20 周年の夜（2014 年 8 月 9 日・長崎）

日米交流で原爆を探究する旅 20年の歩み

真実の共有と和解をめざして

アメリカン大学／立命館大学／立命館アジア太平洋大学

目　次

第１章　20 年間の旅の歴史（1995 ～ 2014 年）　1

第２章　このとき、あの場所、私の思い出　39

第３章　20 回目の旅はどのように行われたか　75

補説　『被爆 70 年―原爆の図　アメリカ展』にむけて　小寺隆幸　88

第４章　被爆者の証言を聴く（2014 年８月）　93

（1）広島駅北方の東練兵場で被爆　山本定男　93

（2）長崎爆心地から南東 3.3 キロで被爆　山田拓民　99

第５章　20 回目の夏―これが私のハイライト　105

第６章　結びと資料　119

第１章　20 年間の旅の歴史（1995 ～ 2014 年）

はじめに――まず全体を大づかみ

立命館大学（RU）では、全学共通の教養科目の一つとして、「国際平和交流セミナー」を設置しています。外国旅行などを介して、国際的規模で平和を考えようというもので、戦後 50 周年を記念して 1995 年に開設された科目です。中国プログラムと韓国プログラムが中軸でしたが、1997 年のアメリカ訪問プログラム（加藤恒彦教授担当）や 2002 年の沖縄プログラム（徐勝教授担当）のように、中国・韓国以外の国や地域に出かけた年もありました。

「日米交流の原爆探究の旅」（別名：広島長崎プログラム）は、中国プログラム・韓国プログラムと並んで、「国際平和交流セミナー」を構成するプログラムの一つなのですが、いくつかユニークなところがあります。

たとえばこのプログラムには、1995 年に未公認の自主企画として発足し、2 年間の試行実績をふまえて、1997 年に正規科目として公認されたという経緯があります。20 年の間、一度の中断もなく実施されてきたこともユニークな点です。20 年もたつとマンネリとなり、応募者が減ってくるものですが、逆に応募者は増え気味に推移しています。

「広島長崎プログラム」の大まかな歴史を知っていただくために、**資料―1** を作成しました。2 年間の未公認時代を別として、正規科目となった 18 年間だけを集計しますと、立命生の応募者総数は 543 名となります。そのうち実際に合格し、旅行に参加できた学生数は 277 名でしたので、平均競争率は 2.0 倍ほどです。応募者の増減には波がありますが、最近は第 3 の上昇期に入っています。2013 年の応募者数は 43 名にたいして参加できた学生数は 20 名。競争率になおすと 2.2 倍で、過去平均を上回っています。2014 年から立命館からの募集枠を 5 名減らして 15 名にしたのですが、逆に応募者は増加し、58 名と過去最高になりました。競争率でみると、4.0 倍になっています。

資料―1　　参加者数の推移

西暦	立命から応募した学生数	立命から合格・参加できた人数	AU など海外からの参加者数	教員・SC などを含む参加者総数	先輩リーダー（SC など）※は TA	その年の特徴点
1997 年	18	11	0	22	山口洋典・奥万喜子・山崎大・川崎裕史	AU 不参加、長崎へも広げる、近藤紘子さん本格参加
1998 年	14	14	10	33	津末幹城・木下妙子・桐山洋一郎・宮原久美・細川貴代	マーシャル諸島短大の参加
1999 年	14	11	13	31	菅原千波・宮原久美・木下妙子・中村信之・村山康文	ピーターが広島で市民開放講座を開く

2000 年	30	14	10	33	菅原千波・紺谷文子・森野博之	SC への改称、中達先生の参加
2001 年	18	14	13	34	菅原千波・丁子基彦	藤岡の心臓発作、藤田先生の代役
2002 年	24	13（3）	14	33	菅原千波・竹江由美・神野有希子 ※藤原郁郎	APU からの参加が始まる。秋葉市長との会見
2003 年	29	14（3）	15	34	伊豆田有希・阪上大葉・高柳麻矢 ※藤原郁郎	旅行団の「憲法」制定、ノーマンの 3 人の娘たち
2004 年	42	15（2）	22	50	小嶋萌・山本太朗・橋本聡樹・紀古鮎美・辻道子 ※坊野成寛	本プログラム 10 周年。長束修錬院
2005 年	31	16（3）	27	46	大塚優・小嶋萌・梶村俊輔・橋本聡樹 ※森下美穂	投下 60 周年。広島市長を宿舎で迎える。長崎でも市民講座開設
2006 年	20	13（2）	8	28	藤川淳之介・岩下舞・河野美和 ※青山富真	乗松さん初参加、山岡ミチコさんの発作
2007 年	24	14（1）	17（1）	36	渡辺慧・山本千春・武田路子	ジョナサン・シェル、デイブ・ウエッブさんとの交流
2008 年	27	16（4）	15（4）	38	山本千春・渡辺慧・福本光代・粟井亨・武田路子	ネバダ実験場の風下住民の参加
2009 年	51	20（4）	19（5）	47	山本美穂子・蓑田盛夫・粟井亨・渡辺慧	立命職員の参加
2010 年	27	20（6）	23（3）	48	坂口理香・洗孝志・宿野部真央・Tao Li	岩国米軍基地ツアー
2011 年	51	19（4）	18（1）	47	裴ジュンキ・藤井勇也・田島美花・南茂芽育	福島から 2 名の医科大生。GS24 名とのコラボ。総数では 70 名に
2012 年	22	18（5）	18（2）	37	坂牧直拓・遠藤秀之・三宅すばる・Lee Hyeonmin	京都で福島医科大 4 名。GS5 名を含むと 43 名
2013 年	43	20（4）	15（2）	47	有廣悠乃・西野友一郎・古賀友望・裴ジュンキ・Zhang Chenyang	GS11 名を含むと 58 名
2014 年	58	15（4）	10（3）	31	戸田一輝・田中志穂・田畑満・和田美里	AU 応募者不足、GS との協同化が進む。GS12 名を含むと 43 名
総計	543	277 (45)	267 (21)	675		

注１　立命関係の数字の（　）は、APU からの参加数で内数。
注２　AU など海外関係の数字の（　）は、カナダからの参加者数で内数。
　　乗松さんのリピート参加分を除くと、カナダからの参加者実数は 13 名。

実際にAU生とともに、京都・広島・長崎の旅に参加できた立命生は何名ほどになるのでしょうか。1997年以来18年間の立命館大学（RU）の参加学生は232名です。2002年から立命館アジア太平洋大学（大分県別府市、以下APUと略）の学生にも門戸を開きますが、以後13年間に参加できたAPU生は45名です。したがってAPUを含む立命生全体の参加者数は277名となります。別に未公認時代に参加した立命生が22名いますので、20年間の立命生（これから「立命生」の表示にはAPU生を含むことにします）の参加者総数は299名にのぼります。

他方、1997年以降の18年間にAUやカナダなど海外から参加した人たち（引率者のピーター・カズニック、カナダ側引率者の乗松聡子さんを含む）の総数は267名です。当初2年間の22名を加え20年間の合計でみると289名となります。この数字には、1998・1999・2001年に来日したマーシャル諸島大学の6名、2008年以降に乗松聡子さんが組織したカナダ系来日者21名（乗松さんを除く実数では13名）が含まれています。ただし海外からの参加者には、19回参加したカズニックさん、9回参加の乗松さんはじめ、2－4回程度参加してきた熱心なリピーター学生が5－6名います。これらを勘案しますと、海外からの参加者は、実数で240名程度でしょう。

したがって立命（APUを含む）・海外参加者（カナダを含む）を合わせた参加者は実数で539名となりますが、そのほか立命関係の教員スタッフとSC（Student Coordinator、学生調整者・先輩リーダーのこと）とTA（教育助手、大学院生のSCのこと）がいます。この科目を実際に運営する「黒子」というか、影の実力者というのは、SCなのですが、先の資料―1が示すように、20年間に活躍してくれたSCの実数は、62名でした。SCは、原則として過去の受講生がなるので、旅経験のある「先輩」となります。受講経験を踏まえて、その後に、SCを4回担当したのは、菅原千波さん。菅原さんの場合、在学中にこのセミナーに5回かかわったことになります。3回担当したのは、渡辺慧さん。2回担当した学生は9名にのぼりました。

その上に、ガイドや通訳を勤めたり、講演や被爆証言をしていただいた方々がいます。この部分もリピーターが多いので、彼らの実数を40名程度と見積もりますと、20年の間にプログラムに主体的にかかわった人の総数は、590名ほどになると思われます。

私たちの20年間のプログラムが、590名の人々のハート（感性）、マインド（思考）、スピリット（大我）にどのような影響を与えたのか。プログラムの長所と短所とはどこにあったのかを、本書のなかで追跡したいと思います。

なお2014年度をもって、本プログラムを20年間担当してきた藤岡惇（経済学部）が引退し、15年度から担当者は、君島東彦さん（国際関係学部）に替わります。藤岡の引退は、兎にも角にも一つの画期だと思われます。本プログラムの20年の歴史を記録にとどめ、必要な教訓を引き出したいと考え、本書を編むことにしました。

これまでの20年の歴史を区分すると、つぎの5期に分けることができるでしょう。

第1期
RU有志が自主的に協力した黎明期
（1995年―96年）

はじまり

話は1994年の夏にさかのぼります。お盆明けの8月23日の昼下がりに、直野章子（なおのあきこ）という女子学生が私（藤岡）を訪ねてきました。場所は、開設3年目の立命館大学（RU）

国際平和ミュージアムの1階フロア。遠くから、せみ時雨が聞こえますが、私たち以外には誰もいない静寂の空間でした。直野さんの母親と私の友人のパートナーとが、同じ甲南女子大学の同僚であることから紹介されたということでした。「被爆2世であり、アメリカン大学（AU）を2か月前に卒業したばかりですが、イラク戦争の開戦や原爆投下をめぐる米国人の意識の低さにショックをうけてきました」と直野さんは語りました。そこで「原爆投下50周年にあたる1995年度にAUの夏セッション科目のなかに、原爆について学ぶ科目の開設を求めようと思うので、その協力者になっていただけませんか。そして、新科目が設置された時には、日本での研修プログラムの実施に協力してくれませんか」というのが、彼女の要請でした。「立命館大学は、大学立の平和ミュージアムという日本で初めての施設を開設したというニューズを母親から聞きました。そんな大学ならば、力になってくれるかもしれない」と期待して、直野さんは私を訪ねてくれたのでした。彼女の使命感に心を打たれ、可能な支援を約束したことでした。

数ケ月後、直野さんの要請が功を奏し、95年度のAUの夏セッションに「核の歴史――ヒロシマ・ナガサキを超えて」という新科目が特設されることになったこと、教養（文理）学部歴史学科ピーター・カズニック准教授が担当教員、直野さんが企画担当職員となったという吉報が届きました。

同じ頃、原爆投下50周年を記念してスミソニアン航空宇宙博物館が企画していた原爆展が、米国各界の猛反発をよびおこし、中止されたばかりか、この計画を推進していたハーウイット館長らが引責辞任に追い込まれるという事件がおこりました。

スミソニアンに送る予定であった被爆史料については直野さんが広島市と交渉し、AUで展示することになりました。この「もう一つの原爆展」は1995年7月に開かれ、当時の広島市長の平岡敬さんをはじめ、多数の被爆者がAUを訪れて証言・講演するきっかけとなりました。その時の記録は、平岡敬『希望のヒロシマ――市長はうったえる』（1996年、岩波新書）に詳しく載っていますので、参照してください。

これより先、AUキャンパス内では「核の文化史」「反核平和運動の世界史」という科目が新たに開講され、被爆50周年の広島を訪問したいという受講生を募っていたのですが、8名の学生が日本を訪問することになったというニューズが、直野さんから伝わってきました。遠路はるばるやってくる彼らを日本（京都と広島）でエスコートする立命生を募り、旅のなかで核の問題を議論し、交流したら、楽しいだろうなというアイデアが、直野さんとの交信のなかから生まれてきました。

1994年から立命では、全学的にセメスター制（6か月の学期制、うち授業期間は4か月）が導入されていました。「軍縮と平和」（4単位）は「平和学」（2単位）に名称変更され、法・経済・経営・産社・文学部の1回生以上を対象に5クラスが設けられ、社系・文系・理系の3名の専任教員がリレー講義をしていました。偶然、私は講師陣の一員として、経済学部クラスを担当していましたので、受講者に「近く米国からAU生が京都・広島にやってきます。彼らをホストするガイド役をやってくれませんか」と呼びかけたところ、当時はスミソニアンでの原爆展の中止が大々的に報道されていた時でもあったので、学生たちの関心は高く、経済学部生を中心に20名ほどが集まりました。彼らは、自主的にRA－PEC（ラペック、立命館―アメリカン平和交流サークル）というボランティア・グループを組織し、「京都での交流計画（3泊4日）の世話をしよう、その後も、希望者は広島まで同行しようではないか」という話になりました。

① 1995 年度（直野さんのリードのもとでマスコミ注視下の旅）

1995 年 8 月 1 日（火）に、ピーター・カズニック准教授（以下、ピーターと呼びます）と直野さんに引率されて、AU の学生 8 名が京都にやってきました。京都での宿泊は 4 泊で、立命館大学にも近い位置にある古都の名刹――妙心寺南門の東隣の花園会館が宿泊所になりました。まず 2 日朝に、花園会館から妙心寺の境内を通って、徒歩で北上し、龍安寺の本堂と石庭を拝観しました。立命の生協食堂で昼食した後に、近くの金閣寺を見学。午後 6 時からは末川会館地下のカルム食堂での歓迎パーティに臨みました。パーティには RA－PEC の学生はもとより、児童劇団やまびこ座の子供たちも来てくれ、交流に花を添えてくれました。

3 日の午前には、平和ミュージアムを見学。直野さんが、『朝日新聞』の記者の問いに答えて「戦争がないからといって、平和とは言えない。泣いてなくても、心から笑ってなければ幸せじゃないのと同じでしょ」と述べておられたのが印象に残っています（**資料―2**）。

正午前から組合主催の歓迎昼食会で立命の職員の方々と交流し、午後は平和ミュージアムで交流会をもちました。戦後 50 周年記念の経済学部企画に選ばれていたことも幸いして、経済学部の上野俊樹、日高正好の両先生が、藤岡とともに自宅を開放し、2 晩にわたって AU 生を泊めてくれました。

5 日から 10 日までの広島の旅（4 泊 5 日）には、RA－PEC の学生のなかから、11 名（うち留学生が 4 名）が同行し、ガイド役を果たしました。広島市の配慮で、立命生も同じ宿舎――平和公園に近い中区大手町にある鯉城会館に宿泊できました。ピーターの友人で当時 AU に滞在していた君島東彦助教授（当時は北海学園大学）も通訳をかねて来日し、同行されました。

6 日には、朝 7 時半からの 50 周年式典に参列し、午後からは平和記念資料館の隣の国際会議場で開かれていた加藤周一さんらの国際シンポ

ひと　朝日、95年8月3日　被爆2世　直野（なおの）　章子（あきこ）さん

■原爆を伝えるなかで、何が見えましたか

国立スミソニアン航空宇宙博物館の原爆展がアメリカ世論の強い反発で中止を余儀なくされたとの夏、アメリカン大学が「原爆資料展」を開くのに、卒業生として力を尽くした。特別講座「核の歴史」も企画し、米国人学生が五日から広島を訪れる。「ある時は被害者。ある時は加害者。そんな人間について学び、考え続けたいのです」

母と祖父母は広島で被爆し、祖父を失った。毎年八月六日には、ともに大学教授の両親とテレビ画面に向かって黙とうしてきた。

十八歳で渡米し、アメリカン大に入学。歴史学者ガー・アルペロビッツ氏の下で、原爆関連の公文書など資料整理を手伝った。アメリカ史の授業で、被爆二世だと打ち明けた。教室中が静まり返った。被爆者を「三十万人」という数字ではなく、痛みを抱える人間として見てほしい。「原爆投下の意味」を伝えていこうと決めた。

が、道のりは険しかった。「なぜ原爆の被害だけを声高に」の反発。計画は何度も頓挫（とんざ）した。国際電話の受話器を握って泣き続けた夜もある。「一人でも心を開いてくれる人がいれば、すごいことじゃないか」。父の言葉に勇気がわいた。

今年初め、一時帰国中に兵庫県西宮市の実家のマンションで阪神大震災にあった。桜が咲くころ、広島の原爆資料館に足を運んだ。安否を伝える白いチョークの文字が焼け焦げた校舎の壁に並ぶ写真を見た。震災後の無事を知らせる張り紙を思い出した。広島の焼け野原を生き延びた人々が、被災者の姿に重なって見える気がした。

「戦争がないからといって、平和とは言えない。泣いてなくても、心から笑ってなければ幸せじゃないのと同じでしょ」。この六日はテレビの前でなく、米国人学生と並んで被爆地に立つ。

文・写真　諸永　裕司

「一人の力はちっぽけだけど、手をつなげば輪は広がるんですね」。23歳。

資料―2

ジウムに参加しました。4時からはAU生とともに広島市長の平岡敬さんを訪問し、日没後は、元安川での灯篭流しに参加しました。

7日（月）は、アステール・プラザで、中逵啓示さん（当時は広島大学助教授、現在は立命館大学国際関係学部教授）と被爆者の下原隆資さんの話を聴きました。下原さんの講演は、直野さんの推薦でしたが、原爆投下を招いた日本支配層の侵略戦争責任（いわば「招爆責任」）を明確にすることが先決であり、日本人の方が身を清めずして、米国側の投下責任だけを追及しても説得性に欠けるという話をされました。原爆投下というのは、トルーマンやバーンズの犯した「戦争犯罪」にほかならぬと主張していたピーターにとって、下原講演はかなりの衝撃だったはず。原爆投下を招いてしまった日本帝国の東アジア諸国民にたいする蛮行や侵略責任の深刻さについての認識が当初のピーターには弱かったように思います。

午後は、広島大の中逵さんの大学院のゼミ生に案内され、京都市電の廃車を再利用した広電の「ちんちん電車」に乗って、宮島に出かけ、厳島神社を拝観しました。狭い生活道路をゆっくりとした速度でちんちん電車は走りますので、50年前の原爆で燃え落ちた地域の広さを体感できます。実際、海を渡って25キロ離れた宮島あたりまで、強烈な爆風が届き、建物が損壊したそうです。

8日には見学者が少なくなった平和記念資料館を再度訪問し、午後には高橋昭博さん・山岡ミチコさんの被爆体験をお聴きしました。高橋さんの名刺には、「人の痛みを感じ取れる力が平和の原点」と書かれていました。**資料―3**は、証言の集い終了後に全員で撮ったスナップです。前列には2人の被爆者とAUから来日した8人の学生が写っています。2列目の左から2人目が直野さん、後列の右から4人目が記録冊子づくりを担ってくれた山崎大さんです。

9日も平和記念資料館で、韓国人被爆2世の方に来ていただき、在韓被爆者の講義をお聴きしました。午後に総まとめの振り返り集会を行った後、AU側主催で広島市と立命関係者を招いた答礼パーティがありました。ピーター・カズニックさんが答礼の挨拶をし、君島東彦さんが通訳をしました(**資料―4**参照)。そして10日の朝には新幹線で大阪に戻り、関西空港から帰国の途につくAU生たちを見送ったわけです。

初年度平和交流の記録は、参加学生の山崎大さんたちの努力でRA－PEC編『アメリカン大学の学生とともに原爆投下を考えた』という報告書にまとめられています。その編集・配布に

資料―3

資料―4

あたっては、2回目の旅の責任者となった金丸裕一助教授（経済学部）にお世話になりました。

なお「立命館創始120年・学園創立90周年記念研究奨励金」という支援制度がありましたので、1995年度の募集に際して「日米アジアの青年の『15年戦争と原爆投下』をめぐる意識の相違と学生参画型の教育方法による克服策についての研究」というテーマで応募したところ、50万円の奨励金の交付を受けることができました。立命生の広島訪問の補助や平和交流報告書の出版にあたって、大きな助けとなりました。

② 1996年度（京都4泊、広島4泊の旅、近藤紘子さんとの出会い）

1996年5月25日、アメリカン大学のベンジャミン・ラドナー学長が来日し、平岡市長を表敬訪問し、今後の交流の可能性について意見交換しました。このような追い風もあり、2回目の被爆地訪問の旅の実施をAUは決断し、私たちも協力を続けることになりました。

立命側では、正規科目ではなかったのですが、「広島と京都で学ぶ平和のための世界学生セミナー」という自主企画を関係者でたちあげ、対象者を1回目のように経済学部学生だけに留めず、他学部の学生にも呼びかけることにしました。準備にあたっては教務課の山本修司さんや平和ミュージアム館長代理の安斎育郎先生に大変お世話になりました。

AUからの旅行団は、1996年7月30日にピーターに引率されて関西空港に到着しました。メンバー数は、第1回目の8名から12名（うち4名が日本人留学生）に増えました。彼らは平和ミュージアムの階上の3－4階にあった旧・衣笠セミナーハウスで、4泊しました。第1回目に随行された君島東彦さんが、再びボランティア通訳として同行され、言葉の壁を下げるために活躍されました。

この年藤岡は、在外研究でAUに滞在していましたので、AUからの送り出しの方を担当し、金丸裕一さん（経済学部助教授）が立命側の担当教員となりました。平和学などの授業の場で、AU生と交流したいという学生を、学部を越えるかたちで募った結果、11名の学生（うち留学生が2名）が集まりました。

8月1日からの京都での交流プログラムの間、立命生は、自分の家や下宿から通いました。立命生もセミナーハウスに泊まり、京都でも寝食を共にするようになるのは、ここ7－8年のことです。

8月3日は京都から広島へ移動する日。旅費を節約するため、全員「青春18きっぷ」を買い、在来線の鈍行列車を何回も乗り換えながら、広島に向かいました。夕刻になってようやく宿舎の「中特会館」（「中国地区特定郵便局長会会館」の略）に到着し、そこで4泊しました。中区幟町の広島女学院高校の南側にあった中特会館は、宿泊料が安く、便利な位置にあったため、その後2000年まで5回の定宿となりました。

近藤紘子さんとの劇的な出会いがあったのは、この年の広島においてでした。20世紀において米国人にもっとも深刻な影響を与えたルポルタージュのトップとして米国のジャーナリストが選んだのが、ジョン・ハーシーが1946年に書いた『ヒロシマ』。この本に登場する最年少の赤ん坊が近藤紘子さんなのです。谷本清牧師といえば、1955年に米国人ジャーナリストのノーマン・カズンズさんの助力を得て、25名の原爆乙女をニューヨークに招き、マウント・サイナイ病院で整形手術をうけてもらう運動を推進した人ですが、近藤紘子さんは、谷本牧師の長女で、被爆当時は生後8か月の赤ん坊でした。高卒後に米国に留学し、1969年にアメリカン大学を優秀な成績で卒業されています。

日本基督教団北千里教会（現在は三木志染教会）の牧師夫人となっていた紘子さんは、1996年夏に母校のアメリカン大学の旅行団が再び広

島を訪問するという情報をお母様からお聞きになり、実家のある広島にやってきて、ピーターたちと会われるのです。この出会いが糸口になって、翌97年以降は毎年広島の地で（2007年以降は京都・長崎の地へも）、紘子さんが同行され、企画づくりにも協力してもらうようになります。

なお紘子さんは、自らの半生記を「この幼い命を――アンティ紘子と国際養子」という連載記事にして2002年7月－9月の『神戸新聞』に載せられました。4－6回目と10回目の連載記事を**巻末資料―2**に収録しましたので、ご覧下さい。

この動きにあわせて、ジョン・ハーシーの『ヒロシマ』を立命とAU共同のテキストとし、事前読破を受講生に義務付けるとともに、被爆直後に谷本一家がさまよった道と建物の跡を再訪するプログラムを旅行に組みこむようになりました。旅行の基本的な枠組みの一つが、紘子さんとの出会いから生まれてきたわけです。

8月7日の広島でプログラムは終了し、AU生は時間節約のために、帰途には新幹線を使い、関西空港から帰国しました。立命生の大半は、広島駅でAU生を見送った後に、青春18きっぷを使って、帰郷していきました。

なお付言しますと、直野章子さんはこの年の9月から、ワシントンを離れ、カリフォルニア大学サンタクルーズ校の大学院に入学し、社会学の研究に着手されました。原爆展示のためにスミソニアン航空宇宙博物館の館長を辞任させられたマーティン・ハーウィットさんが1997年8月に広島を訪れますが、その際、直野さんと会見した模様は『朝日新聞』などで大きくとりあげられました（**巻末資料―3**）。

直野さんは原爆被爆者の記憶とトラウマにかかわるテーマで博士号を授与され、帰国されます。半年ほど立命館大学などで平和学の非常勤講師をされ、現在は九州大学の比較社会文化研究院准教授として、平和研究・教育に活躍なさっています。一例をあげますと、被爆30周年の1974年に750名の広島市民が「原爆の絵」を描きましたが、直野さんは、そのうち50人の被爆者を3年かけて訪ね歩き、絵筆に込めた思いを聴き取り、『「原爆の絵」と出会う――込められた想いに耳を澄まして』という本を岩波ブックレットから2004年7月に出版されました（**巻末資料―4**参照）。

第２期
RUの正規科目となり、紘子さんの同行も始まった（1997年―2001年）

③ 1997年度――立命でも正規科目となるも、AUの来日中止。長崎へ

単位認定の正式科目に昇格したこともあって、この年より事前セミナーを3回、事後セミナーを1回行うようになりました。またピーターたちのリクエストに応えて、この年から長崎に足を伸ばすことにしました。

いま一つ、学生リーダー（SA）が誕生したのも、この年のこと。2回目（1996年度）の参加学生のうち奥万喜子さん（政策科学部4回生。英会話が堪能で、1995年12月の世界学生平和サミットを担ってくれた人）と学生参画型のアクティブ・ラーニングを実践しようとしていた山口洋典さん（理工学部4回生、現在は立命館大学共通教育推進機構准教授、サービスラーニングセンター担当）、1995年の初回の参加者で記念誌編集の中心になってくれた山崎大（政策科学研究科M1）、川崎裕史（経営4回生）さんの4人が学生リーダーとなりました。彼らはSA（学生助手）を自称し、参加者名簿や旅のしおりを作成してくれました。参加者から3000円を集めて、共通経費基金を作り、支払を管理し、最後に会計報告し、残余金は返金するという方法を編み出したのも、彼らでした。

このように1997年は、制度の面では大きな前進を記録した年なのですが、内容面では多難な年となりました。まず6月になって、AU側の募集が不振で、8名という催行の最低数を割ってしまったので、参加は不可能になったという悲報が飛び込んできました。20回の歴史のなかでAU不参加は、この年だけのこと。立命側の応募者は18名で、全員に受講許可を与えていたのですが、「AUが来ないのでは意味がない」として参加を辞退する立命生が続出し、立命側の参加者は11名に減りました。

苦肉の策として、留学生を対象に新たに「単位なしのボランティア」（SA）を募ることとしました（緊急事態なので、旅費の一部を藤岡が助成）。その結果、香港から1人、台湾から2人、マレーシアから1人、オーストラリアから1人、合計5名の「留学生SA」が誕生し、SA数は9名に膨らみました。おかげで旅の参加者20名のなかに外国人留学生が5名いることになり、国際交流科目としての名目と体裁を保つことができました。

7月25日・30日に事前準備セミナーを行ったこともあり、京都プログラムについては中止し、8月2日朝に京都駅に集合し、初の訪問地の長崎に向かうことにしました。宿舎としては、平和公園の北東側にある永井学生センターを予約し、8月2日から4日朝まで2泊しました。被爆者の救援に奔走した永井隆博士を記念するカソリック系の宿泊施設で、男女別に大部屋に分かれて雑魚寝しましたが、朝食付きで1泊2100円と破格に安い値段だったので、財政面では大助かりでした。センターの運営責任者のホセ・アギラール神父さんからは、この施設が外部からやってきた学生運動家の拠点となった頃の苦労話をお聞きしました。

開設まもない長崎平和研究所を皆で訪問し、創設者の鎌田定夫さんにお会いしました。鎌田さんご自身は被爆者ではなく東京からの移住者ですが、長崎に根を下ろし、被爆者の実態調査や証言を集めてきた「長崎証言の会」活動のキーパーソンです。息子の春生さんが奈良の山で遭難し、不慮の死をとげられたこと、事故で下りた2500万円の保険金と夫妻の退職金などで、土地・建物を購入し、1997年1月に、私設の「長崎平和研究所」を創設されて半年後の訪問でした。この出会いが縁となり、『長崎平和研究』という季刊雑誌に、ピーターや私の原稿を何回か掲載していただきました。

その後、定夫さんの奥さまの鎌田信子さんが研究所を継がれ、私財を投じて続けられます。2005年8月9日午後に長崎への原爆投下60周年を記念して「広島・長崎――原爆投下の意味を考える」という市民開放講座を西嶋有厚さんを招いて開いた際には共催団体となってもらうなど、お世話になりました。信子さんが高齢のため2010年に研究所を閉じられたのは、残念なことでした。

市民グループがお金を出し合い、中華料理屋を改造してオープンしたばかりの岡まさはる記念平和資料館も訪問しました。朝鮮人差別問題に取り組んでこられた岡正治牧師の功績を記念するこの資料館は、原爆投下の地にありながら、アジアへの日本帝国の加害責任の面を集中展示した施設です。見学後、長崎大学のフランス文学の教授でもあった高實康稔館長と懇談しました。**資料―5**は、そのときのスナップです。日本帝国が犯した戦争犯罪を直視するため、岡まさはる資料館を受講生必見の施設として位置づける決断をした感動の体験でした。

その後、小グループに分かれて、長崎市内の観光名所を回りました。**資料―6**は、有志で眼鏡橋を訪れた際のスナップ。左から4人がSAの面々です。

8月4日の昼には、長崎から広島に戻り、8日まで4泊の広島プログラムを行いました。この時期の広島のホテルは満員となりがちですが、

資料―5

資料―6

資料―7

8月5日は中特会館、それ以外の日は鯉城会館に宿泊することができました。この年から広島の地では、近藤紘子さんが必ず同行され、色々な被爆者を紹介していただいています。被爆者の方々も「紘子ちゃんに頼まれたら、断ることはできないわね」とおっしゃり、多大の協力をいただいています。

6日の早朝6時15分に、7万人の身元不明者の遺骨を集めた犠牲者慰霊碑の前で開式される「原爆死没者供養行事」に初めて参加しました。紘子さんの父親の谷本清牧師が指導的役割を果たされて、被爆翌年の1946年から始まった感動的な追悼行事です。身元不明者の信仰していた宗教は不明なので、仏教各派・神社庁、教派神道、キリスト教両派が合同して供養するほかなく、宗派を超えた行事として執り行われてきました。原爆死の特別の悲惨さと宗教紛争を克服する展望の双方を指し示す意義深い行事であり、以後毎年、紘子さんの引率で訪れる定番のコースとなりました（**資料―7**）。

8月7日の午前には宮島を訪れ、午後には、平和資料館の地下会議室をお借りして、広島市立大学の吉田晴彦ゼミの学生たちを交え、6チームに別れて、車座になって対話する「まとめのワークショップ」をSA主導で行いました。

8月8日昼過ぎに公式プログラムは終わりましたが、藤岡は帰途に数名の学生と福山駅で下車し、ホロコースト記念館（館長は大塚信牧師）を訪問し、大塚さん一家と交流しました。

山口洋典さんなど4人のSA集団は、“Student-WAY”という学生サークルを作り、この年の記録を『せいか――成果と聖火』という出色の本にまとめました。現役のSAとSA経験者とが集い、自主的にノウハウを伝承し、後継者を養成するサークルが、Student-WAYです。このような学生サークルがバックに存在したからこそ、本科目の立ち上げ期にSA後継者を安定的に輩出できたわけです。京都新聞が、この本の出版を報道してくれました（**資料―8**）。写真の左側が、奥万喜子さん、中央が山口洋典君、右側が桐島洋一郎君。桐島君は翌98年度のSAになった人です。

この年も「創始120年・創立90年記念研究奨励金」に応募したところ、50万円の交付をうけることができ、SA集団の活動と報告書の出版を支えてくれました。

MAY 12 1998 京都

平和学習の成果 冊子に

被爆者らの証言も収録

立命大国際交流セミナー

平和学習の記録を冊子にまとめた立命館大の学生たち

昨夏、広島と長崎を訪問

受講生たちが出版

昨夏、広島と長崎を訪ね被爆者や現地の学生たちと交流した立命館大の正規の授業科目「国際交流セミナー」（指導＝藤岡惇教授）の受講生たちが、平和学習の成果をこのほど冊子にまとめ、出版した。

国際交流セミナーは三年前、「被爆地で原爆投下の意味と平和創造の道を考える」目的で始めた。昨年は過去のセミナーに参加した学生四人がリーダーとして授業を企画し、日本人学生十人とアジアなどからの留学生五人が受講した。八月二一八日に長崎と広島を訪ね、長崎原爆資料館や広島平和記念資料館などを見学。被爆者からの体験の聞き取りや、広島市立大の学生との意見交換も行った。

冊子は「せいかく成果／聖火」と題しA5判、一九〇ページ。リーダーが中心になって編集した。十三部構成で、被爆地の展示施設の概要や、被爆者たちの証言、学生のレポートなどを収録した。

受講した桐山洋一郎さん（二〇＝経営学部三年＝は「広島の学生には平和を発信する意欲を感じたし、留学生と自分の戦争への意識の違いも実感した」、リーダーを務めた奥万喜子さん（二三＝今春卒業＝は「この本は平和を学ぶ人の参考になると思う」と話している。

一部千五百円。問い合わせ先は立命館大研究支援センター☎075（465）1979。

資料―8（『京都新聞』1998年5月12日）

④ 1998年――AUの復帰、マーシャル諸島からの参加

翌98年の8月2日夕刻、2年ぶりに、ピーターの引率のもとに10名のAU関係者（学部生5名、院生4名とピーター）が関空に到着しました。AU側の一員として、マーシャル諸島大学のノウト（Leiviticus Note）君もグアム島経由で来日しました。マーシャル諸島とは、人口7万人の小国ですが、ビキニ環礁などで米国が1946年から1958年にかけて67回に及ぶ水爆実験を繰り返したところです。

ノウト君来日のきっかけを作ったのは、96年にAU生として参加した社会人学生のホリー（Holly Barker）さんでした。当時ホリーさんは、在ワシントンのマーシャル諸島大使館のスタッフだったので、首都のマジュロ市に立地するマーシャル諸島唯一の大学に「核問題」研究所を設立し、ノウト君をAU側受講生として送り出す助けをしてくれたのです。ノウト君のお父さんは、その後マーシャル諸島共和国の大統領になります。

立命関係では、SAが5名。受講生が14名（応募者14名で全員合格。うち経済学部生が8名を占め、社会人が2人、フィリピンからの留学生1名）、そのほか通訳として東海明子さん（国際関係研究科の修士課程院生）とショウ・イ君（1997年度の受講生）が随行してくれました。広島のみ参加の近藤紘子さんと藤岡とを含めると、立命関係では23名。AUを含めると、33名という大所帯となりました。

SAは、「旅のしおり」や参加者名簿を日英両言語で作成したり、旅の実務の多くを担ってくれました。当初はSAの個人負担額（6万円余）の半額程度を藤岡が負担していましたが、この時期になると、ES（教育サポーター）というしくみが新設されましたので、SAをESとして登録することで、大学側の経済的支援が受けられるようになりました。

8月3日－5日朝までが京都プログラム。3日に観光、4日にはミュージアムを見学し、その後にピーターの講義などを聴き、交流しました。

5日から8日朝までの3泊は広島プログラム。

宿舎は前年度と同じ中特会館でした。下原隆資さんを招いて、3度目の講演をしてもらいました（**資料―9**）。通訳しているのは、東海明子さんです。また夜には、中特会館の談話室に座りこむかたちで、近藤紘子さんの半生の体験をお聴きしました。紘子さんは日英両語で話されるので、通訳は大助かり。**資料―10** は、その時のスナップです。

8日から10日朝までの2泊は長崎プログラムでした。長崎の宿泊先は同じ永井学生センター。ただし長崎の宿舎は、大部屋で雑魚寝という悪条件に加えて、学生運動家流入への警戒心からか門限時間が大変に厳格でした。そのため宿泊をボイコットし、自費でビジネスホテルに宿泊するという奇策に訴える者が立命生のなかから生まれました。翌年から長崎の宿舎を門限のないビジネスホテルに変えるきっかけとなった事件でした。

長崎では8日の夕刻、被爆者の店の地下会議室で、米国ニューメキシコ州の中学校教員だったキャッシー・コンドーさんの話を聴きました。1995年の原爆投下50周年を記念して、子どもたちから寄付を集めて、「子どもの平和像」を製作し、同州ロス・アラモスに設置する運動を展開した人です。ロス・アラモスといえば、原爆の開発に決定的な役割を果たしたところ。キャッシーたちの請願は郡議会で否決され、結局、州都のアルバカーキー博物館の庭に平和像は設置されたとのこと。京都で広がった「子どもの平和像」建立運動のモデルとなったお話でした（**資料―11** 参照）。

10日朝に長崎駅前広場で解散式を行い、参加者は思いおもいに帰郷しました。AU生の場合夕刻に大阪駅に戻り、大阪城公園近くのホテルで一泊し、翌11日には近くの「ピースおおさか」（大阪市立の平和展示館）と大阪城公園内のホームレスのテント村を見学した後、関空から帰国していきました。なおStudent-WAYが軸となり、この年の記録を『道―MICHI―』という本にまとめています。

資料―9

資料―10

資料―11

⑤ 1999 年度――AU 帰りの立命生、ピーターを講師とする初の市民講座を開く

第 5 回目を迎えた 1999 年度は、「被爆地で世界の学生とともに『ニュー・ミレニアムの平和』を考える」というテーマをかかげ、8 月 3 日－10 日の 7 泊（京都 2 泊、広島 3 泊、長崎 2 泊）で実施されました。広島の中特会館での 3 泊は同じでしたが、長崎の宿泊地は、爆心地から南へ 600 メートルの大学病院前のビジネスホテルのカンタービレ（浜口町 14 － 10）に変わりました。その後 2006 年までの 8 年間、ここが長崎の定宿となります。

前年度にひきつぎマーシャル諸島大学からグラン・ルイス君など 2 名が参加しましたので、AU 側からは 12 名、サンフランシスコ西郊のリバモアの核兵器開発研究所の隣に住みつき、核兵器開発反対の優れた市民運動を展開してきたマリリア・ケリーさん（Tri-Valley CAREs 代表）も招きましたので、海外からの参加者は 13 名となりました。立命の場合は、14 名の応募者から 11 名を選抜しました。加えて、菅原千波君など 5 名の SA と藤岡、特別講師の近藤紘子さんを加えて合計で 18 名。総勢では 31 名となりました。共通基金はこの年から 5000 円に増額され、SA が管理しました。

「ワールドフレンドシップセンター」（WFC）といえば、「私たちもヒバクシャ」と述べたバーバラ・レイノルズの意志を継ぐ平和団体で、クウェーカー平和運動のバックアップのもと、広島の下町の路地の奥で英語教室と外国人向けの民宿とを営んでいます。この団体は、8 月 6 日の被爆式典の後に「英語通訳つきの被爆証言の集い」を開いているというので、AU の面々とともに証言を聴きにいきました。**資料―12** は、WFC の玄関口への路地の前で写したスナップです。

この年のハイライトは何といっても、原爆投下を米国の歴史家たちはどうみているのかを日本の市民に伝える講演会を 8 月 7 日に開いたことでした。

資料―12

過去 4 回の旅で、日本の支配層が侵略戦争を始めた責任や、敗戦受け入れをためらったために原爆投下を招いてしまったという日本側の「招爆責任」を問うことが大切だとする下原隆資さんの講演を幾度も聞かされるなかで、「米国支配層の独自の思惑や戦略の分析が日本人には欠けている。原爆投下を命令したトルーマンに代表される米国支配層の戦略にたいして、日本人は、なぜこれほど無知でナイーブなのか」と憤るピーターの気持ちは膨らんでいったようです。

この年、AU 留学から帰国した立命生が何名か参加していました。原爆投下をめぐる米国歴史家たちの知見を広島市民に伝え、日本人の原爆投下観の偏りを正したいとするピーターの意を汲み、彼を講師とする公開講演会を広島で開催すべく、彼女たちは行動を始めます。講演会のテーマは「広島、長崎への原爆投下――日本への罪か、人類への罪か」とし、ピーターが 50 分講演し、マリリアが 20 分間コメントし、その後 45 分ほどの質疑応答の時間を設けるというものでした。中心メンバーの杉原美希さん、徳元ゆかりさん、上田雅子さんたちは、SA の菅原千波君らの支援をうけ、事前に何回も広島に赴き、会場を確保するとともに、ビラとお願い状をもって、マスコミや各種団体を回り、公開

京市内　13版△　1999年(平成11年)7月27日　火曜日

広島で公開市民講座

2日から平和の国際交流セミナー

立命大生企画　米国学生ら参加

米国の大学生らと被爆地の広島・長崎を訪れ平和を考える――立命館大学の学生がこんな国際交流セミナーの準備を進めている。このセミナーは戦後五十年の節目の一九九五年から始まり、五回目を迎える。今年は初めて、広島市で学生の手による市民講座を開き、被爆地の市民との交流の輪を広げる。

セミナーは八月二日から十日までの九日間。立命館大十九人、ワシントンDCにあるアメリカン大九人、「死の灰」を浴びた第5福竜丸事件で知られるビキニ水爆実験の場所となったマーシャル諸島共和国のマーシャル諸島大二人の学生が参加する。

一行は、六日に広島市の平和記念式に出席、八日には長崎を訪れ、朝鮮人被ばく者の慰霊祭などにも参加する。ツアー最終日の十日正午には、参加した学生たちが平和実現に向け、長崎市で「共同平和宣言」をして、締めくくる。

京都市でも、四日午後一時半から市民公開レクチャーがある。講演「アメリカは、核を捨てられるか」や沖縄戦と長崎の被爆者の体験談が語られる。

今年は初めて学生が企画した公開市民講座を広島市で開く。テーマは「広島、長崎への原爆投下は日本への罪か、人類への罪か」。従来のアメリカ(加害者)、日本(被害者)という図式だけでなく、違った視点で原爆投下を考えるのが狙い。アメリカン大の教授、アメリカの反核活動家、広島の三人の被ばく者が参加、原爆投下の背景やこれからの核の役割を話し合う。

国際関係学部三回生の菅原千波さん(二)は「昨年は、パックツアー型の旅行形式になってしまった。今年は、自分たちの手で企画したこともあり、学生の参加意識も高まっていると思う。多くの人たちに参加してほしい」と語る。

公開シンポジウムなどの参加への問い合わせは立命館大経済学部の藤岡研究室(075・431・4996)。

資料―13　（『朝日新聞』1999 年 7 月 27 日）

資料―14

講演会への参加を訴えました。この動きは『朝日新聞』などでも報道されました（**資料―13** を参照）。

8 月 7 日（土）の午後 3 時から、原爆ドーム北側の広島市青少年センターの老朽化した建物で公開講演会は幕を開けました。何人の聴衆があるのかまったく見当がつかず、不安でしたが、旅行団メンバー 31 名のほか、被爆者の松原美代子さん、沼田鈴子さんをはじめ、30 名ほどの市民が出席され、安堵しました。「戦争終結には原爆投下は必要なく、原爆投下は明白な戦争犯罪行為であった」とするピーターの明晰な言説に会場はどよめきました。通訳は、広島市在住の和田真美恵さんにお願いしました（**資料―14**）。

SA の菅原千波さん、企画推進者の杉原美希さんが、この年の学生主導の経験を「自己参画型学習で『平和』を学ぶ」というレポートにまとめ、『立命館大学学園通信』122 号、1999 年 11 月に掲載されました（**巻末資料―5** 参照）。

この年の年末の 12 月 1 － 4 日に立命の国際平和ミュージアムを舞台に安斎育郎・ロバート・コワルチェックさんたちと相談して「国際シンポジウム・新千年紀を迎える若者たち」という自主企画を進め、マハトマ・ガンジーの孫のアルン・ガンジーさんを日本に招きました。京都での企画が終了した後に、藤岡はアルン・ガンジーさんを誘って広島・長崎を講演旅行する機

会がありましたが、その時に生まれたアイデアと人々の新しいネットワークもまた、「平和の旅」を豊かに展開するうえでの資産となりました。

⑥ 2000年度――中逵先生の参加、SCへの改称

2000年は被爆55周年で、新しい千年紀開幕の年。ピーターは、「原爆投下から続く人類の悪夢」と題した論文を、『朝日新聞』の8月5日付けの「論壇」に寄稿し、新世紀に向けて、トルーマンへの幻想を打破し、悪しき「核の遺産」を払しょくする共同の努力を訴えました（**巻末資料―6**参照）。

この年から、学生たちの発意で、学生リーダーの名称がSAからSC（Student Coordinator学生調整者）に改称されます。「SA（学生助手）」といえば、教員の仕事を手伝うという受け身の活動をしているという語感がありますが、実際に彼らが担ってきた業務は、単なるSAの域をはるかに超えていました。SAは1年限りというルールなどはないため、SAを2－3年連続で務めるという熱心な学生も、多数生まれていました。そこで名称も実態に合わせようと、「学生調整者」（SC）に変えたわけです。

AU側からは、9名の学生とピーターをあわせて10名が来日しました。他方、立命からの応募者は30名でしたが、選考の結果、受講できたのが14名でした。これに3名のSCと2名の指導教員、傍聴参加者、近藤紘子さん（広島だけ）を加えると、23名に達し、参加者総数は33名にのぼりました。

この年は指導教員の複数制をとり、藤岡のほか中逵啓示教授（国際関係学部）が加わりました。京都では両名が担当し、広島では中逵さん、長崎では藤岡が引率することにしました。中逵先生は、第1回目の旅の際に広島大学におられ、大学院のゼミ生を率いて、宮島旅行の案内に尽力された方であり、ピーターとも旧知の仲でした。

京都プログラムでは、8月3日に観光、4日にはミュージアム見学と講演・討論を行いました。広島プログラムでは、5日に平和資料館見学と近藤紘子さんの体験談を聴きました。

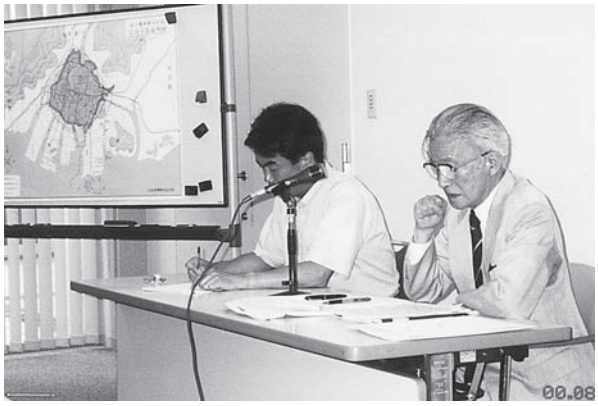
そのあと、広島平和文化センター理事長の大牟田稔さんからレクチャーを受け、討論を行いました。そのスナップが**資料―15**です。中逵教授が通訳されました。翌年大牟田さんは逝去されますので、講演はまさに遺言のような重みがありました。

8日午前に長崎へ移動し、8日午後に岡まさはる資料館と被爆者証言をお聴きしました。9日に城山小学校と長崎市主催の被爆式典に参加し、10日にまとめの集会を行い、現地解散しました。

広島では昨年と同様に中特会館（教員層は鯉城会館に分宿）、長崎では爆心地から南に600メートルほどの浜口町のホテル・カンタービレに宿泊するというように、ほぼ現状に近いプログラムを組むようになりました。

SCたちは、旅行の各段階で、参加者から前日の感想メモを集め、交流し、当日の予定などを告知する「旅行新聞」を英語で発行するという年来の課題にも挑戦してくれました。8月9日の朝に発行された最後の「旅行新聞」を**巻末資料―7**で紹介します。

この年の記録も、Student WAYの編集で



資料―15

『2000年度国際交流セミナー——同じ地球の下で』という小冊子にまとめられています。

⑦ 2001年度——藤岡の急病のため藤田明史講師が引率

2001年度の参加者数は、立命館大学からは14名（応募者数は16名）、これにたいしてAUからは13名が来日しました。うち2名は、マーシャル諸島大学の核問題研究所長のメアリ・シルクさんなど、マーシャル諸島からの参加者でした。メアリ・シルクさんは、閣僚を務める夫を随伴しての来日でしたが、向学心あふれる熱心な参加ぶりが印象的でした。シルクさんについては、**資料—16**を参照ください。マーシャルからの来日は、この年で3回、受講生総数は5名となりましたが、その後は高額の旅費やAUに支払う学費の高さが障害となって、参加が中断し、今日に至っています。

マーシャル諸島短大
核研究所の初代所長

Mary Silk
メアリ・シルクさん

ひと

マーシャル諸島共和国で唯一の短大の研究機関代表に就任して1年。15人ほどの学生に、同国のビキニ環礁などであった米国の核実験について教える。先月末に来日し、この6日に広島へ。長崎も訪れる。

「日本から学ぶことは多い。私たちはまだ歩き始めたばかりだから」

46年から58年までの12年間に計67回にわたる極秘の核実験は、本人が生まれる前に終わっていた。大人たちの多くは実験について口を閉ざしていた。だが子どものころ、不思議なことがいくつもあった。米国から来た医師たちに首をしつこく触られた。ビキニ島から大勢の人たちが移住してきたのを見た……。

疑問が解けたのは7年前。短大の図書館で働き始め、実験に関する米政府の資料を整理した時だ。突然の診察は、被ばくに伴う甲状せんがんの検査だったのだ。集団移住は、実験後にビキニ島へいったん戻った住民たちが再被ばくするのを恐れた米政府の緊急措置だったに違いない、と。

高校卒業後、すぐに結婚し、レストランや銀行などで働きながら2男3女を育てた。暮らしに余裕ができた97年、勤務先の短大にできた「核コース」を受講。熱心な姿勢が目にとまり、所長に抜てきされた。

核実験を許した理由を、老人たちに尋ね歩いた。厳しい日本の統治から解放し、キリスト教を伝えてくれた米国を信じていた、と多くの人は答えた。

「真実を知らされていない。7万人足らずが暮らす小さな国にも直視すべき過去がある。学生たちと一緒にそれを探し続けたい」

文・写真 山口 智久

「千羽づるの折り方を子どもたちに教えたい」。39歳。

資料—16 （『朝日新聞』2001年8月8日）

京都での学習セミナーでは、原水禁大会参加のために来日中のサリー・ライトさん（「ネバダ砂漠の体験を考える会」事務局長）が「ネバダでおこったこと」、メアリ・シルクさんが「マーシャル諸島でおこったこと」というテーマで報告され、反響を呼びました。その後、立命の平和ミュージアムの2階の会議室に集まり、広島・長崎に向かう旅行に備えて、6つの「平和家族」を結成しました。**資料—17**は、ある平和家族の結成式のスナップです。

広島の宿舎として5年の間、中特会館でお世話になってきましたが、会館の方針が変わり、外部者が泊まれなくなりました。加えてこの年の6月9日に藤岡が心臓発作で心肺停止に陥り、担当者が急に藤田明史さんに変更となったため、ホテルの予約が大幅に遅れ、広島では郊外の広島サンプラザ（山陽本線新井口駅から徒歩5分）に宿泊するほかなくなりました。長崎では、長崎大学元学長の土山秀夫さんにレクチャーしていただきました。この年の詳細は、藤田明史さんによる後掲のエッセイをお読みください。

また2000年に参加し、この年にSCを務めた竹江由美さんが、立命館大学の2004年版の広報誌（Dynamic & Academic）に「恒久の平和を願って—国際平和交流セミナー」というエッセイを寄稿されています。**資料—18**をご覧くださ

資料—17

恒久の平和を願って

国際平和交流セミナー

国際的なイベントの運営に取り組み、世界への視野が一層広がった。

国際問題、特に国際平和について考える機会が多かったことから、2回生の時に「国際平和交流セミナー」に参加しました。アメリカン大学の学生とともに京都・広島・長崎の3都市をめぐって平和学習をおこなう実習で、初めて見る被爆地の現状にショックを受けると同時に、ディスカッションなどを通して欧米人と日本人の平和に対する考えの違いを実感。翌年はこのセミナーのコーディネーターを務めました。さらに、その秋、立命館アジア太平洋大学で開かれた「2002世界学生サミット」では、「国際社会と平和」をテーマにした分科会で進行役に挑戦。世界への視野を一層広げると同時に、大役に挑戦できたことはとても貴重な経験です。

竹江 由実さん

■国際関係学部4回生

ニュージーランド・ローズヒル高校出身

国際平和交流セミナーは、夏休みなど長期休暇を利用して教員と様々な地域を旅し、平和の構築や国際理解の道を探るプログラム。

資料―18　（Dynamic&Academic 2004 年版）

い。

第３期
APU の参画でアジアの視点が入ってきた（2002 年―2006 年）

2000 年４月に大分県別府市に立命館アジア太平洋大学（APU）が開設されました。APU は、アジア諸国など世界各地からやってくる国際学生が入学生の半数近くを占めるというユニークな大学でした。2002 年から APU の学生にも、広島・長崎プログラムを開放することにしました。この年以降、毎年３－５名程度の APU 学生が参加するようになりました。彼らの多くは東アジアからの国際学生でしたので、日本の侵略戦争の犠牲となったアジア諸国の若者の視点をプログラムに反映できるようになりました。

⑧ 2002 年度――広島国際大学での宿泊。秋葉市長表敬、カープの応援。秋葉市長の AU 訪問

この年の参加者は、立命館大学から 10 名、APU から初めて参加した３名。AU からは 14 名。そのほかに SC が４名、広島で４日間同行された近藤紘子さんと私を加えると、総数で 33 名となりました。AU から来日した学生のなかには、ピーターの一人っ子で、ミズーリ州セントルイスのワシントン大学で法律を学んでいたレキシー・カズニックさんがいました。AU の夏期講座は、他大学の学生も無試験で受け入れていますので、60 万円ほどの学費（往復のフライト代を含む）を支払い、所定の課題を果たすと、３単位を AU から授与されるわけです。

この年から爆心地から北東２キロの広島国際大学国際教育センター（中区幟町１－５）の高層建ての宿泊施設に滞在できるようになりました。テキストのジョン・ハーシー『ヒロシマ』に出てくるカソリック教会とエリザーベト音楽大学の北隣りの地で、ハーシー『ヒロシマ』を追体験する上では絶好のロケーションでした。カソリック教会は再建され、世界平和記念聖堂となっています。全員にワンルーム・マンションのような広い個室があてがわれ、自炊もできるなど、居住環境は大いに改善されました。宿泊代は一泊５千円と割安でしたが、午後 10 時半が門限となっており、出入りに窮屈さを感じた面もありました。

８月４日の夜、原爆ドームの北側の広島市民球場で、広島カープと巨人との公式戦を初めて観戦しました。ニューヨーク市の下町出身のピーターは、大の野球ファン。８月６日の夜は「とうろう流し」への参加を優先しますが、それ以外の日にカープの試合があると、有志で観戦に行くことが慣例となりました。

米国が開設した原爆傷害調査委員会（ABCC）は、日米共同運営の「放射線影響研究所」（放影研）と改称され、広島研究所は、比治山の山頂にあります。「被爆者を呼んで検査はするが、治療はしてくれない」、「核戦争に勝利するために必要な情報を集めているだけではないか」、「被爆者をモルモット扱いしているのではないか」という批判がたえなかった組織です。中学生時

代の紘子さんが、かまぼこ型の講堂のステージの上に立たされ、大勢のドクターのまえで、スポットライトをあてられ、裸身をさらすという屈辱の体験をさせられたところでもあります（詳細は、近藤紘子『ヒロシマ、60年の記憶』2005年1、リヨン社、139ページ）。

8月5日は、放影研の施設開放日でもありましたので、その日の午後に旅行団として放影研の見学に出かけ、問題の講堂の場で米国の研究者と懇談することもできました。**資料―19**はそのときのスナップです。「皆さんと一緒だから講堂に入る勇気がわいた。講堂はもっと大きなところだと思ってきたが、実際はずっと小さかった」という感想を紘子さんは述べられました。

夕刻には市役所の市長公室に秋葉忠利市長を表敬訪問しました。秋葉さんは元来が数学者で、米国ボストンのタフツ大学の数学担当の准教授を経験され、英語を使いこなす力はネイティブ並です。帰国後は、広島修道大学の教授を務めた後、社会民主党の代議士を3期経験され、1999年に広島市長に当選された方です。この年以降、広島市長を表敬訪問し、交流することが慣例となるなど、私たちを厚遇していただきました。1995年のスミソニアン論争をきっかけとする広島市とAUとの連携のおかげであり、ピーターたちに感謝しなければなりません。

資料―19

この年、長崎の浦上天主堂の側のカソリックセンターでは、世界各地からやってきた「国際非暴力平和隊」の若者たちが、君島東彦さんのリードのもとで研修していました。そこで8月8日の夕刻に、カソリックセンターを会場にして、君島さんのグループと交流会をもちました。

8月9日の被爆当日の朝には、改築前の山里小学校を訪れ、被爆式典に参加しました。城山小学校の式典は体育館のなかですが、校舎の前庭で行われる厳粛な式典でした。

旅行から2か月後の10月、広島市長の秋葉忠利さんはピーターに招かれ、AUで開かれた「増大する核の脅威」と題するパネル・ディスカッションに出席し、ピーターと意見を交換しました。この集いには、作家のジョナサン・シェルさんも出席し、ブッシュ政権が進めるイラク戦争に反対する論陣をはったそうです。AUで開かれた集会の詳細は、次の**資料―20**をご覧くだ

2002.11.18『赤旗』

イラク問題

平和解決へ立ち上がる時

広島市長、米大学討論会で主張

【ワシントン16日連藤誠二】訪米中の秋葉忠利・広島市長は十六日、ワシントン市内の大学でおこなわれた討論会に参加。同市長は、ブッシュ米政権が進める対イラク強硬政策について、市民と世界の声を反映させた平和的な解決を模索すべきであるとの考えを表明し、軍事力行使優先に反対する姿勢を示しました。

アメリカン大学で開かれた「増大する核の脅威　今日の国際的危機にむける歴史の教訓」と題されたパネル・ディスカッションに出席した秋葉市長は、イラク問題について米政権指導部は、「交渉にむけた可能性のある手段は使い尽くしたといっているがまだ手段は残っている」と指摘。同市長はまた、「人々の声や世界の意見を考慮しないで決断をする」米政権のやり方に懸念を表明し、「（世界の）市長が立ち上がる時が来た。…われわれ（地方政府の長）が市民の声を代弁する」べきだと訴えました。

討論会ではさらに、アメリカン大のカズニック教授が、ブッシュ政権は核態勢見直し報告を出しイラク戦争を追求しており、「核兵器の使用がより現実的になってきている」危険性があることを主張。また作家のジョナサン・シェル氏は「イラク戦争は、間違った解決法」と批判しました。

資料―20　（『赤旗』2002年11月18日）

さい。

⑨ 2003年――旅行団の憲法、京大綜合原爆展、ノーマンの娘さんとの交流

この年、近藤紘子さんのお父さんの谷本清牧師を記念して創設された「谷本清平和賞」（財団法人ヒロシマ・ピース・センター主催）の15回目の受賞者として、「原爆詩の朗読」をライフワークとしてきた吉永小百合さんが選ばれました。またお父さんの盟友のノーマン・カズンズさんの銅像が医師団体の寄付を集めて、平和公園の南東部の一角に建立された年でもありました。

優れた力をもつ通訳に確保に、毎年苦労してきましたが、この年から2年間、国際関係研究科の博士課程院生で、外国体験の豊富な藤原郁郎さんが、大学院生のTA（教育助手）として全日程同行されることとなり、通訳態勢が改善されました。

参加者の募集も順調でした。立命生から11名、APUから3名（うち2人が国際学生）の合計14名、これにたいして、AU側の参加者は15名となりました。その他SCや通訳、教員スタッフなどを含めると、34名の大所帯となりました。

学生主体の旅行という特色をいっそう強めようと、立命の一般参加者から3名、AUからも3名の合計6名の学生リーダーを選びました。これに3名のSCを加え、合計で9名の学生リーダー層で会議を開き、旅行団を引っ張ってくれました。

京都での開会総会の場で、旅行団の憲法として「京都議定書」（現在の「八月の花盟約」の原型）を作り、立命から3000円、AUからは5000円ずつ集めて、共通経費基金を設立するという方式も固まってきました。

会場費や講師謝礼、通訳役のTAの謝礼などは、立命の大学財政から負担しており、AU側はフリーライド（タダ乗り）しています。これをどう考えるのか。フリーライドを幾分なりとも是正するために、共通経費基金への拠出額に格差を設け、AU側からはより高額を負担してもらった方がよいのではないかと議論し、この年から4年間は、AU側からの共通基金への負担額を立命側よりも2000円多くする措置をとりました。

しかしもっと広い視点に立つと、AU側は一人45万円（単位なし）か60万円（単位あり）の特別学費（航空運賃を含む）を余分に負担して日本にやってきますが、立命館側には、このような負担はありません。あるいは広島市やマスコミにたいするAU側の影響力から立命生も大きな利益を受けています。これらの点も考慮した場合、共通経費のところで、立命側が多少多い目に負担しても当然ではないかという見解もありえます。議論の結果、2008年以降は、①差額徴収制は撤廃し、共通経費基金の拠出額は日米平等にする、②旅行社主催のパックツアーではなく、平和巡礼団という民主的な共同体を目指しているので、教職員も共通経費を平等に負担すべきという結論となり、問題は決着をみました。

京都では8月3日午後に、米占領軍の圧迫のもとでも、1951年の京大綜合原爆展の開催を成功させた当事者――当時京大医学部の学生であった川合一良さんとパートナーの葉子さんを招いて、セミナーを開きました。米軍の占領下では、原爆の実態の報道は検閲され、真実が隠されたままであったこと、当時の京大の全学自治会（同学会）が、医学部・理学部の学生たちの専門知識を動員して、京都駅前にあった丸物百貨店（現在はヨドバシカメラのビル）を会場に「綜合原爆展」を開こうとしたこと、占領軍の意向をふまえて大学当局が中止の圧力をかけてきたが、これに抗して開催したこと、その結果、延べ3万人の市民が見学に訪れるなど、原

ノーマン・カズンズ氏の養子だった被爆者

ひと

03.8.7 AM

笹森恵子さん（71）

広島市の平和記念公園で2日、米国人ジャーナリスト、ノーマン・カズンズ氏の記念碑が除幕された。式典で通訳を務めていて、被爆後の人生が頭に浮かび、涙が止まらなくなった。

広島の爆心地から約1・5キロで被爆。上半身を熱線で焼かれ、5日間、生死の境をさまよった。やけど跡の治療のため、55年にカズンズ氏の招きで米国へ。「原爆乙女」と呼ばれた25人の中でただ一人、カズンズ氏の養子となった。

90年に75歳で亡くなったカズンズ氏は、編集長を務める文芸誌で原爆孤児に育英資金を送る「精神養子運動」を提唱するなど、被爆者援護に尽くした。

被爆後、母親に看病してもらった経験から看護師を希望した。「米国でしてみないか」と勧められ、両親と相談し米国永住を決意。カズンズ氏の4人の娘と姉妹のように暮らし、新生児を預かる病院などで働いた。

米国にも被爆者であることを隠す人が少なくないが、養父の勧めで毎年のように被爆証言をしてきた。

ただ、カズンズ氏と直接、原爆について語り合ったことはない。いつも周囲を笑わせる「魔法の笑顔」の持ち主が、米国作家協会の代表として49年に廃墟の広島を訪れて受けた衝撃は、後に著書で知った。

6日、平和記念式に臨んだ。養父と参列して以来18年ぶり。「時代は戦前へと大きく舵を切った」という平和宣言にうなずいた。

「残りの人生も証言活動一本でいきます」

文　翁長　忠雄
写真　西田　裕樹

「日々、他人を思いやり、心を通わせることが平和の基盤です」

資料―21　（『朝日新聞』2003年8月7日）

爆の真実を世に広めていく機会となり、原水爆禁止運動を準備する役割を果たしたという報告でした。このセミナーの模様は、同年8月15日15－17日の『朝日新聞』の連載記事「学生と戦争」のなかで報道されました（**巻末資料―8**を参照）。

この年の8月2日に、平和公園の南東端に建立されたノーマン・カズンズの胸像の除幕式が行われました。カズンズさんはユダヤ人のジャーナリスト。谷本牧師とともに原爆乙女25名をニューヨークのマウント・サイナイ病院で整形手術する運動を推進した人で、広島県医師会が広島市医師会と共同して、470万円の募金を集めて記念碑を建立したそうです。

除幕式には、ノーマンの3人の娘さん――長女のアンドリア、4女のセーラキット、養女の笹森恵子さんが、ゲストとして招かれました。笹森さんは、25名の原爆乙女のなかで、ただ一人、ノーマンの養女となり、米国に残った人。新生児を預かる病院などで働いてきました（**資**

被爆者治療に力
米国人の記念碑
平和公園で除幕式

被爆者治療に尽力し、90年に75歳で亡くなった米国人ジャーナリスト、ノーマン・カズンズさんの記念碑が2日、広島市中区の平和記念公園南側で除幕された。広島県、広島市の両医師会などが約470万円の募金を集めて建立した。

カズンズさんは49年、編集長を務めていた文芸誌で、原爆孤児に育英基金を送る「精神養子運動」を提唱。「原爆乙女」と呼ばれた女性の被爆者を米国に招き、やけど跡の治療を手配した。

03.8.2 A

64年に広島市の特別名誉市民になった。

高さ約1・2㍍と約80㌢の二つの石で造られた、碑には、肖像のレリーフが埋め込まれ、「世界平和は努力しなければ達成できるものではない」と、カズンズさんの言葉が記されている。

除幕式には「原爆乙女」の一人で米国在住の笹森恵子さん、カズンズさんの長女のアンドリアさんらが出席。四女のセーラキットさんは、カズンズさんが生前「遺灰を広島にまいてほしい」と話していたことを紹介し、「ここに碑ができたことに、父も感謝していると思う」とあいさつした。

カズンズ氏の娘のアンドリア・カズンズさん（右）のあいさつを通訳していた笹森恵子さんは、感極まって話せなくなり、秋葉忠利広島市長が飛び入りで通訳をした＝2日午前10時35分、広島市中区で

朝日新聞 2003年8月2日 夕刊

資料―22

料—21 参照)。アンドリア・カズンズさんの挨拶の通訳を笹森恵子さんがされていたのですが、途中で感極まって話せなくなり、秋葉市長が飛び入りで通訳するというハップニングがありました（**資料—22** 参照)。

8月4日の広島到着後、平和資料館を見学した後の夕刻に隣の国際会議場で、元館長の高橋昭博さんから被爆体験を聴く集いをもちました。集いの終了後に撮った写真が、**資料—23** です。高橋さんの左隣に笹森恵子さん、一番左の紘子さんの後ろに並んでいるのが、ノーマンの2人の娘さん（左がアンドリアさん、右がセーラキットさん)です。高橋さんも2011年に逝去されました。

8月5日に観光バスをチャーターして、広島市北郊40分ほどのところにある被爆老人ホームの倉掛のぞみ園を慰問し、被爆者と交流し、広島原爆被爆者援護事業団理事長でもある鎌田七男先生と交流するプログラムも、この年から始まり、その後5回ほど訪問しました。この年は、国際的な反核組織の「アボリッション2000」日本側評議員の大庭里美さん（プルトニウムアクション広島）にバスに同乗してもらい、核兵器廃絶の展望について英語で語っていただきました。大庭さんは、宇宙の脱軍事化を求める運動の日本での中心人物だったのですが、惜しいかな、半年後の2004年2月に急逝されます。

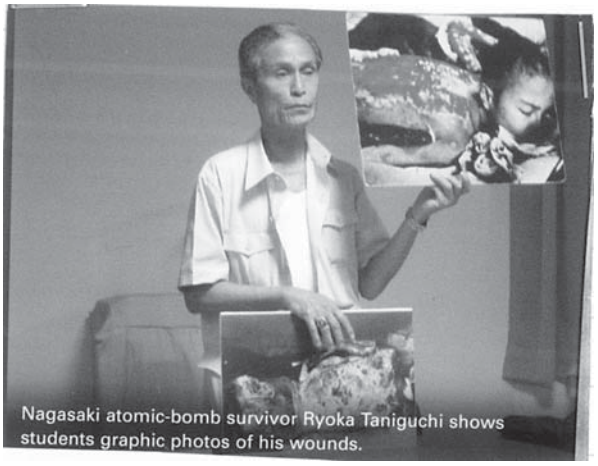
資料—23

倉掛のぞみ園への訪問の際にはノーマンの2人の娘さんも同行され、交流の機会がもてたのは幸いでした。アンドレリアさんはボストン住まい。妹のセーラキットさんはイスラエルへの移住者で、イスラエル評価をめぐって、姉はハト派、妹はタカ派と見解が異なっていました。

なお原爆乙女25名（うち中林智子さんは、執刀1年後にマウント・サイナイ病院で死亡）のなかで、手術後に米国に移り住んだ人が、笹森恵子さん以外にもおられます。手術の10年後に、滞米中に知りあった米国人と結婚するために再渡米した田坂博子さんが、その人です。田坂さんは1997年に亡くなりますが、その前年に『ヒロコ　生きて愛』という自伝を学研から出版されました。この自伝は、原爆投下機に搭乗していた米兵の孫にあたるアリ・ビーザーさんの手で英訳されたそうです（**巻末資料—9** を参照)。

AUでの留学を終えて帰国した紀古鮎美さんに焦点を絞り、彼女に密着取材した記事を『京都新聞』は配信しました。詳細は、**巻末資料—10** を参照してください。

その後、長崎に向かい、7日の夜には、長崎原爆被災者協議会の会長の谷口すみてるさんの被爆体験をお聴きしました。郵便配達中に爆風で自転車もろとも吹き飛ばされ、背中に深刻なケロイドを負ったそうです。あまりに痛いので



資料—24

数か月の間、うつ伏せのままベッドに寝かされたと語られました（**資料―24**）。

8月9日朝には、城山小学校の方の被爆式典に初めて参列しました。爆心地から500メートル西の山腹に位置していたため、水平方向の爆風と地面にぶつかり反転した爆風とが重なりあった「マッハステム」という強烈な衝撃波の直撃をうけ、1400名の児童と職員とが亡くなった所です（NHKスペシャル「長崎原爆――知られざる衝撃波」、2014年8月18日放映）。

クラスごとに「平和の願い」を発表する子ども代表の決意に感動しました。『毎日新聞』が、私たちの訪問を報道してくれました（**資料―25**参照）。　この年以降、城山小学校の慰霊式典に参列するようになり、2014年で12回連続の訪問となりました。被爆校舎を保存した学校ミュージアムを見学し、旅行中に折った千羽鶴を、正門からすぐの「少年平和像」に献鶴することが慣例となっています。

この年には、SC団の発意で、旅行団コミュニティを活性化させる様々なとり組が行われました。たとえば「南北問題を学ぶ地球村昼食会」と称して、最貧国、中進国、富裕国のテーブルを用意し、各テーブルにはその地域の平均所得で調達できる食材だけを並べ、経済格差の大きさを体験した後に、「こんな気まずい昼食会はいやだ」と、「平和革命」を起こして、食べ物をシェアしあうことで平和な世界を追体験しあうというイベントが一例です。この年から数年間、SCが学生有志を巻き込んで、英文の「旅行団新聞」を隔日ペースで発行・配布したり、地域通貨プロジェクトと称して、最初に全員に10ピースの地域通貨を供与し、他のメンバーから援助されたり、サービスを受けとったら、お礼として、地域通貨を渡すといった方法で、相互の協同を可視化し、促す試みも始まりました。「平和への道はない、平和が道である」と説いたマハトマ・ガンジーと妻のカスツーバを図柄にとりこんだ地域通貨ピースは人気を集めました（**資料―26**参照）。10日のまとめの集会では、たくさんのピースを集めた「ピース持ち長者」が顕彰されました。

この年の体験は、受講生に大きな影響を与えたようです。受講生の山田麻祐子さん（法学部2回生）は、『京都新聞』の「読者の声」欄に、「被爆の歴史が伝える悲惨さ」という投書を行い、米国で生まれたため米国籍も有する辻道子さん（文学部2回生）は、原爆を投下した米国の本当の姿を知るため、その後2か月かけて、米国を縦断する自転車旅行を敢行し、米国籍を

米大学生ら34人も出席

○…爆心地から約500㍍にある長崎市城山町の城山小では平和祈念式があり、児童約420人のほか、平和学習講座で長崎を訪れているアメリカン大（ワシントンDC）の学生ら34人も出席した。前波政昭校長が原爆により同校の児童や職員約1400人が亡くなった話をしたほか、各学級の児童代表が「平和の願い」を発表した。アメリカン大4年のニコラス・ロスさん(22)は「戦争に対する考えが変わった。戦争の正当性と口実について深く考えさせられた」と話した。

03.8.10 毎日(朝)

「平和の願い」を発表する児童ら

資料―25　（『毎日新聞』長崎版2003年8月10日）

資料―26

手放す決意を固めたそうです（**巻末資料―11** 参照）。

⑩ 2004 年――エノラ・ゲイの再展示への抗議。参加者の第一のピーク。長束修道院を初めて訪問

2003 年の旅が終わって 3 か月後の 2003 年 11 月、広島に原爆を投下した B29 エノラゲイ機が、完全に復元され、ワシントン郊外のダレス国際空港脇のスミソニアン航空宇宙博物館別館に、12 月中旬から永久展示されるということが分かりました。博物館側は、原爆を投下した飛行機だと説明するだけで、原爆投下による犠牲者数など被害の側面は言及しない方針であることも分かってきました。

ピーターを中軸として活動している「核の歴史と現政策を討議する全国委員会」は、11 月 5 日に展示の説明プレートには、原爆による被害を知らせるなど、バランスのとれた展示に改めるよう求める要請書を博物館に送付しました。要請書には、機密のペンタゴンペーパーを公表したダニエル・エルスバーグ、歴史家のハワード・ジン、ジョン・ダワー、言語学者のノーム・チョムスキー、映画監督のオリバー・ストーン、秋葉忠利さん・広島市長も名を連ねていました。まさに「ピーター人脈」の結集です（この事実をいち早く伝えた『赤旗』記事については、**巻末資料―12** に掲載しました）。

12 月 15 日のエノラ・ゲイの公開にあわせて、ピーターたちに招かれて、日本被団協事務局長の田中熙巳さん、広島の被爆者の坪井直さん、長崎の被爆者の山田拓民さんが訪米し、エノラ・ゲイを展示するならば、投下がもたらした惨劇の側面にも触れてほしいと迫りました。まさにスミソニアン論争の第 2 幕というか、1995 年の「リベンジ戦」となったわけで、原爆投下をどう理解すべきかをめぐって、米国での議論を刺激する役割を果たしました。詳細については、**巻末資料―13** をご覧ください。

この年は交流セミナーが始まって 10 年目の年でした。この年の応募者数は 42 名と、第一のピークとなり、そのなかから受講者 15 名（RU から 13 名、APU から 2 名）を決定しました。ちなみに応募者数で第 2 のピークとなったのが 2009 年の 51 名。第 3 のピークとなったのが、2014 年の 58 名です。

「スミソニアン論争第 2 幕」が追い風になったのか、AU からも最高数の 22 名が来日しました。22 名のなかには、ピーターのほか AU「核問題研究所」の研究主任ウダイ・モハンさんが含まれています。モハンさんはインド出身で、スミソニアン論争とかかわって AU のとりくみを紹介する記事を君島東彦さんと連名で朝日新聞に寄稿された人。悲しいかな、訪日の旅の数年後に死去されました（**資料―27**）。その他に 4 名の SC、1 名の通訳 TA。オブザーバーとして部分参加された中戸祐夫（宇都宮大学）さんやピーターの友人で原爆の惨劇を撮影していたトム・パワー（映画監督）、さらに随行カメラマン 2 名を加えると、総計では 50 名と未曽有の規模に膨れました。そのため定宿のほかに広島ではホテルかめまん、長崎ではビジネスホテル・ニュー

資料―27

トップを追加予約し、2か所に分宿しました。

広島では、紘子さんのほか、母親の谷本チサさんや弟の建さんの息子さんも参加され、被爆時に赤ん坊の紘子さんの着ていた衣服などを見せていただきました（**資料―28**）。

8月5日には前年につづいて倉掛のぞみ園を訪問しましたが、その際、ピーターの友人のキャサリン・サリバンさんとご一緒しました。**資料―29** は、バスのなかで、ピーターがキャサリンを紹介しているシーン。彼女は、長崎の被爆者の下平作江さんを描いた映画『ラスト・ボム――長崎を最後の原爆の地に』を製作したニューヨークの平和教育者。カリフォルニアの平和哲学者で、仏教徒でもあるジョアンナ・メーシーさんと後に交流できたのも彼女のおかげでした。

資料―28

爆心地から北へ8キロの長束にあったイエズス会の修練院（現在は「修道院」と改称）に瀕死の被爆者を、何回も荷車で運び、演台の上に負傷者を寝かせ、外科の腕がある神父が応急手術を行ったという記述が、ジョン・ハーシーの本には出てきます。バスをチャーターしたおかげで、この年はじめてイエズス会の長束修道院を訪問し、手術台の跡を見学できました。またハーシーによって、被爆者救済に奔走した人として描かれているクラインゾルゲ（日本名・高倉誠）神父の墓参りもできました。布教先の現地文化に順応する伝統がイエズス会にはあるのですが、日本の寺院と見まちがうような修道院の造作に驚かされました（**資料―30** 参照）。

長崎では、8月7日の夕刻から夜にかけて、平和公園内の「被爆者の店」（長崎原爆被災者協議会）の2階の会議室で、山田拓民さん（被災協・

資料―29

資料―30

事務局長）と下平作江さんの証言をお聴きしました。会議室の三方の窓からは被爆地の全景が一望できます。証言の最初の頃には、西側の城山小学校の方向から赤い夕陽がまぶしいくらいにさしこみますが、妹さんの絶望のあまりの鉄道自殺のことを下平さんが語られる頃には、暗闇のとばりに沈んでいきます。お二人との交流会の最後に記念写真をとりました（**資料―31**）。右端に立っているのが藤山一郎講師。2列目の中央部で着席されているのが、山田拓民さんと下平作江さんです。

8月8日の午後、いくつかのグループに分かれて、被爆地周辺の学校などを訪問しました。被爆地の北側に位置し、永井隆博士の母校でもある山里小学校を訪問した時のスナップが、**資料―32**です。

この年の事後研修は、11月28日に婦人国際平和自由連盟・日本支部の主催した「日本縦断学生平和テレビ会議」の一環として行われました。来日中のベティ・リアドン教授（平和教育の世界的リーダー）の講演を聞いたのちに、秋林こずえさん（後に立命の教員。現在は同志社大学）の通訳で、日本女子大学の学生たちと交流できました。

⑪ 2005年――被爆60周年、46名の参加、長崎で西嶋さんと協同して歴史講演会

参加者は、AU側が27名と空前の数となりました。リピーターの松下ノアさん、マイケル・フリンさん（ニューヨーク市立大学教員）、キャサリン・サリバン、トム・パワー（この旅行の映画化企画を進めていた監督、まだ実現せず）が含まれています。立命館側は、受講生が16名（うちAPUが3名）、SCが3名、通訳として外山聖子さん（国際非暴力平和隊スタッフ）を加えると、22名。日米双方を合わせると総数は46名に達し、2年つづきで、かつてない規模の参加者を集めたわけです。

この年から近藤紘子さんは、京都の初日から長崎まで全日程を通しで参加されるようになりました。京都プログラムが8月1日から3泊。広島プログラムが8月4日から3泊、長崎プログラムが8月7日から3泊という、今日とほぼ同じ旅行日程が確立したのもこの頃のことでした。

8月4日の夜6時から広島市民球場で巨人と戦う広島カープのナイター試合を応援にいきました。有志参加でしたが、AUはほぼ全員、立命関係者も7割ほどが市民球場に駆け付け、カープを応援しました。「KATTOBASE!」（かっとばせー）というのが、旅行中の人気フレーズとなりました。

秋葉市長は、被爆60周年の諸行事に忙殺されていたので、例年のような表敬訪問は適わなかったのですが、そのかわりに7日午前9時半に私たちの宿舎の広島国際大学国際センターを市長が訪問され、その場で秋葉さんとの即席交流会を開くことができました。まさに破格の厚

資料―31

資料―32

資料―33

遇で、広島市が私たちの事業をどれほど重視しているかが実感できました。**資料―33** は、交流会の最後に撮った記念写真。中央に、ピーターと秋葉市長とが並んでいます。

8月9日の午後2時－4時半まで、原爆投下60周年記念――戦後初の日米歴史学者シンポジウム「広島・長崎――原爆投下の意味を考える」を、私たち国際平和セミナーと長崎平和研究所とが共催する形で長崎被災協の大会議室で行いました。原爆投下をめぐって古典的な著作を出された西嶋有厚さん（福岡大学名誉教授）が「原爆投下終戦論の誤り――日本側の史料に基づいて」、ピーターが「核兵器の犯罪性――黙示録：あの時から現在まで」を論じました。西嶋さんの通訳を長崎の前川智子さん、ピーターの通訳を飛び入りの中村桂子さん（当時は平和情報団体「ピースデポ」のスタッフ、現在は長崎大学核兵器廃絶研究所の准教授）にお願いし、受講生以外にも40名ほどの市民が参加され、会場は満員になりました。この日米歴史学者シンポの内容を詳報した新聞記事として、**巻末資料―14** を参照してください。

集会には、西嶋さんとピーターの共同の友人で米軍の核戦略の専門家の新原昭治さんも参加されました。因みに西嶋さんは著作で、敗戦時の天皇制存続の暗黙の保証にかんして、「ポツダムに駆け付けたスティムソン国防長官がトルーマンに「天皇制の継続の保証が重要であり、ポツダム宣言でそれに触れるように最後の説得を行ったが、『トルーマンから・・・それは不可能だと言われ』た・・・・『私は・・・口頭ででも日本にその保証を与えるよう、慎重に考慮して欲しいと言った。大統領はそのことを心に留めておき、処置を取ろうと言った』という重要な会話があったことを知らしめた人。ピーターたちの本と映像では、この口約束のことが無視されていますが、長崎への原爆投下の直後から、この口約束の線にそって天皇が動き、日本の降伏が実現していったというのが、藤岡見解です（藤岡惇「『核の時代』の真実に迫る」『経済』2014年6月号、117ページ）。

第４期
乗松さんの参画で言語障壁が低下してきた（2006年―2010年）

乗松聡子（Satoko Oka Norimatsu）さんといえば、慶応大学文学部卒業後、夫とともにバンクーバーに移住し、カナダのブリティシュ・コロンビア大学経営大学院で学び、自宅に「ピースフィロソフィ・センター」を開設された人ですが、2006年から通訳として、私たちの事業に参画されるようになりました。2006年には山岡ミチコさんの証言を通訳されただけでしたが、2007年からは全行程に同行していただけるようになりました。乗松さんの優れた通訳力のお

かげで、夜の非公式の交流会はじめ、大小さまざまなレベルでの意思疎通が大いに改善されました。

2008年から、乗松さんは、カナダの若者たちを引率して来日されるようになり、同年以降、13名のカナダ在住者が私たちの旅に参加しています。ただしここ数年は、AUを介した参加者を一人でも増やすため、カナダからの参加者も、高学費は覚悟のうえAUルートで参加するようになっています。

⑫ 2006年（乗松聡子・田中利幸さんとの出会い、脳発作直前の山岡ミチコさんの証言）

この年は、前2年とくらべて、AUからの参加者は激減し、催行ギリギリの8名にまで落ち込みました。これにたいして立命側の参加者は、受講生は13名（APUの2名を含む）、SC3名、TA1名、藤岡・近藤さん、部分参加の乗松さんを含めると、合計で28名となりました。

この年は、3人のSCと立命の参加者の奮闘で、英文の旅行新聞が定期発行されましたし、京都では、君島東彦さんから「核兵器をめぐる情勢と憲法問題』について英語で講義してもらいました。

少額の謝礼で働いてくれる良質の通訳の確保が、毎年の悩みの種でした。広島での初日の8月4日の夕刻、訪米した25名の原爆乙女のなかで数少ない生存者の一人であり、1995年にはAUの原爆展に参加するために訪米した山岡ミチコさんを招き、証言をお聴きすることになっていたのですが、通訳の目途がたちません。2か月前にカナダのバンクーバーで開かれた世界平和フォーラムで知り合ったばかりの乗松聡子が、劣化ウラン弾禁止の世界会議のために広島に来ておられることを知り、「背に腹は変えられぬ」とばかりに、通訳をお願いしました。乗松さんは、「世界平和フォーラム」の「日本国憲法9条の世界的意味」分科会に「9条を救え、バンクーバーの会」代表としてパネラー報告をされ（君島東彦さんも分科会パネラーの1人）、通訳力量の高さは承知していました。じっさいに山岡さんの証言の通訳をしていただいたところ、出来栄えは素晴しいもので、山岡さんも喜んでいました。

乗松さんの人生の原点となったのは、世界平和に貢献するヒトを育てるという教育理念をかかげる「ユーナイテッド・ワールド・カレッジ」傘下のピアソン・カレッジに高校時代に留学したにもかかわらず、コミュニケーションが十分にできず、「不完全燃焼」と「挫折」を体験したことにあるそうです。

その後、アステールプラザの庭園に移動し、近藤、乗松、ピーター、藤岡とで山岡さんの慰労会を行い、楽しいひと時を共有したのですが、2日後の8月6日、被爆式典から帰宅した直後の山岡さんが脳発作で倒れ、入院されたという悲報が飛び込んできました。

その後広島に訪れるたびに、有志で平和公園南側の土屋病院や老人ホームのエクセレントに山岡さんのお見舞いに伺うのが慣例となりましたが、2013年2月2日に82歳で亡くなられました。山岡さんの逝去を伝える『週刊新潮』の記事については、**巻末資料―15**を参照してください。今では25名の原爆乙女のうち、生存者は米国在住の笹森恵子さんなど、ごく少数となっているようです。

これより先の7月15日に、「原爆投下を裁く国際民衆法廷・広島」が開廷したこと、翌16日にトルーマンたちを有罪とする国際民衆法廷の判決が言い渡されたというニューズが届きました。この「国際民衆法廷」運動を支えてきた理論家が田中利幸さん（広島市立大学広島平和研究所教授）でした。オーストラリアでの生活が長く、精力的な活動家です。

8月5日の夕刻に、田中利幸さんのお世話で市役所の前の平和ビルの9階にある広島市立大

学平和研究所の会議室を借りて、田中さんご本人から「原爆投下を裁く国際民衆法廷の経験」を、英語で話していただきました。また広島の代表的な被爆者である高橋昭博さんの「私の被爆体験」の報告もお聴きしました。高橋さんの話は、これで5度目でしたが、この時も被爆した指の爪を見せていただき、エノラゲイ機のポール・チベッツ機長との交流談を聴くことができました。「再び戦争がおこり、原爆投下を命じられたら、私はこれに従うでしょう。戦争とはそんな残酷なものなのです。ですからそんな戦争を2度と起こしてはならないのです」とチベッツ大佐は高橋さんに述べたそうです。高橋さんは筆まめで、達筆で長文の手紙をいただいたことがありますが、その後体調不振となられ、2011年11月2日に亡くなられます。

前年度に引き継ぎ、7日の午前9時半に秋葉市長が宿舎の広島国際大学の国際教育センターを訪問され、45分ほどの交流会をもつことができました。市長との交流会が終わってすぐ、私たちは新幹線に飛び乗って、長崎に向かいました。

AU側は8月11日の昼に関西空港から離日するというフライト・スケジュールを組んでいたため、10日の夜は難波に近いアークホテルに泊まり、道頓堀・新世界などミナミの夜を楽しむことができました。翌朝タクシーに分乗して、南海電鉄の難波駅に向かったのですが、ひどい交通渋滞に巻き込まれ、肝を冷やすことになりました。無事に飛行機に乗ることができたという知らせを聞いて、ほっとしたことを覚えています。

⑬ 2007年（乗松さんの全面参画、デイブとジョナサンとの交流）

この年、AUからの参加者は、16名と増加しました。うち8名が大学院生でした。他方立命側の受講生数は、RUが13名、APUが1名で、計14名。それに3名のSCと藤岡・近藤をあわせて、36名の旅行団を結成しました。

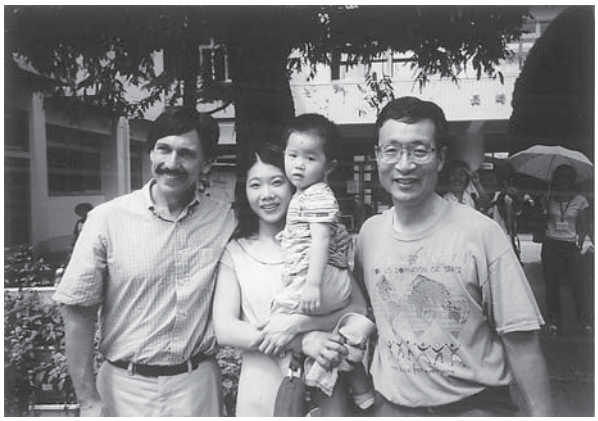
この年から、乗松聡子さんもカナダから来日し、京都プログラムの初日から全日程に参加されるようになり、おかげで言語の壁を越えた意思疎通が格段に向上することとなりました。

「宇宙の脱軍事化を求める地球ネット」運動の代表で、英国最大の平和運動団体CNDのヨークシャ支部代表で執行委員でもあったデービッド・ウエッブ（リーズ都市大学教授）さんが、パートナーのレスリーさんとともに来日中でしたので、彼を招いて、8月3日に立命の平和ミュージアムを会場にして、「知っていますか。宇宙を舞台にした核戦争準備が進行中」という論題で講演してもらいました。デービッドの講演は、市民開放セミナーとして行いましたので、旅行団以外にも10人ほどの市民の方が参加され、有益な交流を行うことができました。デービッドは現在、大学をリタイアして、欧州最大の反核平和団体CND（核廃絶キャンペーン）の議長をしています（**巻末資料―16**参照）。

8月4日昼に広島駅に着き、まずは資料館の隣の国際会議場において、広島平和文化センターと朝日新聞社とが共催した「国際平和シンポジウム――再び核廃絶のうねりを」を聴講しました。お目当ては、ピーターの友人で『地球の運命』『核のボタンに手をかけた男たち』を書いたジャーナリストのジョナサン・シェルの講演でした。

広島平和記念資料館では、企画展「海外からの支援――被爆者への援助と込められた再建への願い」を見学しました。原爆乙女や精神養子運動をめぐるノーマン・カズンズや谷本清さんの活動、フロイド・シュモーなどクウェーカーの人々による「広島の家」建設の情景が展示されていました。その後、被爆者の松原美代子さんの証言をお聴きしました。また5日には、被爆者の老人ホームである倉掛のぞみ園へ4度目

資料―34



資料―35

の訪問を果たしました。

ジョナサン・シェルとは被爆式典の後に、平和公園の木々とテントの下で再会し、しばし交流の集いをもつことができました。カッターシャツ1枚のジョナサンの肌から汗がふきだしており、彼の真剣さ、素直さを体から感じ取ることができました（**資料―34**）。それから7年後の2014年3月25日にジョナサンが死んだという悲報が届きます。

7日の午前は資料館でスティーブ・リーパー館長とピーターとの対談を軸にして「資料館展示をどう改善すべきか」をめぐって交流し、午後1時半に広島駅を出発し、夕刻に浦上に着きました。長崎では1999年以来8年間定宿にしていたホテル・カンタービレが廃業・閉鎖されていましたので、同じ浜口町のホテル・アルファイン長崎に投宿しました。爆心地から南へ500メートルの地で、原爆体験を綴った福田須磨子の住居の跡地に建っています。以後このホテルが長崎の定宿となり、今日に至っています。

毎年ほぼ同じ時期に、同じ順路で「平和を求める巡礼の旅」を続けていますと、思いかけない時に、過去の参加者が会いに来てくれるものです。村井綾さんは2000年度、経済学部3回生だった時に参加した人です。卒業後は郷里の長崎に戻り、金融機関に勤めていましたが、2007年8月9日に城山小学校の慰霊式に赤ん坊をつれて来てくれました（**資料―35**）。

⑭ 2008年（駅前の東横インが広島の宿舎に、共通経費が一律に）

14回目となるこの年の参加受講生は、AUから11名、カナダから3名、RUから12名、APUから4名の30名でした。そのほかSCの4名、スタッフとしては藤岡・近藤の2名で、合計で38名となりました。この年から共通基金の負担額は、全員一律の7千円となりました。

AU側の社会人学生の一員として、ネバダの核実験場の風下住民として被爆し、甲状腺癌を患ったメアリ・デックソンさんも来日され、8月2日に京都で彼女の体験を聴く機会をもちました（**資料―36**参照）。

この年、ピーターとAU側参加者の肝を冷やす事件が発生しました。8月4－10日のAU生の移動のために1週間乗り放題（ただしのぞみ号は対象外）のJRパスを、AUを代表してピーターが米国内で購入して持参してくるのですが、この大切なJRパスをワシントンの自宅に置き忘れてやってきたのです。ピーターは京都からパートナーのシムキさんに緊急電話をかけ、京都を離れる4日早朝までに特急便で藤岡の自宅まで送るように依頼しました。しかしその日までには届かず、やむをえず京都―広島間のJR運賃を別途に負担して広島へ。5日午前に

朝日新聞　2008年8月26日　朝刊　30ページ　長崎

祈念式典に出席した米ヒバクシャ

被爆者の苦労聞き

非核への思い新た

米国で核廃絶を訴えている米国人の「ヒバクシャ」、メアリー・ディクソンさん(53)がこの夏、長崎を訪れた。

ユタ州出身。29歳の時、甲状腺ガンを患い、これまで2度手術を受けた。米軍が51年から900回以上、同州の隣のネバダ州の砂漠で実施した核実験による放射能の影響と診断された。汚染物質が風に乗り、ディクソンさんの町に降り注いだのだった。核実験場の風下で被曝した人々は「ダウンウインダーズ」(風下の人たち)と呼ばれ、全米で約7万5千～22万人と推定されるという。「ヒバクシャは63年前の原爆による被爆者だけを指すのではありません」

来日の目的は、広島、長崎の被爆者に会うことだった。「被爆者の谷口稜曄さんから今までの労苦を聞いて涙が出た。核廃絶という共通の目標を確認できた」。長崎では原爆忌の9日、爆心地近くの城山小学校を訪問し、平和祈念式典に出席した。

多くの核兵器を保有する米国だが、「核を望まない市民は多い。この思いを米政府はくみ上げなければなりません」と力を込めた。

資料―36

資料―37

藤岡宅に届いたことが判り、JRパスをもつ乗松さんが京都駅まで引き返してパスを入手。広島から先の日程ではJRパスを使えるようになりました。

2002年以来6年間、広島では幟町の広島国際大学の国際教育センターに滞在してきたのですが、国際教育センターは学外者に宿泊施設を貸さないこととなったので、新しい宿泊先を探さねばならなくなりました。東横イン新幹線口が広島の新しい定宿となりました。宿泊料金はすこし上がりましたが、駅前のためにタクシーでの移動が不要ですし、門限がないというのも魅力でした。

8月4日夕刻には、市役所前の広島市立大学の広島平和研究所会議室で、松原美代子さんの被爆体験を聴いた後に、田中利幸さんから2007年に判決が出された「原爆投下を裁く国際民衆法廷の意味」のレクチャーをうけました。また8月7日午前9時半から、市役所前の広島市立大学平和研究所で中間評価とまとめの集会を行った後、市長公室で秋葉市長との交流会を行い、昼前に長崎に向かいました。

長崎では、8月9日の午後に有志で軍艦島クルーズに参加しました。9日の夜は、恒例のうちあげ・お別れパーティで、長崎駅前で行います。**資料―37**は、パーティの最後に写したスナップです。共通基金に残額があるばあいは、パーティで使いきるように努めます。

8月10日昼過ぎの解散の後、AU関係者は新幹線でその日のうちに品川まで戻り、翌11日に東京大空襲記念館を見学した後、帰国していきました。

⑮ 2009年（バンクーバーから4名、立命職員の初参加）

この年は、乗松さんルートでカナダから4名の学生が参加しました。またメディア・インターンとして、高校3年生のカイ・キーン君の特別参加を認めました。彼はニューヨーク州イサカからお母さんの実家のある京都市に来ていたのですが、平和の旅のプロモーション映画を作成したいということでした。この仕事を請け負ってもらったところ、約束にたがわず、すばらしい映画を製作してくれました。

特筆すべきは、立命職員の若林あゆみさんが業務として参加されたことです。職員の方が会計実務を取り仕切っていただいたので、ずいぶんと楽になりました。ただし2013年から大学の方針が変わり、職員の同行はなくなりました。

「宇宙の脱軍事化を求める地球ネット」議長のデービッド・ウエッブさんと2007年に交流した

ことはすでに触れましたが、2009年には、広島で開かれる世界平和市長会議の基調講演者に選ばれて来日中のブルース・ギャグノンさん（同じ「地球ネット」の事務局長）と広島で交流することができました。

長崎では、「なぜトルーマン政権は2発目の原爆を長崎に投下したのか」というテーマで、鹿児島大学の木村朗さんとピーターとに語ってもらいました。この市民開放講座の内容は、受講生有志の協力でテープおこしされ、乗松聡子さんが翻訳しました。そして木村朗さんが編集の労をとられ、木村朗・ピーター・カズニック著『広島・長崎への原爆投下再考――日米の視点』という本となり、2010年に法律文化社の手で出版されました。

⑯ 2010年（広島で2日にわたりバスを借り、岩国基地ツアーへ）

この年の参加者は、合計で48名となりました。AUからの参加者は、イラクからの帰還兵や3度目の参加者など、多彩なメンバーとなりました。前年に引き続き職員スタッフとして、勝屋藍太さんが参加され、貢献してくれました。

この年からアカデメイア（平和ミュージアム）の3－4階のセミナーハウスが廃止されたのに伴い、京都プログラムの宿舎は、金閣寺裏の旧西園寺記念館――新しい衣笠セミナーハウスに移りました。

京都では、乗松さんの友人のデイビット・ロサウザー（David Routhauer）監督を迎え、ご自身の最新作 “Hibakusha:Our Life Story” という映像作品を鑑賞し、京都在住の2人の被爆者――米沢鉄志、花垣ルミさんの体験談をお聴きしました。米沢さんは、谷本牧師の流川教会の近くを走っていた市街電車のなかで被爆しましたが、満員電車の乗客が盾の役割を果たしてくれたので、生き残ったという数奇な経験を証言され、花垣さんは、原爆の衝撃の大きさから、その前後の記憶が消えてしまった体験を話されました。米沢さんは立命館大学の卒業生でもあります。

広島では8月4日に、「被爆死していた12名のアメリカ人捕虜」を発掘された森重昭さんのスピーチを聴きました。被爆後に怒る被爆者たちによって、生き残った米兵はリンチされ、死体は橋げたにつりさげられたそうです。被爆死した米兵捕虜の慰霊銘板は、98年7月に設置されましたが、経緯の詳細は、**巻末資料―17** を参照してください。

原爆ドームの北隣の広島市民球場は取り壊され、JR広島駅の西1キロほどのところに、近代的な広島マツダ・スタジアムが完成していましたので、5日の夜には、参加者有志で、「ピースナイター」を観戦し、横浜ベイスターズと対戦した広島カープを応援しました。

沖縄の米軍基地問題に鋭い関心を寄せてきた乗松聡子さんからは、広島市だけは「反核平和都市」とされてきたが、周辺の岩国には米軍基地、江田島や呉には海上自衛隊の巨大な基地が厳然として存在するなど、広島周辺は戦争システムの拠点となっている面にも光をあてるべきではないか、という問題提起を受けていました。そこで日本本土で唯一の米海兵隊の航空基地がある岩国を訪問し、再編強化されつつあるという米軍基地の実態調査を試みようということになりました。

6日の被爆式典後、バスを2日つづけてチャーターし、まずは宮島観光を楽しんだ後、岩国基地の調査に行きました。宮島からはさらに1時間弱かかりましたが、米軍岩国基地を視察するとともに、前市長の井原勝介さんから米軍基地問題についての講義を受けました。ただし準備が十分ではなかったので、いささか消化不良で終わったのは残念でした。

長崎では、8日午後に日本原水協代表理事の澤田昭二（名古屋大学名誉教授）を招いて、被

爆状況を聴きました。そしてその後「なぜトルーマン政権は2発の原爆を投下したのか」というテーマで、鹿児島大学の木村朗さんを招き、ピーターとともに講演してもらい、討論しました。

9日の午後には有志が集まり、アウシュビッツで殉教した聖コルベ記念館（聖母の騎士修道会）を訪れ、修道士の小崎登明さんの被爆体験をお聞きすることができました。

この年の記録は、経済学部の山口耕平君たちが軸になって、『あなたに考えてもらいたい　核兵器のこと』という雑誌風の優れたパンフに仕上げられました。またこの年の平和の旅はNHK国際放送局の取材をうけました。最終的には日米2人の受講生――被爆2世の岡光さんとイラクからの帰還兵のクラウン君との交流に焦点があわされ、紘子さんの被爆体験の語りもまじえて、15分の英語番組に仕上げられ、海外向けに放映されました。

第5期
GSとの協同が進みだした
（2011年―2014年）

2011年4月に立命館大学国際関係学部に「グローバル・スタディーズ専攻」（以下GSと略します）が設置されました。GSとは、英語でのみ教育を行う特別のコースの略称で、海外の英語圏からの留学生や、英語力の優れた日本人学生が集まっています。

GSでは、11年度から独自に「広島・長崎をめぐる平和学習の旅」という新科目を設置しましたので、この新科目とどのようなスタンスで接したらよいのかという問題が浮上しました。別科目ではあるが、できるだけ日程と場所とを同じにして、無理のない範囲で、協力協同を強めていったらどうかという結論となりました。GSで学ぶ英語力の高い学生が私たちの企画するイベントやセミナーに参加し、AUの学生と高いレベルで交流してもらうことは、お互いの利益になります。

当初は、泊まるホテルも、時間も、JRの列車も別で、ただいくつかのイベントを共催するだけでしたが、2013年度になると、移動列車も宿舎も同じにする地点にまでに到達しました。ただしGSのばあい1日早く8月9日の昼間に終了し、そこで解散するという違いが残っていました。14年度になると、日程的にも同一となり、協同化はいっそう前進しました。

⑰ 2011年（福島医科大生2名を招く、GS学生との連携始まる）

この年海外からは、ピーターと乗松さんに引率されて、米国南部・中西部の共和党支持者の間で大きな影響力をもつ福音派キリスト教徒の政治組織リーダーのタイラー（Tyler Wigg-Stevenson）さん、核ミサイル搭載原潜に乗り込んできた現役の海軍士官など19名、RUから10名、APUから9名（うち中国から6名）、SCが4名、藤岡・近藤の2名のほかに、浅岡健太郎（RU）・岡本香織（APU）という2名の職員が参加され、庶務を担っていただきました。加えて全日程にわたって福島医科大学から2人の医学生を招いたので、合計で47名に達しました。

それだけではなく、この年から国際関係学部のGS（グローバルスタディーズ専攻）でも、山根和代准教授を引率者としてほぼ同一日程で広島長崎を旅するというプログラムが始まりました。GSプログラムの参加者はこの年は24名にのぼりました。宿舎や交通手段などは異なっていましたが、被爆証言や映画会などのイベントは、両グループで共催しましたので、その際には参加人数は70名に膨らみました。

1955年に被爆直後の惨状を再現した映画「ひろしま」に注目し、その英語版を作ろうという運動が立命内外に広がっていました。立命生16

名が翻訳に協力して「映画ひろしま」の英語版を完成させた直後でしたので、プログラムの冒頭の８月１日にその上映会を行いました。

広島では８月４日夕刻に市長をリタイアされたばかりの秋葉忠利さんと交流会をもち、その後会場を市役所前の広島市立大学平和研究所に移し、『はだしのゲン』の作者の中沢啓治さんご夫妻から被爆体験を聴きました。中沢さんは体調が良くなかったのですが、「紘子ちゃんから頼まれたら、断れない」と、健康に気遣う奥様と秘書の方同席のうえで、体験談を語っていただき、乗松さんが通訳してくれました（**資料―38**）。

翌５日には松井一實市長を表敬訪問し、その夜は新球場で対戦した広島東洋カープと巨人との「ピースナイター」を応援にいきました。近藤紘子さんと球団オーナーの松田一族とが親しいこともあり、帽子やユニホームなど記念グッズをいただくなど、格別の配慮をいただきました。前夜にお話を聴いたばかりの中沢啓治さんがピースナイターの始球式に臨まれたのには驚きました。なお１年半後の 2012 年 12 月に中沢さんも逝去されました。

長崎では、７日夕刻から、被災協の２階会議室で、山田拓民事務局長と下平作江さんの被爆証言を再び聴きました。

８日の午前に「明らかになってきたナガサキへの原爆投下の真相」という市民公開講座を開き、『広島長崎への原爆投下再考――日米の視点から』を出版されたばかりの木村朗さん（鹿児島大学教授）とピーターとが「長崎への原爆投下は軍事的に不必要な蛮行であり、米国が犯した戦争犯罪だったのか」をめぐって議論を戦わせました。本の出版に影響もあり、多数の長崎市民が詰めかけ、長崎被災協最大の部屋である地下大会議室を満員にするほどで、熱気あふれる集会となりました。

ピーターの教え子で AU を卒業した写真家にポーレ・サヴィアーノさんがいます。ピーターや紘子さん、ギャラリー・エフ（東京大空襲で灰燼に帰した浅草雷門近くで営業する飲食店を兼ねたギャラリーで、焼け残った土蔵に東京大空襲の写真を展示）などの協力をえて、ポーレさんは、広島、長崎、東京、ドレスデンを回り、「上から」攻撃された被爆者の肖像を撮影してきましたが、彼の写真展 “FROM ABOVE” が広島

資料―38

で開催中と聞き、8月5日に皆で見学にいきました。近藤紘子、谷本チサ、松原美代子、沼田鈴子、山口仙二、米沢鉄志、花垣ルミさんたち、私たちもお世話になった被爆者の今日の肖像から過去の惨事を浮き彫りにしようとする展示会です。2010年にはさだ・まさしさんたちが設立した「ナガサキ・ピースミュージアム」、2011年秋には立命館の平和ミュージアム、2013年には長崎県美術館の運河ギャラリーなどを会場にして、ポーレさんの「FROM ABOVE展」は開催されています。

⑱ 2012年（南京虐殺とフクシマの議論）

この年海外からは、18名（乗松さん、ピーター、ピーターの妻のシムキさん、シムキさんの娘さんを含む）、RUからは13名、APUからは5名が参加しました。そのほか支援者として4名のSC、紘子さんと藤岡。職員としては二宮絵美さんが同行し、合計すると37名となりました。

そのほかにGSのグループは、山根和代准教授、TAの鈴木亮さんに引率されて、5名がほぼ同一日程で旅行し、ホテルとJR列車は異なるものの、それ以外のイベントは共通となりました。GSを含めたばあい、42名の規模になったわけです。福島医科大学からは、京都プログラムだけですが、再び白石裕紀子さんを招いて、福島の現状を報告してもらいました。

京都では冒頭の8月1日に旅行団の憲法にあたる「八月の花盟約」を結び、8月2日に「南京虐殺を伝えていく」というテーマで、南京虐殺を調査し映像や本で公表し、普及してきた松岡環さん、南京戦に揚子江の軍艦から参戦した元海軍兵士の三谷翔さんを招いて、事件の真相と日本帝国の戦争責任をめぐって、議論を行いました。

この年の私たちの旅を、京都新聞の松浦吉剛記者が同行取材して、「広島の惨禍、未来への学び」という記事にまとめてくれました（**巻末資料―18**を参照）。

⑲ 2013年（オリバー・ストーンの参加、マスコミの殺到）

この年は海外から15名が参加しました。バンクーバーから参加した乗松聡子さん、聡子さんの長男の洸希君を含んだ数です。立命側からは20名（うちAPUから4名）が参加し、そのほか5名のSCがリーダーとしてプログラムを推進してくれました。

そのほかゲストスピーカーとして、映画監督のオリバー・ストーン、グアンタナモ米軍基地（キューバ）内でのアルカイダ系囚人の人権問題を担当する米海軍の法務担当将校であるケヴィン・ボグッキさん、原爆の図・丸木美術館代表理事の小寺隆幸さん夫妻が参加されました。また京都プログラムには、福島県立医科大学の4名の学生が参加し、福島の状況について交流しました。これらゲスト参加者を含めると、参加者数は47名に増えます。

このほかに、山根和代准教授はじめ11名のGSプログラム関係者が、私たちとほぼ同一の日程で行動しました。この年からは、ホテルもイベント参加もほぼ共通となりましたので、旅行団全体としては、58名の大所帯で動いたことになります。

とくに『もう一つのアメリカ史』第1巻でピーターたちが展開したヘンリー・ウォーレス論は、躍動的で、歴史の可能性の豊かさを示唆し、日本でも大きな反響を呼びました。

とりわけ次の一節です。1944年7月20日の民主党の党大会で、休会動議のまえに「ヘンリー・ウォーレス副大統領を44年秋の大統領選挙の副大統領候補に指名する」という動議を提出すべく進歩派の提出クロード・ペパー上院議員が演台に詰め寄りました。彼は演台のマイクの1メートル半手前まで来ていたのですが、彼

コラム：ピーターとオリバーとが「もう一つのアメリカ史」という映画と本を作った訳

オリバー・ストーン監督（以下オリバーと略）といえば、ベトナム戦争に従軍した経験をもち、この戦争の内幕を描く『プラトーン』、『7月4日に生まれて』を制作し、アカデミー監督賞に2度輝いた米国映画界の巨匠。

ピーターは、元来は映画史を素材にして、米国に巣くう「核や戦争の文化」を探究する歴史学者であるが、1996年の秋学期から、「オリバー・ストーンのアメリカ」という新科目を開講し始めた。オリバーの制作した映画群を題材にして、アメリカの歴史と文化の特質を考えようとする講義で、オリバーをゲスト講師として招くのが慣例となった。長年の交流のなかで2人は肝胆相照らす仲となった。2008年頃には、原爆投下の真相を解き明かす映画を共同制作しようという話になったという。2009年から2011年頃には、広島や長崎のホテルにまで資料をもちこみ、夜遅くまで映画のシナリオ書きに熱中していたピーターの姿を思い出す。

2012年の秋、ついに『オリバー・ストーンが語るもう一つのアメリカ史』という映像作品シリーズと学術書が完成した。

各巻の脚本の素稿をまずピーターが書きあげた。彼が提供する素材をオリバーが取捨選択し、デザインし、芸術的に表現していった。テレビ時代にふさわしく、各巻ごとに1エピソードを取り上げ、独立作品シリーズとしても鑑賞できるようにした。テレビ局の放映の便のために各巻とも55分に収める工夫もされた。

はたして2人の制作した映像シリーズは、世界的に大きな反響を呼んだ。日本ではNHKの手で、50分番組用に圧縮され、昨年6月から7月にかけて、BS1で放映された。反響が良かったので、その後3度にわたって再放映された。加えて導入番組や総集編も制作され、放映された。なお55分のフルバージョンの日本語版については、5巻のCDに編集されて、角川映画が発売している。

映像作品のばあい、どれほど芸術的に秀でていても、きちんとした実証的史料によって支えられないかぎり、説得力に欠けることになる。そのため膨大な典拠史料を明示した学術書（Oliver Stone and Peter Kuznick, Untold History of the Unites States, 2012）が同時に出版された。700ページを超える大著だが、ピーターが初稿を書きあげ、オリバーが補正の筆を入れるかたちで、共著として刊行された。翻訳書のほうは、『オリバー・ストーンが語るもう一つのアメリカ史』という同名のタイトルを冠して、2013年夏までに3巻に分けて、早川書房から緊急出版された。

の演説が阻止され、休会動議が先議され、ウォーレスの副大統領候補指名がネグられてしまいます。もしこの時、「1メートル半の空間を克服できていたとすると、ルーズベルトの急死の際も、トルーマンではなく、ウォーレスが大統領職を襲ったはず。そうなると原爆の投下は阻止できた」というのがピーターの見立てです（この点は、**巻末資料―19**を参照）。

ピーターは長年AUにあって、終身在職権（テニュア）を有する「准教授」という地位にいたのですが、本書の刊行のおかげで14年春に、栄えて「正教授」に昇進しました。

ところで京都の宿泊先は、金閣寺の西の衣笠セミナーハウスでしたが、ローラー式スーツケースが騒音源となるなど、近隣との調整に苦労することになります。

8月1日の午後には、世界的にヒットした「オリバー・ストーンの語るもう一つのアメリカ史」シリーズのなかから原爆投下を描いたエピソードを上映し、議論しました。8月2日の午後には、「虐殺と和解――真実の共有と悔悟・寛容への道を探る」というテーマで、3回目になりますが、松岡　環さんを招いて、「南京大虐殺を伝

えていく――加害と被害の両面からの検証―」のスピーチをしていただきました。また「ベトナムのミ・ライ（ソン・ミ）虐殺のばあい」というタイトルで、藤本博さん（南山大学）に講演していただいた。藤本さんは、その後１年近く、アメリカン大学で在外研究をされるなど、ピーターの良き理解者です。

８月４日の早朝、乗松さんとヴィニー（ピーターの教え子で、歴史家）とが、韓国から来日するオリバーを福岡空港で出迎えるために先発。本隊は、9時ころのJRに乗車して広島に向かいました。平和資料館を見学した後、夕方から小倉桂子さん（平和のためにヒロシマ通訳者グループ代表）に被爆証言をしていただきました。

長崎では、８月８日の午前11時から１時間、長崎の被爆者の店の２階で、「ピーター－とオリバーを囲む集い」を行い、エキサイティングな交流を行ないました。この模様はNHKのBS－1で放映されました（**資料―39**）。

米国南部・中西部の保守的な共和党支持者の間で大きな影響力をもつ福音派キリスト教徒の政治組織リーダーのタイラーさんが、2012年の旅にAU側の学生として参加したことはすでに触れました。米国に戻った後、彼は、米国の福音派系キリスト教大学の教員を組織して、広島への旅を実現しようとします。その努力が結実して、この夏私たちとよく似た日程で、タイラーさんが22名の福音派系キリスト教大学教員グループを引率し、S. リーパーさん（前･広島平和文化センター理事長／広島女学院大学教授）を案内役として、被爆地を巡る旅を続けていました。広島ではオリバー・ストーンとピーターの講演会にも参加したそうです。最終日の９日午後に時間をとって、福音派教員との「交流の集い」を長崎被災協の地下会議室でもつことができました。

資料―39

８月４日に来日したオリバーは、ピーターとともに、私たちの学生たちと交流しただけでなく、平和市長会議、原水協と原水禁双方の原水禁世界大会、市民団体の集会、新外交イニシアティブ設立集会、ハヤカワ国際フォーラム、外国特派員協会、鳩山元首相との懇談会、沖縄での集会を含め、20を超える集会やテレビ番組などに出席し、講演、会見、対談、映画上映、サインセールなどを精力的に行いました。また乗松聡子さんは、私たち旅行団の通訳をこなす一方で、これらイベントの組織者・調整者としての役割を見事に果たされました。

広島で爆心地を歩いたオリバー･ストーンは、「広島から全て始まった」という感想を述べ、この感想は、共同通信の手で全国の地方紙に掲載されました。この記事については、**巻末資料―20**をご覧ください。

なおこの年の記録は、オリバー・ストーン／ピーター・カズニック／乗松聡子『よし、戦争について話をしよう。戦争の本質について話をしようじゃないか！オリバー・ストーンが語る日米史の真実』週刊金曜日、1000円のとくに54－68ページに収録されています。また旅の模様は、NHK広島放送局の番組やNHKの特集企画として、編集・番組化され、NHKのBS－1で繰り返し放送され、海外でも放映されたそうです。

⑳ 2014 年（20 周年の節目の旅）へ

2014 年の初めに、近藤紘子にかかわって、嬉しいことがありました。 紘子さんは、ピーターたちの招きでワシントンの AU で講演されたり、聡子さんルートでバンクーバーやシアトルを回る講演旅行をされるなど、これまで北米大陸各地で数多くの講演をされてきましたが、今回の発端は 2008 年。この年の秋に立命館大学・京都造形芸術大学を会場に国際平和博物館会議を開きましたが、参加者の一人に、沖縄から移民した日系アメリカ人の Roy Tamashiro さんがいました。Roy さんは、セントルイスにあるウエブスター大学の教員で、平和教育に熱心な方。会議の席上、「平和の旅」の報告をした近藤紘子さん・乗松聡子さんに会われたことが縁となり、ウエブスターでも同様の旅をしたいと発願され、2010 年にウエブスターの学生たちをつれ、乗松さんの通訳、近藤紘子さんの案内で京都・広島・長崎を回る「平和の旅」を実行された方です。

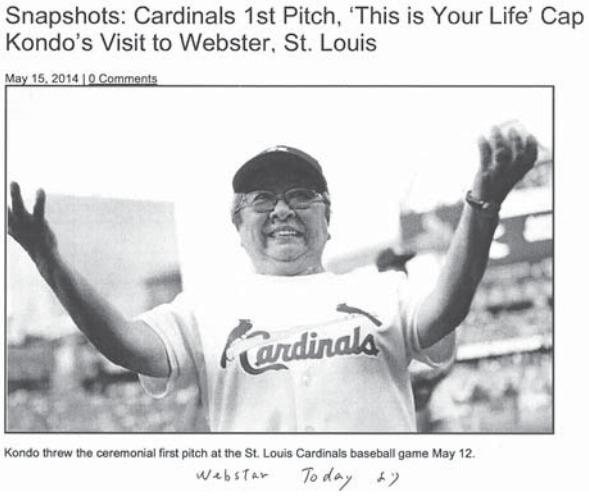
この Roy さんの尽力で、近藤紘子さんの国際貢献が評価され、2014 年 5 月に同大学は、紘子さんに名誉博士号の授与を決定し、招待したのです。紘子さんは、ウエブスター大学の卒業式の場で記念講演を行われ（**資料―40**）、感銘を与えられただけでなく、セントルイスを本拠地とする米国のプロ野球・メジャーリーグに属するカージナルスの試合に招待され、始球式を行うことになりました。野球のボールを投げた経験に乏しい紘子さんに、野球に目がないピーターが投球法の基本をコーチしました。おかげでボールは無事に捕手のところまで届いたそうです。紘子さんの始球式を伝える米国の新聞もご覧ください（**資料―41**）。

2014 年プログラムの詳細については、第 3 章で紹介したいと思います。

（文責　藤岡惇）

Kondo inspired graduates during her Webster University Commencement address in Forest Park.

資料―40



Snapshots: Cardinals 1st Pitch, 'This is Your Life' Cap
Kondo's Visit to Webster, St. Louis

May 15, 2014 | 0 Comments

Kondo threw the ceremonial first pitch at the St. Louis Cardinals baseball game May 12.

Webstar Today より

資料―41　（Webstar Today, May 15, 2014）

第２章　このとき、あの場所、私の思い出

20年前にプログラムを創設して

直野章子

20年の長きにわたって、アメリカン大学（AU）と立命館大学との「日米交流の原爆探求の旅」が継続してきたことに、驚きを感じざるを得ません。私は、このプログラムの原型となった1995年の「平和の旅」プログラムを創設しましたが、プログラムを開始した当初は、20年も続くとは正直なところ思っていませんでした。それが可能になったのも、立命館の先生方、学生やOB・OGのみなさん、AUの関係者、通訳や講師として支えた数多くの方々の熱意と努力によるものだと思います。

本書の第１章でも言及されているように、私がアメリカン大の国際関係学部を卒業して間もない1994年の夏、日本に帰国して、広島市や平和運動に取り組んでいる被爆者や知識人らを訪ね、「平和の旅」実現のために協力していただきたいとお願いしてまわりました。その時点では、まだアメリカン大のプログラムとして正式に認められていたわけではなく、日本側からの協力を取り付けて、実現の可能性が高いことを示す必要がありました。大学を出たばかりのアメリカ帰りの私に対して、藤岡先生は真摯に耳を傾けてくださり、できる限りの協力を約束してくださいました。他にも、被爆者の知り合いなどからも協力が得られることになり、アメリカに戻ってから、正式に大学の夏季プログラムとして認められることになりました。

ことの始まりは、私のアメリカン大（AU）留学にありました。1991年はじめにワシントンDCにあるAUに留学したばかりだった私は、湾岸戦争開始後の学生たちの反応にショックを受けました。今から振り返ると、なんとナイーブだったのかと思いますが、米国の歴史や社会状況について、さほどの知識を持たないまま留学していた私は、湾岸戦争が始まったとき、ベトナム戦争時のように、学生をはじめ、米国市民は戦争に反対するのではないかと考えていたのですが、そんな期待は見事に裏切られました。学生のなかには、イラクに対して核兵器を落とせばよいという意見もあり、クラスで議論したときも、私だけが戦争反対の立場でした。まだ英語で十分に自分の意見を述べることができなかったこともあり、悔しくて、寮に帰っては泣いていたことを覚えています。日本で育ちながら、原爆やアジア太平洋戦争について――それが、「戦後日本」という枠組みにとらわれたものであるとしても――多少なりとも学び、「平和」を自明の価値として受け入れていた者にとって、米国での経験は衝撃的だったのです。

ただ、米国史の授業のなかで原爆投下について扱ったとき、被爆当時女学校３年生だった私の伯母の話をすると、みな、真剣に耳を傾けてくれました。手ごたえを感じた私は、アメリカの学生を日本に招いて直接被爆者の話を聞いたり、日本や米国の戦争責任について考えるようなプログラムを作ることはできないかと考え始めたのです。その後、AUの先生たちや藤岡先生たちの協力を得ることができ、プログラムがAUの正式な夏季講座「核の歴史プロジェクト」として認められ、1994年の秋から一年、プロ

ジェクトのディレクターとしてAUで働くことになりました（留学生ビザであっても、卒業後は一年間、就労が認められる制度があり、それを利用することができました）。1995年に入ってからは、広島市の平岡敬市長（当時）や大牟田稔・広島平和文化センター理事長（当時）などとお会いして、スミソニアンでキャンセルとなった原爆展に代わって、95年7月にAUで原爆展を開催することになるなど、「平和の旅」以外でも多くの展開があったのですが、詳細については、拙著『ヒロシマ・アメリカ――原爆展をめぐって』（渓水社、1997年）をご参照ください。

このプログラムを取材した新聞やテレビの報道などでは触れられることがありませんし、本書の第1章にも書かれていないことですが、「日米交流の原爆探求の旅」の歴史を語るうえで、ぜひ付け加えておきたいことがあります。AUでプログラムが正式に認められ、原爆展が開催されることになったのも、当時AUの夏季講座担当主任であったバレリー・フレンチ教授の熱意と尽力があってのことである、ということです。バレリーは、プログラムが正式に承認されるよう動いてくれただけでなく、政治的な理由でAU側が原爆展から手を引こうとしたときにも、私と一緒に広島に行ったり、大学の執行部と交渉したり、文字通り「体を張って」プログラムを支えてくれました。バレリーの支えなくして、プログラムがスタートすることはなかったのです。

私は、その後カリフォルニア大学サンタクルス校の博士課程に進んで、「被爆の記憶」をテーマとした論文で社会学の博士号を取得し、日本に帰国して、日本学術振興会の特別研究員を経た後、2005年から九州大学の教員となりました。日本の大学教員になって、つくづく思うのですが、一留学生であった私の立案を大学の正式なプログラムとして採用するというところに、米国の大学の懐の深さを感じます。同じ事を日本の大学で実現することは、ほとんど不可能に近いのではないかと思いますが、藤岡先生のように、学生だった私の話を真摯に聞いてくださり、日本側の受け入れ先として正式にプログラム化を果たしてくださる教員もいらっしゃることも、また事実です。

本書ではこの20年間、プログラムを継続するにあたって、さまざまな障害を乗り越えなければならなかったことが書かれていますが、たとえば、財政面の問題を解決するのは、大変であったと思います。どんなプログラムも財政的なアレンジメントが不可欠ですが、二つの組織の共同プログラムであることから、どのように負担を分担し合うかなど、多くの難問があるかと思います。それを、民主的な方法で解決されてきたことが、本書の第1章からもうかがえますが、かつてAU側で事務的なことから内容面にいたるまで、すべてアレンジした者からみると、本来はAU側のスタッフが、日本でのプログラムに関して、もっと事務的な面でも関わる必要があると思います。プログラムを始めた年に関しては、AUからも財政的なバックアップがありましたし、広島での講師の謝礼、宿泊費や会場費については広島市がかなり負担してくれていましたので、財政面で問題を感じることはありませんでした。しかし、二年目以降、広島市の関わり方も変化したようですし、AUの方の関わり方も変化したのではないかと思われます。宿泊費用を抑えたりするために、さまざまな工夫がなされ、多くの人や組織の協力を得られたことが本書の第1章からもわかりますが、AUの方も、もう少し積極的に旅のロジスティックスな面でも関わるべきではないかと思います。いつまでも「お客さん」として招いてもらうのではなく、プログラムの対等なパートナーとして関わることで、新たな展開へとつながるかもしれません。

何かを始める事よりも、それを継続する事の方が、より困難です。日米間で調整をし、旅に参加する学生指導にあたり、講師の手配をし、広島との交渉をし、等々、「日米交流の原爆探求の旅」を毎年行うにあたって必要な仕事を、多忙な中で20年もの長い間続けることは、並大抵の決意ではできないことです。このプログラムから数多くの「平和の使者」が旅立っていったことは、プログラムを立案し始めた者として、ほんとうに嬉しいことです。それを可能にした藤岡先生に心から感謝したいと思います。またそれを可能にした日米の関係者のみなさまに心からの敬意を表したいと思います。

残念ながら、20年前に比べて、日本や米国だけでなく、世界中で破壊と暴力の行使が加速しています。ある意味で、「ヒロシマ」と「ナガサキ」が世界各地で繰り返されているといえるでしょう。世界をより破壊と暴力に満ちたものにするのか、それとも、子供たちが希望をもって生きられるものにするのか、私たち一人ひとりの手に委ねられているのです。この旅を通して生まれた数多くの出会いから、破壊と暴力を阻止する力が拡がっていくことを願っています。

（九州大学大学院　比較社会文化研究院准教授）

「平和の旅」の20年を振り返って

ピーター・カズニック

藤岡惇教授と私とは、1995年に「平和の旅」を始めたのですが、私たち2人の人生を変えるに留まらず、数えきれないほど多くの人々の生き方を変えることになる、そんな大事業を始めたという自覚は、当時はほとんどありませんでした。

このプログラムは論争の只中で生まれました。原爆投下50周年をどう記念したらよいのかという論点をめぐって、当時の米国は異常な騒乱状態に見舞われていたのですが、私たちの最初の日本訪問は、そのさ中に行われました。当時スミソニアン協会は、傘下の航空宇宙博物館で特別展を開き、広島長崎で起こった無残な破壊を正直に展示しようと計画していたのですが、保守派や在郷軍人たちが猛烈な反対運動を展開し、展示計画は撤回されたのでした。彼ら、および米国の少なからぬ人々は、日本本土への侵攻なしに戦争を終えるには、原爆を投下するしかなかったという誤った考え方に、今なおしがみついています。原爆が投下されなかったら、数十万のアメリカ人が死亡していただろうと彼らは信じているのです。しかしそうとは言えないという見解が、米国の歴史家の大勢となっています。一方の側には、この20世紀の最重要の事件をより全面的にもっと深く探究したいと願う人々がいました。他方の側には、歴史を脚色し、原爆投下を論争の対象にすることを拒否し、アメリカの指導者たちを歴史の審判から守ろうとする人々がいました。両者の間で、すさまじい戦いの火が噴いたのです。

スミソニアンでの展示のために、大量の被爆遺品を送ろうと広島と長崎の原爆資料館は計画していましたが、スミソニアンをめぐる論争が被爆遺品の展示中止という結末を迎えました。その後、遺品の多くはアメリカン大学に届けられ、私どもの大学で被爆50周年を記念する原爆展が行われました。広島・長崎の両市が海外で、これほどのスケールの原爆展を行ったのは稀だと聞いています。原爆展がアメリカン大学で開催されたことに伴い、わが核問題研究所が設立されました。被爆50周年の広島での式典に参加すべく、私たちが平和の旅を計画しているというニュースも拡散し、アメリカン大学は国際的なスポットライトを浴びました。京都・広島への私たちの訪問も意義深いものになるに違いな

いという観測が広がったからです。

これより少し前にアメリカン大学を卒業された直野章子さんは、母親と祖母が被爆者であり、祖父が広島の原爆で亡くなった人です。藤岡教授の協力を得て彼女が、日本への旅を計画し実行してくれました。アキコと私は米国の学生10名を引率して、京都と広島を訪問しました。この旅には、ワシントンで知り合った君島東彦教授も同行してくれました。旅行団が広島に到着すると、「全米で反対論が吹き荒れた原爆展をアメリカン大学はよくぞ引き受けてくれた」と、平岡市長はじめ広島市の幹部の皆さんは私たちに謝意を表し、大歓迎してくれました。

私個人の思いを語らせていただきますと、広島に足を踏み入れたことは、人生のなかでもっとも感動的な体験のひとつとなりました。長年原爆投下のことを研究してきたのですが、50年前にそこで起こったことの本当の意味をはじめて理解できたからです。その後、広島へは20回、長崎へは18回訪問していますが、2つの都市に身を置くたびに、何とも名状しがたい思いを禁じることができません。2発の原爆が、わが地球上の全生命の絶滅可能性のドアを開けたことにたいして、人生の美と喜びの享受を途中で断たれた無数の人々が現れたことにたいして、さらにいえばそのような恐怖が今なお続いていることにたいして、底知れぬ悲哀を感じるからです。

最初の旅のなかで、3年前に開館したばかりの立命館大学国際平和ミュージアムを安斎育郎教授・藤岡教授に案内してもらって、見学したことがありました。平和ミュージアムなるものを見学したのは、人生初の体験でした。それ以来、立命の平和ミュージアムの見学が「平和の旅」の必須カリキュラムとなりました。この施設の見学は、AUの学生たちに鮮烈な印象を残し、旅のハイライトの一つとなっています。「平和」を展示するミュージアムがあること自体が想定外のことなので、彼らは単純にびっくりします。

米国には戦争を展示するミュージアムがたくさんあります。ごく少数の例外を除くと、この種の施設のほとんどは、戦争を賛美する「戦争」ミュージアムだといっても過言ではありません。同じ戦争を展示しても戦争ミュージアムと平和ミュージアムとでは、発信するメッセージの方向が正反対なのです。戦争ミュージアムとは異なる視点で戦争を展示し、平和の価値を発信できるのだという気づきは、米国の参加者にとって極めて新鮮です。唯一の超大国として世界に号令をかけている米国で育ち、米国特有のゆがんだ戦争と平和観に染まってきた米国民にとって、この気づきは特別に重要なのです。

立命のミュージアムの見学後に、いつも振り返りの話し合いをしますが、このミュージアムが米国の犯した戦争犯罪に批判的であるだけでなく、日本の戦争責任についても認め、東アジアに起こした日本の侵略戦争にたいして批判的な姿勢を貫いていることに、米国の参加者たちは称賛の言葉を贈るのが一般的です。展示を見て、AU学生もまた、原爆投下、冷戦、核軍拡競争、最近のアフガン・イラク・リビアへの米軍の侵攻にたいして米国もまた責任を免れないことに気づき、侵攻の意味を再考せざるを得なくなるのです。

初回の日本への旅が目覚ましい成果を生んだので、このプログラムを1回限りで終わらせるのはもったいない。今後はAUの核問題研究所が主管して、科目提供を継続的に行おうと決めました。2回目の平和の旅には、立命館大学の日本人学生が一層アクティブに参加されるようになり、AU生と一緒に生活し、旅し、語り合う活動が充実してきました。両国の歴史を日本人・米国人の目で語り合い、異なる歴史認識を交流し、相違を克服する道を探るという新しい段階が始まったのです。

1996年の旅には、いま一つ、意義深い出来事がありました。そごう百貨店の前で、近藤紘子さんと出会うことができたことです。「『ピーターさんたち、今年もAUの学生さんを広島にお連れなさるようよ』と私の母親が教えてくれたので、ワクワクしてあなたをお待ちしておりました」と紘子さんはおっしゃいました。「なぜなら私はAUの卒業生であり、後輩たちとも会いたいからです」と。その晩、紘子さんは私たちの宿舎に来られて、自分の半生記を語られました。原爆投下の時には8か月の赤ん坊だったこと、父親は谷本清牧師であり、ジョン・ハーシーが1946年に出版した『ヒロシマ』というベストセラーとなった古典のなかで描かれた6名の被爆者の一人だったと語られたのです。不思議な符合でした。ハーシーの本を、日本訪問前に読んでおくべきAU生の必読文献に指定していたからです。

1時間ほどかけて彼女は数奇な人生を語ってくれました。旅行団全員がその話に釘付けとなりました。真実への気づきと和解と許し、忙しすぎた父親との葛藤から受容・共生に至るまでの話を紘子さんはしてくれたのです。谷本清牧師は、広島の復興に尽力しただけでなく、1955年に25名の「原爆乙女」たちを米国に派遣し、整形手術を受けてもらうプログラムを推進した人でもありました。紘子さんは、エノラゲイの副操縦士だったロバート・ルイスと出会った時の話もしてくれました。一度聴いたら、絶対に忘れられない感動的な話でした。一度でも会うと彼女のことを忘れられなくなる――紘子さんはそのようなタイプの人でした。最初の年、受講生全員が彼女を代理母のような人だ考えたとすれば、それから20年が経過しましたから、今年の受講生は紘子さんを代理祖母のごとき存在とみなしたことでしょう。

最初の出会いから数年間、紘子さんは「平和の旅」の広島の部分に参加されただけでしたが、それだけでは満足できなくなって、「平和の旅」の全行程に参加していただけないかと紘子さんにお願いしました。おかげで紘子さんは長崎の部にも参加され、2005年からは京都の部を含み全行程にわたって同行されるようになりました。

1995年に北米の大学夏期講座協会が、私たちのプログラムを北米全体で「もっとも創造的でイノベイティブなプログラム」だと認定してくれたのですが、真価が発揮されたのは、むしろその後でした。1998年から長崎を訪問地に加えることが始まりました。長崎を訪問するために、旅行期間を幾分か長くする必要がありましたが、異議を唱えた者は誰もいませんでした。旅行期間を長くしてほしいとする学生の声のほうが圧倒的に多かったのです。ただし旅行期間が長くなると、コストがかかります。私たちは、コストアップとならないよう努力と工夫を重ねました。

長崎での体験は、広島とは異なる独特の趣があります。広島の平和資料館よりも長崎の原爆記念館のほうが身近に感じられ、インパクトがあると評価する学生が多いように思われます。同様に被爆式典から受けた印象の点でも、長崎のほうが身近に感じられ、より深く心に刺さったと語る学生が多いように思います。

両都市で多くの被爆者と会い、体験を聴いてきました。被爆者の話は実に多様性に富んでいますが、どの被爆証言を聴いても、戦争と平和にかかわって、ある普遍的な真実を発信される点では共通しています。生と死、受難と回復のプロセスを歩む中で、どの被爆者も、信じられないほどの恐怖を目撃し、生き残ってこられたのですが、何か達観した神々しさが滲み出た人が多いのです。原爆を投下した米国にたいする怒りや憎しみを昇華させ、愛と希望に変えた人が多いのです。被爆者の人生の目的は、米国へ

の復讐ではなく、核兵器の不吉な影を地上から一掃することに昇華しています。彼らは「こんな苦しみは誰にも味あわせたくない」、「ノーモア・ヒロシマズ、ノーモア・ナガサキズ、ノーモア・ヒバクシャズ」と訴えます。被爆者の夢は、生きている間に核兵器が廃絶された世界を見ることです。ですから彼らの証言は、紘子さんの証言が示すように、人に感動を与え、前向きにさせ、元気づけるのです。

私たちのプログラムは、たえず改変され、改善されてきました。最近の事例を挙げると、山根和代教授に引率されたグローバルスタディーズ専攻のグループが合流され、新たな活力源となりました。バンクーバーのピース・フィロソフィーセンターを主宰するサトコ・オカ・ノリマツさんの参加によっても、新たなパワーが生まれました。サトコさんは、米国に占領された沖縄の諸問題に関する国際的な専門家ですが、私たちの「平和の旅」を担う教員集団の重要な一員でもあります。

さらに言えばヴィンセント・イントンディ教授の貢献も称賛されるべきです。彼は、2005年に大学院生として「平和の旅」に初参加したのですが、その後も幾度となく参加され、勤務するメリーランド・カレッジの学生たちを「平和の旅」に送り出してくれています。15年の夏には、彼の著作『核爆弾に抗するアフリカ系アメリカ人たち』が公刊されるでしょう。

子どもたちの成長を見守る父親のように、アツシと私とは、20年にわたって、このプログラムが成長し、変貌していく様子を誇らしく見守ってきました。しかし今年、藤岡教授はその任を君島教授に譲られ、引退されます。君島先生といえば、「平和の旅」の初期の頃に多大の協力をいただいた高名な学者です。このプログラムが更なる前進をとげるように画期的なアイデアを提起し、改革を推進していただけるでしょう。とはいえアツシの広いハートとユーモアのセンスを欠いたうえでプログラムを運営することは難事であることに相違なく、しばし試練の時を迎えるでしょう。アツシは私たちを見捨てるつもりはないと約束していますので、できるだけ彼をつなぎとめておきましょう。聞くところによれば、アツシはパートナーとともに、京都の自宅の1階部分を改造して、地域住民のためのオープンスペースとして開放したとのこと。一度訪問したいものです。

皆様方のおかげで、この20年間で240名もの米国の学生を「平和の旅」に迎えるという素晴らしい経験を積むことができました。藤岡先生のほうも、立命館大学、立命館アジア太平洋大学を母体にして、300名程度の参加学生を獲得されました。参加学生は米国・日本だけでなく、ベトナム・中国・カナダ・韓国・フィリピン・マーシャル諸島など、世界各地からやってきました。参加学生の職業経歴も実に多彩でした。米海軍の現役の兵士もいましたし、平和活動家、福音派キリスト教の説教師、法律家、労働運動の活動家、高校生、年金生活者、核問題専門家、高校大学の教員、心理専門家、歴史家も参加してくれました。毎年のように広島市長とお会いしましたし、ジョナサン・シェル、ダニエル・エルスバーグ、ユキ・タナカ、『はだしのゲン』作者の中沢啓治、木村朗教授、広島平和文化センター前理事長のスティーブ・リーパー、2013年夏に広島と長崎で私たちの旅に参加してくれたオリバー・ストーン監督などなど、説得力に富み、パワーに満ちた講演者と出会うことができました。

「平和の旅」を「生き方を変える」経験だったと私の学生たちが語る時、それは単なる社交辞令ではありません。ある者にとっては、旅への参加が、反核・反戦運動の活動家へと脱皮・転換するきっかけとなりました。この旅がきっかけとなり、博士論文のテーマを核問題に変えた学生もいます。旅への参加がきっかけとなって、

勤務する高校や大学の場で、学生・生徒たちに広島・長崎の核惨事について本格的に教え始めた者もいます。たとえ平和と軍縮の追求を自らの職業にしない人でも、ヒロシマ・ナガサキの精神を身につけ、これをその後の全人生の指針として生きる人もいるでしょう。「平和の旅」の最初の20年間の成果と収穫には格別のものがあったことは疑いありません。今後の旅の行く末については予断を許しませんし、楽観してはいませんが、前進することを期待しております。

（アメリカン大学歴史学科教授）

この時、あの場所、私の祈り

近藤紘子

思い返せば、この19年の間、あっと言う間に時は流れ、素晴らしい出会いの数々が走馬灯のように、今、私の頭を駆け巡っております。

私は、このセミナーに加わる前は幼児に関わり、又親に恵まれない子と子に恵まれない親の為に国際養子縁組を手がけ、これは戦後の原爆孤児達の「精神養子縁組」が形を変えて、時代にそった形での橋渡しをしていました。それと平行して25年間 “Children As The Peacemakers” の国際相談役として世界の子供達（小中高生）と世界を回り、各国のリーダー（首相、大統領等）に平和な世界になるようにと子供達が訴える活動に関わっておりました。それがこのセミナーに関わることによって、大学生たちとの平和の旅が始まったのです。

きっかけは1996年、広島在住の母から受けた「アメリカン大学の先生が学生さん達を連れて広島に来られると新聞にでていますよ」との電話でした。アメリカン大学を卒業してから二十数年がたっていましたので、嬉しさのあまり飛び上がらんばかりの喜びでした。早速、君島東彦先生（当時北海学園大学）に連絡を取りました。忘れもしません、広島のそごうデパートの前でピーター・カズニック先生と始めての出会いでした。お目にかかったことが無いのに、私に取っては旧友との出会いのような喜びでした。

その出会いを皮切りに初期のセミナーをピーター・カズニック先生、藤岡惇先生に私を加えて頂き、弥次喜多道中のような三人組が動き始めました。知識に溢れ、人脈のある、お二人に「助手」（?）として私を加えて下さり、多くを学ぶことができました。お二人よりもちょっと年上のお姉さん役です。ピーター・カズニック先生と藤岡惇先生の名コンビがおられなかったら、このセミナーは出来なかったと思います。

ピーター・カズニック先生、藤岡惇先生、君島東彦先生、藤田明史先生方の男性方に素敵なレディのお二人、乗松聡子さん、山根和代先生が加わりました。年がたつに連れ、先生方も増え、家族が大きくなるように、このセミナーに関わる人たちも増えてまいりました。

面白い事がありました。ある年のステューデント・コーディネーターの女子学生達が「紘子さんのスカートを引っ張る会」を作ってくれました。それは私が年をとり、おかしなことを言い始めたら、「ちょっと、紘子さん」と、スカートを引っ張って注意をしてくれる人達だと聞かされ、何と嬉しい事か。本当に多くの素晴らしい若者との出会いが始まりました。

大学生達はこのセミナーを通し、広島・長崎の被爆者があの日どのようにして生き残ったの

かを自分の目で見、自分の耳で聞くことは、どんなに価値あるものか。この機会を通して語り継ぐ者となってほしいと願っています。幸いにも私の話しを聞いてくれた大学生達は、月日を経て、今度は教える立場で若い人達に語る人となり、この私をまたもや用いてくれています。このような学びの場に接することは、大きな喜びとなっています。こうして語り継かれることは、このセミナーの素晴らしさであると感じています。

生き残った被爆者は、「核兵器の無い世界」、「核廃絶」の実現を望んでいます。しかし世界を一度に変えることはできません。この「人から人へ」の精神こそが、「核兵器の無い世界」、「核廃絶」へと導いてくれる原動力だと、私は信じています。このことを次の時代を担ってくれる人たちに伝えたい。これからも「このセミナーに幸あれ」と祈り、願っています。

（日本キリスト教団三木志染教会）

独善を乗り越えて

乗松聡子

2006年6月、バンクーバーで開催された1万人規模の「世界平和フォーラム」で立命館の藤岡惇さんとの「運命の出会い」があり、それ以来約10年にわたり参加し、この旅の学びと出会いを通じて私の平和観、歴史観は形成されていきました。

思い出といえば、まずは近藤紘子さんです。紘子さんは、赤ちゃんのときに広島で被爆し、牧師の父親のもとに訪れる、顔にひどいケロイドを負った女性たちを見て、お姉さんたちをこんな目に遭わせた人間たちにいつか復讐してやろうと思っていました。しかし10歳のとき米国のテレビ番組に一家で出演、対面した元「エノラ・ゲイ」乗組員のロバート・ルイス氏が内面で苦しんでいたことを知り、幼心に、自分が正しく相手が悪者だと思い込んでいた自分に気づくのです。

紘子さんの話を聞いたときは衝撃でした。自分も含め、自分たちが絶対正しいと思い込み、世の中の「悪者」を糾弾するだけの独善的な平和運動の在り方に気づいたのです。私はその後、自らがどれだけ戦争、貧困、格差、搾取、資源浪費、人権侵害といった世の中の不正義に加担しているかを意識するようになりました。平和運動でも、自分や自分の国中心の考え方が気になるようになりました。広島長崎も、日本の戦争全体の歴史の中で捉えるようになりました。

そこに、広島平和研究所の田中利幸さんとの出会いがありました。田中さんが旅の参加者への講座で「ヒロシマはヒロシマのことしか考えていない」と言い切ったことには驚きました。田中さんは日本軍による戦争捕虜虐待、日本軍「慰安婦」、無差別爆撃など、戦争犯罪を研究してきた人です。私は、日本の戦争の本質、つまり天皇の名の下に日本の覇権を拡大し、アジア同胞を見下し苦しめた帝国主義と植民地主義がもたらした破局の中において、広島と長崎を理解するようになりました。

そういう意味でこの立命とAUの旅は、朝鮮

人被爆者の被害も学び、日本の加害を扱う「岡まさはる」平和資料館にも全員が足を運び、日米だけでなく中国や韓国やベトナムなどの参加者と共に、日本の戦争を学ぶ視点を養います。日本では原爆被害や日本人の被害だけを学ぶような「平和教育」が多い中で、稀有なプログラムだと思います。

今後の期待としては、戦後も広島と長崎は日米安保体制の軍事拠点であり、「非核」日本が、米国の支配下で事実上核兵器を容認し、核発電を行ってきている矛盾をもっと直視するプログラムになって欲しいと思います。そのためには戦後いまだに日米が軍事占領している沖縄に目を向けることが大事であり、たとえば広島か長崎どちらかと沖縄を組み合わせる旅にすることで歴史と現在の連続性を自覚し、責任ある平和創造者を育てるプログラムになるのではないか、などと夢想しています。

私を育ててくれたこのプログラムに深く感謝し、これからも恩返しをしたいと思っています。

（ピース・フィロソフィー・センター代表）

ドイツのフランクフルトから被爆地を訪れて

Annika Elena Poppe

国際関係と外交政策を探究する政治学徒であり、歴史学者の卵として、歴史的なプロセスのなかで何が重要な要因であったのか、要因の優先順位を判断し、理論的な展望を示す作業に、毎日携わっています。まだ十分な質のものになっていないかもしれませんが、政策的な提言文書の執筆にも挑戦しています。

一人で机に向かい、何らかのテーマで世界に貢献したいと願ってきた私のような者にとって、この「ピースツアー」は、現在の世界で何が本当の危機なのかを知るうえで忘れられない体験となりました。広島と長崎を訪ね、ヒバクシャと会い、日本とアメリカの学生たちと共通の時間を過ごせたことはラッキーでした。この旅を通じて、快適な日常生活のなかでは知りえないようなこと――原爆がもたらした情緒的な側面、人間的な側面に気づくことができましたし、平和の本当の意味を知ることもできました。なぜ、平和がこんなにも価値あるものなのかについても、はっきりと知ることができました。

（2007年にAUから参加したドイツ人学生、南茂芽育訳）

右がAnnika、左は山本美穂子さん

トルコの女子学生が見たヒロシマ

イシル・ティピオグル

広島を訪れてから2年近くが経っていますが、そこで観た光景は今でも私の記憶のなかに鮮明に生き続けています。

日本での2週間のスタディツアーでは、ヒバクシャから耳を疑うような話を聞きましたし、ヒバクシャの瞳のなかからは68年前に彼らが経験した恐怖と絶望を見ました。

私は自分自身に問いかけていました。「いたる所に痛みと苦しみの記憶をもたらした原爆投下の後で、一体この街の誰が幸せになれるのだろうか」と。広島では何千もの人々の叫びが、今にいたるまで私の耳の中でこだましており、とても気が滅入りました。私は今にいたるまで、それほどたくさんの人の声を聞いたことがなかったのです。

どうにもできない「小さな」出来事が人々を苦しめ続けています。私の手では歴史をどうすることもできないという無力さも覚えます。

一つの爆弾が私たちの生活を変え、無数の影響を与え続ける結果となりました。原爆について語るとき、人は判断停止となってしまいます。

原爆は、誇りを持てるような遺産ではありません。しかし辿ってはならない道筋、向かうべき道のりを私たちのために照らしてくれます。この機会をとらえることができるならば、歴史を私たちのものにできるでしょうし、より良き未来の創造につなげることができるでしょう。私はその努力を続けていきたいと思います。

（Işıl Tipioğlu、2013年度にAUの一員として参加。南茂芽育訳）

「平和の旅」で「発問」の大切さを学んだ

Sara Phillips

7歳頃、初めて原爆について学んだとき、私は祖母に、アメリカがなぜそんなに多くの人を殺したのかと聞きました。私たちアメリカ人は、結局、もっとひどいことが起こることを止めた「正義の味方」だった、と教えられてきたからです。私の質問に対し祖母は、「ときに、命を救うためには犠牲になる命もあるのよ」と答えました。この説明こそがアメリカ人の「偉大なる世代」、つまり第二次世界大戦で悪に打ち勝ち、アメリカの人々に経済的な繁栄をもたらした世代に繰り返し伝えられてきたことです。多くのアメリカ人はその時代を懐かしそうに語ります。しかし、その時代を振り返らない人もたくさんいます。なぜなら、振り返ることは「問うこと」だからです。そして第二次世界大戦と原子爆弾について振り返ることは、居心地の悪いことです。このような歴史は忘れること、自分たちが覚えていることを信じる方がずっと簡単です。今回の広島と長崎への平和の旅は「振り返る」だけでなく、その歴史を「問いなおす」体験を与えてくれました。

大阪の空港に到着した瞬間から、長崎の最終新幹線まで、平和の旅は私に学びを与え続けてくれました。近藤さんたち「被爆者」の方々からお話を聞くことで、この歴史的な被害の中にいた人々を想い、原爆を生き延びた人々のはかりしれない苦しみを知りました。広島の美しい灯篭流しはとても印象に残っています。原爆ドームを背景に何千もの灯篭が流れ、私の灯篭も一緒に流れていった光景を忘れることはないでしょう。

この平和の旅では、私の経験を「旅行」と呼ぶことさえ憚られるくらい素晴らしい体験をさ

せてもらいました。なぜなら「旅行」というのは休暇中にマイアミに行ってビーチを楽しむようなものだからです。アメリカン大学と立命館大学がこの平和の旅で行ってきたことは、世代とともに深まっている過去と現在の溝を埋めることです。平和の旅に参加したことで、答えを出したいと思う質問がたくさん見つかりました。道徳への問いや現実への問いです。しかし、これらの問いへの答えを探し続けて気づいたことは、「問うこと」自体が大切なことであるということです。

平和の旅は私だけでなく、参加したすべての人に多くの学びを与えてくれました。時には知ることの辛い事実もありましたが、これらの情報は私たちの中に「内在化」されました。だからもう忘れることはありません。アメリカに帰った今も、平和の旅を通して芽生えた私の思いはどんどん強くなっています。私が周りの世界と自分自身のためにできる一番大切なことは「問うこと」である、と信じるからです。

（翻訳　坂口理香）

爆心地に立って思ったこと

Thomas Kenning

歴史を専門的に学んでいない人々にとって、歴史とは「聖書」のように感じられるでしょう。世界の中で自分の立ち位置を見出す指標となる多くのたとえ話（事例）があるからです。「正義を貫き、悪を負かす」――そういう物語はいつの時代にも人気があります。第二次世界大戦は多くの人にとって「出来事」というよりも、ただの「記念碑」でしかありません。家族で夏にDCに行ったときに訪れる「記念碑」。7月の太陽の下で子どもと一緒に写真を撮る「記念碑」です。それは荘厳で大きく、石灰石でできています。それくらいしか人々の記憶には残っていないでしょう。そして、そのくらいの記憶しか、日々を生きていくためには必要とされません。

そのため、多くのアメリカ人にとって、第二次世界大戦の物語は単純で明白なものです。ある日、卑怯な敵から宣戦布告のない不当な攻撃を受けました。その敵は人間の命なんてなんとも思っていない。私たちのように命に価値を置かない敵は、死を恐れない悲惨な戦い方をしていました。そしてついに、彼らには然るべき罰が与えられたのです。原爆投下による徹底的な破壊は、彼らが行った許しがたい攻撃の報復を果たしただけでなく、早期に戦争を終わらせ、そのことで数えきれない命を救った、というものです。

この一方的で簡略化されすぎた話の中で、原爆投下は火による「洗礼」のように語られてきました。この「洗礼」によって日本人は救済され、自分たちのやり方の間違いに気づいたのだと。そして、悔い改めた日本人は、礼儀正しく勤勉な市民に生まれ変わり、質の高い科学技術と自動車とで世界経済に貢献する同胞となった。第二次世界大戦について真実を究明しようとしてきた歴史家たちは、この話のほとんどは、良く言えば特徴の誇張、悪く言えばまったくの間違いだということを解明してきました。とはいえハリウッド映画の影響と、操作されたアメリカの教科書によって、一般の人々の多くはいまだにこの説明を信じているのです。

「アメリカに祝福あれ。自由の鐘を響かせよう。第二次世界大戦は正義の戦いだった。核兵器を与えてくれた神に感謝しよう。」この言葉は真実として、そして運命であったかのように繰り返されてきました。アメリカ史に刻まれた物語は、一度刻まれてしまえば、人々はその物語を信じ続けます。

カズニック教授や藤岡教授とともに日本を訪

れ、文化と歴史を、その記憶を学んだことで、これまでアメリカで教わり続けていた取り繕いの虚構は崩れ去りました。破壊された後に再建された近代的で美しい今日の長崎の街を見ても、爆心地の下に立ち、功績や名誉を感じる気持ちになどとてもなりません。

そこでこう思いました。人間は様々な問題を解決する能力のある賢い生き物です。病気の人がいるから、薬を開発します。飢えている人がいるから遺伝子組換え作物を発明します。川が氾濫するから、堤防システムを作り出します。そして、戦争をするから、核兵器を生み出したのです。

たぶん核兵器も、元々は問題を解決するために考え出されたものだと思うのです。しかし、使われた瞬間から、それ自体が「問題」になってしまいました。しかし人間には創意に富んだ方法で、複雑な問題を解決しようとする意思があります。その意思さえあれば、私たち自身が生み出した問題を解決することも可能なはずだと信じます。

（翻訳　坂口理香）

わが開眼の体験記

Vicki C. Bryant

2014年の8月に初めて日本を訪れたのですが、この地の美しさにすっかり魅せられてしまいました。この国の上品さ、鉄道切符の洗練されたデザイン、空港の荷物受取場を飾っていた花の美しさ、お茶をいただいた庭園の均整美には、本当に感動しましたし、宮島では野生の鹿と対面でき、アイスクリームを鹿と分け合ったことも、佳い思い出です。

これらの美の与える滋養分を吸収するとともに、広島・長崎への原爆投下という悲劇の69周年にピーター・カズニック教授が組織した「平和探求の旅」からも多くの知的刺激を受けることができました。この旅が多様な国籍と年齢層のメンバーから構成されていたことも良かったです。

とはいえもっとも心を動かされたのは、立命館大学国際平和ミュージアム、広島と長崎の原爆ミュージアム、訪問した小学校内の資料館で対面した生々しい資料でした。被爆者の体験の証言や日本・世界の子どもたちの平和を願う芸術作品群の壮大な展示も感動的でした。

広島平和記念資料館で米国の犯した虐殺という事実に初めて直面して、私は怒りに震えました。人道に反するこのような残虐事を引き起こした当の国から、私がやってきたことに、言い知れぬ恥ずかしさも感じました。長崎の原爆博物館を見学した時には、ただ泣き叫ぶことしかできませんでした。

以上の経験を介して私の人生観は大きく変わり、新しい使命を自覚するようになりました。「核兵器廃絶財団」を設立し、平和の旅の参加希望者に資金援助をして、私と同様のことを経験してもらうことが、私の新しい使命です。許されざる破壊と虐殺についての人類の理解を広げるには、日本への旅行が不可欠だと思います。日本を訪問し、これら優れたミュージアムを見学する以外にありません。私が設立する財団の第2の目標は、私たちの将来がかかっている教育プログロム――紛争のレベルダウンに向けた紛争の変容と解決、自然に対する暴力の緩和、平和研究といった分野に資金を投ずることです。

このような気づきに至ったことへの感謝の気持ちを表わすとともに、人生観の転換をもたらしてくれたピーター・カズニック教授にたいしても、満腔の感謝を表明したいと思います。

「藤岡 / カズニック思想」の集大成を期待

秋葉忠利

20 年にわたって育てられた「広島長崎プログラム」の歴史を読ませて頂き、私もこの素晴らしい「事業」に関わらせて頂けたことに感謝しています。

立命館大学とアメリカン・ユニバーシティーの学生たちに日本、特に広島と長崎を共に経験して貰うことで、原爆を原点にした素晴らしい教育プログラムができ、そこから巣立った若い世代の人たちがさらに未来へ向けて大きな輪を広げていることに、大いなる希望を感じています。同時に、「広島長崎プログラム」の意味は単に教育的な面に留まっていない点も重要だと思います。

コオーディネーターとしてこのプログラムの企画や運営にも携わった学生・OB/OG の皆さん以外の学生諸君は、ほとんど一年でこのプログラムを「卒業」して行く訳ですが、毎年新たな人材を発掘し、あるいは以前からの人的資源をさらに有効に活用しつつ、藤岡先生自身もアメリカン・ユニバーシティー側の責任者であるピーター・カズニック教授も毎年大きく成長され、その成果を多くの同志の皆さんと共有し、広め、まとめて来られた様子も良く分ります。その結果として藤岡 / カズニックというお二人のコンビが築いた壮大な成果は、「藤岡 / カズニック思想」と呼んでも良いのではないでしょうか。そしてその思想の中核には、それぞれ御自身の思想や世界を創造しつつ、「広島長崎プログラム」を支えて来られた直野章子さん、近藤紘子さん、オリバー・ストーンさん、君島東彦さん、中逵啓示さん、乗松聡子さん、田中利幸さん等多くの方々（ここには書き切れません。藤岡先生の「20 年史」を読み下さい）がいらっしゃいます。その皆さんを「藤岡 / カズニックネットワーク」あるいは「藤岡 / カズニック学派」とお呼びしたら失礼でしょうか。

また、別の視点から考えると、「広島長崎プログラム」は、広島市と平和市長会議が提唱してきた「広島・長崎講座」の一つの素晴らしい先進例だと思いますし、私自身のこれまでの活動とも様々な面で重なっています。ですから、そのような結果を生むためには多くの御苦労があり、また高いハードルのあったことも良く理解できます。それらの困難さを乗り越えられた御努力にも心から敬意を表します。

先生がクリアーされた大きなハードルの一つは、このプログラムを実施するための資金面での問題です。私の拙い経験ですが、かつて奉職していたタフツ大学で、アメリカの学生たちに被爆体験の実相と被爆者の思想を伝える試みとして「広島・長崎の被爆体験」というコースを教え、実際に学生たちに広島・長崎に来てほしいと願っていました。残念ながら旅費の捻出ができなかったため、学生を広島・長崎に招くというアイデアは実現できませんでした。結果として、毎年数人のローカル新聞やテレビの記者を招待するプロジェクト（Hibakusha Travel Grant Program）を立ち上げることになりました。その時点に戻って考えると、「藤岡・カズニック　チーム」は私の夢を実現して下さったとも言えるのです。

改めて、藤岡先生に感謝するのと同時に、20 年のまとめが契機になって、「藤岡 / カズニック思想」の集大成が、学問的にも整理された形で近い将来まとめられるであろうことを期待しています。

（前広島市長）

記憶を引き継ぐということ

大槻とも恵

藤岡惇教授に初めてお会いしたのは、2010年夏のことでした。カナダから参加の二名のうちの一人としてピースツアーに参加し、そこで日米の大学で学ぶ学生達とともに、京都・広島・長崎を廻るという貴重な体験をさせて頂きました。

数ある思い出の中で、一番印象に残っているのは、長崎でお会いした下平作江さんの証言を聞いた時のことです。これまで、多くの被爆者の方々の証言を聞いたり、手記を読む機会があったのですが、彼女の証言には安易な共感や、同情、哀れみ、和解のナレティブなどを断固として寄せ付けない強さがありました。

もう一つ、とても考えさせられたのは、日本軍兵士だった父親の証言をそばで、娘である谷川佳子さんが英訳されているシーンでした。これは、この娘さんの訳する行為そのものが、加害の記憶と責任を引き継ぐとは何なのかと、その難しさを体現していました。戦場へ行った父親の証言は、決して聞いている私達が居心地よく座っていられるものではありませんでした。でも、私はその居心地の悪さを真剣に受け止めなくてはと、その証言をつらそうに訳する娘さんの表情から感じたのです。この父親と娘さんの行為を見て、記憶を引き継ぐという行為が、そのまま証言を記録するのではなく、実は痛みを伴うものであり、その証言を批判的に見つめ返すことなのだと、学んだのを憶えています。そして、こういった貴重な経験を提供してくれた、ピースツアーに心から感謝したいと思います。

日米の大学で平和について考えてみようと決意した学生が一同に集まって、爆心地を廻るというプログラムはとても稀だと思います。藤岡教授が何年も情熱を注がれて築いてきたこのピースツアーは、将来に向かって何かを示すことの出来る可能性を秘めていると思います。

広島・長崎が被爆地となってから70年が経ちます。核兵器はまだ存在し、日本は今もアメリカの核の傘の下にいます。沖縄の基地問題はどんどん複雑化し、東アジアの情勢は戦後最悪の緊張感を孕んでいます。そして、3・11事件後の今「核の時代」を生きるという概念そのものが再検証されるようになってきました。そういう意味で、核・戦争・平和・命の問題を提起してきた教育そのものが、再検討を求められているのだと思います。藤岡教授が丹念に企画してきたこのプログラムが、変わり行くこれからの世界情勢と向き合い、どのような質問を若い学生達に提起していくのか、今後も見守っていけたらと思います。

（トロント大学博士課程在籍）

2010年度に職員スタッフとして参加して

勝屋藍太

2010年8月1日（日）～8月10日（火）の10日間、「被爆地で世界の若者とともに、『核の時代』の意味と平和創造の方策を考える」というテーマのもと、京都・広島・長崎の3都市を巡る平和学習プログラムに引率職員として参加した。本プログラムはアメリカン大学と立命館大学の共同プログラムであり、両大学より約20名ずつ、合計40名の学生が参加した。調査と討論の柱としては、(1) 原爆雲の下で何が起こったのか、(2) 原爆投下は「必要悪」だったのか、それとも「悪質な戦争犯罪」だったのか、(3)

核兵器の廃絶は可能か、安全保障上望ましいのかなどである。市長表敬訪問や被爆者の方の講演を通じて種々意見交換行いながら互いに学びあうことができるプログラムである。

このプログラムは平和学習だけでなく、海外学生と立命館の学生で4～5人の「Peace family」というグループを作り、海外学生の生活（移動・食事等）のサポートも行っている。プログラムの初めの方はPeace family単位での交流が多いが、後半期になると日本人学生と海外学生が全体的に交流していく。また、空き時間には自主的に日本人学生と海外からの学生が一緒になって「戦争」「核」についてディスカッションするような場も見受けられた。また、本プログラム期間中に過年度の参加者がよく顔を出しており、大学生活の中で、本プログラムが貴重な経験となっていることを実感できた。

（立命館大学職員）

ミャンマーの地で平和交流セミナーの体験を想う

紀古鮎美

立命館大学国際関係学部を2004年9月に卒業した紀古鮎美です。平和交流セミナーには2003年に参加者として、2004年にStudent Coordinator（SC）として参加させていただきました。現在は、独立行政法人国際協力機構ミャンマー事務所でミャンマーに対する開発援助に携わっています。

アメリカン大学との共同学位プログラムでアメリカン大学（AU）に留学していた時に核廃絶を訴える学生団体「AU Coalition for a Nuclear Free World」に所属していました。アメリカ人には原爆に関する被害状況などの知識を持っている人は少なく、日本人の視点で原爆に関する真実を伝えたかったためです。被爆者をお招きして講演会を企画したり、原爆に関する写真展を行ったりしていました。顧問の先生はもちろんピーター・カズニック先生でした。帰国後、AUの学生と原爆記念日に広島、長崎に平和を学びに行くという、この平和セミナーは当然魅力的に映りました。

平和セミナーの中で最も印象に残っていることは、近藤紘子さんと一緒に平和の旅をさせていただいたことです。近藤紘子さんはAUの卒業生で、私の留学中にもAUで講演をされたことがありました。自らの被爆者としての体験を流暢な英語で、感情をこめてスピーチされたのを聞いて心を打たれたことを覚えています。SCとして関わらせていただいた2年目には一緒にお話しさせていただく機会も多く、この小さな体にどれだけのパワーが詰まっているのかと感心しただけではなく、紘子さんとお話しする中で、たくさんの元気をいただきました。

ミャンマーに赴任してから、ある日NHKのテレビをつけていたところ、カズニック先生が登場し、オリバー・ストーン監督と一緒に映し出されていました。遠く離れたミャンマーの地で、自分が関わったプログラムに関する内容がNHKで特集されているのを見て誇らしい気持ちになったと同時に、懐かしい気持ちにもなりました。

国と大学を越え、平和について学ぶという目的で旅をするこのセミナーは非常に有意義なものだと思います。私もこのセミナーから、異なる考え方を理解すること、時間をかけて話し合い、お互いを受け入れることなどを学びました。その考え方や取り組む姿勢は、文化や習慣が異なるミャンマーの方々と仕事をする上でも役立っています。また、かけがえのない友人と出会えたこともセミナーから得られたことでした。セミナーから10年経った2014年、一緒に

SCをやらせていただいた小嶋萌さんのマカオでの結婚式に、辻道子さんと出席。今でもお互いに刺激を与えあえる関係でいられるのも、SCとして密な時間を過ごさせていただいたおかげだと思います。

皆から愛される人間性でセミナーを成功に導かれてきた藤岡先生が引退されるとのこと、大変お疲れ様でした。引き続き、平和について学ぶという共通の目的を持った学生が集まるこのセミナーが続いていくことを心より祈念しております。

（独立行政法人　国際協力機構
ミャンマー事務所）

かけがえのない日米をつなぐ平和交流に参加して

木村朗

私は鹿児島大学で平和学・国際関係論を教えている者です。現在の主な研究テーマは原爆投下問題、日米安保・基地問題、メディア・司法問題などです。この「平和を求める巡礼の旅」に参加させていただくようになったのは、故鎌田定夫先生が創設された長崎平和研究所の客員研究員だったことと以前から交流のあった立命館大学の君島東彦先生が「非暴力平和隊」のワークショップを2002年に長崎で開催された折に、体験参加させてもらったことがきっかけでした。

2005年頃からは毎年のように長崎で参加させてもらうようになり、藤岡惇先生やピーター・カズニック先生、乗松聡子さん、近藤紘子さん、中村桂子さん、山根和代先生などと知りあえたことは私にとって本当に幸運なことだったと思います。2005年8月9日に国際平和セミナーと長崎平和研究所とが共催する形で原爆投下60周年記念――戦後初の日米歴史学者シンポジウム「広島・長崎－原爆投下の意味を考える」が開かれましたが、その場で私の恩師の一人でもある西嶋有厚先生（福岡大学名誉教授）が「原爆投下終戦論の誤り－日本側の史料に基づいて」、ピーター・カズニック先生が「核兵器の犯罪性――黙示録：あの時から現在まで」を報告された時のことが、特に印象に残っています。その集会に参加されていた新原昭治さんと久しぶりにお会いできたことや私の知り合いでもある関口達也さんに長崎放送で取り上げてもらったことも良かったです。

また、その後、2010年8月8日に、ピーター・カズニック先生と私が「なぜトルーマン政権は2発の原爆を投下したのか」というテーマで講演をさせていただくことがありました。その時に通訳をしていただいたのがカナダから参加されていた乗松聡子さんでした。そして、そのことが契機となって、ピーター・カズニック先生（翻訳は乗松聡子さん）と私との共著『広島・長崎への原爆投下再考－日米の視点』（法律文化社）を出版することになったわけです。

2013年8月8日に長崎で乗松聡子さんのコーディネートで開催されたオリバー・ストーン監督とピーター・カズニック先生を中心とするシンポジウムに私もパネラーの一人として参加させてもらったことも貴重な体験でした。その時のことは、昨年（2014年）出版された『よし、戦争について話をしよう。戦争の本質について話をしようじゃないか（オリバー・ストーンが語る日米史の真実）』（金曜日）に私がコラムのなかで紹介させていただいています。

最後に、1995年から20年間、この「平和の旅」を主催・運営されてきた藤岡 惇先生やピーター・カズニック先生には本当に多くのことを学ばせていただいたことに感謝しています。また特に、今回でこの「平和の旅」から勇退され

る藤岡 惇先生には、これまでの功績・貢献に対して大いなる敬意を表させていただきたいと思います。

（鹿児島大学教員、平和学専攻）

いじめ・アイデンティティー・平和

酒井泰幸

2011年の8月以来4回、国際平和交流セミナーに参加させていただきました。最初はお誘い下さった乗松聡子さんに会うために野次馬として出かけていったのですが、若い学生さんたちと一緒に語り部のお話を聞き、史跡や展示物を前にして語り合うことは、とても刺激的な学びの機会になってきました。また、私がこれまでに知ったことを若い人たちに伝えていくことに意味があると自覚できる場でもありました。2013年にストーン監督が来日したときには、乗松さんの代役で広島での講演の通訳を（事前にいただいた原稿に基づいてですが）なんとか務めることができました。

私は1963年に愛知県で農家に生まれたのですが、子供の頃から人付き合いに癖があって、今でいう発達障害のようなものを持っていたらしいのです。近所の男の子供たちと一緒に外で遊ぶことができず、家で本を読んではその知識を大人達に披露して褒めてもらうことを支えにして生きていました。そんな子供でしたから、小学校に入ったときは「変な子」として、いじめの標的にもなりました。

最近のいじめ事件の報道を見ると心が痛みます。昔のいじめは明るかったなどと言う人がいますが、とんでもない。いじめは昔から陰湿でした。いじめっ子は私の心の弱点を知って、それを突いてくるのです。私は自分に自信の持てない子でしたので、侮辱に極めて弱く、感情が自動的に反応してしまうのです。それがいじめっ子にとっては愉快なので、私が泣き崩れるまで執拗にいじめが続きました。

当然、この窮状を親に訴えるわけですが、父は「いじめられるお前が悪いのだ、なぜ反撃しないのか」と言うだけでした。そんな非現実的な話が有るとは思えませんでした。体力と敏捷性に劣る私が、パンチを相手の顔面に届かせること自体が無理でしたが、もし仮に1発当てることができたら、何百発の仕返しが返ってくることは目に見えていました。子供の私に、刃物で刺す、毒を盛る、火を付けるというような陰険な手段を実行できなかったのは、幸いなことでした（もっと追い詰められたらやっていたかもしれません）。今思えば、父の「いちどギャフンと言わせて、こいつに手を出すと何をされるか分からないと思い知らせてやれ」という発想はテロリズム以外の何物でもありません。私の精一杯の安全保障は、ひたすら勉強して「良い子」として先生に守ってもらうことだったのです。

父は褒めない人でした。もし私が十分に愛され認められているという実感を持っていたなら、簡単に傷つかない自我を作れたのではないかと思います。これはアイデンティティーの問題で、守るべき自分は何者なのか、自他の境界線はどこにあるのか、境界を侵されたらどのように対応するのか。共通する問題が現代のあちこちに現れているように思います。心のアイデンティティーが暴走すると自己嫌悪から鬱になるでしょうし、細胞レベルのアイデンティティーが不具合を起こすとアレルギーになります。解決の鍵は、異物との共存であり、他者との共存が健全なアイデンティティーを作るのだと思います。民族や国家のアイデンティティーが問題にされるとき、このアナロジーは役立つだろうと直感しています。

私は昨年エンジニアとして27年勤めた会社を退職し、長年考えてきた自然農を実践しようと準備中です。草や虫を敵にしない非暴力の生き方として、意味を感じています。

（元（株）デンソー勤務）

Familyとして学ぶということ

坂口理香

私は、2009年のセミナーに立命館大学から参加しました。旅のユニークさと、それに関わる人々に魅せられ、2010年にはSC（Student Coordinator）として参加させて頂きました。

私は大学入学前から国際NGOでボランティアを始め、市民が「平和」の創造にどのように関わることができるのかに興味を持っていました。海外から帰国して、もっと日本を知りたいと思っていたタイミングで出会ったこの旅は、私の大学生活のハイライトとなる非常に思い出深い経験となりました。

この旅の一番の魅力は、「人」にあると思います。何といっても、セミナーの魅力の一つはお茶目な藤岡先生でしょう！また、いつも新しい視点を提供してくれるカズニック教授、女性として国境を越えて平和のために活躍する近藤紘子さんと乗松聡子さん。主催者だけではなく、アメリカ、日本、アジアからのセミナー参加者も、原爆投下に関わる多様な視点を与えてくれました。そしてなによりユニークなのは、こういった多様性に富んだ人々が"Peace Family"という疑似家族となり、共に学び、議論することにあると思います。

多くの学びがあったツアーの中でも、原爆投下をアジア諸国の視点で考えられたことは大きな収穫でした。私のPeace Familyには韓国人のAPU生がおり、岡まさはる記念館で一緒に資料を見ました。この時、自分ではコントロールできない程の感情が溢れたことを忘れることができません。ツアーも終盤となり、姉のように慕っていた彼女と、少し時代が違えばどんな関係に立たされていたかを想像しました。「この写真の中で、槍で突いているのが私で、その先にいるのが彼女かも知れない…」。人間関係を築いて学ぶからこそ、すべてのことが自分に関連することとしてリアルに迫ってきました。Peace Familyという密な関わりを持つ彼女とでなければ、あのような感情を感じることはなかったでしょう。

単なる「出来事」を学ぶのではなく、人間関係（つながり）を築く。これは、今の私の教育方針の根底となっています。このセミナーのように多角的な視点で「原爆投下」「核問題」を身近に考える人が増えてほしいという思いから、2010年には『あなたに考えてもらいたい核兵器のこと』という小冊子をセミナー参加者とともに制作しました。休暇期間の2月になっても編集が終わらず、朝から晩までラウンジに籠りました。夜は六畳部屋で眠気に負けそうになる互いを起こし合いながら何日間も朝まで作業したことは、今振り返ると青春の1ページです。それ程、このセミナーは私たちの心に熱い想いを与えてくれました。

現在私は、東京の私立高校で教鞭をとっています。核廃絶と直接関ってはいませんが、一度宿った情熱は消えることはなく、教育現場で平和を創造する方法を日々模索しています。この素晴らしいセミナーを続けてくださった藤岡先生に深く感謝するとともに、君島先生率いる新たな旅の始まりに期待を寄せて、自分の持ち場でセミナーでの学びを実践していきたいと思います。

（私立高校英語教員）

職員スタッフとして
プログラムを支えて想う

澤田博昭

私は、教務課に配属されていた際、国際平和交流セミナー広島・長崎プログラムの担当をさせていただきました。プログラム自体に引率等で参加させていただいたわけではないのですが、事前講義には参加させていただいておりました。

私自身、本学経済学部出身であったこともあり、藤岡先生の講義も受講していましたので、お人柄はよく分かっていたつもりでしたが、このプログラムを担当して、いかに先生が学生思いであり、アメリカン大学の学生と立命館大学の学生との対話を通じて、「草の根から平和を実現するんだ」という揺ぎない信念をお持ちなんだと、改めて痛感したのを思い出します。

時がたち、今年、NHK のオリバー・ストーン監督の特集番組の中で、ストーン監督が広島・長崎プログラムに参加している様子が放送されていました。その中でも藤岡先生は昔と変わらず授業の進行のために尽力されておられ、やはり信念は揺ぎ無いんだと確信いたしました。今後ますますのご健康とご発展をお祈りいたします。

（立命館大学 BKC 国際課　課長）

医学生として福島から参加して

白石裕紀子

私は2011年から4年間平和の旅に参加させていただきました。2011 年 3 月 11 日に東日本大震災が起き、福島第一原子力発電所で水素爆発が起きました。ちょうどその年に福島県立医科大学に入学した私は、経済学の後藤宣代先生にご紹介いただき「平和の旅」に参加しました。これは素晴らしいチャンスでした。なぜなら入学が決まってから原発事故が起きたため、故郷を離れ、福島に行き、そこで学生生活を送ってもよいかを考え、いろいろ調べた際に、広島・長崎のことが沢山出てきたからです。広島・長崎に行って学び、旅の参加者とともに被爆や被曝について考えたいと思いました。

2011 年の平和の旅は想像以上に楽しかったです。紘子さん、ピーター、藤岡先生、その他沢山の方のお話を伺い、アメリカン大学や立命館大学の学生と議論をする。夜遅くまで学んだことについて学生同士で話をしました。京都では福島での生活について話しさせていただきました。10 日間はあっという間でした。2011 年の旅では、核エネルギーを誤ったことに使用することの恐ろしさを痛感しました。と同時に何が誤っているかの判断は難しく、時代の差や判断する者の立場によっても変わってしまいます。米国の加害・日本の被害・日本の加害・アジア諸国の問題・沖縄の問題・福島の事故などは核をこえて考えていかなければならないと思いました。

2012 年から 2014 年の 3 回の平和の旅には京都プログラムのみに参加しましたが、参加のつど、何か新たな発見がありました。最初の年はまだ日本人として歴史を学んでいるような感じが拭えませんでした。しかし自国の加害を学びに来る米国の学生と話しをし、日本の加害を伝え続ける日本人に会い、東日本大震災でヘリを使って物資を運び続けた米兵の涙を見てからは、自分の根底にある日本人の利害のようなものを取っ払ったうえで学ばないと、分からないことがあると感じました。

藤岡先生、ピーター・カズニック、近藤紘子さん、乗松聡子さん、後藤宣代先生をはじめ多くの方々、素晴らしい旅を有り難うございました。旅の仲間にもっと自分の言葉で伝えたいと思ったからこそ、英語での会話が楽しくなり、英語でのプレゼンテーションにも挑戦できました。またどこかでお会いしましょう。

（福島県立医科大学医学部４年）

平和と真剣に向き合う姿勢を感じて

鈴木亮

「原爆はなぜ投下されたのだろうか」「そもそも原爆投下は本当に必要なことであったのだろうか」。日本の歴史、そして平和を考えるうえで私が常に疑問に思っていたことを学ばせてくれたのがこのプログラムでした。国際関係学部のグローバルスタディーズ専攻という多くの留学生とともに学ぶ環境にあって、もっと日本の歴史について理解を深めたい。そして、原爆投下という大きな事件に対して他国の方々がどのように考え、感じているのかを知りたい。これらのことから私はこのプログラムへの参加を決定しました。

私は、このプログラムに４回参加しています。１回目は、学生として平和について学び考える立場として。それ以降はアシスタントティーチャーとして、同じ専攻の学生を支える立場として参加しました。２回目以降は、初めてプログラムに参加した学生たちの様子をみたり、感想を聞いたりしましたが、どの学生も真剣に平和について向き合っていて、アシスタントティーチャーという立場ではありましたが、学生から多くのことを学びました。

その中で最も印象的であったのは、やはり２年前の2013年の出来事です。その年は、オリバー・ストーン監督が広島・長崎にいらっしゃるとのことで、多くのマスコミが詰めかけました。私たちのプログラムにもほぼ常に１つ２つの取材班がついているという状態でした。そのために、せっかく真剣に講演に耳を傾けようとしてもカメラの音で聞こえない、あるいはマイクが気になって集中できないことも多々ありました。その中で、多くの学生が、その状態に甘んずることなく、少しでも多く学ぼうと、マスコミの方にお願いをして少し後ろに引いてもらう、あるいは講演を録音するといった工夫をしていました。また感想をマスコミの方に聞かれた際も、率先して協力していたことも印象的でした。余談ではありますが、私自身も、マスコミの方と学生たちとの間を取り持つことに苦労した記憶もあります。

４年間のうち、３年間は学生を支える立場として参加していたために、どちらかというと学生の側を見て行動することが多かったのですが、前述した一昨年の学生に限らず、どの年の学生たちも、平和について真剣に学ぶ姿をみせてくれていました。私自身がまだまだ平和について、考え学ばなければならないのですが、学生たちのそのような姿をみて、安心をしました。一人ひとりの学生が本当に真摯に平和について向き合っているので、意見交換の場がよりたくさんあれば、さらによいプログラムになると思っています。

最後になりますが、藤岡先生、20年間本当にお疲れ様でした。私自身を含め、このプログラムを通し、多くの学生が平和について考えることができました。

（国際関係学部グローバルスタディーズ専攻学生）

日本の戦争責任をも問う旅に敬意と感謝

髙實康稔

藤岡先生がピーター・カズニック先生とともに始められた「日米交流の原爆探求の旅」が20周年を迎え、旅の担当を終えられるとのこと、毎年8月、長崎原爆の日に合わせて長崎まで学生を引率して来られたお姿が鮮明に思い出され、並々ならぬご尽力に心から敬意を表します。

本書第1章の「20年間の旅の歴史」によれば、私が理事長を務める「岡まさはる記念長崎平和資料館」（以下、資料館）への訪問は1997年からとのことで、この最初の来館に私が応対し、展示解説の後に懇談の場を設けたことや、記録集「せいか－成果と聖火」を後日いただいて感動したことなどを懐かしく思い出しました。「受講生必見の施設と位置づけ」とは光栄このうえありませんが、資料館の設立（1995年10月1日）から2年も経たないうちに来館されるようになったのですから、資料館の歴史と重なり、毎夏待ち望む格別の来館者でした。

「被害者の痛みを心に刻み、戦後補償の実現と非戦の誓いを」と訴える資料館がRU・APU生やAU生に「必見の施設」として評価されたと知れば、設立の提唱者である故岡正治牧師もさぞ喜ばれることでしょう。「原爆の悲惨さと核兵器廃絶だけを訴えて、植民地支配や侵略戦争の加害責任を問わないのは世界に通用しない。一人よがりだ」と、とりわけ若い世代に向けて加害の面を展示する歴史資料館を設立したいと奔走される中で、岡先生は急逝され、いわば教え子たちが遺志を継いで設立したのでした。

2006年からは乗松聡子さんがカナダの若者を引率して参画され、2011年には山根和代先生がGSの学生を引率してほぼ同一の日程で参画されたわけですが、資料館の熱心な見学に終わらず、8月9日の「長崎原爆朝鮮人犠牲者追悼早朝集会」にも必ず参加してくださったことが熱い記憶として脳裏に焼き付いております。

集会の後でAUの学生が朝鮮人被爆者の惨状について私に詳しく質問したこともあり、また韓国では原爆を「解放の兵器」と見なす意見が根強いことについて学生たちが真剣に議論していたと乗松さんから聞いたこともあります。カズニック先生の論説をはじめ、多彩かつ重層的な探求によって「原爆投下は戦争終結には不必要な蛮行であり、米国が犯した明白な戦争犯罪であった」ことを学んだ学生たちにとって、「解放の兵器」とは克服すべき原爆観と思えたことでしょう。しかし、被爆の惨状を骨の髄まで知らされた徐正雨さんでさえ、「原爆でも落とさなければ日本は戦争を止めなかったでしょう」と言われたことを思えば、日本国民はいわゆる「招爆責任」の問題として、重く受けとめなければならない原爆観というべきでしょう。

2013年夏にはオリバー・ストーン監督が資料館を訪ねてくださり、「東京にもなければならない」との感想に感激一入でしたが、これも「日米交流の原爆探求の旅」によって与えられた幸運と感謝に堪えない次第です。

（岡まさはる記念長崎平和資料館理事長）

2014年夏の旅をSCとして振り返える

田畑満

私は、2013年にGSの受講生としてこのセミナーに参加させていただきました。その時は、周りの参加者の流れについて行ったり、与えられた議題やテーマについてだけ考えていました。しかし、今回SCとして運営側で関わらせていただくことで責任感が与えられ、そのこと

を通して「自分で考え行動する」と言うことを学ばされました。このセミナーの意図は何なのか、ここで出会った一人一人はどのようなバックグラウンドを持って何を考えているのか、平和とは何なのか・・・。考えれば考えるほど多くの疑問が出てきました。しかし、このような疑問や考えを少しでも意識してSCの仕事ができれば、何気ない行動一つ一つが受講生に良い影響を与えることができるのではないかと思いました。

今回のセミナーを通して私は、「平和とは何なのか」ということを改めて考えさせられました。平和とは、暴力が存在しないこと、一人一人の生存権・人権が保障されていること、軍事的に勢力が均衡していること、皆が笑顔でいられること・・・。平和の概念は人それぞれいろいろな考えがあると思います。

今回私が感じた平和とは、このセミナーの参加者一人一人の繋がりの中にありました。平和な状態を生み出すためには何が必要なのか。それは、相手の立場に立って物事を考えること。つまり、相手も自分と同じ人間であり、家族がいて、友達がいて、多くの繋がりの中で生きているのだということを知り、理解することです。

人間は歴史の中で、肌の色、髪の色、目の色、体の大きさの違いから、同じ人間を人間とみなさずに差別してきました。悲しいことに今でもそうです。しかし、このセミナーでは、いろいろな国から集まった人たちが肌の色や言語の違いを超えて、日本・韓国・アメリカ・カナダなど、それぞれの文化と考えを知り、理解しようと努力していました。そして、理解したうえで互いに議論し、平和について考えていきました。このような関係こそが、平和を実現させるために必要なのだと感じました。そして、このような繋がりがもっともっと大きな輪となり広がっていくことで、差別や偏見を世界から減らすことができるのではないでしょうか。また、戦争において人を殺すことに対する心の痛みも生まれてくるのではないでしょうか。このようなことを実現させるための足掛かりとしての存在意義が、このセミナーにはあるのではないかと私は考えました。このセミナーを通して、他者の立場で物事を考えることのできる人が、一人でも多く出てくればいいなと思います。

（2014年度SC、国際関係学部2回生）

前列右の端が鈴木亮さん、右から3人目が田畑満さん（2013年8月、長崎にて）

1995年と2000年に「日米共同の平和の旅」に参画して

中逵啓示

藤岡惇教授が長年にわたり運営されてきた国際平和交流セミナーに一時期だけとはいえ参画できたことは、今にして思えば非常に幸運なことであったように思います。私が最初に国際平和交流セミナーに関わったのは、広島大学助教授であった忘れもしない被爆50周年の1995年のことでした。

その前年には米国スミソニアン航空宇宙博物館のハーウィット館長一行が広島を訪れ、50周年を記念し航空宇宙博物館で特別展示を行いたいので、被爆遺品の貸与をしてもらえないかと

当時の平岡敬市長に要請しました。ルーブル美術館よりも来場者数が多いとされる同博物館での展示に関与することに、当初から市長は前向きであったように記憶しています。しかしながら、広島の一部では、原爆を投下した爆撃機エノラゲイと一緒に展示される結果、被爆遺品が原爆の破壊力を誇示することにのみ利用されるのではないかという危惧が存在しました。それに対して私も微力ながらローカル紙中国新聞で短い論稿を書いたり、広島のテレビ局で、原爆投下という事実は例えようもなく重く、それを伝える原爆遺品はエノラゲイをむしろ圧倒するであろうし、世界の多くの人々に改めてヒロシマを考えさせる重要な機会に参画することを恐れるべきではないと訴えたりしました。その頃までには広島の反核運動は十分に成熟しており、それに市長の英断も加わり、広島側は参加の方向で固まりました。

ところがアメリカ側の退役軍人会からクレームが出ました。彼らは軍国日本を打倒した自らの辛苦が道徳的に否定されてしまうのではないかと、逆の立場から特別展示を批判したのでした。結局展示は中止となり、ハーウィット館長は辞任にまで追い込まれてしまいました。広島市長も航空宇宙博物館長も、そして末端にいた私も、事実を事実として世界に認識してほしかっただけであったのに……いまも館長の "Set the record straight." という発言が耳に残っています。戦後50年にわたり友好関係を構築してきた日米にして、まだこの有様かと、前途に夢を描いていた若い研究者であった私も、大いに嘆いたことを昨日のように覚えています。

しかしながら幸運なことにアメリカン大学が特別展を実施してくれることになり、少し救われた気持ちになりました。そしてカズニック准教授が率いるアメリカン大学の学生団と立命館の学生達が50周年の1995年に広島にやってくるということが分かり、一も二もなく協力を了承した記憶があります。

その後偶然にも私は1998年から立命館大学に奉職することになり、2000年のセミナーにも同行し、大牟田広島平和文化センター理事長による、ご自身と奥様の被爆体験のお話を、涙しながら通訳したことを今も忘れません。

こうした一連の出来事と中逵とのかかわりは、多分に偶然の要素が付きまとっていることは否めませんが、広島、立命館、アメリカン大学はいずれも平和主義を奉じる団体であり、三者の結びつきは決して偶然ではなく互いに求めあった結果であったと思います。それにしても、藤岡、ガズニック両先生、さらにもう一人付け加えるとすれば直野章子さんという個人の情熱が、セミナーを開始し継続するには是非とも必要であったことはいうまでもありません。そして最後にこれだけの長きにわたりセミナーが継続出来たのは、立命館とアメリカン大学の平和主義を信じる多くの学生達が参加し続けたからであったことも忘れてはなりません。

（立命館大学国際関係学部教授）

人の「個」を見つめること

南茂芽育

私にとって平和セミナーは、今の自分の原点になっているものです。入学して数ヶ月、課題に追われるなかで自分の一番やりたいこと、学びたいことにどうやって飛び込めばいいのだろうと気持ちだけが焦っていたときに、2010年度平和セミナーに参加しました。

元々原爆や戦争体験の継承に関心があり、それをアメリカの学生と一緒に学ぶことができるということで参加を決めましたが、そこでの出会いと学びは、何も知らなかった私の目をぱっ

と開かせてくれたような気がしました。藤岡先生はもちろん、コーディネーター兼通訳の乗松聡子さん、アメリカン大学のカズニック先生、そして一緒に歩いて考えて悩んだ、強くあたたかいつながりを持つ参加者と出会うことができました。翌年の2011年度はSC（Student Coordinator）も務めさせて頂きました。

たくさんの印象的な思い出のうち、特に心に残っていることは2011年度の一人のアメリカン大学生の言葉です。議論の時、日米安全保障条約がテーマに上がり、ある日本人学生がアメリカは有事の際に本当に日本を守るのか、アメリカに都合の良い時だけ助けようとするのではないか、と言いました。参加者のなかに在日米軍に所属し東北の震災の際に救援に当たっていたそのアメリカン大学生がいました。それを聞いた日の夜、彼はショックで眠れなかったそうです。「安保条約が巻き起こす問題が多く存在するのは分かっているが、それでも少なくとも私たちは、心から日本のために米軍として救援に携わっていた。自分自身も日本の一部のように感じ、東北も自分の一部と思ってがんばっていた。それを、どうしてもみんなに知ってほしかった」と、最終日の議論で彼は泣きながら話していました。

それを聞いたとき大きな衝撃を受けました。震災の時に救援に米軍が駆けつけたことと日米安全保障条約の是非はまた別の話ですが、それでも在日米軍の一員として働いた彼の話を聞き、当然のことですが、「アメリカは」「日本は」というとらえ方の中に、多くの人々の一人一人の気持ちを自分は考えていたかと突きつけられたような気がしました。

国家と国家の関係のみを見ていると、難しくなります。そしていつのまにか争いの火種になり得ます。例えば「最近のアメリカ人は自分の国が日本に原爆を落としたことも知らない、本当に原爆の悲惨さを分かるのか」と、「アメリカ人」単位で見ている意見は多いです。しかし実際に私たちはこのセミナーでその固定観念を覆すアメリカ人学生達に会いました。一人一人の個を意識すること、相手が人間であることを感じることがいかに大切かを感じた瞬間でした。平和学習をするうえで、「国の考え」を越える一人一人の意見を聞くことが、お互いの差別観念を変えると信じます。

SCをしていたとき、楽しそうに一緒にいる参加者たちの様子を平和だなぁと思いながら見ているなか、SC仲間だった一人が「原爆が落ちたあの一瞬がなければ、今このセミナーはなかったんだね」と言ったのをずっと覚えています。平和とかけ離れた瞬間が原因となって始まったセミナーが、つながりと話し合いと学びの場を持つ平和な形をつくりだしていることに、様々な人の思いと不思議な力を感じます。

他の人には決して出せないあたたかい雰囲気、人柄、言葉を持つ平和の権化のような藤岡先生のご退任は本当に寂しいですが、これからもまた新しい形の素晴らしさを持った平和セミナーが続いていくことを心より祈っています。私もまた自分の場で、セミナーで感じたことを体現できるような仕事をしたいと思います。

（国際関係学部学生）

入市被曝した亡き母が導いてくれたご縁

畑井克彦

2014年の「平和の旅」に広島で同行させていただいた畑井です。兵庫県被爆2世の会の会長をしています。

原爆投下された時、私の母は賀茂高等女学校（現在賀茂高等学校）の4年生に在学しており、動員学徒として広島に救護活動に入ったことに

より入市被曝しました。母の被爆（被曝）体験については、幼い時から何度も何度も聞いておりました。しかし、私が中学生の反抗期に「おんなじ話ばかり聞いて、何になるねん！俺に何をしろというねん！」と反発しました。その後、母は語らなくなってしまいました。

2010年に母が亡くなった時に、被団協の方から兵庫県には、被爆二世の会がないことを知りました。私は、高校の教師であるとともに、多くの社会的プロジェクトを手掛けておりましたので、自分の経験が何か役に立てると考え、兵庫県被団協を基盤にして兵庫県二世の会を立ち上げました。現在、会員数は40名程度です。被団協の平均年齢が80歳となっている現状を考えると、被爆の実相を伝える土台をつくることが急がれています。

さて、2014年国際平和交流セミナーに参加するきっかけは、私の高校の教え子である田中志穂（国際関係学部2回生）さんとの再会にありました。田中さんは高校在学中から広島の原爆資料館に勤めたいと言っており、平和の意識の高い生徒でした。京都で唯一の平和博物館をもつ立命館大学に入学し、2013年の国際平和交流セミナーに参加して感銘を受けたようでした。今年は学生リーダーとなって企画運営すると聞き、藤岡教授との交流が始まり、同行することとなりました。

もう一つの要因として、2013年長崎で、私は、オリバー・ストーン監督とピーター・カズニック教授の講演会に参加して、お二人の考え方に共感を覚えていたことも大きいです。

エピソードを2つ、お伝えしたいと思います。一つ目は、母の苦しみを教えてくれたのは福島からの避難者だったことです。というのも兵庫県被爆二世の会を立ち上げていたのですが、母の苦しみについては言葉だけの理解でしかなかったのです。母の世代は、非常に我慢強く、自分の感情を表現しないということもありますが、私の感性が低く、本当に母の苦しみを理解することができてなかったのです。福島の事故が発生し、すぐに避難者の支援を兵庫県被爆二世の会の活動として行いました。そこで萩原ゆきみさんと出会い、勤務校での講演をお願いしました。最初は感情を抑えつつ話をされていましたが、やはり苦しみを思い出して、何度か感情を抑えきれなくなられました。その抑えきれない感情に触れて初めて、私は母の苦しみが理解できたのです。萩原ゆきみさんが私の母と重なったのです。母を理解するのに50年以上かかってしまいましたが、萩原ゆきみさんには感謝しております。

二つ目が、今夏の「平和の旅」に同行して、母が看護した現場である本川小学校に行けたことです。私の中では、言葉は悪いですが、「母の殺害現場」という潜在意識を持っていました。何度広島に行っても、どうしても行くことができない場所でした。今回告白すると、藤岡教授や参加者が同行してくれるというので、本川小学校に行く決心をしました。本川小学校の地下に下りた時に、一瞬ぎゅうぎゅうに詰められた患者さんたちが見えました。母が亡くなる前後もいろいろと不思議なことがあったのですが、母は私に「自分が人のために尽くした場所」を見てほしかったのだと思いました。

今後の取り組みについてですが、現在「二世の会」が全国的に立ち上がりつつあります。今一番頑張っているのが九州エリアです。福岡県二世の会の南会長が、全九州をとりまとめて活動しています。もちろん、兵庫県二世の会も共同しています。二世会員の多くは癌などの病気を患っています。したがって、二世は親の体験を見聞きしながら、自分の苦しみを背負ってきた人たちです。今後ともより多くの二世が、全国の被爆二世の会と一緒に活動をして、次世代に生きるかたちで被爆実相の継承をして欲しいと願っています。

（兵庫県被爆二世の会長、
伊丹市立伊丹高等学校勤務）

20年も継続したことに敬意

花垣ルミ

「継続は力」とは言え、受講生には アメリカ人と日本人だけではなく、様々な国からの留学生さんがおられたことでしょう。私がお会いした限りでも、「どこのお国の方？」と思うことが多々ありました。20年前の学生さん達は、もう立派な中年になっておられるのですね。その後どんな生き方をされているのでしょうか。

この20年の間に、目を覆うばかりの事件や災害が数々あり 、なかでも日本特有の地震については、世界中が心配してくれました。1994年7月に孫が産まれましたが、その5カ月後に、阪神淡路大震災が起こりました。京都でも私や孫が住んでいた上京区（二条城の近く）でも、食器棚の物や額などが落下し、散乱しました。

20年後の今年、メディアの報道や発生当時に集め保管していた資料等を読み返したところ、この頃にはもう多数の原発があったことに気づき、改めて恐怖心がわいてきました。被爆者でありながらも、私どもの無知と無関心、そして無責任さに「ご免なさい」と謝るほかありません。

2005年5月のNPT（核不拡散条約みなおし）会議に参加したことで、私のなかの被爆者性に目覚め 、ゆるゆると活動を始めることになりました。2010年のNPT会議に参加した頃から、藤岡先生とカズニック先生の平和交流会に参加させて頂き、私の世界観が変わってきました。カズニック先生が私に「本当にアメリカを許していますか」と質問された時、「許しあわなければ、世界中が不幸のままです。アメリカやアメリカ人が嫌いなのではない。日本の加害も甚大でした。戦争そのものが嫌いなのです」と答えました。

カズニックさんの奥様のシムキさんにもお会いしました。2010年には藤岡先生からご紹介頂き、NYの写真家のポーレ・サビアーノさんに取材していただきました。ドレスデン・東京・広島・長崎の戦争被害者たちの人生を綴った写真集『上空から』も頂きました。今年のNPT会議に参加しますので、その折にポーレとはNYでお逢いする予定です。

2013年にオリバー・ストーンさんとカズニックさんの長崎での講演を聞きました。またお二人の著作も読み、目からウロコの体験をしました。自分の国の否定的な面を赤裸々に語っておられ、カズニックさんの「本当にアメリカ人を許しているか」の質問の深奥を読み取ることができました。戦争が辛かったのは私達だけではなかったことにも気づくことができました。

谷川佳子さん、乗松聡子さん、近藤紘子さんに加えて、東京大空襲に生き残った浅草の実家の土蔵を使い、「ギャラリーエフ」を経営なさっている桜井泉さんも、私の人生に大きな存在感を残しています。加えて何よりもアメリカン大学生と立命大生との出逢いが強烈でした。これからの世界を平和の方向に導いてくれるのではと思わせてくれました。「まだ世の中は捨てたものではない」ことに気づきました。ご苦労も沢山おありでしょうが、「平和の旅」が永続するように祈っています。

（京都被爆者懇談会世話人）

左が花垣ルミさん、右が米沢鉄志さん

2001年度の「広島・長崎の旅」——15年後の報告

藤田明史

2001年度「広島・長崎の旅」(8月2日 - 10日)の参加者は、立命生14名(内APU生2名)、AU生13名、うちマーシャル諸島から2名、SCの菅原千波さん・丁子基彦さん、ピーターさん、そして私(藤田)でした。

今年20年目になる阪神・淡路大震災の年(1995年)に私は立命館の国際関係研究科に社会人入学し、社会科学の立場から原子力の問題を研究していたので、直前に体調を崩された藤岡先生の代わりの引率者として、指導教官の安斎育郎先生が推薦してくださったのでした。広島・長崎で多くの人たちの話を聞き、多くのものを見、街を歩きながら議論し、私たちは必死になってヒロシマ・ナガサキの意味するものを考えました。このことが、稀有な出来事として、いまも私の記憶の中に鮮明に残っています。

広島に同行して貴重なお話をしていただいた近藤紘子さん、長崎で自身の過酷な被爆体験を語ってくださった長崎被爆者協議会の山田拓民さん、「戦争の極限としての『原爆死』」の意味について講義してくださった長崎平和研究所長の鎌田定夫先生(そのお話を聞いた翌年に先生は亡くなられました)、そして市民による平和運動の可能性について語ってくださった元長崎大学長の土山秀夫先生。私たちの心に刻まれたこれらの方々の印象は今後も決して消えることはないでしょう。

立命生のいくつかの感想を紹介します(表現・文体は改変しました)。「核廃絶がなぜ実現しないのか、私はその原因の一端をこの合宿で見た気がしました。アメリカ人の学生と意見交換をしたとき、広島・長崎で原爆被害の実態を知り、被爆者の証言を聞いてもなお、何人かの学生は核抑止論を捨てませんでした。私には衝撃でした。」「日が経つにつれて核問題は重要だが、私自身がこのセミナーで学びたいものは『全体としての平和』だと分かってきました。いま一般的に考えられている『平和』は、一国や個人の平和にすぎないと私は考えるからです。」「原爆投下当時の日本で被爆したのは日本人だけではありませんでした。朝鮮人被爆者は、日本の『加害者』と『被害者』双方の立場を最も如実に示している重要な存在です。過去の清算ができない限り、日本はアジアと真に向き合うことはできないでしょう。」「セミナーの最後の平和宣言で、私は『平和のためには正しい歴史教育が必要である』という自分なりの結論を出しました。」

セミナーが終わって、一月後に9.11事件が起こりました。私は、安斎ゼミでの議論を踏まえて起草した、「テロリズムに反対し、平和的手段による紛争解決の緊急の必要性を訴える声明」を電子メールでセミナー参加者に送りました。AUのリーダー格の学生から、「将来の平和を保証するためには、いま戦争が必要だ」といった趣旨の返答が来て、私は大きなショックを受けたことを覚えています。一方、それに対する反論や冷静な意見も寄せられました。問題があまりにも大きく、私の力不足から、何らかの形で

議論を継続できなかったのは今でも申し訳なく思っています。

ヒロシマ・ナガサキのもつ普遍的な意味を9.11後の世界にどう生かしていくのかという問題に、否応なく私たちは直面させられることになったのです。

（立命館大学非常勤講師）

「真実の共有」を育む「学びの場」としての期待

藤本博

私は、藤岡先生からお誘いを受け、2013年に京都プログラムの一環として開催された京都セミナーの第3セッション「虐殺と和解―真実の共有と悔悟・寛容への道を探る」に話題提供者の一人として参加させていただき、ベトナム戦争中の1968年3月16日にベトナム・ソンミ村でアメリカ軍が起こした虐殺（「ソンミ虐殺」）についてお話し、その虐殺の真相と、その虐殺の地にて今日、ベトナム帰還兵マイク・ベイム氏の主宰のもとで展開されているベトナムの人々を対象にした「和解・共生」活動を紹介させていただきました。私の場合、「日米交流で原爆を探究する旅」にはこの場限りの参加ですが、アメリカン大学と立命館大学との共同プログラムには以前から興味を抱いてきました。

この共同プログラムの目的は、アメリカン大学と立命館大学の学生が広島・長崎を訪問し、学生を中心として草の根の市民交流を深めることで原爆投下認識をめぐる日米ギャップを埋め、「真実の共有」の道を探ることとされています。この共同プログラムにおいては、原爆投下の記憶を共有するためには、第二次世界大戦中に日本が中国や朝鮮半島を含むアジア地域の民衆に対して行なった「加害」行為を見つめ直すことをはじめとして、より広く戦争全体の歴史の中で原爆投下を位置づける必要があるとの視点から、これまで様々な企画が展開されてきたことに大きな意義があると受けとめています。

やや古いデータですが、米国のQuinnipiac Universityが約5年半前の2009年8月4日に発表した世論調査によりますと、トルーマン大統領の原爆投下が間違いだったと回答した米市民は22%にすぎず、原爆投下認識をめぐる日米ギャップが依然として根深いことを示しています。ただ、核による「恐怖の均衡」に特徴づけられる冷戦時代を同時代として体験していない若い世代では、原爆投下を支持する意見は他の世代より少なくなっているようです（それでも、18～34歳の50%が原爆投下を支持する意見ですが）。

被爆者の方々をはじめ第二次世界大戦の戦争体験者が高齢化し、原爆を含む戦争の惨劇の記憶の継承が次第に難しくなっているだけに、アメリカン大学と立命館大学の共同プログラムが、自国に閉ざされた原爆認識を克服する場として、言い換えれば、第二次世界大戦期における日米それぞれの「加害」と「被害」の重層的な側面を学び、原爆投下を広く現代の戦争の歴史の中に位置づけることで、戦争の「真実の共有」を育む「学びの空間」として、引き続き発展することを期待しております。

私自身、2013年9月から2014年3月までアメリカン大学の客員研究員としてカズニック先生のもとで学ばせていただいたこともあり、この場を借りまして、本共同プログラムを長らく担ってこられた藤岡先生とカズニック先生に深い敬意を表させていただく次第です。

（南山大学外国語学部教授）

学んだことを生徒たちに伝える

三宅すばる

APU 卒業生の三宅すばるです。私は 2011 年度に受講生として、2012 年度にはスチューデント・コーディネーターとして、合計 2 回、国際平和交流セミナーに参加しました。現在は立命館中学校で英語を教えています。

私がこのプログラムに参加した理由は、オーストラリアの高校留学時代に遡ります。現地では日本人としての意見を頻繁に聞かれ、その度に自分自身が母国についてもっと知らなければならないと痛感しました。また、APU に入学しても、日本人の考え方・意見を常に求められ、留学生と議論をする度に、留学生は母国の歴史・文化をきちんと知り、その上で母国に対して誇りを持っていることを実感しました。このプログラムを最初に知ったとき、APU の留学生やアメリカン大学の学生など、多種多様な背景を持った人と一緒に被爆地となった広島・長崎を訪ね、議論もできる素晴らしいプログラムだと思い、すぐに応募しました。

特に印象に残っていることは、長崎に原爆が落とされた 8 月 9 日に城山小学校（被爆校）で行われた式典に参加したことです。児童が平和について真剣に考え、自分達が平和への一歩を歩みだそうとしているその力強い姿にとても感銘を受けました。そして、教職を目指していた私は、いつか自分が教員になったら、広島・長崎に生徒を連れて行き、平和についてもっと自分達の問題として考えてほしいと強く思いました。

大変有難いことに教員 1 年目にして、生徒の広島研修に引率する機会を得ました。広島では、被爆者からのお話を聴き、あまりの衝撃にお話が終わってもしばらくその場から動くことができない生徒もいました。そして、夜の議論では、自分達が被爆者から聞いたお話を自分達だけに留めずに、もっと多くの人に伝えていかなければならないという意見が全員からでました。生徒を広島に連れて行くという夢を叶えることができ、大変大きな一歩を踏み出すことができて嬉しく思っています。

私が広島・長崎に行って衝撃を受けたように、実際にその場に行くことでしか得られないものがあります。今後も一人でも多くの生徒に、自分の得た体験を伝え、その生徒がまた別の人に自分の体験・想いを伝えていく・・・というように、平和へのバトンを渡していくきっかけになればと思います。2011 年に参加した際に、『はだしのゲン』の作者、故・中沢啓治さんは、「若い世代に引き継ぎいでいきたい」と言われましたが、その力強いメッセージを原動力として、教育の分野で貢献できればと思います。

追伸：いつか何らかの形で高大連携の一環として、立命館高校の生徒がこのプログラムに関わっていけたら良いなと思っています。このプログラムで出会えた全ての人に、心から感謝申し上げます。

（立命館中学校講師）

---

20 周年に寄せて

安福裕一郎

国際平和交流セミナーには、このプログラム以外に中国や韓国をフィールドとしたプログラムがあります。私は引率者ではなく、このプラグラムを含む国際平和交流セミナーの事務局担当者として 2008 年から 5 年ほど携わりました。この科目は開設から長年に渡り、特殊講義（毎

年継続して開講するかどうか決まっていない時限的な科目）として開講されてきましたが、2012年度からは正規の教養科目として開講されています。これをもってこのプログラムが永続するということではありませんが、全学に評価された証のひとつであることは間違いないと思います。

このプログラムについての印象ですが、最初に担当を引き継いだ時、正直なところ、何をやっているプログラムなのか全く分かりませんでした。まずは担当の藤岡先生やSCと話をするところから始めたことを記憶しています。第一印象は、藤岡先生も熱い思いをもっておられますが、SCのみなさんはそれを上回る情熱をもっておられることでした。SCの仕事は相当な負担であるにもかかわらず、労を惜しまず参加する姿をみてとても驚きました。

このエネルギーはいったいどこから生まれてきているのだろうとSCの話を聞いていると、SC以外にも過年度のプログラムに参加した学生、さらには卒業生にもサポーターがいることが分かってきました。これが、このプログラムの一番の強みであり、継続性と発展性につながっているのではないかと思います。これからもこのプログラムの情報を広く国内外に発信して、世界から注目されるプログラムになるよう応援していきたいと思っています。

（立命館大学共通教育課　課長）

ハイブリッドな学びのコミュニティを、これからも

山口洋典

十年一昔といいますから、「二昔の歴史」を感慨深く想い起こしています。1996年に参加、1997年にはStudent Assistantの制度を導入する形で参加し、今は立命館大学のサービスラーニングセンターの教員となりました。1994年に理工学部に入学したため、BKCの一期生です。1回生で阪神・淡路大震災、そして2回生で戦後50年を迎えました。震災ボランティアを共にした仲間たちと共に1995年に立命館大学などが主催した世界大学生平和サミットに携わった後、被爆地で平和を学ぶことに魅力を感じて、このプログラムに応募したのです。

昨年（2014年）の8月2日、立命館大学諒友館食堂で旅行団が開催した20周年記念懇親会にお招きいただきました。その際にもお伝えしたとおり、このプログラムは歴史を見つめ、今に向き合い、未来を見据える、ダイナミックでアカデミックな旅です。実際、「戦後」を見つめ、向き合い、見据えるのは50年という区切りの年だけにしてはならないと、当時、考えたのは私だけではありませんでした。この思いに突き動かされて、戦後50年から戦後51年（経済学部のプログラムを全学に拡張）、そして戦後52年（長崎を追加し単位認定も開始）へと、毎年変化を重ねつつ、20周年に至ったのでしょう。

そもそもこのプログラムは、ハイブリッドな学びのコミュニティが生まれ、育つ可能性を秘めたものでした。日本とアメリカの大学生が混ざる、京都と被爆地で学ぶ、ヒロシマとナガサキを訪れる、学部や学年の構成も広い、など多様な参加者によって多彩な関係が構築されることにより、濃密な10日間を過ごし、体験を共有するからです。その濃密さを、今改めて表現するなら、自らの感覚、目にした現状、問いかけに応えるためになされる思考、それらを表現する言葉が追いつかない程の体験をする環境に身を置くこと、と書きたいと思います。「すごい」「いろいろ」「よかった」といった、曖昧な言葉に留めてしまうのは実に恥ずかしく、「これが無

知の知か」と自覚した気がしています。

このような経緯をへて立ち上げたのが、過年度の参加者や経験豊かな学生たちがプログラムを企画運営する「Student Assitant」制度であり、学生どうしが支え合う学びのコミュニティづくりに取り組むサークルたる「Student WAY」でした。今でこそ、ピアサポートやアクティブラーニングなどの概念が浸透してきましたが、当時は教える人（教育者）の役割が明確かつ強固に位置づけられ、学ぶ側（学習者）を中心に据えるという前提で学び方を工夫することは極めて稀でした。

世界大学生平和サミットで事務局長を務めた内山博史くんらと、震災ボランティアや戦後50年の後を考える上で、中央募金会に相当する米国の組織が「United WAY」という名前であることに着目し、学生どうしが共に理想の未来を歩む道をつくろう、などと語り合って命名したサークルです。当初は理念から入った仕組みや仕掛けが、時を経てプログラムの根幹に位置づいてきたことが本当に嬉しいです。

その意味で1997年度の記録集を「せいか」（「成果」と「聖火」の二重の意味）と名づけてよかったと感じます。付言しますと、上記の記録集「せいか」には、真夏の学びから「盛夏」、単位認定されたから「正課」といったさらなる意味がありました。私たちの播いた「平和の学び」の種子は、20年の歴史をへて、見事な花を咲かせ、大きな実をつけるまでに成長しました。

末筆ながら、この20年、そうしたハイブリッドな学びのコミュニティを見守り、支えてきた藤岡先生に敬意と謝意を表します。そして今後も、「平和を学ぶ旅」が続き、言葉にできない体験を重ねる機会が若者の間に広がっていくことを期待しています。

（立命館大学共通教育推進機構准教授）

GSの学生とともに、広島・長崎を旅して

山根和代

2011年から私は、国際関係学部Global Studies（GS）専攻の学生が受講する平和学やPeace Studies Seminarを担当し始めました。国際平和交流セミナーの藤岡惇先生が長年積み上げて来られた平和の旅に受講生といっしょに参加させていただき、貴重な体験をしてきました。これまで参加したGSの留学生は、タイ、バングラデッシュ、中国、韓国、イギリスの出身です。

この平和の旅で学生は、学校で習った歴史観を問い直す機会を持つことが多く、貴重な体験をしています。「原爆投下により地上戦が回避されて人命が救われ、戦争を早く終わらせることができた」と教科書で習ってきたアメリカ人学生にとって、被爆者の証言は衝撃的なものでした。中国や韓国の留学生は、「原爆投下で戦争が終わって良かったと思っていましたが、被爆者の話を聞いて、考えがすっかり変わりました」と述べていました。長崎では「岡まさはる記念長崎平和資料館」へも行きました。その平和資料館では、朝鮮や中国への侵略や強制連行など日本の加害の側面に焦点を当てて展示しています。多くの日本人学生は、原爆資料館よりこの平和資料館で衝撃を受けています。その他学生は韓国人原爆犠牲者慰霊碑や朝鮮人被爆者の慰霊式を訪れました。学生は「他国の痛みに共感し、日本による加害の歴史に向き合う姿勢は、平和な未来への一歩ではないだろうか」と考え始めます。その意味でも、この研修旅行は大変有意義であると思いました。

毎年行われるこの旅では、思いがけない人に出会います。2012年8月に長崎で学生と如己堂・永井隆記念館へ行った時、偶然アメリカの友人に出会いました。ニューヨークで軍縮教育を推

進されているキャサリン・サリバン博士です。

彼女は永井隆記念館である男性を私に紹介してくれました。その方は何とトルーマン大統領の孫に当たるクリフトン・トルーマン・ダニエル氏（当時55才）でした。彼は新聞記者を経て、1998年から2012までシカゴ市立ハリー・S・トルーマン大学の広報担当ディレクターを務めたそうです。彼の来日については新聞で知っていましたし、被爆者の「今さら何をしに日本へ来たのか」という怒りに満ちた声を聴いていました。しかし私はとっさに自分が被爆二世であることを述べ、彼が広島と長崎に来た勇気を称え、今後核兵器廃絶のために共に努力していこうと話しました。その時はあまり時間を取ってはいけないと思っていたので、彼と十分話すことができませんでした。しかし学生から「何て話したのですか？」と質問され、改めて歴史的な対話をしたのだと思いました。

長崎では原爆資料館だけでなく、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館へも行きました。そこには私の父の被爆体験の手記とそれを私が英訳したもの、また私が息子に向けて書いた英文の詩をパソコンで読むことができます。以前イタリアへ反核平和の旅に出かけた際に、書いたものですが、英語で被爆体験を書いたものが少ないので平和祈念館で読むことができるようにしてほしいという依頼があり、承諾した次第です。アメリカの教員がそれを読み、「出産の時赤ちゃんの指の数を数えたという部分がショックだった」と語っていました。

学生はピースファミリーとして、いっしょに行動したので親しくなり、お別れ会では泣きながら別れを惜しんでいました。ある日本人の学生は「自分の国の歴史や文化についてアメリカ人の学生に質問されて、答えることができませんでした。また言いたいことが英語で表現できず、もどかしい思いをしました。これからはもっと知識を増やし、英語の力をつけていきたいです」と述べていました。このような平和の旅は大変貴重であり、今後も続けていくことが重要ではないかと考えています。

（立命館大学国際関係学部准教授、
国際平和ミュージアム副館長）

ワールド・フレンドシップ・センターの場で皆さんと交流して

山根美智子

ワールド・フレンドシップ・センター（WFC）に35年関わり、いま初めての女性、初めての戦後生まれの3代目理事長をしています。

今年の1月6日付けの中国新聞に出た、「米首都で原爆展計画、今夏20年ぶり」の見出しに目を奪われました。「6月頃に、1995年の会場と同じアメリカン大で開く方向で検討」とありました。

偶然にも95年の3月までの1年間、主人がジョージタウン大学に留学中だった関係でワシントンに住んでおり、毎日テレビや新聞に接し、スミソニアン航空宇宙博物館での原爆展の開催が退役軍人たちの反発で中止になった事を知り、腹を立てていました。それからこの交流セミナーが始まったのですね。95年の7月にはアメリカン大学が原爆展を引き受けてくれただけでなく、WFCの前理事長の森下弘先生が、被爆者としてアメリカン大へ呼ばれました。

その後毎年、8月6日にはアメリカン大や立命館の学生さんがWFCの被爆証言を聞く会に来ていただき、いつも皆さんに会えるのを楽しみにしていました。長崎では岡まさはるの記念館で皆さん方と会ったこともあります。

WFCは、アメリカ人でクエーカーのバーバラ・レイノルズによって1965年に創立され、今

年で50周年を迎えます。この4月に記念行事を行いますが、アメリカからの参列者の中に、フロイド・シュモー氏と共に原爆で住まいを失った広島の人々のために家を建てるために、1949年に来日したDaisy Tibbsの家族も来られます。原爆はあまりに非人道的で、赦されるものではありませんが、善意の外国人が、ヒロシマの復興を助けるとともに、バーバラのように“No More Hiroshima, No More Wars”を世界に訴え続けました。

今なお私たちは、バーバラの遺志を受け継いで地道に活動を続けています。世界中からゲストを受け入れ、被爆者のかたの体験を聞いてもらい、平和公園の碑めぐりなどをして核兵器廃絶の思いを共有しています。バーバラの理念は、人と人とが出会い、膝を交えて話し合えば、相互理解が生まれ、友情が築かれるという事です。私たちの合言葉は

“To foster peace, one friend at a time.”

（ワールド・フレンドシップ・センター理事長）

中央が山根美智子さん
（University of Central Missouriにて）

国際交流セミナー発足の頃の思い出

山本修司

現在の国際平和交流セミナー（広島・長崎プログラム）の沿革はシラバスにも記述されていますが、別の角度から見た沿革があります。

当時、立命館大学では戦後50周年を迎えるにあたり、様々な企画が実施されました。正課の部分では、国際交流セミナーという名称で、夫々中国、韓国への海外研修を含む科目が教養教育科目として実施されました。元々は記念事業としての単発の企画であったのですが、希望者が予想を上回る規模で集まり、大きな成果を上げました。学生の多様な学びの要求に応える多様な教学のあり方としても評価され、以降毎年実施されていきます。

1997年度の科目実施にあたり、憲法施行50周年ということもあり、それまでは任意の企画であった広島・長崎プログラムが追加され、以降アメリカン大学との共同による正課プログラムとして毎年実施されます。当時はいわゆる「特殊講義」としての開講でしたが、中国、韓国へのプログラムとあわせ、教養科目として定着し、現在に至っています。

その頃私は事務局としてこの科目を担当しました。この様なフィールドワークを含む科目の運営について、大学としてはほとんど経験が無い時代で、教学上のルールの整理や、参加者の募集活動など、先生方とも相談しながら一つ一つ積み上げていった事が懐かしく思い出されます。現在教育手法として話題となっているPBL（問題探求・解決型学習）のさきがけのような科目であり、この科目を通じて多くのノウハウが大学として蓄積されました。その意味でも、このプログラムの果たした役割には大きなものがあったと考えています。

（立命館大学教学部　事務部長）

2007年と2009年の「平和の旅」に参加して

山本美穂子

このセミナーには、2007年に初めて参加し、2009年にはSCとして参加しました。私がセミナーへ興味を持ったのは、アメリカン大学生と一緒に学ぶという点にありました。広島・長崎へは、個人でも日本人同士でも行くことはできますが、異なる背景の学生との体験の中で、違った視点に気づきたいと思っていました。実際、参加者は旅を共にする仲間であり、個々の背景に学ぶことが多い点で講師でもありました。

セミナー終了後も、交流や学びの場は広がっていきました。藤岡先生は、様々な催しに誘って下さいました。カナダ留学時には、乗松聡子さんのPeace Philosophy Centre主催の勉強会に参加し、Vancouver Save Article 9の方々ともお会いできました。

セミナーはそれ自体に学ぶことも多いのですが、原発や米軍基地等、関連する諸問題へ関心を抱くなど、セミナーを起点として広がり、つながる世界にこそ意義があるのかもしれません。大学卒業後、私は韓国の光州やソウルの大学院で学ぶ機会に恵まれました。セミナーで得られた“視点”は、今後も私を導いてくれることでしょう。

満員電車のなかで被爆した体験を語り続けて

米澤鐵志

私が藤岡さんに初めてお会いしたのは、2009年8月5日の午後に広島で開かれた「2009年8・6反戦・反核市民運動全国集会」（田中利幸代表）閉会後の交歓会の席上でした。参加者それぞれが自己紹介をしたのですが、その席上での私の自己紹介を聞かれて、「広島での被爆体験を証言できる人が京都におられることを知り、心強い。来年のツアーも京都から始まるので、是非日米の学生たちに体験談を話してほしい」と、藤岡さんから懇請されたのが始まりでした。これがきっかけとなり、2010年から5年連続で、京都でのセミナーに招かれ、私の体験を話してきました。詳しくは、私の著書『ぼくは満員電車で原爆を浴びた――11歳の少年が生きぬいたヒロシマ』（小学館）を読んでください。

本書の第1章「20年間の旅の歴史」を読ませていただき、このイベントが多くの人々の大変な協力と努力で継続されてきたことを知り、感銘を受けました。とくにピーター・カズニックさんが、原爆投下の責任者のトルーマンを「開けてはならぬパンドラの箱を開けた人類に対する最大の犯罪者」と見なされている点、「原爆投下で日本の敗戦が決定した。本土決戦になったら殺されたはずの米日の多数の人命を原爆投下が救ったのだ」という通説を全面的に否定されている点にも、感動しました。スミソニアン協会の航空宇宙博物館での原爆展の拒否事件を見るにつけ、「悪魔の兵器」の使用をやむをえない「必要悪」として、大多数の米国人は容認していると思っていましたので、カズニックさんの豊富な学識と世界観を知るにつけ、「米国にも、このような人がいるのだ」と嬉しくなりました。

通訳の乗松聡子さんにも感心しました。私は過去数回外国人に被爆体験を話したことがありますが、何時も通訳の方は私の話を十分に理解出来ず、途中で「それはどういう意味ですか」と反問されることが多く、英語が理解できない私は不安に感じてきました。それにたいして、乗松さんのばあいは、私の話が明確に伝わっていることを強く感じました。その後4回連続で通訳をしていただきましたが、何時も彼女の通訳は正確なものなので、彼女の通訳のもとで証言をすることが楽しみになりました。その後知ったことですが、乗松さんは、ガバン・マコーミックさんと共著で『沖縄の“怒り”』という本を出版されたり、オリバー・ストーンやピーターさんと『よし戦争について話をしよう』という本を共著で出しておられ、しかもオリバー・ストーン監督の講演や談話は全て彼女の通訳や翻訳で出版されているという方でした。私の証言に通訳の労をとっていただけたのは、まことに幸運なことでした。

近藤紘子さんとお会いでき、交流できたことも、よい思い出です。私は8･6集会で広島を訪ねるたびに、中学生のころから指導を受けてきた大先輩であり、今は亡き松江澄さん（広島県原水禁常任理事）のお宅を訪問し、あいさつを欠かしませんが、4，5年前の訪問の時に、このセミナーの話をしましたら、松江さんの妻であった祥子さんが「紘子ちゃん」を連発され、近藤さんを幼児の時から知っているとのことでした。「鐵ちゃん（私のこと）と紘子ちゃんとが一緒に活動していると知ったら、亡くなった夫（松江澄）は感慨深く思うでしょうね」とおっしゃっていました。

この事業への感想を述べさせていただきます。巧まぬユーモアで学生たちを引き込んでいく藤岡さんの話術が絶妙で、人気を博した一因だと思います。今までの平和運動には一過性のものが多く、あまり長続きしないものが多かったなかで、この国際交流セミナーが20年も続いた原動力として、プログラムの国際性と内容の広さとともに、過去にいがみあってきた平和運動団体についても、差別や分け隔てをせず、公平に接してこられたことにあると思います。その意味で、プログラムの公正さには、他をしのぐものがあります。本セミナーには、沖縄の反基地・平和運動に匹敵する「大義」があり、高く評価したいと思います。

（『ぼくは満員電車で原爆を浴びた』の著者。立命大卒業）

セミナーを通じて学んだこと

渡辺慧

私は2006年に参加者として、2007年から2009年までの3年間はSCとして関わらせて頂き、本当に様々な経験をさせて頂きました。今でも8月1日になるとセミナーのことを思い出し、今年はどんなセミナーになるのかなと考えます。

経済学部で学んでいた私が、平和セミナーに参加したのは経済学以外のことも勉強したいと考えたからだったと思います。

私が平和セミナーに参加した2006年は、戦後61年目ということもあり、前年の60年の節目と比較するとあまり関心を持ってもらえるテーマではなかったように思います。それ故に、私みたいな学生でも藤岡先生に選んでもらえて参加できました。セミナーでは広島市長の講演を初め、多くの貴重な講演を聞くことができ、普段の学生生活では学ぶことができないテーマに接し、大変勉強になりました。また、ディスカッションでは様々な視点からの意見を聞くことができ刺激になりました。

セミナーの中で特に印象に残っているのは、

2006年の山岡ミチコさんの講演会と2009年の広島平和記念式典での広島平和宣言です。どちらも力強い講演で核兵器廃絶に向けた強い思いを感じることができました。

2007年からの3年間はSCとして参加する機会が得られました。年々各大学からの参加者が増え、聡子さんの引率でバンクーバーからの参加者も加わり、多様性と国際性の増したセミナーになっただけでなく、講演会の数も年々増えました。それだけSCの仕事も増え、やりがいもありました。毎年、ここには書けない様々な出来事が起こり、たった10日間でこれだけ色々なことがあったなと今でも思い出します。不眠不休で働いた10日間の経験があったからこそ、社会人になってからも少々のことで心が折れることなく、働くことができています。

私は、数少ないBKC（びわこくさつキャンパス）からの参加者でした。当時は参加者の多くが女性だったためにBKCでの学生生活とは違う雰囲気を楽しむことが出来ました。私は授業で平和学を勉強していません。平和活動に関わりがあったわけでもなく、戦争で多大な被害を受けた地域の出身でもなく、帰国子女でも英語が上手に話せるわけでもないので、このセミナーの中では究極的なマイノリティだったと思います。だからこそ、自分とは違うアイデンティティを持った個性的な人たちと交流ができる平和セミナーに長年関わりたいと思いました。平和セミナーで出会った人たちとは、今でも交流があり、お酒を飲みながら近況を報告して、親交を深めています。

最後になりましたが、藤岡先生20年間にわたり、広島・長崎プログラムの引率お疲れ様でした。これからの広島・長崎プログラムの益々の発展を期待しています。

（2010年立命館大学経済学部卒業）

第３章　20 回目の旅はどのように行われたか

20 周年を迎えた 2014 年度の「平和の旅」は、例年より１日遅い８月２日に京都で始まりました。開始日を立命館大の定期試験終了の翌日にあわせたからです。終了日は、例年と同じ８月 10 日。正午過ぎに、長崎で現地解散ということになりました。

今年は AU からの参加者募集が難航を窮めました。最終盤で、カナダの乗松聡子さんが高額の学費負担を覚悟し、息子さん、知人の娘さんを AU 側参加者として登録してくれたおかげで、ようやく催行の最低基準の９名に達し、AU 側の参加が可能となりました。

RU 側からの参加者 10 名、APU からの参加者４名、RU 国際関係学部の GS からは、中国、韓国、バングラデッシュの３名の留学生を含め 11 名、学生スタッフの SC4 名、教員スタッフが５名で、正式参加者の総数は 43 名となりました。

加えて京都プログラムにはインターン生１名、福島医科大学生２名が参加し、そのほか講師陣・ゲスト・傍聴参加者などを含めると、ことしも 55 名ほどが集うことで、多彩な交流を行うことができました。第５章では、参加者の生の声を収録していますので、ご参照ください。

1）具体化された教育目標

国際平和交流科目の各プログラムには、共通した目標があります。「担当教員のガイドの下で旅をし、戦争と平和を考えるうえで重要な現場に身をさらすという国際的な体験学習を通して、世界平和の構築と国際理解・協力の道を探る」というものです。この共通点を踏まえたうえで、2004 年度の広島長崎プログラムは、つぎのような目標を掲げました。以下、2014 年度の RU の「シラバス（履修案内）」から引用します。

日本国憲法の前文には「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」と書かれていますが、「北朝鮮や韓国・中国の『公正と信義』に信頼などできるのか」。「隣国に侮られ、尖閣・竹島と、領土を奪われるだけでないか」。「米軍とともに戦争ができる国に変えておいたほうが、結果的に日本の権益も平和も守れるのではないか」という意見の人が増えています。３つの被爆地――ヒロシマ・ナガサキ・フクシマをかかえる日本の地で、世界の若者とともに、「戦争で平和が創れるのか」、「核の時代の戦争は何をもたらすのか」について、深く考えてもらいたいと思います。

「原爆学習の旅」とは、被爆した死者の無念の魂を慰霊し、自らの生き方を問う旅でもありますから、「平和巡礼の旅」だということもできます。この旅のなかで、議論し、解明したいのは、つぎの３つの問題です。広島の平和公園には、「安らかに眠って下さい、過ちは繰り返しませぬから」（英文で言うと、Let all the souls here rest in peace, for we shall not repeat the evil）という碑文がありますが、①「過ち」（evil）とは何ですか。②「繰り返しませぬから」という一文の主語（we）とは誰のことですか。③「繰り返しませぬから」（shall not repeat）という誓いは実現可能ですか、どうしたら実現できるのでしょうか、という３つです。・・・・（以下略）

（14年度シラバスの全文については、第6章の資料編に掲載していますので、ご参照ください）

以下、じっさいにプログラムがどのように進行していったのかを準備の段階から紹介したいと思います。

2)「募集要項」の広報

シラバスを具体化した今年の「募集要項」を4月中旬に公表し、受講生募集に活用しました。以下、紹介しますと――

テーマ　世界の学生と被爆地を巡礼し、核の惨事を繰り返さぬ道を語り合う

場 所　京都・広島・長崎

募集人数　15名（APUから4名程度）

現地研修期間　8月2日～8月10日（8泊9日）

事前研修　京都と別府とをテレビ回線でつなぎ、第1回は6月7日（土）、第2回は6月22日（日）、第3回は7月5日（土）の各15時～17時半を予定。その後有志で懇親会。

事後研修　10月4日（土）の15時～17時半を予定。

費 用　52,000円（広島・長崎までの片道交通費、宿泊代、保険料など）

担当教員　君島東彦（国際関係学部教授）、藤岡惇（経済学部教授）

随行教員　ピータ・カズニック（アメリカン大学教授・核問題研究所長）

随行する被爆体験者　近藤紘子（アメリカン大学卒、広島流川教会の谷本清牧師の長女）

カナダ側引率者・通訳　乗松聡子（ピース・フィロソフィーセンター代表）

本プログラムは、今年で20回目、20周年を迎えます。プログラムの歴史や目標・内容などは、シラバスに詳しく書きましたので、そちらを参照してください。

ここでは、シラバス作成後の変化を中心に、何点か補足することとします。

①アメリカン大学の学生は7月31日夕刻に来日し、立命館大学衣笠セミナーハウスに4泊します。8月1日は彼らにとって休養日・京都観光ディとなりますので、もし定期試験が終わっておれば、彼らのガイド役・メンター役を担当されることを勧めます。感謝されること必定です。

②宿泊所が内定しました。8月2日から4日朝までは、金閣寺の裏にある立命館大学衣笠セミナーハウス。4日午後から7日朝までは、広島駅新幹線口から徒歩で5分の東横イン。7日の午後から10日の朝までは、長崎の爆心地から徒歩で15分のアルファイン長崎に泊まります。広島はツイン（一部はシングル）の部屋、長崎はシングルの部屋で、いずれも朝食がつきます。夜に談論ができるスペースもあります。

③講演を聞き、討論する場所も確保できました。4日の午後は平和公園近くのアステールプラザ、5日午前は中国新聞社ビル、7日と9日には長崎爆心地公園のなかの被爆者の店（長崎被災協）の会議室が利用できます。

④国際関係学部の山根和代准教授の指導する「グローバル・スタディーズ」プログラムの学生たちも、同一ホテルに泊まり、同じ日程で旅行しますので、適宜、行動をともにします。そのため北米出身にとどまらず、東アジア出身の国際学生の参加も期待できます。多様な民族集団からなる50名ほどの旅行団コミュニティが形成されることでしょう。

⑤本プログラムは、旅行社が組織する「パッ

ク型の旅」とは対極にあるスタイルをめざします。394年前にメイフラワー号に乗ってプリマスの地にたどり着いた「巡礼者」たちが「メイフラワー盟約」を結んだ故事に学び、8月2日朝の集まりで「平和巡礼団」の憲法にあたる「8月の花盟約」を結びます。昨年度に参加した4名の先輩学生が「学生リーダー」として再登場してくれます。イベント企画の多くを彼らに委ね、学生主体の運営を行います。

⑥全員に共益が及ぶイベント・現地移動費・歓迎夕食会・お別れパーティなどの費用として、全員から8000円を集め、「共通基金」を設立し、学生リーダーの管理下で運用します。教員スタッフも、旅行団コミュニティの一員として、平等に負担します。余剰金が出れば、8月10日のまとめの集会の場で返金します。

⑦イベントの後には振り返りの時間を設け、感想を交流し、旅行内容の改善が図れるようにします。京都での神社仏閣の参拝やカラオケ交流、広島での宮島見学や「平和ナイター」の場での広島カープとの交流、長崎での稲佐山や教会めぐりなどができるよう、自由時間を増やします。

⑧いまだ福島第一原発の核惨事は収束していませんし、北朝鮮の「強化型原爆」の実験も行われました。今年で64年目を迎え、東アジア史上最長の戦争となった朝鮮戦争をいかに終えたらよいのか。「核の惨事」の連鎖をどう停め、東アジアの平和を創造したらよいのかについても、議論を深めたいと思います。広島市立大学の田中利幸さんや鹿児島大学の木村　朗さんといった専門家の方々とも交流できるでしょう。

⑨乗松聡子さんという力量抜群の通訳がつくので、英語が得意でなくても、平和や参画型学習スタイルに強い関心があれば、それで十分。9日間（プレイベントの京都観光を含めると10日間）、英語のシャワーを浴びることになるので、英会話能力は伸びるでしょうし、世界各地に心がつながる友達をつくるチャンスです。たとえ英語に自信がなくても大丈夫、安心して応募してください。

3）準備セミナーと事前レポートの読みあい、学びあい

5月中旬になると、交流セミナーの参加者（15名、うち1人は病気のため棄権）が決まりましたので、京都の衣笠キャンパスと別府のAPUをテレビ回線でつなぎ、以下の段取りで準備セミナーを行いました。4名のSCが司会を行い、2回目と3回目のセミナーには、GSからも多数が参加し、終了後には懇親会も開きました。

第1回　6月7日（土）午後3時―
　事前レポート作成のためのレクチャー
第2回　6月22日（日）午後3時―
　レポート作成の交流会　SC主導で自治と役割決め。
第3回　7月6日（日）午後3時―
　直前の準備セミナー

平和交流セミナー受講生14名には、つぎの課

（2014年6月7日）

題でレポートを作成し、交流してもらいました。

第１回レポートの課題（6月7日出題）

1）ジョン・ハーシー『ヒロシマ・新版』を読み、本の中の冒頭の「原爆当時の広島市」地図を2倍程度に拡大コピーし、家屋の焼失地域、黒い雨が降った地域を図示してください。また被爆直後からの谷本清さん、チサ・紘子さんの被爆した地点と避難先、当時の流川教会、イエズス会宣教師館、長束のイエズス会修練院、エリザベト音楽大学女子寮、旧ABCC（放射線影響研究所）、現在の流川教会、広島市役所、ワールド・フレンドシップセンター、シュモー・ハウス、私たちの宿泊ホテルの所在地を図示して下さい。

2）浦上地区を含む長崎市の地図を用いて、宿泊するホテル、被爆者の店（長崎被災協）、長崎大学、隠れキリシタンを監視していた旧・浦上部落、岡まさはる記念平和資料館、賑橋―眼鏡橋の中間点の原爆投下目標地（旧･常盤橋）、聖コルベ記念館の所在地を図示してください。

第1回レポートは､7月6日の第3回セミナーの当日までに完成させて、持参してもらいました。おかげで第3回セミナーでは、班ごとに集まり、正確な所在地を突き止め、イメージをふくらまし、現地調査の企画づくりに役立てることができました。

第２回レポートの課題（6月7日出題）

1）ジョン・ハーシー『ヒロシマ　新版』を読み､関心をもった任意のテーマについて調査し、リポートしてください。適当なテーマが見つからないばあい、笹森恵子（しげこ）・山岡みち子・田坂博子さん（自伝『ヒロコ　生きて愛』学研)､などニューヨークのユダヤ系マウントサイナイ病院で整形手術を受けた25名の｢原爆乙女」の人生について、調べてください。

2)曇天に遮られたため実際に2発目のプルトニウム型原爆が投下されたのは、目標地点の長崎市常盤橋ではなく、4キロ北の浦上地区でした。浦上というのは､どのような町でしたか。「浦上4番崩れ」を含む隠れキリシタンの歴史、被差別部落民との抗争の歴史についても調べてください。

3）知日派のジョセフ・グルー国務次官やヘンリー・スティムソン戦争省（兼・陸軍）長官が付加していたポツダム宣言草案第12条末尾の「現在の皇統下の立憲君主制の存続もありうる」という文言が、発表直前になってなぜ削除されたのですか。2発の原爆投下直後に「皇室安泰」「天皇制存続」の「口約束」をトルーマン政権は発するようになりますが、それはなぜですか。結局米国は、いかなる目的で、日本の庶民密集地区の上空に、異なるタイプの原爆を2発たてつづけに投下したのでしょうか。

4）以下の6問から4つを選び､調べた成果を他の受講生に披露してあげてください。

①中国新聞社のヒロシマ平和メディアセンターの運営する「ピース・ミュージアム」のHPを参照し（http://www.hiroshimapeacemedia.jp/peacemuseum_d/jp/index.html)、他の受講生に知らせたい「掘り出し物」のテーマを見つけ、教えてあげてください。

②乗松聡子さんの運営するPeace Philosophy CentreのHPを閲覧し、もっとも関心をもった記事をとりあげ、論評してください。

③「オリバー・ストーンが語るもう一つのアメリカ史」を視聴するか、同名の書物（全3巻、早川書房刊行）を読み、そのなかから「掘り出し物」のテーマを見つけて、調べた成果を他の受講生と分かち合ってください。（以下略）

1か月余の作成期間を設けて､提出期間は7月12日（土）から15日（火）までとし、提出先は､「マナバ」の本科目の部屋にしました。「マナバ」というのは、大学が用意した科目専用のホームページのこと。おかげでこのシステムを活用できる力量があれば、受講生が互いに、どのようなレポートを書いたのかを読みあい、学びあうことができます。

4）3日間の京都プログラム（8月1日―3日）

AU関係者の来日と京都観光

7月31日午後6時すぎにピーター・カズニック教授に引率されて、AU関係者9名が大阪・伊丹空港に到着。藤岡と乗松（母子）とが出迎え、夜9時頃に衣笠キャンパスの末川会館に着きました。近隣住民に騒音被害を与えないように、荷物保管室にスーツケースなどを保管し、セミナーハウスでの生活に必要な日用品と貴重品だけを持って、衣笠セミナーへ徒歩で移動しました。

8月1日（金）は、AUにとって、時差もあり、休養・観光日になりました。朝には、福島医科大学の2人も到着し、定期試験が終わった立命側参加者のリードで、金閣寺などを案内し、夕食を共にしました。

8月2日（土）：「建団式」から京都セミナーへ

午前10時から12時に、セミナーハウス1階のカンファランスルームで、開会の全体集会を行いました。まずは外国からの来訪者と日本在住者とを混合し、5－6名で構成された「ピースファミリー」を6組作りました。

500年余り前に、ピリグリムファーザーズたちがメイフラワー号に乗って、ボストン近郊のプリマスに上陸しますが、その直前に船内で採択された「5月の花盟約」が、米国の「建国」の原点、米国憲法の最初の母体になったとされます。その故事に学び、旅行団のコミュニティの大枠のルールを定めた「憲法」（「8月の花盟約」）の制定が「平和巡礼団」としてのコミュニティづくりの第一歩です。「建団式」の場で合意・採択された本年度の「8月の花盟約」は、つぎのようなものでした。

Peace Pilgrims' "August Flower Compact"

Aug.2, 2014 Kyoto

20th Pilgrims since 1995

1) Peace Pilgrims Community、named "August Flower" had been founded successfully by a strictly democratic rule, therefore 20th community must be settled and be governed by a democratic rule.

2) Establishment of the Peace Pilgrim's Common Fund

a. Equality : one citizen, one vote.

b. 8,000 Yen per a citizen.

c. Purpose of the fund: inner city traffic, entrance fee, flowers and gift to Hibakusya, as well as welcome party and farewell party, which all the citizens are requested to participate.

d. Collected and controlled by student coordinators

e. Audited and settled in the general assembly of the final day

3) Community Flag: Charlie Brown & Snoopy

4) 3 groups, which are composed of the community of 43 citizens

a. 6 Faculties: Peter Kuznick (AU), Atsushi Fujioka(RU), Akihiko Kimijima(RU), Kazuyo Yamane (Global Studies Program, RU), Koko Tanimoto Kondo, Satoko Oka Norimatsu.

b. 5 Student Coordinators : Kazuki, Mitsuru, Shiho (from RU), Misato(APU), Ryo(GS, RU)

c. 32 Students: 8 from AU, 10 from Ritsumeikan U, 10 from Global Studies Program of RU, and 4 from APU

教授も含めて全員に8000円の「税金」を課して「共通基金」を設立し、これを先輩学生リーダーたちが管理し、財政面から民主主義的統治を貫くというのは、例年と同じです。今年から

第3条をおこし、スヌーピー（とチャーリー・ブラウン一家）の描かれたタオルを旅行団公認の団旗と定めました。元来このタオルは藤岡教授の孫娘が保育園で使っていたものですが、ピース・ファミリーの旗として人気を呼び、旅行団の先頭に翻える団旗となったわけです（122ページの写真参照）。

その後、衣笠キャンパスの生協食堂に移動し、ピースファミリー単位で昼食をとりました。AU関係者には、ベジタリアンやベイガン（牛乳なども避ける）が少なくありませんから、好きな皿を自分で選べるアラカルト方式の食堂の利用がベストとなります。

13時20分から「京都セミナー1：原爆は何のために投下されたのか」を、国際関係学部恒心館721教室で行いました。まず「オリバー・ストーンが語るもう一つのアメリカ史」という映画の第3章（原爆投下）を上映しました。この映画の企画者であり、シナリオのほとんどを執筆したピーターから、補足説明をしてもらい、その後、議論しました。

ついで午後4時から6時20分の間、「京都セミナー2：原爆体験とは何であったか 」を同じ教室で行いました。まず、「被爆後の人生を父親の谷本牧師の軌跡を交えて近藤紘子さんに話してもらい、質疑を交えて、内容を深めました。

その後に時間の節約の必要上、2グループに分かれて被爆者の話を聴くこととしました。第1グループは、乗松聡子さんの通訳のもとで、米沢鉄志さんの話を聞きました。第2グループは、谷川佳子さんの通訳で花垣ルミさんの被爆体験をお聞きしました。詳細は、巻末資料―21を参照ください。

セミナー終了後の6時40分から1時間半ほど、生協が経営する近くの諒友館食堂にて歓迎夕食会を「核の時代探究の旅」20周年のお祝いをかねて行いました。

このプログラムの発案者で第1回目の旅を主導された直野章子さんからは、心温まるメッセージが寄せられました。原爆の図丸木美術館代表理事である小寺隆幸さん（京都橘大学教授）から被爆70周年記念して、ピーターたちと共同してワシントンのAUを会場に、丸木夫妻の「原爆の図」6作品を展示する予定であることが披露されました。本年度の共同担当者の君島東彦教授からは創世期の「1995年・1996年のこの旅に参加した時の思い出」が語られ、山口洋典准教授（立命館大学ボランティアセンター）からは、1996年・1997年の旅のなかでSC活動を発案するにいたった経緯と大学教育改革に賭けた思いが披露されました。

懇親会終了後、参加者全員が宿舎のセミナーハウスに帰る途中にコンビニに立ち寄り、翌朝の朝食の材料を買い入れ、夜間にも交流が続けられました。

AU側から2度目の参加をはたした乗松コウキ君（聡子さんの息子）がSCの通訳助手の役割を果たしてくれたこともあり、交流が一層スムーズに進みました。

3日（日）：ミュージアム見学とセミナー3

朝9時に、セミナーハウスの玄関に集まり、徒歩で国際平和ミュージアムに向かい、9時半から1時間余り、平和ミュージアムを参観しました。

その後、10時50分から11時半まで、平和ミュージアムの2階会議室に移り、ミュージアムの展示を振り返り、意見交換をしました。あわせてAU側の一員として、マサチューセッツ工科大学の物理学者のSubrata Ghashroyさんが参加していましたので、「米国の最新の軍拡計画――宇宙兵器・宇宙での核爆発、サイバー戦争の最新局面」について講義してもらい、認識を深めました。ゲスト参加者の酒井泰幸さんは、専門的用語の通訳、説明で活躍していただきました。

午後には同じ会場で、「京都セミナー3」が開かれ、3本の報告を聞いたうえで、討論を続けました。トップバッターは、愛知からお招きした神直子さん。「ブリッジフォアピース」の創立者で代表理事でもあります。神さんからは、青山学院の学生時代にフィリッピンの戦争犠牲者を訪ねた体験がきっかけとなり、日本軍兵士を探し出し、何をなしたのか、現在の心境をビデオにとり、惨劇の地に赴き、被害者とともにビデオを見て、心のわだかまりを解こうとする活動を展開してきた経緯を話してもらい、和解に至るためには何が必要かを考えました。

つぎに福島医科大学の白石裕紀子・安達祐里さんを招いて、「医学生としてフクシマを体験して」という報告をしてもらいました。白石さんは4回目の入洛です。そして最後に、本科目の指導担当教員となった君島東彦さんに「アジアへの加害と日本の平和憲法の特質」について、スピーチしてもらいました。

夕刻4時すぎには京都セミナーを終え、平和家族単位で街中へでかけて、夕食を共にしました。門限の10時までに全員が宿舎に戻り、2階の談話室で「振り返りの全員集会」を行い、翌日からの広島行に備えました。

5）旅のクライマックス――広島にて（8月4日から3泊）

広島の平和公園へ

8月4日（月）の朝6時50分にセミナーハウスを出発し、徒歩で末川会館に行き、ドアを開鍵し、保管されていたスーツケースを運びだし、予約したタクシーに分乗して、JRの円町駅に向かいました。7時50分にJR円町駅を発車した通勤電車に乗りこむことができ、無事に京都駅に到着。京都駅を8時23分に発車する「ひかり」に乗りこむことができました。外国からの参加者は、JRパスを購入して来日していましたが、JRパスでは新幹線の「のぞみ」は乗れません。そこで立命側参加者も、AU側と連帯して、今年は同じ「ひかり」で移動することにしたのです。

定刻の10時44分に広島駅に到着し、駅から北へ5分の定宿の「東横イン・新幹線口」にチェックインしました。スーツケースなどを1階フロアで保管してもらい、11時半にホテルを出発。広島駅で昼食休憩を取った後に、広電の市街電車に乗って、原爆の投下目標となったT型をした相生橋前で下車。

原爆ドームと爆裂直下の島外科病院を見学し、平和公園内を巡回して、平和記念資料館に至りました。午後1時45分から3時半まで平和記念資料館を見学し、炎天下を15分ほど歩き、アステールプラザに向かいました。

午後4時から7時までアステールプラザの大会議室を会場にして、「広島セミナー1」を開催しました。

この集まりには、田中志穂さん（SC）の恩師の畑井克彦先生（兵庫県被爆2世の会会長）や酒井泰幸さん（聡子さんの知人で通訳ボランティア）も参加し、最初の15分間は資料館の展示の振り返りと感想の交流を行いました。

ついで山本定男さんに「東練兵場で教練の際に被爆した体験」を語ってもらいました。東練兵場とは、宿舎の東横イン新幹線口の西方に広

がる広大な演習場でして、本土決戦にそなえて、西日本全域を統括する第2総軍司令部の置かれたところでした（現在は二葉の里として再開発工事中）。山本さんからは、被爆の実相、逃げる途中に山の中腹の広島東照宮の防空壕で休んだ体験などをお聴きしました。

2番バッターは、欧州のTV局やメディアなどと連携しつつ、タブーに斬り込む作品を制作しているジャーナリストの西里扶甬子さん。「731部隊、原爆投下、ABCC、そしてフクシマ」というまさに壮大なテーマで、この4つのモノ・コト・ヒトの深部には、人的にも思想的にも通底した流れがあることを示唆されました。西里報告にたいしては田中利幸さん（広島市立大学）が鋭いコメントを寄せられました。

セミナー終了後は、平和家族などが軸となり、広島焼きの店などを訪れ、広島の夜を楽しみました。

5日（火）：貸し切りバスを活用

原爆投下の前日にあたる5日は、朝8時40分にホテルに来た貸し切りバスに乗り、まず広島駅北の二葉地区に広がる旧東練兵場の跡地を眺めながら、大戦中に中国軍管区司令部のあった広島城内を訪問。例年、城内の護国神社前の空き地が、全国から結集する数十台にのぼる右翼団体の街宣車の集結地となります。今年も、集結の情景を観察することができました。

例年通り広島市役所内市長公室に9時40分頃に到着し、10時から30分ほど、広島市長を表敬訪問しました。そしてその後、中国新聞社の会議室をお借りし、皆で車座になって着席し、1時間余り「広島プログラムの振り返りと中間総括の集い」を行いました。8月2日の朝に採択した「8月の花」誓約（旅行団憲法）に照らして、前半の4日間の実践をどうであったのかを中間総括し、不十分な点があれば、修正していく――このような仕組みは、1995年の最初の旅でもありましたが、20年間引き継がれてきた「善き伝統」の一つだと思います。

バスで爆心地から東500メートルにあった袋町小学校の敷地内にある被爆校舎の遺構を訪れ、階段の壁に刻まれた「私は無事だ、連絡を乞う」といった文字を見ました。コンビニに寄り、食材買い、バス内で昼食した後、「シュモーハウス」を見学しに行きました。

シュモーさんたち米国の平和主義キリスト教徒のクウェーカーたちが、戦後に被爆者救援に謝罪の意味もこめて、「ヒロシマハウス」という被爆者の家を20戸建設しましたが、そのうち集会所となっていた建物が2013年にもともとあった広島港に近い江波町で保存され、一般公開されていたのです（中区江波二本松一丁目2番43号）。近藤紘子さんのお父様の谷本牧師さんも、大きな役割を果たされたそうです。室内には当時の写真や資料が並べられ、案内人の方と話の花が咲きましたが、おかげで予定時間を大きく超過しました。

その後、比治山の山頂にある放射線影響研究所（旧ABCC）を訪問しましたが、毎年の交流を今年はカットし、紘子さんが屈辱の体験をされた「講堂」だけを見学するにとどめ、後はハーシーの記録文学に出てくる場所（旧流川教会、藤井正和博士の病院跡）を車窓から確認し、平和祈念聖堂、現在の流川教会を訪問し、幟町中学でサダコの像の模型を見た後に、縮景園（浅野泉邸）を見学しました。

縮景園では紘子さんの案内で、8月6日の夜に被爆者たちが救いを求めて集まっていた場所、当時満ち潮で塩水が押し寄せていた川、対岸に被爆者を運んだ渡し船の発着点などを探し、その後バスで「イエズス会長束修道院（長束黙想の家）」（広島市安佐南区長束西 2-1-36）に向かいました。被爆者たちの救いのシェルターとなった施設の一つです。現地文化に溶け込むことを重視するイエズス会の伝統でしょうか、仏教寺院のような造作に驚きます。外科医の素養のある聖職者が被爆者の応急手術に使わったとされる部屋などを見学し、丘の上に立つクラインゾルゲ（日本に帰化して高倉誠）神父の墓参を行いました。数年ぶり、4回目の墓参でしたが、今年は藪蚊の襲来に悩まされました。

こうして6時過ぎにはバスは平和公園に到着し、解散となりました。夜を徹した祈りや鎮魂の行事など、被爆記念日前夜の平和公園は特別な雰囲気に包まれます。この雰囲気を体感しながら、思い思いに夕食の場に向かいました。

6日（水）：大雨のなかの被爆69周年式典、宮島

過去20年間、8月6日はいつも晴天であり、太陽の熱をうとましく思い続けてきました。しかし今年は地球温暖化の余波でしょうか、接近する台風のため夜半から豪雨に見舞われることになりました。

土砂降りの雨の中、6時過ぎに紘子さんに引率された先発グループが、タクシーで出発し、相生橋へ。身元不明7万人の遺骨を埋葬した原爆供養塔（平和公園の北西部）の前での宗派を超えた式典に参加しました。15分遅れで後発グループもタクシーで相生橋へ向かい、原爆供養塔の前の慰霊式典に合流しました。樹木の下に雨宿りしつつの参加を30分ほどで切り上げ、式典会場に移動。7時半ころからAU側の参加者は、同時通訳レシーバーを借りて、雨のなかの外国人席に雨合羽を着て着席。RU側は、早朝からSCが会場にいき、最後部の屋根のある席を確保してくれたおかげで、雨の心配をすることはなくなりました。

式典終了後の9時に全員で再び、原爆供養塔の前に集合し、献花と献鶴を行いました。そのころには、雨脚も多少弱まりました。南隣の韓国人慰霊塔も参拝した後に、供養塔前でミーティングをもち、SCが用意した午前中の自由選択プログラムのどれに参加するのかを相談しました。

第1グループの5名は、聡子さんの運転するレンタカーで瀬戸内沿岸の竹原市忠海の沖合の大久野島を訪ねました。戦時中は毒ガス兵器と風船爆弾づくりの島となったところです。

第2グループは、山根和代先生の引率で、ワールド・フレンドシップセンター（広島市西区東観音町）を訪れ、10時から11時半まで開かれ

る堀江壮さんの被爆証言（英訳。質疑応答を含めて）の集いに参加しました。

第３グループは、藤岡と畑井克彦さんの引率で、相生橋・原爆ドームの西の本川小学校を見学､その後原水禁世界大会―広島の閉会総会（原水協系、広島県立総合体育館・グリーンアリーナ）を調査・取材（賛同・参加ではなく）しました。開催者側は取材の趣旨を理解し、報道陣に準じた取り扱いをし、参加費を免除してくれました。

その他、何人かは、自分でつくるコースを選び、平和資料館を再見学したり、国際会議場地下２階のコスモスで被爆証言を聴き、英語で交流する集いにも参加したようです。

昼前にはさしもの雨もやんできました。大部分の参加者は、ホテルに午後２時頃に戻り、小休止の後、順次 JR で宮島へ向かいました。AU 関係者は JR パスをもっているので、宮島に渡るフェリー代金も含めて無料となります。

宮島ではいくつかのグループに分かれて、厳島神社を参拝し、鹿と戯れ、土産物店を回り、帰途は、宮島口から広電の市街電車に乗って、原爆ドーム前に直行しました。広電のばあい１時間余りかかりますが、260 円と料金が破格に安く、広島の風景をゆっくりと楽しめます。当時の爆風と火災で全滅した地域がどこまで広がっているかを体で感じられるという利点があります。

夕刻７時すぎには、サダコ像まえに集まり、平和家族ごとに「とうろう流し」行事に参加し、広島最後の夜を過ごしました。

6）長崎へ移動し、フィナーレへ（7 日―10 日昼まで３泊）

7 日（木）：原爆資料館とセミナー１

朝７時 25 分にホテル玄関に集合し、徒歩５分の距離にある広島駅に向かい、７時 57 分発の新幹線――さくら号に全員無事に乗車できました。博多駅では長崎本線のかもめ号に乗り換えるために 48 分の待ち合わせ時間があります。AU 関係者は今年も指定席を確保できなかったため、自由席車両の前に早くから並びました。おかげで AU 生もなんとか座席を確保できました。

長崎線を走るかもめ号は、開門の是非で議論が沸騰する諫早湾干拓地沿岸を南下し、定刻通り 11 時 46 分に浦上駅に到着しました。駅前からタクシーに分乗し、600 メートルほど離れた浜口町にある定宿のアルファイン長崎にチェックインしました。片足鳥居からは 200 メートル、長崎大学医学部付属病院の近くです。

部屋に荷物を置き、小休止の後、午後１時にホテルを出発し、炎天下を歩き、30 分で原爆資料館前に到着。隣の国立平和記念館とともに２時間かけて見学し、その後、爆心地公園を横切り、エスカレーターのできた階段を上り、平和公園を通り、長崎セミナーの行われる長崎被災協会館に向かいました。１階が「被爆者の店」となっており、ソフトクリームが人気です。

長崎セミナーは、この被災協会館の2階の会議室を会場とし、午後4時から6時半まで行われました。まず被災協会長の谷口すみてるさん、ついで事務局長の山田拓民さんが被爆体験を語られました。お二人とも、色々な機会にAUを訪れた機会があり、ピーターたちとは深い信頼関係を築いてきた方々です。山田さんの証言は第4章に収録しましたので、ご参照ください。証言の集いの終了後も同じ部屋をお借りして、30分ほど「振り返りの集い」を行いました。

8日（金）：長崎大学RECNAとの交流後、岡まさはる記念館を訪れる

午前8時30分から、近くの片足鳥居を見学。その後、大学病院前駅から15分ほど市電に乗り、長崎大学前で下車し、校内に入りました。

9時30分から12時頃まで大学内の教室をお借りして、長崎セミナー2を行いました。

長崎大学では日本の大学のなかではじめて、核兵器廃絶研究センター（RECNA）が設立され、活動を始めていましたが、そこで准教授をなさっている中村佳子さんを君島東彦さんの仲立ちで講師としてお招きし、核兵器の現状、核廃絶の展望について、明晰なレクチャーを日英両言語でしていただきました。

中村佳子さん

10年ほど前でしたか、長崎では、被爆者の証言を的確に英語に通訳できる人が乏しく、困っていたところ、NGOのピースデポの事務局員として長崎に来ておられた中村さんが飛び込みで通訳をされ、窮状を救っていただいたことを思い出します。講演をふまえ、木村朗さん（鹿児島大学）と君島東彦さんとが、鋭いコメントを寄せられました。

長崎大学の生協食堂で昼食をしたあと、平和家族単位で長崎各地を回るツアーを行いました。長崎駅前近くの高台にある岡まさはる平和資料館は、全グループとも見学する（共通基金で入館料を負担）というルールがありますが、それ以外は行先を自由に決められます。被爆地から至近距離にある山里小学校、永井隆博士が住んだ「如己堂」という名の掘っ建て小屋、浦上天主堂、大浦天主堂を回ったグループが多かったようです。夕食後は再び「平和公園」に戻り、キャンドルサービスの集いに参加したメンバーが多かったようです。

9日（土）：城山小学校と平和公園で開かれた被爆式典

日本語が分かるグループは午前8時にホテルを出発し、爆心地公園の南側に建立された「朝鮮人被爆者の慰霊碑」の前の慰霊式に参加したあと、爆心地の西側に位置する城山小学校に向かいました。そして午前8時30分から9時半まで、慰霊式典に参加し、正門前の「子どもの平

和像」に献鶴し、校内の被爆遺跡を見て回りました。城山小学校の式典列席は、12 回連続なので、なじみになりましたが、特別扱いされないことが逆にすがすがしい思いです。被爆死した先生方の写真を見て、いかに 10 歳代を含む若い女性の先生が多かったかが再確認できます。

その後、坂を下り、南北を流れる浦上川を渡り、10 時半には平和公園で行われる長崎市主催の慰霊式典に合流しました。広島に次いで長崎の地にも安倍首相が列席されていました。

式典終了後の 12 時 10 分から午後 1 時半まで、被爆者の店の地下会議室に移り、本日のイベントへの感想をだしあう集いを行った後、自由行動となりました。

君島さんは、中村桂子さんと連携して、昨日と同じ長崎大学を会場に「長崎大学の学生との対話の集い」を企画されました。この企画が一番人気を博しました。

藤岡は、アウシュビッツで殉教した聖コルベ神父を記念する展示館を訪ね、被爆者の小崎登明神父と語る集いを呼びかけたところ、7 名の応募者がありました。市電の蛍茶屋終点を下車して、15 分ほど歩いたところにある聖母の騎士修道院を訪ね、聖職者の方々と懇談するとともに、山腹にあるルルドの泉も訪ねました。

そして夕闇迫る午後 7 時からは、長崎駅前のいつものパーティ会場を借り切って、旅の打ち上げを祝する「フェアウェルパーティ」を開催。共通基金の残額をパーティ費用につぎ込みました。

10 日（日）

ホテルを午前 9 時にチェックアウトし、10 台以上のタクシーに分乗して、長崎駅前の長崎教育文化会館に向かい、午前中をかけて、10 日間の旅全体を振り返る「まとめ集会」を行いました。円陣を組んで、①もっとも印象的だったこと、②核の時代を克服するために何が必要か。③旅の改善点を交流し、最後に贈り物を交換し合い、昼すぎにこのプログラムの幕を閉じました。

現地解散となりましたので、AU 関係者は、午後 1 時 20 分発の JR に乗車し、この日の夜は品川駅の近くに投宿し、翌 11 日の飛行機で成田空港から帰国の途につきました。

立命関係者の一部は AU 生と同一旅程で帰郷しましたが、帰省費を節約するために深夜バスを使ったり、青春 18 きっぷを利用して帰った者も少なくなく、せっかく長崎まで来たのだから

と、九州各地や沖縄に足を伸ばした学生もいました。

7）旅行後の振り返りと最終レポートづくり、成績評価

最終レポートの論題は、つぎのようなものでした。

> 以下の２つのテーマの両方に取り組んでください。
> ① 事前研修と10日間の旅行に参加するなかで一番関心をいだいたテーマを設定し、論じてください。対象をできるだけ明確に限定し、他の受講生が読んで「目から鱗」の感動を呼ぶレポートに仕上げてください。
> ②今回の旅のなかで強いインパクトを感じたイベントやヒトについて、2－3件に絞って、報告してください。
> 10月10日（金）から10月14日（火）までにマナバの本科目の部屋に提出。分量は自由です。

最終レポートの中間発表と本年度の反省、来年度の方針を定める目的で、10月4日（土）午後3時から事後研修の集いを行いました。この集いは、SCの主宰のもとで進めました。15年度のSC希望者も募ったところ、4名の枠を超える応募者があり、早々とSCの後継者を確保することができました。

成績の評価については、例年通り、①予習レポート作成の充実度（100点満点）、②本番（8月1日－10日）での日米学生間の交流と討論にどの程度積極的に参加し、貢献できたか（100点満点）、③各プログラムを実りあるものにし、参加者を幸せにするために、どのような役割（「縁の下」も含めて）を果たしたか（100点満点）、④最終レポート作成の充実度（100点満点）という項目にわけて自己評価し（なぜそのような評価を行ったのか、その理由も書く）、最終レポートにあわせて、受講生自身に自己評価メモを提出してもらうこととしました。ただし自己評価点を重要な参考資料としますが、他の受講生との公正さにも配慮して、最終的には君島・藤岡の合議による判断で評価する結果となりました。

8）被爆70周年の2015年に向けて

2015年は、原爆投下70周年の節目の年です。次項で原爆の図丸木美術館代表理事の小寺隆幸さんが紹介されていますが、6月から8月にかけて、アメリカン大学美術館を会場にカズニック教授と丸木美術館、それに広島・長崎両市の三者が共催するかたちで、原爆投下が何をもたらしたのかを絵画と遺品でもって示そうとする展覧会を開く準備が進められています。

この展覧会は、20年前に同大学で開かれた最初の原爆展を量・質の両面で上回る可能性が大きいようです。ともあれ私たちが20年間にわたって積み上げてきた原爆探究の旅が、2つの原爆展をつなぐ一本の赤い糸として役立ったことを誇りに思うものです。詳細は、次項の補説をご参照ください。

補説

『被爆 70 年―原爆の図アメリカ展』にむけて

小寺隆幸

「日米交流の原爆探究の旅」が 20 年間続いてきたことに心からの祝意と敬意を表したいと思います。実は私自身は 2013 年夏まで、この旅の存在を知りませんでした。知人の早川与志子さんからこのことをお聞きし、プログラムを見てその充実した内容に驚きました。そこで直前だったのですが、京都セミナーと長崎の旅への参加を藤岡先生にお願いしたところ、快く受け入れてくださいました。長崎には妻と二人で参加させていただき、さらに 2014 年にも 8 月 2 日から 5 日まで京都と広島の旅に夫婦で参加させていただきました。

『原爆の図アメリカ展』は、この「旅」があったからこそ実現することができたのです。この展覧会は 2015 年 6 月から 8 月までアメリカン大学美術館で開催されます。さらにその後ニューヨークの美術館でも開催される予定です。被爆 70 年の節目に、しかも国際赤十字・非核有志国・NGO などが核不使用条約の制定へ向けた大きな一歩を踏み出そうとする時に、原爆が人間に何をもたらしたのかを描いた『原爆の図』が核超大国アメリカの首都で初めて展示されるという歴史的な取り組みが、この旅の中で、藤岡先生のご協力によって生み出されたのです。その事実を本冊子に記録することで、藤岡先生始め皆様への感謝としたいと思います。

『原爆の図』をアメリカで展示しようという企画は、2011 年 1 月に早川さん（フリーのディレクター）が、当時国連軍縮局で仕事をしていたキャサリン・サリバンさん、被爆者の平田さんとともに埼玉県東松山市の原爆の図丸木美術館を訪ねられた時から始まりました。（そのキャサリンさんが 2004 年、2005 年にこの旅に参加されていたことも今回初めて知りました。）民放で美術番組を手掛けていた早川さんは、フリーになって以降『原爆の図』をアメリカで展示したいと熱心に動かれ、全米各地の美術館に打診されました。しかし 500 万円以上もかかる運送費負担がネックとなり進展しませんでした。そういう時にオリバー・ストーン監督がピーター・カズニック教授とともに 2013 年夏に来日することを知った早川さんは、京都でピーターさんと直接会って協力を依頼するために「京都セミナー」への参加を私にも勧めてくださったのです。

私は 8 月 2 日から参加しました。その日は映画「もう一つのアメリカ史」を鑑賞した後に日米の学生が話し合ったのですが、そこでピーターさんが「原爆投下は間違いだった」と明確に話されるのを直接お聞きして、この人なら『原爆の図』を託すことができると確信しました。そして翌日、早川さんと私は、藤岡先生らも交えた昼食の際に、ピーターさんに『原爆の図』の図録を見ていただきながらアメリカ展実現への協力を要請しました。ピーターさんは『原爆の図』自体を知らなかったようですが、大変関心を持ってくださいました。しかし突然の話ですから何か決められるわけはありません。アメリカに帰られてから考えていただくことをピーターさんも約束してくださいました。

その後の広島の旅は、丸木美術館の「ひろしま忌」と重なり参加できなかったのですが、7 日からの長崎の旅には妻と二人で参加させていただきました。私たちはヒロシマにはたびたび訪ねたことがあり、被爆された方との交流も多いのですが、長崎とはそれほど接点がなく、被爆者の証言を聞く機会もありませんでした。そこでこの時に谷口さんらの証言をお聞きし、城山小の平和集会に参加できたことなど、私たち

にとって貴重な体験をさせていただきました。オリバー・ストーン監督と『原爆の図』について話し合う時間はありませんでしたが、監督が学生と対話する様子をまじかに見ることもできました。

この年の京都と長崎の旅の様子をつぶさに撮影した記録を藤岡先生、ピーターさん、乗松さんらに送ることで、少しはお役に立てたこともうれしかったです。

その後、ピーターさんから連絡がないまま9か月経ちました。2014年5月、突然ピーターさんから、お連れ合いのシムキさんとともに5月下旬に丸木美術館を訪ねるという連絡が入りました。名古屋の南山大学で講演をされた後、わざわざ一日日程を空けて東松山まで来てくださるというのです。

5月22日の日の朝、私たち夫婦は、早川さん、シムキさんの文通相手の野田さん、京都橘大の卒業生で若い教師の福嶋さんとともに池袋のホテルを訪ね、美術館に夫妻をご案内しました。ピーターさんは「原爆の図」をはじめとした丸木夫妻の作品を3時間ほどかけてじっくり見て、鋭い質問をいくつも学芸員の岡村さんに投げかけていました。そして取材に来たNHKにも「原爆の図」の意義を訴え、当日のニュースで放映されました。

それから1か月後、ピーターさんからアメリカン大学美術館で展示をしたいというメールが来ました。しかも1年後（2015年）の6月から8月にというのです。急な展開に驚きましたが、被爆70年にぜひというピーターさんの熱意にほだされ実施を決めました。その時に初めて、1995年のスミソニアン博物館での原爆展中止の際に、広島・長崎の被爆資料を代わって展示した勇気ある大学がアメリカン大学であることを知ったのです。

それから20年目となる今回の展示でも、ピーターさんは広島･長崎の資料も併せて「原爆展」として開催する意向でしたが、広島平和資料館の決定には時間がかかるとのことでしたので、私たちは「原爆の図」展としての取り組みを先行して進めることにしました。ただアメリカでの展覧会は日本とは異なり参観料はとりません。アメリカでの運営費はアメリカン大学が出してくださるとしても、日本からの運送にかかる費用など諸経費およそ1000万円は日本で負担しなければなりませんが、お金がない丸木美術館で出すことは不可能です。そこで、私たちはこの展覧会を多くの市民の賛同募金で実現しようと考えました。そのためにまず記者会見を開いて、展覧会実現の意義とそれへの協力要請をマスコミを通じて呼びかけようと思いました。その場にピーターさんの参加は不可欠です。しかし8月の広島でのピーターさんの日程は分刻みで詰まっています。しかし藤岡先生が配慮してくださり、8月5日夕方の時間帯をあけてくださいました。その時間は、セミナーとしてバスで郊外のイエズス会長束修道院に行く日程でしたが、ピーターさん、藤岡先生、乗松さん、近藤さんらが全体の行動から外れて記者会見に参加することになりました。平和の旅の皆様にご迷惑をおかけしてしまったことを、この場を借りてお詫びしたいと思います。

記者会見に向けて賛同される方々を募りました。ここでも藤岡先生がお知り合いの方々に精力的に呼びかけてくださいました。また「平和の旅」を共に運営されている君島先生や山根先生、立命館平和ミュージアムの安斎先生、さらに澤田昭二先生（原水爆禁止日本協議会代表委員）など「平和の旅」を通してピーターさんとつながっている方々も賛同してくださり、わずか数日間で112名もの賛同が集まりました。

記者会見は8月5日17時から広島市役所で行いました。私が概要を提起した後、ピーター

さんがアメリカで開催する意味を語られました。通訳を詩人のアーサー・ビナードさんが引き受けてくださいました。さらに賛同者として、前広島平和文化センター理事長スティーブン・リーパーさん、被爆者近藤紘子さん、被爆二世の畑井克彦さんが発言してくださいました。また乗松さんはメディアの一員としての立場から発言してくださいました。この時間帯は広島各地で様々な取り組みがあり、記者も手不足のため参加された記者が少なかったのが残念でしたが、中国新聞などが翌日報じてくださいました。

記者会見での発言要旨を紹介します。

ピーター・カズニックさん

1995年スミソニアン博物館での原爆展が中止されたとき、そこで展示されるものをアメリカン大学で展示した。またその年から学生の広島・長崎ピースツアーを立命館大と共同で始め、今年は20年目になる。私は5月に丸木美術館を訪ね、本物を見て決心した。美術作品としての迫力。美しさと恐ろしさを併せ持った価値。ピカソのゲルニカと肩を並べる20世紀の大きな作品である。ゲルニカは大量虐殺の恐ろしさ、ピカソの感じたおぞましさを伝えている。それは市民の大量虐殺の始まりと言える。それは広島、長崎の核を使った大量虐殺に直接つながった。100人単位から10万人単位へと大きくなった。

ゲルニカは美術作品としても、歴史の中で力を発揮した表現としても高い評価を受けている。ピカソが描いたのは悪いファシストが行った大量虐殺。一方、丸木夫妻が描いたのはアメリカ政府が行ったこと。これを展示することは70年という機にアメリカ市民が核の恐ろしさを知り、今も私たちの命を脅かす核の危険について考える大きな力となる。

『原爆の図』6点を新しく作った美術館に展示する。これにあわせて新しい教育プログラムを始めたい。歴史から学ぶことは同じ過ちを繰り返さないために重要である。展覧会には「米兵捕虜の死」を含める。重層的な意味だが、加害者でありながら、被害者になることが戦争の中にあるということを実感してもらいたい。展覧会と併せて被爆者の語りを聞く会を持つ。

来年は第二次大戦の勝利70年。アメリカでは国家をあげて、米軍がいかに素晴らしいことをやったかが宣伝されるだろう。しかしナチスを倒したのはソ連。戦争を終わらせるために原爆を使ったというのも虚偽。いい戦争などない。イラク、アフガン、ソマリア、パレスチナ…戦争は子どもを殺し女性を殺すこと。『原爆の図』展でそのことを感じてほしい。

スティーブ・リーパーさん

平和文化センターの理事長だった時に少なくとも3組の人々から、『原爆の図』をアメリカに、という依頼をされたが、お金がなくて実現しなかった。今回実現できて本当に喜んでいる。核のことを考えなくても、芸術だからと見に行く人もいるだろう。アメリカン大学は、この取り組みを人々の意識を高める企画の出発点と考えている。

アーサー・ビナードさん

『原爆の図』と10数年前から向き合ってたくさんのことを教わった。今、『原爆の図』を使った紙芝居を作っている。『原爆の図』というが、徹底して『人間の図』。人間という生き物の本質を描いている。この作品は広島に最も深く根ざし、広島の本質を伝えている。と同時に日本が抱えている核の本質も。丸木夫妻は「戦争の時原爆で殺されました。平和になった時、原発に化けて出ました」と書いている。

近藤紘子さん

8か月の赤ん坊の時に被爆した。自分の母校

であるアメリカン大学で『原爆の図』を見せることができるのはうれしい。若い学生がこれを見て、今の社会を考えてほしい。自分の目で実物を見るのは一番心に訴える。

畑井克彦さん（兵庫県被爆二世の会会長）

30年前に丸木美術館を訪ね『原爆の図』を見た時に、母親が話したことがこういうことだったと納得できた。アメリカ展でも大きなインパクトを与えるだろう。一世から二世へ引き継ぐときであり、全面的に応援したい。

記者会見をステップとして「原爆の図をアメリカに」という運動は全国に広がりました。特に日本YWCAが全面的に協力してくださり、また広島の様々な団体、原水禁国民会議、そして各地の平和団体、立命館平和ミュージアムをはじめとする各地の平和博物館、労働組合なども積極的に動いてくださいました。2015年1月末時点で賛同者は1300名、募金は850万円を超えています。

1月には美術館の岡村学芸員が訪米しアメリカン大学との具体的な話し合いを行いました。広島・長崎の原爆資料も併せて展示されることが決まり、総合的な原爆展としてアメリカ市民に訴える大きな取り組みになると思います。またアメリカン大学の後、秋にニューヨークの美術館で展示することも決まりました。

今後、アメリカ展の様子についてはマスコミも報じるでしょう。美術館ホームページにも随時掲載しますので、ぜひご覧いただければと思います。

アメリカ展のことに限って書かせていただきましたので、この旅で学んだこと、そこで感じた藤岡先生の粘り強さと温かさなどについてはふれることができませんでした。20年続けることがどれほど大変だったか、藤岡先生はニコニコ語られますが、本当に頭が下がります。この取り組みを通して原爆の真実に触れた多くの若者たちが生み出され、アメリカと日本でしっかりと根を張り、核のない世界へ向けた取組の担い手になっていくでしょう。

藤岡先生は20年を区切りに一歩下がられるようですが、先生の思いは次の方々に受け継がれていくと思います。しかし被爆70年を過ぎると原爆の記憶を伝える語り部も減っていきます。この旅をどう継続するのか、新たな展開が求められると思います。私自身も、今年で3回目になるこの旅への参加を通して、原爆の記憶をどのように若い世代に継承するのかをともに考えていきたいと思います。それはまた、原爆の図丸木美術館に問われていることなのです。

1905年、アインシュタインは特殊相対性理論により$E = mC^2$を発見しました。それは人類の叡智の帰結だったはずですが、その後20世紀は戦争と殺戮の世紀となってしまいました。ゲルニカ・南京・ドレスデン・東京・広島・長崎と続く無差別爆撃、そしてアウシュビッツや731部隊などの人間性に対する犯罪が20世紀の歴史に刻み込まれたのです。第二次大戦が終わっても米ソ冷戦下の核軍拡競争の中で各地で地域戦争が勃発し、核兵器と表裏一体のものである原発が「平和利用」というごまかしのもとに世界中に広がりました。そのような核の20世紀の総括をなしえないまま21世紀に入ったのです。9.11のテロを契機としたイラク戦争、イスラエルによるガザへの無差別爆撃などが憎しみの連鎖を増幅させています。今、テロリストの手に原爆が渡る危険性も高まり、また原発を標的とした戦争やテロの危険性も現実のものとなっています。

核の時代を切り開いたアインシュタインは、亡くなる直前の1955年にラッセル＝アインシュタイン宣言を発表し次のように訴えまし

た。

「私たちは、人類として、人類に向かって訴える。 あなたがたの人間性を心に止め、そしてその他のことを忘れよ、と。もしそれができるならば、道は新しい楽園へむかってひらけている。もしできないならば、あなたがたのまえには全面的な死の危険が横たわっている。」

それから60年。今も世界中に大量の核兵器が存在し続けています。しかも核廃絶の先頭に立つべき日本は、アメリカの「核の傘」の下で、国際赤十字などによる核兵器使用禁止条約制定の努力の足を引っ張っています。さらに日本内部には核武装へのフリーハンドを得るために原発維持に固執する強大な政治的意志も存在しています。

そういう中で核のない世界は可能だろうか、という諦めや無力感にとらわれることもあります。しかし子どもたちに、未来の世代に核にまみれた世界という負の遺産を残してはならない、というのは核の時代に生きてきた私たちの責務です。そのために、私たち自身の人間性を問い直し、勇気をもって他のことは忘れ、前へ進まねばなりません。

今年、国際赤十字や有志国は、核不使用条約制定に向けた取り組みを開始するでしょう。それを日本の地で支える市民運動を大きく広げていくことも大切です。それとともに、被爆の記憶を聴き取り、それを通して人間性を見つめ直し、核に依拠する文化・社会のあり方を問い直し、それを次代に伝えていく地道な取り組みもまた、今求められているのだと思います。

藤岡先生とピーターさんが行ってきた20年の取り組みは、まさにそのようなものでした。丸木美術館もまた「人々の心の中に平和の砦を築く」(ユネスコ憲章) ために微力ですが取り組みを続けていきたいと思います。

第6章の巻末資料―22に「市民の力で『原爆の図』をアメリカへ」と題した丸木美術館とピーター・カズニック連名のアピール文を掲載しましたので、ご参照下さい。

(京都橘大学教授・
公益財団法人原爆の図丸木美術館代表理事)

第４章　被爆者の証言を聴く（2014 年８月）

（1）広島駅北方の東練兵場で被爆

山本定男　Sadao Yamamoto

私の名前は山本定男、年齢は 83 歳です。被爆した時、私は広島県立広島第二中学校（通称：広島二中）の二年生で 14 歳でした。あれから 69 年の月日が経ちました。今日は原爆が落とされる前の日本や広島の様子、学校の様子、被爆した時の様子、家族や親戚の様子などの私の体験と、全滅した広島二中一年生のことをお話します。

当時の日本全土や広島市の状況

1945 年に入り日本の全国の都市に対して、アメリカの大型爆撃機 B-29 による空襲が激しくなり、次々に焼け野原になって行きました。その中で、広島・小倉・新潟・長崎の４都市だけは空襲がなかったのです。それはアメリカが原爆の標的都市として残していたからです。ですから、私も子供心に、なぜ広島は空襲されないのかと不思議に思っていましたが、何かしら、もうなれっこになってしまい、広島は空襲されない都市だと思い込んでいました。しかし、広島も全く空襲がなかったわけでありません。一度アメリカの戦闘機が広島の上空に飛来し、超低空飛行で機関銃を撃ち込んだり、小さな爆弾を落としたことがありました。私の家の近くでも小さな爆弾が落ちて、その家の方が亡くなったことがあります。

原爆の標的都市：広島

そんな広島も、いよいよ 1945 年８月６日、マリアナ諸島のテニアン島を飛び立った B-29、大型爆撃機「エノラ・ゲイ号」は、第１目標で天候も良かった広島市を目指して飛んで来ました。そして８時 15 分、原子爆弾を落としました。投下された場所は広島市の中心部、原爆ドームのすぐそばです。その結果、広島では 1945 年の 12 月末位までに大体 14 万人余りの人が亡くなったと言われています。当時の広島市の人口が軍隊や市外から入った人を含め 35 万人位だったと言われていますので、約 40％の人が亡くなるという大惨事になったわけです。その亡くなった人の中に、幼い小学校１年生や２年生、それと私と同年代の中学校や女学校の１年生と２年生がたくさん含まれているのです。なぜ、そうなったのか。当時の学校の様子からお話します。

昭和20年8月頃の広島市内の中学校・女学校の状況

まず、小学校では3年生から6年生までは学童疎開といって、集団で農村部に移っていました。それから中学校や女学校、当時は5年制ですが、これは学徒動員といって3年生から5年生までは、主に広島市の周辺にあった軍需工場とか軍事施設に働きに行っていました。その結果、広島市内に残っていたのは小学校の1･2年生と中学校、女学校の1･2年生という状況でした。そのうちの中学校や女学校の1･2年生は何をしていたか言いますと、学校の授業と市内の中央部で盛んに行われていた建物疎開という作業に従事していました。

建物疎開というのは、道路の周辺の木造家屋を全部壊して、空襲に備えて火災の延焼を防ごうということで、広島市を東西に貫く2本の広い防火帯をつくっていました。その作業は大人の人がやっていたのですが、その手伝いのために、中学校、女学校の1･2年生が動員されていたわけです。もちろん、その作業は子どもの手に負えるようなものではありませんので、大人の人が家屋を壊した後の跡片付け程度のものでした。その建物疎開が市内の中央部で行われており、ほとんどの学校の生徒が動員されていました。そのために市内の中学校や女学校の1･2年生に大変な被害をもたらしました。丁度原爆投下地点の周辺に中学校や女学校の1･2年生を配置したような形になってしまったのです。まことに悲劇です。私のいた広島二中では、1年生321人と4人の先生が全員亡くなっています。最大の被害を出した広島市立高等女学校では、何と541人の生徒と7人の先生が亡くなっています。結局、建物疎開作業に従事した中学校・女学校の1・2年生は、全部で6,300人余りの生徒が命を落としています。何とも痛ましいことです。

運命の日、広島二中では

私が行っていた広島二中の状況をお話します。広島二中では、1年生と2年生が建物疎開作業と学校の授業とに交互に行っていました。前日の8月5日は、私ども2年生が建物疎開作業に行き、1年生は学校に行きました。運命の日、8月6日は1年生が建物疎開作業に行きました。その場所は爆心地からわずか500メートル位離れたところでした。2年生の私どもは、その日は学校に行く日だったのですが、前日の建物疎開作業が終わったとき、ある先生から、2年生は、明日は学校に行くのをやめて、東練兵場の学校のサツマイモ畑の草取りをするから、東練兵場に集合しろという指示があって、2年生は東練兵場に集合したわけです。2年生が集合した場所は爆心地から約2,500メートル、1年生は爆心地から約500メートル、この差が生死を分けたのです。

実を言うと、もしその日、私が学校に行っていたら完全に被爆死していました。私の家は東練兵場よりもう少し東寄りにあり、学校は市内の西の方にありました。当時は、通学には電車に乗ってはいけない、歩けということで、毎日片道6キロの道を歩いて通学していました。ですから、私がもし学校に行っていたら、8時15分には丁度市内の中心部を歩いていたわけで、私は前日の5日であろうと、6日であろうと、死んでいました。たまたま2年生は東練兵場に集合したので命を救われました。

私の被爆時の様子とその後私が目にしたものは

まず、東練兵場にいた私ども二年生は、丁度先生から集合という声がかかったと思いますが、そのときに上空に3機のB-29、大型爆撃機が南東の方向から飛んできました。しかし、警戒警報も解除されていましたし、機数も少ないので、何か偵察にでも来たのだろうと、みんなで空を見上げていました。まことにのんきなも

のです。そしたら、広島の上空を通り過ぎたころに、急に飛行機が反転して逃げて行くので、おかしいなあと思った瞬間、物すごい爆発音とともに強烈な熱風で、私どもはみんな吹き飛ばされました。そうして気がついて立ち上がってみると、丁度広島駅の方向に輝くようなピンク色の巨大な火球が、物すごい勢いで湧き上がっていました。その火球は直径280メートルあったと言われています。私どもがいた場所と爆心地を結ぶと、丁度その線上に広島駅があるので、私はまさに広島駅に爆弾が落ちたように見えました。それで、これは大変だというので、近くの山のふもとにあった天満宮に何人かの友達と一緒に逃げ込みました。私どもはみんな帽子から下に火傷をしていましたので、その天満宮のお母さんに、火傷をしたところにてんぷら油を塗ってもらいました。これは火傷の応急措置です。

そして天満宮の裏の谷間に逃げ込みました。そうすると、私どもが行く前に、すでに兵隊さんだったか、大人の人が何人か逃げ込んでいまして、私ら子供を見つけて、「おい、子供らはここでじっとしておれ、また爆弾が落ちるかもしれない」と言うので、私は谷間にずっと潜んでいました。ところが、どうも続いて爆弾が落ちる気配がないのです。飛行機も飛んで来ない。おかしいなあと思って、時々谷間から出て町の様子を見るのですが、真っ白で何も見えないのです。そのうち、だんだん住宅が焼けてくるのが見えまして、最後には、私の行っていた小学校がついに焼け落ちました。

それでも、その日の午後3時か4時ごろでしたか、どうやら火が消えたので、天満宮から丁度1キロ位のところにあった自分の家に帰りました。帰ってみると、家が少し傾いていたし、家の中は床もはね上がって、もうめちゃくちゃでした。でも、幸いなことに、私の家族に被害がありませんで、誰もケガや火傷をした者はいませんでした。

○通訳（乗松）　家族の人は家にいたのですか。

○山本　家にいました。家にいたのは、私の母と祖母と姉ですが、夕方には私の父ともう一人の姉が帰って来ました。その中で、私の父は爆心地からわずか700メートル位のところのビルの中にいたのですが、幸いなことに、ビルのコンクリートの厚い壁の裏側にいて助かりました。私の父はよく言っていましたが、そのビルの中で窓際にいた人は、原子爆弾が爆発したときは一遍に吹き飛ばされて、随分の人が亡くなったそうです。そのビルの中の数少ない生存者の一人が私の父でした。原子爆弾によって親や兄弟が亡くなったり、孤児になったりした方が沢山おられる中で、私は家族が全員無事でしたので、本当に幸せでした。

翌日市内中央部で目にしたもの

翌日、私の母の妹、叔母が爆心地から大体400メートル位の本通商店街にいましたので、私の母が「叔母さんのところの様子をみてこい」と言うので、その本通商店街まで私は出かけて行きました。そうすると、まだ残り火が盛んに燃えており、白骨になった姿も見えるという、もうさんざんな状態でした。帰って私の母に、「もう叔母の家は焼けてしまって何もない。どこに逃げたのかわからない」という報告をしたのです。今から振り返ってみると、こういう爆心地に近いところは残留放射能が一杯あるところでして、行かなきゃよかったと思っています。広島には入市被爆者という方がおられます。これは家族の捜索や救護のために後から広島市に入った方で、原爆症を発症した方があるとも聞いています。

救護所にいた叔父を見舞いに行った時のこと、そして東練兵場の救護テントにて

今度は、その叔母の主人、私の義理の叔父の

ことですが、広島湾の金輪島に収容されていることがわかりまして、私の母から「おまえは、叔父のところへ見舞いに行け」と言われ、その金輪島の救護所に行きました。私は洗った浴衣と桃を１つ持って、３つ年上の従兄弟と一緒に島へ渡りました。建物に入ってみると、床の上にむしろを敷いて、被爆者がたくさん収容されていましたが、その中で運よく私の叔父はすぐ見つかりました。よく見ると、その叔父はけがも火傷も何もしていないのです。叔父は爆心地から400メートル位の本通商店街にいたのですが、けがも火傷もなく元気でした。それで、叔父が大変喜んでくれまして、よく来てくれたということで、私どもも叔父さんも元気でよかったですねとお互いに喜び合って、別れて帰りました。それから、その叔父は別の収容所に移されて、間もなく亡くなったという知らせが入りました。爆心地に近いところにいましたから、強烈な放射線を体に浴びているわけです。たとえ無傷であっても死んだわけです。広島には、たとえ無傷であっても、強烈な放射線で亡くなった方があったようですし、その一人が私の叔父でした。

その家にはもう一人、私の１つ年下の女学生がいまして、それも行方不明だということで、私の家の近くの救護所とか、東練兵場あたりを探し回ったことがあります。その子は結局見つかりませんでしたが、そのときいくつか大変悲惨な状況を目にしましたので、そのことをお話したいと思います。

爆心地から２キロぐらい離れたあたりなのですが、道端に兵隊さんがたくさん死んでいまして、みんな大火傷をしているわけです。そうすると、どういうわけか体がゴム風船みたいにぱんぱんに膨れ上がって、死んでいました。また、この東練兵場は広い草原ですから、白いテントがたくさん張られ、むしろを敷いた収容所ができていました。そこで目にしたのですが、若い女の人でしたけれども、背中に大やけどして、看護婦さんに白い火傷の薬を塗ってもらって、そのままむしろに横たわっている。着せてあげるものも何もないわけです。そういう大変悲惨な状況を目にしました。いまだにむごいことだと私の目に焼きついています。

私の火傷と高松市の郊外に転居

私の火傷は、今でしたら大火傷ですが、当時は軽傷です。一部化膿はしましたが、大体３週間位でよくなりました。でも、いつまでも顔が黒ずんでいて、その黒ずみが取れるのに数年以上かかったと思います。

８月下旬だったと思うのでが、四国の高松にいた私の父方の叔父が見舞いにやって来てくれました。私の顔を見た途端に、その叔父が、「お前は青い顔をして元気がない。お前は高松へ来い」と言われ、私はそれから高松に行ったわけです。その叔父も高松で焼け出されたのですが、幸い近郊の農家に間借りしていまして、私もそこへ行ったのです。そうすると、さすがに農家には食べるものがありました。いつもご飯を食べさせて貰いました。それから、高松は讃岐うどんの名所ですから、うどんをたびたび食べさせて貰いました。それで私は元気を回復しました。私は農村のきれいな空気と食べ物で元気を回復したわけです。大体１カ月位いました。

そこから広島へ帰るとき、その場所の村役場へ行きまして、「私、今から広島へ帰ります」と言いますと、その村役場の受付の方がびっくりされ、「あんな広島みたいな焼け野原のところへ、なぜおまえは帰るのか」と聞かれたのですが、「いや、私はそこがふるさとだから帰るのだ」という話をしたことが今でも思い出されます。

広島二中１年生の悲劇

最後に、全滅という惨劇を受けた広島二中１

年生のことをお話したいと思います。

1年生は、爆心地からわずか500メートルのところで被爆したので、私は、1年生はみんなその場所で亡くなったのだろうと、ずっと長いこと思い込んでいました。原子爆弾は地上600メートルのところで爆発し、広島二中1年生は爆心地から500メートル位のところにいたわけです。原子爆弾の中心温度は100万度とも言われていますが、その中心地域の地表の温度は3,000度、あるいは4,000度にも達したと言われているのです。そういう状況でして、広島二中1年生はものすごい炎といいますか、それを頭の上から浴びているわけです。どんなことになったのか、怖くて想像することすらできません。まさにこの世の地獄だったと思います。

ところが、戦後24年たった1969年、そのころ毎年広島テレビ放送では原爆ドラマを発表していましたが、1969年には、「碑（いしぶみ）」という原爆ドラマを発表したのです。それが何と広島二中1年生の悲劇の物語でした。私は、その「碑」というドラマを見て、本当に衝撃を受けました。みんなその場で亡くなったとばかり思っていたのですが、実はそうではなかったのです。もう信じられないような生徒の様子が一人ずつ名前を挙げて、そのドラマでは語られていたのです。そのドラマによりますと、どうも3分の1位の方はその場で、粉塵の中とか、川の中で溺れて亡くなったらしいのですが、残りの人は大火傷を負いながらも、歩ける者は必死になって自分の家に帰った子がいるとか、家にたどりつけずに途中で倒れて亡くなっていたとか、あるいは一人の先生が学校へ行こうというので学校を目指したが、誰一人たどりつけなかったとか、あるいは川に逃れろという先生の指示で川の中に逃れ、みんな流されないように手をつないで軍歌を歌っていたとか、そういうさまざまな様子が初めて分かったのです。

なぜ、そういうことが分かったかと言いますと、そのテレビ放送の制作者の一人に薄田純一郎という方がおられ、広島二中の私より3つ先輩の方です。この方が1年生の遺族の方から子供さんの様子を集められ、それによってテレビドラマを作られたのです。そのように遺族の方から1年生の様子を集められたことによって、初めて1年生の様子が分かったわけです。多くのお父さんやお母さんは、翌日から必死になって自分の子供を探されています。それでも自分の子供を見つけられた方は少なかったようですが、何人かの子供を見つけられた方の様子をお話します。

平和記念資料館に黒焦げになった弁当箱が展示してあります。これは折免滋という子供が持っていた弁当箱です。この方のお母さんは、3日後、8月9日に、その弁当箱で自分の子供を見つけられたそうです。その子は弁当箱を大事におなかに抱えて死んでいたそうです。

また、あるお母さんは、子供の胸につけた名札で自分の子供を見つけられました。でも、その子はもう息絶えて死んでいました。ですが、その子の目からほおに伝わった涙がまだ乾いていなかったそうです。ということは、息絶えて間なしだったということです。なぜ、もう一足早く自分の子供を見つけられなかったか、そのお母さんは随分嘆かれたそうです。あるお父さんは、自分の子供が広島赤十字病院に収容されていること知り、病院に行きました。真っ黒焦げになった自分の子供を見つけ、お父さんはお医者さんに、「どうかこの子を治療してくれ」と頼みました。でも、医師の答えは、「残念ですが、これほどの大火傷ではもう治療の方法はありません、お父さん、自分の子供をしっかり抱きしめてあげなさい」と答えられたそうです。

また、わが家にたどり着いた山下明治という子どもさんですが、自分の死を悟ったのでしょう、自分の弟や妹に別れを言ったそうです。そしてお母さんが、鹿児島のお爺ちゃんに、貴方

のことを何と言おうかねと問いかけると、その子はたった一言「立派に」と答えたそうです。何と言いたかったのでしょう。私が思うに、「自分はお国のために立派に死んで行きます」と言いたかったのだろうと思います。何と健気な子がいたものと、私も涙が出ます。

被爆者を苦しめた水

当時、大火傷をした者には水を飲ませてはならないと教えられていまして、私らもそのように思っていました。そのために、広島二中の1年生で自分の家に帰った子も、水を飲ませてくれといくら親に頼んでも、親は水を飲ませていないのです。仕方なく、とうとう自分の指から膿を飲み込んだという子どもがいます。何と痛ましいことでしょう。膿を飲んだというその子の指の爪が、平和記念資料館に展示してあります。

水のことは広島二中1年生ばかりではありません。被爆者が共通して苦しめられたことです。みんな水を飲ませて貰えなかたのです。まことに悲惨な状況があったそうです。道端で苦しんでいる被爆者が通りがかりの人に水をくれと頼んでも、通りがかりの人は水を飲まさなかったと言われています。

最後に、私事で恐縮ですか、広島二中1年生を描いたテレビドラマが放映された翌年、1970年10月2日に、私はそのテレビドラマに基づいて作詞、作曲をして貰い「男声合唱のためのレクイエム「碑」(いしぶみ)」という合唱曲を、当時私が指揮者をしていた合唱団で発表しました。この合唱曲は大変な感動と反響を呼びました。今も母校のOB合唱団が毎年歌ってくれています。

まとめ

原爆の惨状は、たった一発の原子爆弾で全部の町が焼かれ、そこにおる者をみんな殺してしまったわけです。このような原子爆弾が二度と世界で使われないように、核廃絶ということが世界共通の課題だと思います。そのためには世界を平和にしなきゃいけない。何としても世界平和を達成することが、私どもの、あるいは全世界の人の願いではないかと思っています。私も少しでもお役に立ちたいと思いまして、被爆体験証言や私の好きな音楽活動を通じて、頑張っております。どうか皆さんも核廃絶のために、世界平和のために、どうかお力をおかしください。今日は私の被爆体験を聞いていただいて、本当にありがとうございました。

(2014年8月4日夕刻・広島アステールプラザ)

(テープおこし・山口美起)

（2）長崎爆心地から南東 3.3 キロで被爆

山田拓民　Hirotami Yamada

原爆投下直後の学校での様子

私は今、83 歳です。私が原爆に遭ったのは 14 歳のときです。私の家族は 6 人でした。父と母と、姉と私と、あと 2 人の弟がいました。私はごらんになったとおり、いい男とは言いませんけれども、けがの跡は別にありません。というのは、南東の方向にはずっと山があるからです。あの山のもっと向こうで、私は原爆に遭ったんです。何でそんなところにいたのかというと、私が通っていた学校がそこにあったからです。といっても、別に山の中に学校があったわけじゃなくて、あの山を越えると、また町があるのです。その町の端っこのほうに、私が通っていた学校があったのです。原爆が爆発したのは、高さが 500 メートル、そのぐらいの高さで爆発したのです。私の住んでいた家というのは、ちょうど西側の山のふもとのほうです。それで、原爆が破裂したのは、私のうちまでは 800 メートルぐらいの距離なのです。

私が原爆のときにいた学校というのは原爆の中心地から南東へ 3.3 キロも離れているのです。かなり歴史と伝統のある学校ということなんですけれども、一方から言えば、古びた学校です。建物も随分古い木造の建物です。それで、あの原爆が爆発したときには、とにかくびっくりしました。大きい音とものすごい光、そして校舎が揺れる。ああー、校舎が潰れると、そう思ったところだったのです。

しかし、私はびっくりしただけで、けがをすることはありませんでした。というのが、ぼんやりつっ立っていたら、窓ガラスなんかは全部壊れましたから、それが爆風で吹き飛ばされてきて、教室の中はガラスの破片がいっぱいあり、机の上にも突き刺さっていたのです。だけど、その前に目が潰れるような、すごい光がきました。それで、四、五人いた友達の中の一人が、「危ない！」と言ったんです。思わず出たんだろうと思うのです。だもんだから、みんな、机の下に潜り込んだのです。そのときに大きな音がして、物が壊れる音がしました。そのときは机の下にいたものですから、けがも何もすることがなかったのです。その日、原爆が破裂したのは午前 11 時 2 分と言われているんですけれども、私は時計を見たわけじゃないので、それが本当かどうか知りません。けれども、そういうふうに言われています。原爆のドーンという大きい音と、物が壊れる音が静かになると、何だか気味が悪くなって、机の下から出てきたんですね。そうしたら、教室の中はめちゃめちゃになっている。何が起こったか、わからなかったのです。

当時は、空襲となると、爆弾とか焼夷弾とかをたくさん落としていって、そこいらが一面火災になってしまう、そういう印象がありました。ところが、ぼろ校舎であった建物も壊れないし、それから窓から近所の家を見ても、屋根がわら

はきちっとなっていなくて、ぐじゃぐじゃになっているというのはあるんですが、壊れた家もないし、火の手が上がっている気配もないんです。ですから、何が起こったのかわからなかったというのが正直なところでした。それで、しばらくは教室の中にいたわけですけれども、先生が回って見えて、「もう早く帰れ。きょうはどうなっているのか、さっぱり見当がつかない」というようなことを言われたものですから、帰り始めたのです。

学校から家への向かう途中で（長崎市内の様子）

学校から長崎駅まで、歩いて30分近くかかるんです。ずっと歩いて行く途中、確かに窓ガラスが壊れたり、屋根がわらが吹き飛ばされたりしているのはわかるのですが、家が潰れたり、燃えたりしているというのは、そこまではなかったわけです。それで、長崎駅の近くまで来たら、駅が燃えている、駅の近所が燃えている。だから、ああ、駅が爆撃されたのかと私は思ったのです。駅とか港とかというのは、爆撃に狙われることが多いんですね。そういうことは新聞なんかでも見ていますし、ああ、ここがやられたのかと納得したようなものだったのです。ところが、駅だけが燃えているんじゃなくて、駅の近くまで燃えている。実は、駅の前の通りを北の方へ歩いて行くと、今お話しているこの場所に来るわけなんですね。ところが、そのあたりが燃えている、駅を含めて。だから、ああ、これは通れないなと思ったんです。

それで山の中腹をずーっとこの辺りまで歩いてきたわけです。そうすると、山の下は町になっていて、人がたくさん住んでいるんですけれども、そこから山のほうへ逃げてきました。もう動けなくなっている人もたくさんいるわけです。そのときに本当に、人間がこんなにめちゃめちゃになるのかという光景にぶつかったんです。それまでは長崎というところは、爆撃もほとんどなかったわけです。全然なかったわけじゃないんだけれども、それは主として工場とか港とか、そういうものがやられる。だから、私は、けがをした人とか、死んだ人というのは、ほとんど見る機会はなかったんです。めちゃくちゃになった人間の体というのを見るのは初めてでしたから、びっくりして、今度は自分の家族のことが心配になって、もうあたりを見回すなんていうことはなくて、一生懸命山の中腹を歩いてきたわけです。今私たちのいるところは丘の上ですよね。下の平らなところまで行くと、その先には浦上川があるわけです。川には橋がかかっているわけですけれども、幸いなことに、橋は壊れていませんでした。欄干だけは倒れていますけれども、橋はかかっていたものですから、その橋を渡って向こう岸へ渡りました。

よく被爆者の話を聞いていると、けがをした人たちがどうしていたというような話が出てくるんですよ。例えば首がもげた赤ん坊をおんぶしていたとか、そういう話があるんですけれども、私はそんなに落ち着いて、周りを見渡すような余裕がありませんでした。早く自宅へ帰らないと、どうなっているかわからないと。そのことばっかりで、一生懸命帰りました。

家族との再会

父と母と、姉と私と2人の弟、この6人が当時の私の家族でした。父は教師で、北の方へちょっと行ったところに大きな工場があって、今は長崎大学の本部になっているところですけれども、その工場へ生徒たちを連れて行っていました。

うちへ帰ると、母と姉と2人の弟にはすぐ会えたわけですね。もちろん、けがはしていましたけれども、私が途中で見てきたような、命を失うようなけがとは思えなかったのです。父は帰ってきていませんでしたので、これは一体どうなっているんだろうか、探しに行くこともで

きずに、そのままにしていたのです。

そうした中赤ん坊が最初に死にました。赤ん坊は全くけががなかったのです。それが8月12日に死にました。そして、その赤ん坊が死んで、母は死んだ赤ん坊を抱いて寝ました。寝るといっても、地面にごろっと横になって寝るだけなんです。暗くなったらそういう暮らしをしていたんです、みんな集まったような形で。だから、何が原因で死んだのか、わからない。そういう気持ちでした。さっき言ったように、赤ん坊なんてかすり傷一つなかったんですよ。布団に寝せてあって、そして家が潰れてしまったんですけれども、うまいぐあいに、家具の間に押しやられたみたいで、本当にけが一つなかったんですけれども、やっぱり一番最初に死んだのは赤ん坊だったんですね。翌日（13日）、目が覚めると姉が冷たくなっていました。それで、焼け跡に燃え残った材木を積み上げ自分の手で火葬しました。

そして、母と小学校6年生の弟が残っているんですけれども、焼け跡ですから、雨が降らなくてよかったけれども、雨でも降ったら、覆うものが何もないというようなところですから、もうここにはおれないということで、隣の諫早という市に父の母が住んでいたんです。それで、おばあちゃんのところに行こう。父はどこへ行ったのか、探しようもない。しょうがない、死んだものと諦めて、おばあちゃんのところへ行ったわけです。そのときはもう列車が動いていたんです。

それで諫早に行ったら、父と会えたんですよ。ものすごい怪我をしていました。ちょうど父の仕事場の窓にひさしがあって、そこが額のところから上を隠しているんですね。だから、ここから上のほうはひさしの影があって、ここから下は向こうから原爆の熱線がそのまま当たっている。ですから、顔から胸、おなかのあたり、両腕は物すごいやけど。そして、背中には大きな切り傷がある。父はそういう怪我をしていました。そんなけがをしていて、初めに見たときは、ああ、もうこれはだめだと。そういうけがをして死んでいく人たちは、近所の人たちの中にもたくさんいたわけですから、ああ、もうこれはだめだという、おやじには申しわけない話ですけれども、そんな気持ちで見たんです。

ところが、逆だったんですね。諫早に行って、8月23日に母が死んで、そして弟がその翌日、死んだんです。その2人は大したけがじゃないと言ったでしょう、そういうのが死んでいきました。父はその後、少しずつ少しずつよくなっていって、そして結局、1961年まで生きたんですよ。それも死んだ原因はけがのためじゃなくて、がんだったのです。肺にがんができて、それが手おくれで、61歳で死んだのです。父と母たちの差は何だったのか。結局、母たちが原爆に遭ったところが近いんですね。原爆の中心から800メートルぐらいのところで原爆に遭っています。父は1.5キロぐらい離れていました。その差が早く死ぬのか、61歳まで生き延びることができたのかの違いだったんじゃないかと思っています。

○通訳（乗松）　お父さんが被ばくされたところは長崎大学だと言っておられました。

○山田　長崎大学のところです。そのころそこは工場だったので、私の父はそこへ生徒たちを引率して行っていました。

８月９日後の国の対応、被爆者の状況

そうやって死んでいったわけですけれども、私がぜひ報告したいと思ったのは、死んでいった一人一人のことよりも、日本政府はこの原爆の被害にどう向き合ったのか、原爆を落としたアメリカはどうだったのか、そのことをぜひ聞いてほしいと思うのです。

そのころ、日本ではちゃんと戦時災害保護法という法律がありまして、それはずっと前から

あったというわけじゃないんですよ。原爆の2年ぐらい前からですか、太平洋戦争になってからですけれども、空襲があったりした場合には、例えば救護所をつくるとか、そういうことが決めてあったわけです。ところがここから見える範囲は全部焼けまして、そこには建物がないから、救護所なんていうものもできません。ちょっと離れたところになると、長崎の市内にもたくさん救護所ができましたし、それから小学校なんかが点々とありますから、その小学校を使って応急の病院ができたのです。そこに行けばお医者さんもいて、看護師さんもいて、そしていろいろ手当てもしてくれるのですが、そのころのいわば個人病院なんかは薬品なんかも本当に乏しかったわけで、それでもお医者さんが手当てをしてくれるというだけで、やっぱりけがをした人たちは安心しました。

ところが、8月9日に長崎に原爆が落とされて、10月8日、ちょうど2カ月で、はい、これで救護所は閉鎖、こうなってしまったんです。そうなってくると、けがをした被爆者、病気になっている被爆者はどうしようもありません。焼け跡に小さな小屋をつくって、そこで暮らしたり、あるいは親戚のところへ転がり込んでいったり、ということは結局、みんなから見えないようなところに住んでしまったのです。そういうふうに本当に放りだされてしまって、社会から見えないようなところで被爆者は暮らさざるを得なくなってしまったわけです。

そうこうすると、今度は悪口を言う人も出てくるんですよ。このあたりだったら、みんな誰でも被爆者ですから、お互いにそんな悪いことは言いませんけれども、住むところがないですから、親戚を頼って、ちょっと離れたところに行きますね。そうすると、「ああ、あの人は被爆者だから、近くに寄るなよ。病気が移るぞ」、こうやって本当にまともな暮らしができないような、そういう状況に被爆者が追いやられてしまったのです。

例えば、母たちは一応病院に入院できていたんですけれども、それは海軍の病院でした。長崎は佐世保というところが海軍の本拠地で、そこからずっと諫早のほうまで点々と、5カ所ぐらい、海軍の病院があったんです。そういうところへ全部被爆者が送り込まれていったんですけれども、そこからみんな追い出された。父もけがをしていましたけれども、病院から、ここはアメリカ軍が使うことになったから、出て行ってくれと頼まれたわけです。私は、父はもう助からないと思っていました。だから、どうせ死ぬのなら、母親のそばがいいんじゃないかということで、私のおばあちゃん、つまり父の母が諫早に住んでいましたから、そこへ引き取ってもらったわけです。

おばあちゃんのところに引き取ってからは、父は次第に傷がよくなっていって、そしてまた、父は学校の先生をしていましたから、まだ怪我が完全によくならないけれども、動けるようになったら、長崎まで出てきて、学校へ出るようになったわけです。その後は、醜いやけどの跡を残しながら、授業もできるようになったんです。だけど、さっきちょっと言ったように、父は肺にできたがんのために死にました。

私がたった一人だけ残ったわけですよね。どうなるのだろうかと思いながら生活をしていたわけですけれども、一昨年、私にもがんが見つかりました。左の肺にがんが見つかって、ああ、俺はもう終わりかと思いましたけれども、「悪運が強い」という言葉が日本語ではあるわけですけれども、悪運が強いのか、手術をして、そのがんの部分を取り出してしまったら、あとはすっきりして、今もお医者さんには通っていますが、ただし、半年に一回ぐらいで、細かな検査を受けるんですけれども、今のところ、再発しているおそれは全然ないということで、このぐらい大きい声を出しても、びくともしない。

こんな細い体で元気でいるわけです。さっき、日本政府は原爆で傷ついた人たちの面倒を見るための、本当にお粗末な病院ですけれども、そういうのを全部、たった2カ月で閉鎖してしまったということを言いましたが、これは実際には日本政府がやるわけですけれども、アメリカに遠慮したんじゃないかと思われます。

ファーレルというアメリカの原爆製造計画の副責任者、そしてアメリカ軍の将校でもあった人ですが、このファーレルが占領軍としての声明を発表しているんです。9月になったら、アメリカ軍が上陸して、東京でもいろいろ動き出すわけです。その中で出した声明に、「広島・長崎では、死ぬべき者は死んでしまい、9月上旬現在において、原爆放射線のために苦しんでいる人は一人もいない」と言ったわけなのです。占領軍と一緒に新聞記者がついて来ているわけです。そのころ、テレビがあったのかどうか知りませんけれども、ジャーナリストが一緒に来ているわけです。ところが、その人たちは東京の焼け跡を見たって、しょうがないんですよ。ちっとも珍しいものじゃない。見たかったのは、広島・長崎なんです。これは世界で初めてでしょう。初めての原爆が使われたところ。それは行きたいですよ。

ところが、ここに入られたら、アメリカはこんな残虐なことをしたのかということが世界中に広がってしまう。それをアメリカは困ったわけです。それでも新聞記者たちは入ってきたらしいんですね。そして、記事を送る。ところが、今度は本国でもそういう記事は掲載しない。掲載させてはいけないということで、制限してしまったらしいのです。

○通訳　ジャーナリストは、広島・長崎に入ることも禁止されたんですよね。

○山田　そこはやっぱり、新聞記者さんたちはすごいですよ。そこに入って、自分の目で確かめたいという思いがあったら、いくらそこはだめだと言われても、潜り込むんですね。そして、どんどん記事を送るわけです。だから、初めは珍しがられた。ところが、アメリカ政府がそういう記事を新聞なんかに掲載しちゃいかんということで規制をしてきた。

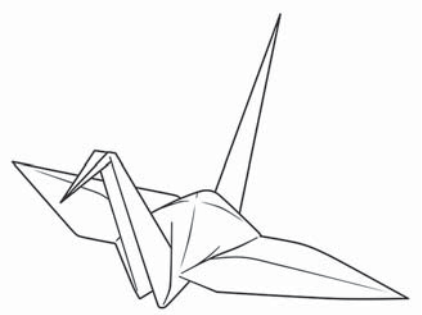
私も83歳になりましたけれども、よーし、あと10年頑張るぞと言っても、誰も本気にしませんよね。それほど、私たちは限界に来ている。だけど、やっぱり最後の最後まで、原爆の被害というのは放射線だけじゃない。熱線も爆風も含めて、被爆者がこうむった全ての被害を国は補償しなさい。焼夷弾や爆弾によってけがをしたり、病気になった人たちについても同じことです。死んだ人が最大の犠牲者ですから、死んだ人への対策もきちんとしなさい。こういうことを言い続けているし、それこそ死ぬまで言い続けなくてはいけない。何とかして、これを実現しなければ、日本はまた戦争をする国になりかねない。それをとめるためにも、私たちは一生懸命頑張らなきゃならないと、今、思っているところなんです。

これは長崎での「被爆者の会」をつくるときの呼びかけのチラシです。どういうことを被爆者は願っていたのか。

「私たちはここに団結して、国家の補償が実現できるようにするため、会を結成したい」と後のほうに書いてあります。人の名前が12名書いてありますが、こういうお世話をした人ですね。この人の中で、今、生き残っている方は、一番上の段の端っこのナガタヒサコさんとお呼びするんですけれども、そのナガタさんという方、一人だけです。あとはみんな亡くなられました。そういう方の気持ちを実現するためにも、私たちは頑張りたいと思っているところです。ありがとうございました。

（2014年8月7日夕刻・長崎被災協会議室）

（テープおこし・山口美起）



第５章　20回目の夏―これが私のハイライト

地図から消された島＝大久野島をレンタカーで訪ねて

市橋由佳子

乗松聡子さんの運転するレンタカーに同乗して、聡子さん、ピータ・カズニック教授たちとともに、8月6日の式典終了後に大久野島を訪ねた。大久野島は戦時中、毒ガス製造所として使われた島である。瀬戸内海に位置し、現在は国民休暇村として使われ、ウサギが多く生息しているのどかな島である。しかし、島の至るところに当時の工場や発電所があり、毒ガス資料館も設けられている。

戦時中、この島は地図から消されていた。戦争での毒ガス使用はジュネーブ条約で禁止されていたからである。日本軍は違反して毒ガスを製造し戦闘で使用していた。毒ガス製造に携わった人々は現在でもその化学物質の後遺症に苦しめられている。身体に現れる影響だけではなく、精神的にも苦しめられているようだ。このツアー後、大久野島で働いていた人へのインタビュー映像を見てみた。インタビューを受けていたのは80代の男性だった。まさか自分が毒ガスを作っているとも思いもせずに働いていたこと、年をとった今でも化学式を覚えていて書けることなど、自分の青春をそれに費やしてしまっていたことへの悔しさなどを語る様子は見ていて悲しかった。

毒ガスの処理は今でも続いていて、中国に捨てられた毒ガス弾で被害を受けている人々がいるという現状を知って、まだまだ戦後で解決されていないことがたくさんあることを知る機会になった。

（経済学部２回生）

戦争と加害のこと

Y.U

今回、この広島･長崎平和セミナーに参加し、様々な方のお話を聞き、様々な資料館を訪れ、初めて平和や戦争について深く考えることができた。平和や戦争についての勉強なら教室でもできるかもしれない。しかし、今回初めてこのようなことについて深く考えることができたのは、セミナーで京都、広島、長崎を巡り、出会った人や見たものに大きな衝撃を受けたからであると思う。ここでは特に印象に残ったことについて記す。

このセミナーでは数人の被爆者の方のお話を聞くことができた。私は今まで長く海外に住んでいたこともあり、修学旅行などで長崎や広島を訪れることもなく、もちろん被爆者の方の話を聞いたこともなかった。今回のセミナーに参加して被爆者の方々のお話を初めて聞いて、戦争がいかに人々を苦しめてきたのかを改めて感じた。

特に、一番初めに聞いた紘子さんのお話はとても衝撃的だった。いつもと同じ朝、突然原爆が落ち、多くの人が亡くなった。どうにか生き延びた人も火傷をし、皮膚が焼きただれ、苦し

んだ。原爆が投下され、多くの人が亡くなったことは歴史の授業で学んでいるから知っている。しかし、赤ちゃんであってもその場にいたという紘子さんが話しただけで、本当にこの日本でそんなに悲惨なことが起こったのだと恐怖を感じた。また、原爆乙女と呼ばれる女性たちとともにアメリカへ行き、原爆を落としたエノラ・ゲイの操縦士と会った時の話には胸が苦しくなった。それまで操縦士は原爆を落とした“悪い人”だと思っていた紘子さんはアメリカで彼に会い、彼の涙を見て見方が変わったという。その話を聞いたとき、やった方もやられた方もどちらも人間で、誰もいい思いをしないのが戦争なのだと感じた。

長崎で訪れた永井隆記念館でも「お互いに許しあおう…お互いに不完全な人間なのだからお互いに愛し合おう…お互いにさみしい人間なのだから　けんかにせよ、闘争にせよ、戦争にせよ、後に残るのは後悔だけだ。(「平和塔」より)」という言葉を見て、誰もいい思いをしないのが戦争なのに、なぜ人間は同じ過ちを犯してしまうのだろうと考えさせられた。たぶんそれは、戦争へと進める人の多くは常民ではなく人の上に立つ人で、進める人自身は傷つくことも、大事な人を失うこともないからなのではないかと私は思っている。

「本当の平和をもたらすものは、ややこしい会議や思想ではなく、ごく単純な愛の力による」(「いとし子よ」より）という言葉を見て、世界中の人々がこの言葉の内容を理解して実行できたらどんなに素晴らしい世界ができるのだろうと思った。しかし、人間は必ず対立するものである。家族の中でさえ、小さいことで対立することもあるのに、70億もの人の中で対立が起きないわけがない。でも、対峙した人々の中に少しでも相手を理解しようとする気持ち、お互いの意見を取り入れた第三の道を開拓しようという意思があれば少しでも平和に近づくだろう。このような考えを生み出すことができるのは多分、国を率いるリーダーではなく、常民だ。上の言葉にあるように、リーダーは日々ややこしい会議をして難しい思想を次々と生み出す。しかし、平和に近づくためには私たちのような一般市民が“単純な愛の力”をもって生きることが一番なのだろうと感じた。

もう一つ、大きな衝撃を受けた資料館がある。それは同じく長崎にある、岡まさはる記念長崎平和資料館である。ここでは被爆朝鮮人や中国、朝鮮、東南アジアへの侵略など、日本が戦争中に行ってきた加害行為を知ることができる。施設は小さく、ほかの資料館などとは違い、いかにも“市民によって作られた資料館”という感じだった。

私は今まで人生の半分以上を東南アジアで過ごしてきたため、日本に侵略された国の人々がどんなに残虐なことをされてきたのかは課外授業などで学び、知っていた。しかし、日本に多くの朝鮮人や中国人が連れてこられ、過酷な強制労働を強いられていたことはあまり知らなかった。

特に驚いたのは、「軍艦島」についての記述である。私はこのセミナー後に東京から来る友達と長崎観光をし、その中で、軍艦島に行くツアーに参加しようとしていた。テレビ番組では、日本で初めて作られた鉄筋コンクリートのマンションなど、当時の時代の最先端の建物がつまった島としか言ってなかったし、その非現実の空間を利用してミュージックビデオや映画の撮影などが行われていると聞いていたので、あの島で強制労働が行われていたなんて全く知らなかった。

セミナー後に軍艦島ツアーに参加した時には実際に島に住んでいた人がツアーガイドをし、さらにスクリーンで軍艦島の歴史を流したビデオが流されたが、強制労働についての情報は一つも入っていなかった。コンクリートの建物に

草木が生い茂り、非現実的な空間を持つ軍艦島だが、その外見のカッコよさだけではなく歴史も多くの人が知るべきだと思った。人間はどうしてもきれいな部分しか見せようとしない。日本がしてきた負の側面を知るためには自分で知ろうとする姿勢が大事だと感じられた。岡まさはる資料館には日本の東南アジアなどへの侵略についての資料も展示してあったが、観光などでそれらの国を訪れる際に少しでも戦時中に日本がその国にしてきたことを知ろうとすることなどが必要だと思った。セミナー後、夏休みにシンガポールに行った際に国立博物館に訪れ、日本が侵略した歴史の展示を改めて見てきたが、このような歴史を知らずに日本人として国際社会で生きていくのは失礼だし、とても怖いことだと感じた。

多くのことを学び、考えることができた大変充実したセミナーだった。もし自分がこのセミナーに参加していなかったらと考えると恐ろしいほど戦争、平和、日本について多くのことを知ることができた。参加することが出来て本当に良かった。

（国際関係学部２回生）

旅の思い出

T.K

今回、このプログラムに参加して印象に残っている所が二つあります。一つ目は、「岡まさはる」記念館です。私は長崎出身で、原爆資料館や平和式典などには参加した事があったのですが、「岡まさはる」記念館には行った事がありませんでした。実際行ってみると、日本軍がアジア諸国にしてきた残虐な行為についての資料が多くあり、戦争被害者としてではなく、戦争加害者の面での日本について展示してあった事が印象的でした。今度、長崎に帰ったときはまた行ってみたいです。

二つ目は、平和記念式です。私は、山里小学校出身ということもあり、長崎の平和記念式には出席した事があったのですが、今回、長崎と広島の記念式に出席して、双方の違いを感じ取る事ができ非常に良かったです。

（経済学部３回生）

セミナーで学んだこと

鈴木純佳

国際平和交流セミナーを通して、私は他では学べないようなことをたくさん学ぶことができました。例えば、第二次世界大戦時の日本、アメリカ、朝鮮や中国、そして、原子爆弾がどのような影響を人に与えるのかを知りました。それに、被爆者の方の話も聞き、原子爆弾や戦争に対しての意見を聞けて、とても良かったです。被爆者の方は年々減っており、直接お話を聞くのは容易ではありません。だから、私はとても貴重な体験をすることができて嬉しく思いました。

さらに、このセミナーは日本人学生だけでなく、国際学生もいたので、日英両言語を使う機会がありました。一人ひとり違う背景をもっているため、意見や考えがそれぞれ違うのでとても勉強になりました。例として、学校で使う教科書についての話がありました。国によって、教科書に書かれていることが違い、一方的な内容が多いことがわかりました。このことから、一つの国の歴史を知っているだけでは、真実にほど遠く、私は何も知らないことを思い知りました。

最後に、このセミナーのおかげで、平和や戦争に対してもっと興味を持ち、勉強していきたいと思いました。そして、世界に貢献できるような人になりたいと思いました。国際平和交流セミナーに参加できて本当に良かったです。

（APU1 回生）

五感で感じた平和とは？

高橋和輝

私が印象を受けたことは主に２つあります。

１つ目はやはり岡まさはる記念館です。正直なところ日本にこのような資料館があるとは想像していませんでした。いままで自分は広島という眼鏡を通してしか戦争や原爆、平和について考えていなかったのでどうしても被害者意識しか持てませんでした。加害者意識に関しては心のどこかで考えてはいるものの、ただ単に考えているだけにすぎませんでした。そんな状態の中で岡まさはる記念館に行き、展示物を見て自分の考え方がなんて狭いのだろうと痛感させられました。韓国やアメリカの教科書には原爆はいいことであったという記述があったことや日本が本当にひどいことをしたという記述があったということを聞いていましたが本当かどうか自分は信じられませんでした。しかしこの記念館で実際に日本がやってきた数多くのことを見て、知っていくとそのような記述があってもおかしくないと思うようになりました。この記念館はぜひとも日本国民全員が見るべきところであると感じました。

２つ目は広島、長崎の平和式典です。私は広島出身であるにもかかわらず一度も広島の式典に参加したことはありませんでした。今回がどちらも初めてでした。私がなぜこの２つの式典に強い印象を受けたかというと、同じ平和式典とはいえども微妙に違うところがわかったからです。広島の式典の方はとてもオープンな感じがして世界に向けて何かを発信しているような感じがしました。また人々が行っているのではなく政府や機関が式典を行っている印象を受けました。

長崎の式典の方は広島の式典と違いセキュリティがきつかったのもありますがどこか厳粛でした。しかしながら、地元の学生たちが水を提供したりとどこかアットホームな印象も受けました。また長崎の式典の方には被爆者代表のスピーチもあり、被爆者の方々の気持ちもきちんと汲み取られているという印象を受けました。なぜこのような違いがあるのか今の未熟な自分にははっきりとわかりませんがいつか理解できるようになりたいです。

今回のセミナーは自分にとって本当に大きな財産となりました。この財産を生かすも殺すも自分次第なのでこれからより深く学んでいきたいと決意を新たにしました。

（APU1 回生）

強いインパクトを感じた人やイベント

冨田すみれ子

爆心地から 500m の所に位置し、原爆投下により 1400 名余の児童と教職員が命を落とした城山小学校。原爆が投下された 9 日の早朝から平和祈念式典が行われ、国際平和交流セミナーのメンバーも出席した。私はここで出会った人々の言葉に強く心を打たれた。それと同時に、将来「伝える」仕事に就き平和を構築する事に貢献して行きたいという決意を固く持った。

式典には城山小学校の全校生徒が出席し、同

校校長の中尾美津子校長は式典の挨拶として次の様に述べた。

「69年前の長崎は復興に向け立ち上がった。ここ、城山小学校や長崎の土地には様々な人の思いが詰まっている。二度と戦争の悲劇を起こさず平和な日本を作って欲しい。そしてその礎を皆さんに作って欲しい。自分に何が出来るか考えてみて下さい。答えは沢山あります。平和な未来を作るという事はどのような事なのかを考え、自分なりの考えを伝えて行って欲しい。城山小学校の皆さんが伝える事に意味があり、それが世界に発信されるのです。」

この言葉は城山小学校の生徒のみならず、日本全国の若者に向けられている言葉であると私は感じた。中尾校長が述べていた様に、世界で唯一の原爆被爆国である日本の若者が平和や核廃絶のメッセージを発信して行く事に意味があるのではないか。平和とは何かと考えなければ分らない程平和な日本という国において、今一度「平和」とは何か、そして真の平和を実現する為に「自分たちに出来る事は何か」と考える事に意義があると私は強く感じた。

平和祈念式典では毎年、「子らのみ魂よ」が合唱される。「子らのみ魂よ」は1951年8月8日、少年平和像の建立に合わせて作られた合唱曲だ。歌詞では儚く散った1400名余りの児童と教職員、そして平和について語られており、平和とは反対の方向に歩みつつある現代の日本に問いかけている様にも思えた。当時命を落とした小学生と同じ年の小学生たちが歌う「子らのみ魂よ」には思わず涙が溢れた。

「"子らのみ魂よ"は私達の平和への願いであり、誓いでもあります。城山小学校の生徒として、私達は平和の大切さを伝え続けます。」

合唱の前に児童代表が言った言葉は頼もしく、自分も平和を発信して行かなければと強く感じる。

また、式典が行われた体育館の舞台横には校歌の歌詞が掲げられており、またその校歌にも平和のメッセージが込められていた。

「世界の平和ここにあり　もろ手をあげて呼ぶ空に　かわいい小鳩の声がする　わが城山に光あれ」

被爆した校舎は今では平和祈念館となって保存・公開されている。城山小学校、そして長崎・広島で起きた事を伝えて行くのも私達若い世代の役割であり、今後の日本の「平和」を構築して行く事も原爆被爆国の国民としての義務であり使命であると私は考える。

そしてまた自分自身に課された使命は、写真と文章により平和や戦争を伝える事であると、この広島・長崎での一週間で強く感じた。このセミナーでの経験や感じた事を忘れずに、ここを原点にして生きていきたいと思う。

（文学部4回生）

日本人の加害者意識

羽藤友里

私の中でとても印象深かったのは岡まさはる記念資料館での展示と山田拓民さんの戦争体験談、そして長崎平和式典でした。

資料館で見たものは私だけではなく、特に日本人学生にとっては衝撃的だったと思います。これまで学んできたことと異なる事実が存在し、自身がそのような日本の加害事実を知らなかったことに対して、すごくショックでした。それと同時に学校でそのような加害事実を教えてもらえないことに憤りをおぼえました。教員を目指す一人として、未来の大人たちに事実を伝えていく重要性を深く感じました。

また多くの被爆者の方々から貴重なお話を聞くことができたのは、このセミナーだからこそ実現可能であったように思います。特に山田さんのお話は印象的で、「被爆者に近づいてはならない」という間違った噂により山田さんの祖母が病院から追い出されてしまった事実の裏にアメリカ軍が関わっていた話や情報操作の話は正直信じられませんでした。彼の話のもう一つに「焼夷弾で被害を負った者も被爆者のような待遇を受けるべきだ」という話がありました。というのも、被爆者たちは「被爆時に一定の地域にいた者、原爆投下後2週間以内に入市した者、被爆の救護等を行った者及びそれらの者の胎児」という規定に沿っている者であれば原爆手帳が付与され、治療をすべて無料で受けることができます。ですが、つまり焼夷弾による影響を受けた者は何の保護も受けられないということなのです。今年もゲストとして参加してくださった近藤紘子さんとお話した際に「東日本大震災で被害にあった被爆者だけでなく津波被災者も同等の保護を受けるべきだ」と話した際のことも同時に思い出しました。被爆者の方々もそれ以外の被災を受けた方々もつらい経験をしたのであって、国の残された課題を発見することができました。

長崎での平和祈念式典は驚きの連続でした。入る直前にあった過去の長崎市長襲撃による検閲、悪天候に伴って手渡されたレインコート、子どもたちの合唱、そして何よりも被爆者の方による平和への誓い。子どもが毎年全世界へ平和の誓いを発信する広島式典とはまた違い、被爆者本人による訴えかけるようなスピーチは心に深く残りました。

本セミナーは様々な国籍および異なる専門分野から同じ平和を目指すみなさんと意見を交わすことのできる、とても有意義な時間でした。先生方、SCのみなさん、本当にありがとうございました。

（文学部2回生）

国際平和交流セミナーを終えて

森下陽介

この国際交流セミナーを終えて、平和という壮大なテーマで20年間行われてきたセミナーに参加できたことに嬉しく思う。私はまず、自分の歴史認識の甘さを痛感させられた。それは10日間を通して、常に新たなことを発見できた、とも言えるが、自分の受けてきた教育を否定されているようなことさえ感じた。

机上だけで受けてきた歴史では人並み以上に暗記できていても、それはただの暗記クイズでしかなく、歴史を通して考えるというレベルまで至っていなかった。特に日本人として、第二次世界大戦については多少の興味はあり、深く知る必要があると認識していたが、なかなか1人で消化できる課題ではなかった。

まず、第二次世界大戦、日本は敗戦国であるが、真珠湾攻撃や、アジア各国への侵略や非人道的な行為などなどから、私はひたすら日本は悪いと考えていた。原爆に関しても、しょうがない、されて当然、大戦の一連の中で起きたこと、などとあまり深く考えずにいた。

しかし、理由はいくつかあるが、今はそのような考えは一切もっていなければ、必要悪とは全く考えていない。セミナー前の自分の考えていることがあまりにも信じられないが、それと同時に、今の日本にそのような考えを持っている人がどれだけいるのか、と想像すると恐ろしい。また、大戦中のことに関して、アメリカに対して、憤りなど微塵も感じたことはなかったが、原爆を投下したこと、またその背景にあった経緯に対しては感じざるを得ない。

身内で広島・長崎の被曝者がいなかったことも今まで身近に感じていなかった理由の一つでもあるが、もし、祖父母があのとき、広島・長崎にいたとしたら、原爆を落としたトルーマンに対して、さらにとてつもない憤りを感じていただろう。そもそもこのことに関して、どうしても「アメリカが、アメリカが」といって、アメリカに責任をもってもらうことが先にきてしまうが、日本政府がその舵を切ることができていないことにも問題があり、日本政府が責任を果たしていない。これは長崎で被爆された谷口さんがおっしゃられていたことだが、深く納得させられた。

新たな発見ばかりであったセミナーであったが、これをきっかけに様々な平和問題に強く関心を抱くようになったので、日々の出来事に常に着目し、これからもしっかりと考えていきたい。

（理工学部３回生）

印象に残った人・イベント

森萌香

ひとつめは、広島・長崎市による慰霊式典です。毎年ニュースで目にするだけであった慰霊式典に実際に訪れたことが印象深かったです。例年は猛暑の中執り行われる式典が広島では大雨、長崎では強風の中で行われました。テレビで見ていた式典とは違いましたが、反戦の思いの強さは変わらないことを実感しました。今年は特に日本国憲法９条の改定が議論され、集団的自衛権の行使が容認された中、国民一人一人が戦争に対してどのように考えていくのが重要になってくる年だと思いました。

広島の平和公園は３年前に友人と訪れたことがありました。その際は友人と話しながら園内を歩き原爆資料館へ訪れただけでした。今回のセミナーでは近藤紘子さんに一つ一つのモニュメントの意味を聞いてから園内を歩いたので、違う空間にいるような気がしました。紘子さんから話を伺うと今まで聞いてきた原爆の被害の状況をより鮮明に想像することができました。実際に被害を受けた方から話を伺うのと本やパソコンからの情報では受ける印象が大きく異なり改めて戦争は繰り返してはいけないという思いが強くなりました。

親しみがある人からの話は深い説得力があります。若い世代に口づてに反戦の思いを広めていくことが大切だと感じました。原爆資料館にも肉声での被爆者の方々の訴えが残っておりその言葉にも重みがありました。

広島、長崎の両方の式典の特徴の違いを肌で感じることもできました。前者は約５万人参加という大規模な式典であり、献花を一人ひとり受け取り、祈りを捧げることで厳かな気持ちになりました。

一方長崎での式典は約6000人参加という広島に比べ規模が小さいですが、市民で立ち上げているという印象が強く感じました。中でも長崎の式典では高校生が司会として式典を進行していたことに驚きました。そして、毎年原爆に関連した症状で亡くなった方の人数を公表していた際に原爆の被害は今の世にも尚、尾を引いているのだと改めて感じました。

被爆者代表の城臺美彌子さんの平和への誓いというスピーチは主張が強く、市民による式典なのだと感じました。また、スピーチの内容によって拍手の大きさが全然違っていたことも日本の一般的な集会との違いを感じました。私自身が平和や政治に関する式典に出席経験がなかったので余計に強く感じたのかもしれませんが、普段日本人の習慣として発表者に対して分け隔てなく拍手を送るということが多いです

が、今回の式典では参列者の方々が内容に深く耳を傾け、吟味しているのだと感じました。

そして、岡まさはる記念館。行政が関わることなく、しかもスタッフの方々はボランティアで働いており、完全に民間で運営しているという点にまず特色を感じました。館長さんの「うちの記念館は長崎市が手掛ける情報誌や地図に記載されることがない」という言葉が印象に残りました。

確かに展示内容は日本の加害者責任を強く訴えかけるものであり、教科書では１ページにも満たない歴史が２時間見て回っただけでは目を通し切れないほどたくさん展示されていました。その展示は文章だけではなく写真も多く、当時の出来事を鮮烈に伝えてきました。銃を突き付け処刑を執行しようとする日本兵やアジアの国々が日本兵に攻撃され負傷した写真などもありました。その前後やどういう経緯でその写真が撮られたかの状況はわかりませんが、日本人の私が見ると申し訳ない気持ちになり目を背けてしまいたくなる内容が多々ありました。

日本の他の博物館や資料館、外国の博物館を訪れても自国の戦争被害についてばかり展示され、戦争下では市民や兵士は食料もなく貧しい生活を送っていたことや爆撃の被害、どのような拷問がされたかという内容のものが多く、自分の国が相手の国にどんな攻撃をしていたかを展示する博物館はあまりないので本当に珍しい記念館だと思いました。

長崎の原爆資料館で少し触れられていた戦時中における朝鮮出身者労働者に対する差別は奴隷のように働かされていたという記載もありました。当時は日本が朝鮮半島を植民地化していて、日本語を強制的に学ばされ名前も日本風の名前を持つように言われていたのにいざ日本で働くと朝鮮人だと差別され過酷な状況だったのだろうと思いました。

長崎の原爆被爆者の方々の差別についても展示されており、同じ症状でも日本人と朝鮮人では全く手当が異なっていたことを知りました。今までは戦争中や戦後に苦しい思いをしてきた日本人の生活ばかりを学んできました。中国残留孤児やシベリアに拘束されたまま日本人がいたことも学びましたが、反対の立場の外国人の人について自分は考えていなかったことがわかりました。朝鮮や中国に対しては日本は加害者の立場であることは大々的に報道されてきたので知っていましたが、他のアジアの地域への日本軍の侵略行為はあまり知らなかったのです。

岡まさはる記念館では豊富な資料が展示されていて新しい情報が多すぎて頭の中で整理することが大変でした。改めて無知は恥ずかしいと感じたので歴史をもっと学び、現在の世では過ちを繰り返さないようにしようと強く思いました。

（経営学部４回生）

戦争と平和の過去、現在、未来

山口万智

今回の旅は先生方やSCさん方、ピースファミリー、その他の参加者、みな本当に素敵な方たちに恵まれ、充実した中身の濃い旅をすることができた。自分一人だと日本人の視点でしか物事を見ることができなかったので、「戦争と平和」という一つのテーマでも本当に様々な視点から捉え、それらの第一線で活躍している方々のお話しを聴き、さらに様々なバックグラウンドを持った多国籍な方々とディスカッションをすることによって、視野を広げることができた。

とりわけ、君島先生が「平和」を語る上では「過去／歴史」、「現在／理論」、「未来／政策」と時間軸に沿った、これら３つの要素が欠かせな

いとおっしゃっていたことに非常に強い共感を覚えた。その中でも、このセミナーの主なテーマであった「過去 / 歴史」すなわち歴史認識と、個人的にとても興味深かった「未来 / 政策」すなわち核廃絶のための国際的な動向について述べる。

まず「過去 / 歴史」にかかわる歴史認識についてだが、私は日本で生まれ日本で教育を受けてきたため、太平洋戦争で日本が二度の原爆の惨禍にあったことを知っていたし、平和学習で被爆者のお話しを聴いたこともあった。しかし、15 年戦争において、大東亜共栄圏、南部仏印進駐に代表される日本の加害行為の状況はあまり知らなかった、というより自身のこれまでの経験により、日本が東南アジアで行ってきた行為は重大なことではないと思っていた。日中、日韓関係は歴史認識などをめぐって今も緊張状態にあり、他の参加者は中国や韓国の学生から、日本が過去に行ってきた残虐な行為を責められたと言っていた。

しかし逆に私はインドネシア出身の学生に戦時中、日本がインドネシアを侵略したことをどう思っているのか聞いても、何も思っていないとしか答えてくれず、さらにマレーシアに行った際も、地元の人が日本人の私に日本が侵略していた跡地のことを快く紹介してくれたこともあった。これらの経験から、日本は本当に欧米列強の植民地であった東南アジアを解放したのだと思っていた。

しかし、まず初めに国際平和ミュージアムを見学し、日本がマレーシアに侵攻した様子の写真などを見て、何が真実か分からなくなり、困惑を覚えた。続いて行われた神直子さんの講演での、夫を亡くしたフィリピン人女性が彼女に向かって言った「日本人なんて見たくなかったのに何であんたはフィリピンに来たんだい！」との言葉が印象的だった。講演の後、個人的に上記の私自身の体験を話し、質問をしてみると、「そういう話は、何年も友達づきあいをしているフィリピン人ですら、口を開こうとしない。私もその友達とお酒を飲んでいて、初めて語ってくれた」とおっしゃっていた。

この話を聴き、私が経験したインドネシアやマレーシアの事例では、苛めなどでも、苛められた側はなかなかその話しをしないのと同じで、それほど深刻だからこそ、口を開こうとしなかったのかなと思い、また同時に、過去の話しとして収束していることをわざわざ掘り起こしてまで対立するのを避けたかったのかなとも考えた。

長崎で見学した岡まさはる平和資料館では、日本が行ってきた加害の歴史がありのままに展示されてあった。中でもフィリピン人女性の証言が言葉だけであったが、とても生々しく、字を目で追うだけでも目を覆いたくなったほどだ。アメリカ人の多くが原爆を正当化し、原爆の惨状を知らないことを遺憾に思っていたが、日本でも同じように、被害の面にのみに焦点を当てた歴史教育がなされていて、私はこれまでそれを鵜呑みにしてきたのだなと思い、恐ろしく感じた。この被害の面だけに偏らない歴史認識をした今、初めて私は「現在 / 理論」、そして「未来 / 政策」のことを考えられると思う。

次に「未来 / 政策」について、とりわけ核廃絶への国際的な動向について述べる。私は現在、大学のサークルで模擬国連をやっている。去年は核軍縮の会議に参加し、スウェーデン大使を務めた。スウェーデン大使をやろうと思った理由は、やはり、核兵器は非人道的なものと思っていたため、核保有国では肩身が狭く、相当な弁舌な人でないと務まりきらないと考えたために、当時新アジェンダ連合に属していたスウェーデンの方が核保有国より簡単だろうと考え、スウェーデンを担当した。スウェーデン大使として、インド、パキスタンを含む南アジアを非核兵器地帯とするのが、その会議でのトッ

プ目標であった。しかし、結局交渉の末、インド、パキスタンともに、非核兵器地帯に含めることができなかった。このように、国際社会のジレンマを疑似的ではあるが体験したことにより、被爆者の話しを聴き、核廃絶をしなければいけないと思っても、それが偽善の塊としか思えないでいた。

とはいえ、核廃絶のために唯一残された方法として、現在国際社会に蔓延している「核の傘による平和」という平和の理論をも越え得る何か新しい平和の理論というものがあれば、核廃絶が現実のものと成り得るのだろうとは考えていた。しかし、私にはその平和の理論は思いつきもしないし、思いついていたら、世界はとっくに平和になっているはずである。

しかし、RECNA の中村桂子先生の講演を聴き、核廃絶は実現可能なのだと思うようになった。中村先生のプレゼンの構成が、これまでたくさん平和学習をしてきた長崎の大学生へのアンケートを基に、私のような考え方をしている人目線で語りかけていたので、訴えかけてくるものが伝わった。また、去年スウェーデン大使を務めた時は、非核兵器地帯の本質をあまり理解せずに、南アジア非核兵器地帯構想を掲げていた。しかし、核保有国以外の国のみで非核兵器地帯を作ることは、単なる現状維持ではなく、「核の傘による平和」という理論を否定し、核保有国に対し、圧力をかけているという面において、意味があるということが分かった。そのように考えると、私がスウェーデン大使として掲げた文言が、妥協の塊となってしまったと思っていたが、少なからず意味のあるものだと思った。

また、核軍縮を語る上で、私は NPT の不平等性が大きな問題だと思い、この不平等をなんとかして、平等にしなければならないと思っていた。しかし NPT の問題点について、核保有国の動向を待っていても、なかなか話が進まないので、非核兵器地帯構想を核を持たない国同士で進めるという風に、核軍縮へ向けた道は一つではないということも分かった。この講演を聴いたことにより、私自身これからは偽善ではなく理論的に考え、核廃絶に向けて考えていくことができると思う。

以上のように、この旅で、「過去 / 歴史」から「未来 / 政策」まで、本当に様々な切り口から学ぶことができ、新たな興味も見つかった。この旅で学んだことを活かし、これからも、核廃絶の実現可能性について、より一層知識をつけ、学んでいきたいと思う。九日間一緒に引率して下さった先生方、SC さん、参加者のみなさん、ありがとうございました。

（APU2 回生）

強いインパクトを感じたこと

Jeon Haelin

初めてこのプログラム生活を送りながら、私が最初に最も影響を受けたのは、日本人の謝罪でした。私が韓国に滞在しながら、韓国で教育を受けていた中、日本人は自分たちが起こした戦争による加害については認めず隠そうとする、と思っていました。しかし、このプログラムが進行していた 10 日間、多くの方々の謝罪の涙を見て、彼らは本当に胸の深さ、日本が戦争中にしてきたことが悪いことであったということを知っていたし、今の若い世代の人たちも知り、再びそのようなことが起こらないように反省しなければならないと言っていました。実際に自分が今まで生きてきた中で、そのような悟りを得られず、自分たちのような悪い行動を正当化させようと人を見て私の代わりに申し訳ないと涙を見せ謝罪をしてきた友人もいました。

そのような人たちを見ながら、私は私達韓国の人を顧みるきっかけとなりました。

私が育ってきた韓国では、今まで日本が悪いことをしてきて、今でも反省をしていない悪い国だと教えられてきました。そして私の友人もそのように言っていました。しかし、そのような認識がされてしまった理由は、一人でも悪いように言う人がいれば、それに対してメディアが膨らませ報道し、その人の意見がすべての意見のようになってしまったからです。これにより、私は一人がすべての意見を代表するものではなく善良な人であれば、悪い人もいるものなのに、なぜ今まで少数の意見のために良い心を持っていた人たちまで誤解されて苦労していることに気付きました。

これから一人一人の意見をよく聞いて見ることができるよう、両国の円滑な会話が必要だと感じました。そして、悪い意見を持っている人がこれ以上強調されないようにしっかりとした教育が行われることの必要性を感じました。普段日本が第二次世界大戦についての真実を隠してしっかりとした教育を学生にさせなかったことは知っていましたが、実際に私はプログラムに参加している複数の友人との会話をしていた時に、本当に日本の教育が間違っていたことを感じ、またその決定的なきっかけがありました。日本人の友達の中に、留学中偶然にドイツの友人とバスケットボール対決をする機会があったそうです。その後周辺の友人が「あれは世界大戦である。」というふうに言ってたそうです。日本の友人は、何の反応もなく、ああそうなのかと言っていたが、ドイツの友人は本当に大きく怒って、それを過去のものであり、絶対的な戦争ということは二度と起こらないだろうと言っていました。

ドイツは子供の頃からドイツが戦争中どのように悪いことをしており、ナチズムがどのように悪いもので、再びそのようなことが起きてはいけないと学んできたそうです。しかし、日本は、誰も子供の頃から、学校や大人に軍国主義がどのように悪いもので、戦争中に、自分たちがどのようなことをしたのか教えなかったようです。

長崎で岡まさはる記念館に行った時、日本がどのような犯罪を犯したのか展示されていました。私はその内容を見て子供の頃から教科書で見てきた写真でありたくさん見てきたので、ショックを受けませんでしたが、日本の友人は、そこに展示されている写真を見て、これはどのような写真か私に尋ねることがあり、本当に大きな衝撃を受けました。

それを見て、私は本当に子供の頃からの教育がいかに重要かを悟り、将来本当にしっかりとした教育が行われば、戦争という悲惨なことが繰り返されると思いました。隠し、自分たちが被災した部分のみを打ち出し、お互いが被害者だと主張するよりも、自分たちが犯す罪は、まず認めて、他人の痛みを守ってくれた次に私たちも、このような痛みがあるということが、韓国人としての唯一の願いです。

確かに２つの原子爆弾により、大きな痛みを経験して大きな被害を受けたことは明らかです。しかし、その分、他の人に与えた痛みについても知るべきだと思います。長崎で永井先生が言った言葉の中で記憶に残った言葉があります。原爆が天罰だと言う人がいるが、それは世界大戦という人類の罪の代価として、日本で唯一の聖地浦上が選択されたと、永井先生は言いました。私も罪のない市民の命の奪う原子爆弾は悪い行動だと思います。したがって、再び、私たちにこのようなことが二度と起こらないように、今の世代を生きている私たちが努力しなければならないと思います。

（APU1 回生）

平和を願う人々の叫び

金鉉敏

今回の旅で最も感じたことは「皆、平和を願っている」ということである。観光客やセミナー参加の学生など、数多くの人々にインタビューを行い、様々な意見の聞くことができたが、皆が願っている、強く感じている一つの共通点は「平和」であった。

全ての人が学んできた歴史や知識、生きた環境は異なり、国籍や言葉も異なる。しかしながら、お互いに「平和」という言葉で一つになり、共感し、調和していることを見て非常に感動を受けた。特に、観光客の方々、セミナー参加の学生、ヒバクシャ、活動家、団体など、各々の役割や立場、原爆に対する考えなどがそれぞれであるが、平和を望み、学びながら、ときには涙を流しながら、平和について考えていくことを見て、平和への至る道が遠くないと感じた。

広島・長崎の原爆を単に過去の歴史だけで考えて終わってはいけない。いつでも平和は崩れることができるものである。そのため、我々は今回の平和セミナーで学んだ知識、心から感じた感情などを忘れずに、これからも平和に意識を持ち、平和を守っていくことは大切なことであり、学んでいくものであると思う。

（産業社会学部３回生）

岡まさはる記念長崎平和資料館での衝撃

Platt Maria Rose

岡まさはる記念長崎平和資料館で私は大きな衝撃を受けた。アメリカ人であるのにもかかわらず高校の時まではほとんど日本の歴史にしか触れずにいた私は、他のアメリカ人の学生と違って今回のプログラムを通して日本での原爆の歴史にあまり驚くことはなかった。しかし、岡まさはる記念長崎平和資料館で見たことに私の心は激しく動かされた。それは日本の歴史でもアメリカの歴史でも触れることができない、日本が第２次世界大戦でアジアで行った残虐行為についての説明や写真であった。

私の近くにいたビッキーさんは「これは奴隷制度だ…、これは奴隷制度だ」と繰り返して呟いていたが、私はうなずくことしかできなかった。もう一人の日本人は「日本のことが嫌いになってくる」と言っていたが、私は一切このような気持ちにならなかった。

その理由は、現在のアメリカの中東での行動を考えることしかできなかったからである。現在のアメリカの行動に関するはっきりしたニュースはあまり流れていない。しかし、把握できているところからいうとアメリカは、日本がアジアで行った残虐行為以上に残酷なことを中東でしていると考察できる。これを考えると私はアメリカ人であることをやめたくなる。一応アメリカが出身国である私は、アメリカの行為を大変恥ずかしく思う。

しかし、私はアメリカ人をやめることができたとしてもやめるべきではないと、次の日にビッキーさんと長崎大学の方の会話を通して思った。アメリカ人であるからこそ平和のためにできることがあるからだ。例えば、最終的に中東における行為の決断を下すリーダーをアメリカの選挙で投票したり、アメリカ内では普段触れることのできない情報や考え方をアメリカ人である家族や友人に教えてあげることができる。もちろん、投票は国籍がなければできない。平和を求める者がアメリカから逃げていくとアメリカには戦争主義の人しか残らない。また、海外の教育をアメリカ人に伝えるのは外国人で

もできるかもしれない。しかし、外国人から教えてもらったら、見下されているような感覚になる可能性がある。その同じ内容を同じアメリカ人である私から聞いたら、悲しい話であることは変わらないが、もっと素直に受け入れることができるのではないかと思う。私は決してアメリカの行動を正しいとは認めないが、アメリカ人としての平和な世界への役割を果たそうと思う。

補足―紘子さんの話

広島と長崎の国際交流プログラムの１日目に、私は被爆者である近藤紘子さんの話を聞く機会が与えられた。近藤さんは生後８ヶ月の時に爆心地から1.1㎞の所で被爆された。そして、原爆によって顔が恐ろしい様子になっていたお姉さんたちにかわいがられて育てられた近藤さんは、小さいころに原子爆弾を落とした人に対して大変怒りを抱いていた。そして、いつか必ず自分が爆弾を落とした人と会って彼を蹴るなり、パンチするなり、噛み付くなりして敵を討つつもりであった。

実際に彼女は10歳の時に原爆を落とした兵士の一人と会う機会があったが、最初はそうしたい気持ちであふれていた。しかし、原子爆弾を落とした彼が広島に対してしたことによって苦しんでいたことを知り、彼が広島を思い流す涙を見て、近藤さんの気持ちは一瞬にして180度変わった。10歳の彼女は彼に対して優しい気持ちになるだけではなく、自分の心の中の汚いところや兄弟に対して行った乱暴な行動を思い出した。そして、近藤さんが彼に対して抱いていた怒りを思い出し、反省した。その時、彼女は話すことができなかったが、実際に彼の手を握った。最終的には彼を嫌ったことに関して謝りたい気持ちであふれた。

私は、彼女の話を聞いて思った。戦争の存在に対する怒りはどうなのか？あるべきものなのか？と考えた。もちろん、戦争は絶対に存在するべきではないという考えは変わらない。しかし、戦争がなければ、世界は平和になるのか？私はそんなわけではないと思う。

『明鏡国語辞典』による「平和」の定義は「戦争や紛争がなく、世の中が穏やかな状態にあること」であったり、「心配事やもめごとがなく、おだやかであること」である。戦争の欠如は平和の半分にも満たないようだ。しかし、これは私に希望を与える。それは、身の回りでおだやかな状態を保つために自分ができることをすることによって、世の中をもっと平和にすることができるからだ。

（国際関係学部１回生）

強いインパクトを感じたこと二つ

揚洋

まず一つ目は、長崎でNPO法人に経営された非常に小さい博物館を見学になった時だった。正直、広島平和ミュージアムを勉強したとき、ちょっとがっかりした。なぜなら、原爆が投下された前の広島市民への描写はあまりにも賛美ばかりだったため、まるでそれらの市民たちは何らかの形で当時大日本帝国の侵略戦争に力を貸していなかった口調で書いてあったからだ。

でも、岡まさはる記念館で勉強した時、全く逆のことが書いてあった。広島での反応に対し、むしろ日本がどのぐらい犯した罪を日本人の学生と一緒に勉強したかったが、本当にそういう機会が目の前に置かれていた。日本人の学生と一緒にこの戦争を異なる視点で考察する場合、私は満足感は感じず、むしろ悲しくなる一方だった。

学生の中にお爺さんが戦場で亡くなられた日本人学生がいた。岡まさはる記念館では、つら

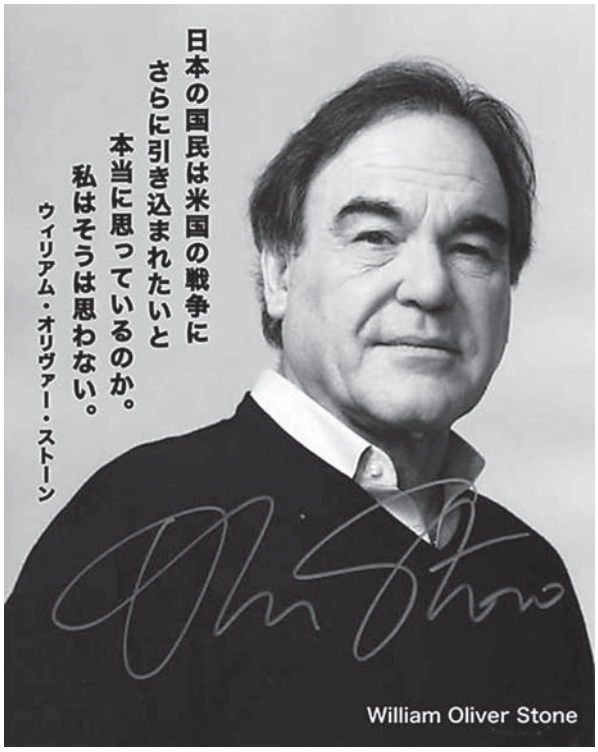
くても、一通り見るという覚悟が彼女の顔に出ていた。だがその時初めて私が何か気付いた。それは、先代のミスや罪などを今の世代に持ち込まないでほしいということだ。

戦争認識やなんやら、もういい。二度と戦争を行わなければ、それはいい。先代が犯した罪は今の世代にも苦痛を与えるのがあまりにも理不尽と言うべきかわからないが、その時点で私が考えたことは、歴史は決して忘れてはいけないものの、どの場面でも持ち上げる必要はない。忘れるように覚えよう。

次は長崎での慰霊式に、被爆者による発言が安部首相を猛烈に批判し、現在取り組む中の政治問題、例えば集団的自衛権のことまでとりあげ、強い姿勢で批判をした時だった。

正直私はデモクラシーをあまり信用していない。結局のところ、昔の戦争ゲームみたいに今の政治は大人のある種のゲームだと思っていた。でもその時はじめて自分のこのような思いは真剣に政治を見守っている一般市民にとって失礼な考え方だとわかった。デモクラシーはなんやかんやで役に立っているのだ。むしろなければいけない存在だという認識に長崎での慰霊式をきっかけに変わった。

（法学部３回生）



第６章　結びと資料

20年の間には山あり、谷あり、色々なことがありました。軍役を終えた韓国人が長崎での打ち上げパーティで痛飲したために、救急車で病院に運び込まれたこと、米国人が酔っ払ってホテルのドアや窓を壊してしまい、弁償金を支払ったことなど、いくつかの事故が起こりました。しかし死傷者を伴うような大事故にはいたらず、総計590名ほどの参加者が無事に旅を終え、プログラムの所期の目的を達成することができたわけです。

ただし残された課題も大きいことも率直に見ておく必要があると思います。まずは中心になって運営していただく後継者をしっかりと育てる課題です。ノウハウを継承するに留まらず、現実的課題にあわせて、これを創造的に発展させ、教学的な魅力をいっそう輝かしていく必要があるでしょう。

とともに、このプログラムに参加するための費用負担には、日米間で巨大な格差があることも見ておかねばなりません。立命側から参加するばあい、5-6万円の負担ですみます。しかしAUを通して参加しようとすると、往復の航空券代を含めると、一人あたり60万円ほどの費用負担が発生します。10倍の格差があるわけで、AU側の参加者数がなかなか安定しない一因がここにあります。

これまでのところ篤志家からの寄付や無償のボランティア活動などで、しのいできたのが実情ですが、広範な人士から広く奨学資金を募るなど、本格的な取り組みが必要な段階に入っているように思われます。

本科目の活動を紹介したいくつかの論稿がありますので、最後に列記してきます。

(1) 4回目の旅（1998年）の際、通訳を勤められた東海明子さんが「『アクティブ・ラーニング』の力――立命館・アメリカン・マーシャル諸島大学の原爆学習の旅」というレポートを書かれ、『平和をどう展示するか――第3回世界平和博物館会議報告書』1999年3月、175 － 179ページに掲載されました。

(2) 7回目の旅（2001年）については、藤岡惇「被爆地で世界の学生とともに平和づくりを考える――日米2大学が共同開発した『平和の旅』7年間の教訓」『長崎平和研究』13号、2002年4月がレポートしています。

(3) 12回目の旅（2006年）については、藤岡惇「原爆の体験学習・対話・参画が日米の学生をどう変えたか――日米2大学が開発した『平和の旅』12年の教訓」『立命館平和研究』8号、2007年3月。

(4) 14回目の旅（2008年）については、藤岡惇・乗松聡子「被爆地の博物館をベースに日米カナダの学生は何を学んだか――国際平和交流セミナー（広島・長崎プログラム）の魅力を考える」があります。この論稿は『第6回国際平和博物館会議報告集』2009年3月、に収録されています。

巻末資料 1
2014 年度の本科目のシラバス

授業の概要と方法

1995 年の原爆投下 50 周年を記念して、米国の首都ワシントンにあるスミソニアン航空宇宙博物館が原爆展を企画したところ、米国各界の批判を浴び、中止されるという事件が起こりました。　広島･長崎への原爆投下と「核の時代」の幕開けが何を意味するかについて、米国民とアジアの人々、日本人、そして被爆者の間に、深刻な認識ギャップがあることが明白となったのです。この時期、同じワシントンにあるアメリカン大学では、被爆 2 世の日本人留学生とピータ・カズニック准教授とが「広島学習の夏期講座」を計画していました。この夏期講座が軸となって、アメリカン大学で独自に原爆展を開き、広島市長はじめ、多数の被爆者を招くとともに、被爆 50 周年式典のために多数のアメリカン大生が来日したことが、このプログラムを始めるきっかけとなりました。それ以来毎年、アメリカン大学と本学とが共同で本プログラムを企画・実施し、今年で 20 周年、20 回目の開催となります。

アメリカン大学を窓口に海外からは 15 名が参加しますので、立命関係の受講生数は 15 名（アジア太平洋大学の学生 4 名ほどを含む）とします。別に過年度の参加学生 4 名ほどが、リーダー役として同行し、経験の伝承と実務を担ってくれます。アメリカン大学で原爆投下を研究してきた歴史学者のピータ・カズニック教授、国際関係学部の君島東彦教授、経済学部の藤岡惇教授が旅行団を引率します。カナダで平和教育団体を主宰する乗松聡子さんが全行程の通訳を務めます。また国際関係学部の山根和代准教授が「英語で学ぶコース」の学生を引率して、同一の日程で旅行されるので、適宜合流し、8 月 6 日と 9 日の被爆式典に参列し、広島市長をはじめ多数の被爆者と交流します。

20 世紀において米国人にもっとも深刻な影響を与えたルポルタージュのトップとして米国のジャーナリストが選んだのが、ジョン・ハーシーが 1946 年に書いた『ヒロシマ』。この本を参加者全員の共通テキストにします。このテキストに登場する最年少の赤ん坊が近藤紘子さん。25 名の原爆乙女をニューヨークに招き、マウント・サイナイ病院で整形手術をうけてもらう運動を推進した谷本清牧師の娘さんで、アメリカン大学の卒業生でもあります。近藤さんに全行程同行してもらい、69 年前に被爆者がさまよった道と建物の跡をたどります。

受講生の到達目標

日本国憲法の前文には「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」と書かれていますが、「北朝鮮や韓国･中国の『公正と信義』に信頼などできるのか」。「隣国に侮られ、尖閣･竹島と、領土を奪われるだけでないか」。「米軍とともに戦争ができる国に変えておいたほうが、結果的に日本の権益も平和も守れるのではないか」という意見の人が増えています。3 つの被爆地――ヒロシマ・ナガサキ・フクシマをかかえる日本の地で、世界の若者とともに、「戦争で平和が創れるのか」、「核の時代の戦争は何をもたらすのか」について、深く考えてもらいたいと思います。

「原爆学習の旅」とは、被爆した死者の無念の魂を慰霊し、自らの生き方を問う旅でもありますから、「平和巡礼の旅」だということもできます。この旅のなかで、議論し、解明したいのは、つぎの 3 つの問題です。広島の平和公園には、「安らかに眠って下さい、過ちは繰り返しませぬから」という碑文がありますが、①「過ち」とは何ですか。②「繰り返しませぬから」という

一文の主語は誰ですか。③「繰り返しませぬから」という誓いは実現可能ですか、どうしたら実現できるのでしょうか、という３つです。

より具体的な調査と討論の柱としては、①原爆雲の下で何が起こったのか、②米国はなぜ２発の原爆を立て続けに庶民居住地域の上に投下したのか、③「核の時代」とは何か、④北東アジアを舞台にする憎悪と戦争の悪循環を克服し、「核兵器」を廃絶し、国際理解と協力を促進するには何をすればよいのか、⑤原子力発電をどう評価したらよいのか、などが考えられます。外国の若者との交流を通じて、臆せずに英語で会話ができる力量を高めるとともに、心のつながる終生の友人をつくっていただくことを目標とします。

「原爆投下は、対日戦争を早く終わらせるための必要悪であったという通説は誤っている。そうではなく、ポツダム宣言の条項を操作することで日本の降伏時期を引き延ばし、対ソ威嚇と人体実験による情報収集のため原爆を投下するまでは日本の降伏を許さなかったのだ」とする映画を、米国側引率者のカズニック教授は、著名な映画監督のオリバー・ストーンさんとともに制作し、世界的に大きな反響を呼び起こしました。彼の主張についても鵜呑みにせず、原爆投下の真実を探究する機会にしてほしいと思います。

授業外学習の指示

事前の予習レポート、事後の最終レポートと、２回のレポート作成が必要です。作成のため国際平和ミュージアムの１階にあるメディア資料室を活用してください。

優れた通訳でもある乗松さんにほとんどを訳してもらいますので、平和の問題や体験型の学習に強い関心がある学生ならば、英会話が不得意でも参加できますし、参加を歓迎します。

教科書

『ヒロシマ』ジョン・ハーシー著　法政大学出版局　翻訳　谷本　清

参考書

『原発とヒロシマ――「原子力平和利用」の真相』田中利幸、ピーター・カズニック　岩波書店（翻訳　乗松聡子）

『広島・長崎への原爆投下再考』木村朗、ピーター・カズニック　法律文化社（翻訳　乗松聡子、コラム　藤岡　惇）

『ヒロシマ、60年の記憶』近藤紘子　リヨン社

Oliver Stone & Peter Kuznick, Untold History of the United States

Gavan McCormack & Satoko Oka Norimatsu, Resistant Islands：Okinawa Confronts Japan and the U.S

『オリバー・ストーンが語るもうひとつのアメリカ史』オリバー・ストーン＆ピータ・カズニック　早川書房　全３巻、とくに第１巻「２つの世界大戦と原爆投下」の熟読を

『オリバー・ストーンが語るもうひとつのアメリカ史』オリバー・ストーン＆ピータ・カズニック　角川映画　全５巻のうち、とくに第２巻の鑑賞を

『沖縄の怒――日米への抵抗』ガバン・マコーマック＆乗松聡子　法律文化社

備考　2008年度と2009年度にこの旅行団が主催して長崎の原爆被災者協議会の会議室で開いた公開市民講座の成果が本になりました。それが最初の本です。広島市立大学平和研究所でおこなった講演会の記録も「岩波ブックレット」の１冊として出版されました。それが２つめの本です。この旅行に19回連続で参加してもらっている近藤紘子さんの自叙伝が出版されました。それが３つめの本です。

オリバー・ストーン監督といえば、ベトナム戦争を描いた『プラトーン』、『7月4日に生ま

れて』を制作し、アカデミー監督賞を2度受賞した米国映画界の巨匠。本科目の引率者のピーター・カズニック教授がオリバー・ストーン監督とともに制作した「オリバー・ストーンが語るもうひとつのアメリカ史」の10エピソード（各エピソードは50分に短縮）は、NHKのBS-1で繰り返し再放送されるなど、世界的に大きな反響を呼びました。55分のフルバージョン版が全5巻に組みなおされて、角川映画から発売されています。とくに第2巻の鑑賞を薦めます。

参考になるWWWページ

国際平和交流セミナーのホームページ：http://www.ritsumei.ac.jp/liberalarts/wp/

藤岡　惇のホームページは、http://www.peaceful.biz/　藤岡の書いた論文を読むことができます。

このプログラムを共催しているアメリカン大学核問題研究所（ピーター・カズニック所長）のHPはhttp://www.american.edu/cas/history/institutes/nuclear-studies.cfmここからのリンクで、当時高校生だったKai Kean君の制作した2009年の旅の記録映画や各年の写真集、アメリカン大学側の受講生募集パンフレットなどを観ることができます。カズニック教授の参加は、今年で19回目です。

過去8年間、通訳とカナダ側コーディネイタを務めていただいた乗松聡子さん（Peace Philosophy Centreの代表、Japan Forcusの編集委員）のHP http://peacephilosophy.com には参加者の感想が掲載されています。

中沢啓治夫妻、スヌーピーの団旗、後列には田中利幸さん（2011年8月4日夜）

神戸新聞

19　2002年（平成14年）7月22日　月曜日

この幼い命を

アンティ紘子と国際養子

●●4

父、谷本清

被爆者支援に奔走

私は生後八カ月の時に広島で被爆しました。私たち母子は建物の下敷きになりましたが、母は私を抱いて守ってくれました。近所で生き残った乳児は私だけだったとも言われました。

父の谷本清は外出先できのこ雲を見て、家に戻る途中、建物の下敷きの人たちを助けられず、大変悔しい思いをしたそうです。

牧師の父は、原爆で苦しむ人たちのために働きづめ。米国の人たちに海の向こうから孤児たちを精神的にサポートしてもらう精神養子運動もそのひとつでした。

届いた英語の手紙を訳してもらいに、たくさんの孤児たちが教会にやって来ました。なぜこの子たちには親がいないのかなと思いました。

十歳の時です。父が被爆者への支援を募るために渡米した際、母と私たちきょうだいは、ペンシルベニア州にある父の知人の作家パール・バックの自宅で夏休みを過ごしました。

びっくりしました。何人もの養子たちがバックのことを「マザー、マザー」と呼ぶんです。血がつながっていないのに、こんなに親密なんてすごい。初めて養子というものを知りました。

その時、将来こんなことをしたいと思ったのかもしれません。二十代に米国留学し、児童心理学と社会学を専攻し、養子や妊娠中絶の制度などを学びました。

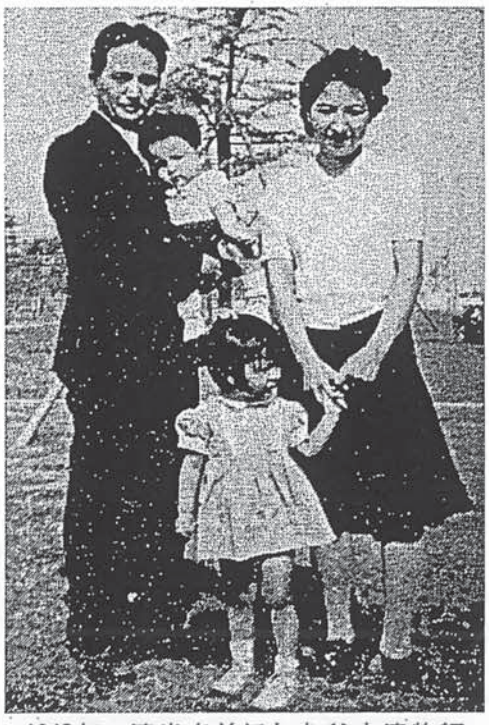
一九六九年に帰国。父は牧師という職業柄、いろんな相談が来て、その中に養子の話もありました。

やがて私が事務的なことをすべてするようになり、機会があるたびに養子縁組のお手伝いをするようになりました。

そうして児童相談所や養護施設、産科医などから、恵まれない子どもたちの相談を受けるようになっていきました。結局、父の仕事がつながっていったように思います。

（国際養子ボランティア）

谷本清氏　元広島流川教会牧師。米作家パール・バック、編集者ノーマン・カズンズらと財団法人ヒロシマピースセンターを設立。一九五五年、顔などにやけどを負い「原爆乙女」と呼ばれた女性被爆者二十五人の米国での治療を実現した。八六年死去。業績をたたえ谷本清平和賞がつくられた。



1948年、渡米を前にした谷本清牧師（左）と家族。右から2番目が近藤紘子さん

巻末資料 2-1　（『神戸新聞』2002 年 7 月 22 日）

神戸新聞

11　2002年（平成14年）7月29日　月曜日

この幼い命を

アンティ紘子と国際養子

●●5

米ペンシルベニア州フィラデルフィア近郊の作家パール・バックの自宅はそれはそれは広い敷地でした。農場のようになっていて、野菜をつくったり牛を飼ったり。美しいバラ園もありました。

パール・バック　一八九二年生まれの米国人作家。幼少期から前半生を中国で過ごし、小説「大地」など中国を舞台にした多くの作品を著した。一九三八年ノーベル文学賞を受賞。四九年に孤児のための施設「ウエルカムハウス」を開設。これまで同ハウスは約六千人の養子縁組を手がけた。七三年死去。

パール・バック

血縁なくても「家族」

一九五五年、夏休みをここで過ごした十歳の私は、バックの養子の中で、一歳年下のヘンリエッタという黒人少女と仲良しになり、毎日、姉妹のように遊んだり、けんかしたりでした。

バックは七人ほどの養子を持ったほか、養父母が見つかるまで孤児たちを養育する「ウエルカムハウス」という施設も開いていました。朝鮮戦争で米兵と現地女性の間に生まれた子どもなど、戦争の犠牲者たちも多くいました。

バックが肌の色の違う子どもたちと家族をつくっていることに、私は小さかったので驚くばかりでした。でも、ヘンリエッタたちと楽しく生活するうち自然に「これは家族だな」と思えてきたのです。

十八歳でバックと再会しました。米国留学の最初の一年はペンシルベニア州にいたので、週末にはバックの家を訪れ、また〝子どもたち〟との楽しい日々が帰ってきました。

とても見たい映画があって、私たちはバックに連れて行ってもらいました。七十歳を過ぎた文豪に車を運転させて。

映画は二本立てで、最初はシャーリー・マクレーンが結婚と離婚を繰り返す喜劇。すると途中でバックが怒り出し、お目当ての映画の前に連れ戻されました。

「この石頭」と私たちはぶんぶんでしたが、翌朝バックは「きのうはごめんね。でも結婚というのは、もっとシリアスなのよ」と。

はっとしました。養子たちの親にはそれぞれ事情があります。また、障害のある子どもを持ち、離婚をしたバックの険しかった人生が思い出されたのです。

（国際養子ボランティア）

紘子さんが米国留学中に撮影したパール・バック

巻末資料 2-2

神戸新聞

21　2002年（平成14年）8月5日　月曜日

この幼い命を

アンティ紘子と国際養子

●●6

母よ嘆くなかれ

この世に生まれた意味

小窓から午後の光が差し込む部屋で二人でお茶を飲んでいた時です。パール・バックが急にあらたまって「戦争があったら犠牲になるのは子どもだよ。孤児はもちろん、兵隊がつくった子どもも同じだということを忘れないで。そのために何かをしてほしい」と話し始めました。

大学生だった私は、何げなく聞いていたのですが、だんだんと心に響いていくようになります。

バックは中国に住んでいた一九二〇年に女の子を出産しました。言葉をしゃべる年ごろになるまで気が付かなかったのですが、娘には重い知的障害があったのです。

この子はどこかおかしい。あちこちの医者を訪ねましたが、治療する方法は見つからず、いったんは落胆しますが、「この子はこの子の幸福を」と、米国各地の養護施設を回って、娘のために最適な施設に預けたのでした。高額な医療費などのために、バックは小説を書きに書いたそうです。

「娘のような子は世のため人のために何もできないと人たちは言う。しかし、それは違う。私がノーベル賞をもらえるような人間に育ててくれたのは、ほかの誰でもない。愛する娘だ。この世に生を受けた者は必ず意味がある」。小窓の部屋でバックは言いました。

バックは娘のことを五〇年になって初めて女性雑誌で告白しました。それを出版したのが「母よ嘆くなかれ」です。

バックが多くの養子を引き取ったことには、娘の存在が影響していたと思いますが、本人が自ら語ることはありませんでした。

バックは私が帰国して四年後に八十歳で亡くなりました。美しい庭でバラづくりをする姿や、網掛け帽子ではちみつをとる姿が思い出されます。エレガントな人でした。そして、過去がどうであれ、親がどうであれ、この世に生まれた命に意味がないものはない、と教えてくれた人でした。

（国際養子ボランティア）

米ペンシルベニア州の自宅前のパール・バック（右）と再婚した夫のリチャード・ウォルシュ氏（1950年代後半）

原題は「The Child Who Never Grew」。知的障害のある子どもの親が体験記を出版したのは米国でもバックが初めてだったという。知的障害への偏見を少なくするのに大きな影響を与えた。日本でも障害者教育の古典として読み継がれている。

「母よ嘆くなかれ」

巻末資料 2-3

この幼い命を

アンティ紘子と国際養子

●●10

子どもたちの名前

「私たちは生きたい」

赤いシルクの横断幕には無数の名前が書かれています。一枚が縦二㍍、横三㍍。それを縫い合わせると一㌔以上になりました。名前はすべて戦争で亡くなった子どもたちです。

横断幕は米国のNGO「チルドレン・アズ・ザ・ピースメーカーズ（平和をつくる子どもたち）」が作りました。メンバーの子どもたちは世界を旅行し各国元首らに平和を訴え、現地でさまざまな人たちに名前を書き込んでもらったのです。

二十年ほど前に広島で被爆体験を話したことからこのNGOとかかわるようになり、毎年のように子どもたちと中国や旧ソ連、イラクなどを訪れました。米国人との養子縁組をお手伝いした子どもたちと同じく、私の大切な子どもたちです。

生後八カ月で被爆した私は、高熱と血便に苦しみました。その間、両親をはじめ、多くの人々が祈ってくれました。また、焼け野原の広島には国内はもとより外国からも多くの善意の手が差しのべられ、それは、すべて返礼を求めないボランティアでした。

私が行ってきたことも「ボランティア」と呼ばれるものかもしれませんが、社会の一員として当たり前のことと考えています。また、原爆に生き残った者として、与えられた命を大切に使いたいのです。

戦後日本は豊かになりました。しかしその中にあって助けを求めている子どもたちがいます。この子どもたちは、被爆で生死をさまよった私と同じなのです。

自分の子どもを産むことができない悲しみを受けましたが、私自身が引き取った二人の娘が喜びをもたらしてくれました。米国に渡った子どもたち、旅をした子どもたち、そして愛する二人の娘。みんな「私のチルドレン」です。

世界中のどの子も、家族の愛に包まれて幸せになってほしい。NGOの子どもたちが一九八七年、旧ソ連のゴルバチョフ書記長の前で読み上げた言葉を紹介して、私の話を終わります。

「私たちは子どもたちの名前をこれ以上この横断幕に書き入れたくないのです。私たちは生きたい。私たちは成長したい。私たちは知りたい。私たちは私たちがあげられるものを分け与えたい。私たちは生きたい」。

（国際養子ボランティア）

＝おわり＝

「世界の子どもたちからいろいろなことを学びました。みんなが与えられた命を全うしてほしい」と語る近藤紘子さん

巻末資料 2-4

朝日新聞（夕刊）　1997年（平成9年）8月5日　火曜日

原爆展中止の米博物館前館長

「自由で正確な歴史展示 恒久平和実現に不可欠」

広島再訪　教訓訴える旅

「ノーモア・ヒロシマ」と訴えると、「リメンバー・パールハーバー」（ハワイ真珠湾奇襲を忘れるな）と返ってくる米国で、二年前、国立スミソニアン航空宇宙博物館が計画した原爆展が事実上の中止を余儀なくされた。退役軍人団体の圧力で辞任に追い込まれた当時の館長マーティン・ハーウィットさん（六六）が五日午前、広島市で始まった世界平和連帯都市市長会議で世界中の市長ら約二百二十人を前に「歴史の理解こそが世界平和に不可欠なものだ」と、スミソニアンの教訓を訴えた。

（広島支局・吉田　博紀）

新幹線の車中で語り合う米国立スミソニアン航空宇宙博物館のマーティン・ハーウィット前館長と直野章子さん＝4日夜、新大阪―広島間で

ハーウィットさんにとって四年ぶりの広島訪問。講演のテーマは「核兵器、歴史からの教訓、そして人類の未来」だった。

ハーウィットさんは壇上から次のように訴えた。

「民主主義のプロセスが繁栄し、戦争が回避され、恒久平和が築かれるためには、全世界の国民は正確な歴史展示へのアクセスをもたなければならない。それにはみなさんが責任を担われる自治体の博物館に、政治的妨害から独立した自由が必要なのです」

圧力受け辞任

館長を辞任したのは一九九五年五月。昨年、原爆展が中止に至った経緯をつづった著作を出版した。その日本語訳『拒絶された原爆展』は六百頁の大作で、七月に書店に並んだばかりだ。

その中で、スミソニアンには約三千通の手紙が届き、うち九割が「米国兵の犠牲を食い止め、戦争終結をもたらした原爆投下に異議を唱える展示会はいらない」など反対だったことを明らかにしている。そうした反発を生んだ背景についてハーウィットさんは政治状況の変化を挙げる。

「冷戦が終わり、米国内ではあの時期、軍事予算削減が課題になっていた。そのような折に、第二次世界大戦の意義に疑問を投げかけかねない内容の展示だと、空軍の退役軍人団体が圧力をかけた」

「その宣伝が『原爆投下は戦争終結のための正しい手段だった』と考える多くの米国人の心の琴線をくすぐり、圧力が独り歩きして止められなくなったのが中止の要因だ」

日本に到着した四日夜、広島に向かう新幹線の中でハーウィットさんと一人の日本人女性に話し合ってもらった。スミソニアンの原爆展中止を受けた形で、ワシントンのアメリカン大学で開かれた原爆展を企画した被爆二世の直野章子さん（三五＝米国カリフォルニア州在住＝である。

大学展を評価

「アメリカン大の展示会には行きました。原爆に限らず核全体を扱うなど、私たちが見せたかったものをたくさん見せていました」。ハーウィットさんの一言から話は弾んだ。

「原爆展の中止を機に、米国内の原爆投下に対する意識は変わったと思いますか」。直野さんの問いにハーウィットさんは「未来はわからないけれど、現時点では私は悲観的です」。

「それでも」とハーウィットさんは強調する。「相手との意識の差を理解するためにも、自国の歴史を見つめ直すのが大切だ。一方的な見方だけでなく、様々な角度から歴史をとらえ、客観的な歴史観をつくり出していかなければならない」

米国でラジオやテレビに出演するだけでなく、八

スミソニアン航空宇宙博物館の原爆展　第二次大戦終結五十周年と、広島に原爆を投下した爆撃機「エノラ・ゲイ」号の修復に合わせ、米国立スミソニアン航空宇宙博物館が企画した。ハーウィット館長（当時）らは「同号を単なる技術進歩の一つの印としてでなく、原爆投下と戦争の終結、原子力時代と冷戦の幕開けとして」展示すべきだと判断していたが、これを知った米国内退役軍人団体などが猛反発。メディアや議会を巻き込んだ大論争の末、一九九五年一月、同展は中止され、六月からエノラ・ゲイのみの小規模な展示だけが催された。これを受けて、貸し出される予定だった広島の被爆資料約七十五点を使った「原爆資料展」がアメリカン大で同年七月に開かれ、約三千人が訪れた。

巻末資料３　（『朝日新聞』1997年８月５日夕刊）

朝日新聞　2004年(平成16年)6月27日　日曜

絵筆に込めた願い届け

「原爆の絵」50人聴きとり

広島の原爆で祖父を奪われた女性が、約30年前に「原爆の絵」を描いた被爆者50人を3年かけて訪ね歩き、絵筆に込めた思いを聴きとった。子や孫にも体験を語らないまま戦後を暮らし、60年近くたって初めて口を開いた被爆者もいた。若い世代に伝えたいのは「二度と同じ思いをさせたくない」との切実な願いだ。

兵庫県西宮市に住む日本学術振興会特別研究員の直野章子さん(32)＝写真。95年夏、米国・スミソニアン国立航空宇宙博物館が広島に原爆を投下したエノラ・ゲイと被爆資料の併設展を中止した後、母校アメリカン大で独自に原爆展を開いた経験がある。

「市民が描いた原爆の絵」は被爆30年目となる74年、NHK広島放送局が呼びかけた。翌年までに約750人の被爆者から計2200枚余りが集まり、広島平和記念資料館に収められている。

原爆被害についての研究を進めていた直野さんは、01年夏に聴きとりを始め、資料館が進める絵のデータベース化作業にもかかわっている。

息絶えた母親に、空き缶にくんだ水を飲ませようとする幼女の絵。作者の瀬川キクノさんは、原爆投下の翌日、爆心地近くの比治山橋でこの母子に出会った。「お母ちゃんは死んでいるのよ」と、幼女を抱き寄せて一緒に泣いたという。

直野さんの祖父は、被爆直後に急性症状を訴えて亡くなっている。02年春、瀬川さんの絵を見たアメリカの指導教授は、直野さんにこう話した。

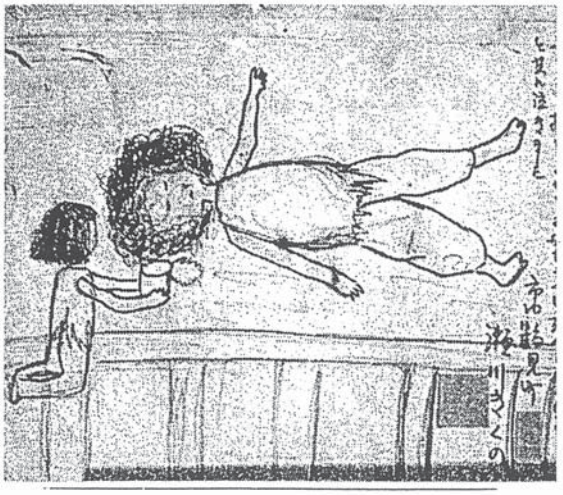
「アキコも、おじいさんにお水をあげて生き返らせようとしているのね」

3年の間に何人かの絵の作者が世を去った。直野さんは「若い世代が体験をどう受け継ぐか。被爆者の沈黙に耳を傾け、その願いを未来へつなげたい」と話す。

◇

聴きとり内容は「『原爆の絵』と出会う――込められた想いに耳を澄まして」（岩波ブックレット、504円＝税込み）として、7月6日に出版される。

祖父は被爆死 西宮・直野さん



巻末資料４　（『朝日新聞』2004年6月27日）

REPORT

自己参画型学習で「平和」を学ぶ

1999年度国際交流セミナーに参加して

「市民公開講座」の様子

今年度で5回目を迎えた「立命館大学国際交流セミナー」、これまで中国、韓国、アメリカ、それに広島、長崎と様々な地域を旅し、戦争の実相を調べたり、外国の人々と膝をつきあわせて対話し、国際交流の道を探ってきた。これまでの参加者は150名をこえ、実に様々な成果を残している。今回は参加学生が初めて企画から運営までを行った。そのため、今までのセミナー以上に苦労も多かったと思われるが、学んだものも多かったに違いない。セミナー全体の様子を今回のステューデント・リーダーである菅原千波さんに、広島で行われた学生企画の「市民公開講座」について杉原美希さんから報告してもらう。

菅原千波
すがわら・ちなみ
国際関係学部3回生
本セミナーステューデント・リーダー

国際交流セミナーとは

一九四五年八月六日・八月九日、広島・長崎への原爆投下により「核の時代」が開幕しました。

この広島・長崎への原爆投下から五六年目を迎える今日、未だ原爆投下に関する日米間の意識にはギャップがあります。このような事態を放置したままでは、二〇世紀を総括する視点が定まらず、また二一世紀の平和を創造する方向と視点が定まらないことになります。

立命館大学国際交流セミナー（以下国際交流セミナー）はそうしたギャップを少しでも埋めようとすべく、二一世紀の平和創造の道を探求するために、国際交流を通して世界平和に貢献する『地球市民』を育てようと、ワシントンDC（アメリカ合衆国）のアメリカン大学と本学が共同で開発してきたもので、一九九五年の戦後五〇年を機に始まり、今年度で五回目を迎えます。実際にアメリカン大学から一〇名の学生とマーシャル諸島大学から一名の学生を招きました。

この国際交流セミナーにおいて、参加者は実際に被爆地広島・長崎を訪れて、レクチャーやフィールドワークなどの調査や海外学生との討論や対話を行います。また、これらの調査や討論の企画・運営の多くを参加学生に任せ、学生中心の主体的な学びと気づきを重視します。調査や討論・対話においては（一）原爆投下の責任をどう考えるか、（二）核時代をどう考えるか、（三）核兵器の廃絶はどうすれば可能か、（四）二一世紀の平和と国際理解を推進するには何をしたらよいのか、などを柱としています。

セミナーの特徴点

この国際交流セミナーの特徴は、通常の大学の授業とは違い、参加者が自分で参加して学ぶ自己参画型学習であるということです。つまり、教科書にかじりつくだけの学習ではなく、実際に見て、聞いて、感じることの出来る参加型・体験型の授業なのです。もう一つの特徴として、通常の大学での授業にはない点で、SA（ステューデント・アシスタント、以下SA）制度が挙げられます。これは、参加学生とは別の学生有志が学校側、担当教授、先方の関係者、そして参加者との折衝・調整、旅行の企画、運営を行うサポート集団のことです。このSA制度の導入により、参加学生は旅行中の細かいトラブルや煩わしい問題を心配することなく、自分たちの調査、研究に集中し、研修を楽しむことが出来るのです。いわば添乗員の役割です。

今年度の特徴点
―主体的な学びと気づきの実現

しかし、これまでの国際交流セミナーは全般の企画・運営をSA、学校、担当教授だけが行い、参加者は「国際交流セミナー」という名のパック旅行の参加者となって、ど

「市民公開講座」の会場には約60名が集まった

巻末資料 5-1　（『立命館大学大学通信』122 号、1999 年 11 月、10 ～ 12 ページ）

S② TUDENT

うしても受身になってしまい、主体的な学びと気づきを実現することは難しいという問題点がありました。

そこで今年度の国際交流セミナーは、この主体的な学びと気づきを実現するために、企画・運営の多くの部分を参加学生が担い、また参加者が何かを企画して、実際に参加学生が運営することを取り入れてみました。SAは参加学生と学校、教授との補完的な橋渡しとして裏から参加者を支えるという役割を担うことになり、これにより旅行の企画、運営のほとんどを参加学生がこなすということになりました。

出発までの二ヶ月間、参加学生は何度も自主的な企画会議を開き、「自分がやってみたいこと」を企画しました。企画会議では様々な企画が提案され、その中から準備期間、予算などを考慮して「市民公開講座」を行うことに決定しました。すぐにプロジェクトチームが編成され毎日深夜まで会議が繰り返されてきました。

その他にも、「この国際交流セミナーで学んだこと、これからの二一世紀の平和を実現するために私達学生に何ができるか」を何らかの形で表明し、それを世界に発信しようということで「私の平和宣言」も生まれました。

実際の活動内容

実際の活動は次の通りです。

期間中、参加学生は寝食を海外学生と共にし、毎晩遅くまでそれぞれの部屋で熱い討論が繰り広げていました。また、参加学生は京都・広島・長崎で道先案内人として海外学生にそれぞれの地域の伝統、名物などを案内するなど充実した日々を過ごしました。

SCHEDULE

8月2日	午後	海外学生来日
8月3日	午前	海外学生と立命館大学国際平和ミュージアム見学
	午後	海外学生と京都市内観光（金閣寺、八坂神社、祇園、新京極）
	夜	ウェルカムパーティー（河原町）
8月4日	午前	講義『米国の原爆投下と核の文化』（講師 ピーター・カズニック／アメリカン大学教授）
	午後	講義『核兵器複合体の再編の方向』（講師 マリリア・ケリー女史）
		海外学生との討論・対話『私の考える平和とは』
広島プログラム		
8月5日	午前	新幹線で広島へ
	午後	広島原爆資料館見学→講義『原爆の被害について』（講師 高橋昭博さん）
8月6日	午前	平和慰霊式典出席→フィールドワーク
	夜	ピースキャンドル
8月7日	午前	核シンポジウム『核兵器のない未来のために』（藤岡惇教授主催）
	午後	学生企画「市民公開講座：広島・長崎への原爆投下〜日本への罪か人類への罪か」（ピーター・カズニック／アメリカン大学教授）
長崎プログラム		
8月8日	午前	新幹線等で長崎へ
	午後	講義『核兵器廃絶の展望』（講師 山田拓民さん）
8月9日	午前	長崎平和資料館見学→フィールドワーク
	午後	岡まさはる記念資料館見学
	夜	フェアウェルパーティー
8月10日	午前	最終討論会・総括企画「私の平和宣言」発表
	正午	解散

活動を通して得たもの

八月一〇日の総括企画「私の平和宣言」において、多くの参加者が次のようなことを述べています。「これまでの原爆投下に対する考え方が変わった。」「平和についてもう一度最初から考え直したい。」

今回のセミナーで参加学生は多くのことを学んだはずです。それは平和のことであったり、コミュニケーションの大切さであったりと様々です。普段の大学の授業で学ぶこととは全く別のことです。それは「自分の新しい考え方の確立」ではないでしょうか。彼らがそうすることができた理由は、実際に被爆地を訪れて恐ろしい被爆体験や恐ろしい写真を目の当たりにし、被爆体験を間接的に共有したからであると考えられます。つまり体験の共有が考え方に変化をもたらしたのではないでしょうか。

通常の教科書からだけの学習、教授による講義一本型の学習、つまり既存の理論、理屈を暗記するような学習では、このような新しい自分の考え方を作り出すことはできません。自己参画型・体験型学習によって、自主的に参加・体験し、実際に聞いて、見て、感じることによって新しい考え方を生み出すことが出来たのです。

現在、「平和」という言葉を聞くだけで身を引いてしまう学生は多いと思います。しかし、この国際交流セミナーでは「平和」について様々な視点から考え、そして今までとは違った視点で捉え、参加者自身が考える「平和」を確立することができるはずです。

私達は「平和」の問題だけに限らず、様々な問題について枠を取り払った方法によって学ぶことにより、今までとは違った視点で考えることが出来ると考えます。また、来年以降も多くの学生がこの国際交流セミナーに参加して多くのことを学んでくれることを期待しています。

杉原美希
すぎはら・みき
国際関係学部3回生

なぜ「市民公開講座」を開いたのか

市民公開講座は「被爆地の人々が原爆についてどんな考えを持っているのか聞いてみたい」という思いから生まれ

巻末資料 5-2

STUDENT REPORT

③

ました。被爆地でヒバクシャの方々のお話を聞くことは当然国際交流セミナーの予定に組み込まれていました。しかし、国際交流セミナーが「被爆地で世界の学生とともに『ニュー・ミレニアムの平和』を考える」と銘打っている以上、過去を振り返るだけでは足りないのではないか、話を聞くのはヒバクシャからだけで良いのか、と考え、「市民公開講座」というモノに発展していきました。

ないないづくしから始めた作業

「市民公開講座」が形になるまでにおよそ一ヶ月半、時間がない、お金がない、アテもない、何から手をつけていいのかわからない、とないないづくし、手探りで作業を進めていきました。企画班の面々がそれぞれ個性的だったこともあり、講演会のテーマ決めから難航しました。開催日が八月六日前後ということで、会場も通訳も手配ができず、広島市内のホールを持っている会場への電話が日課、通訳ボランティア団体探しが日課となりました。

会場が決定すると今度は広報の必要性がでてきました。広報の素人集団が集まって、でてくるアイディアは実現しそうにもないものばかり、実現しそうでもそれで本当に人が集まるのかどうか疑わしいものばかり。結局、安斎育郎先生、藤岡惇先生に、在広島平和団体の方々を紹介してもらって協力をあおぐことになりました。そして始めたのが、協賛団体の募集です。企画書を送り、目的意義を説明し、広島で広報に協力していただけるようお願いする。たったこれだけのことですが、何団体も同じことをくり返すのですから大変です。つれなく断られるのはまだ良いのですが、全く連絡がこなくなる、こちらから連絡してもつながらないなど、困ったことはたくさんありました。広報の一貫として、記者会見も行いました。京都で毎日新聞に取材された記事が、中国地方、近畿地方版でも掲載され、それを見て「広島まで新幹線に乗っていきます」と連絡をくださった方もいて、励みになりました。広島での各所への挨拶周りでも、多くの方々に快く協力を約束していただき、本当に助かりました。

そして一段落する間もなく当日配付する資料の作成に取りかかりました。ここでも講演者の写真がギリギリまで手に入らない、文書が届かない、とばたばたしました。何しろアメリカとのやり取りですから、時差もあれば、バカンスなど文化の違いもあり、意志の疎通がうまくとれないこともありました。

いざ当日、見えた課題、そして学び得たもの

当日は予定通りに準備が終わり、後はお客さんの入りを待つばかり。なかなか人が集まらずはらはらしましたが、ギリギリになって、そして講演中にも何名か来て下さり、結局六〇名程の参加者がありました。会場は一〇〇名収容でしたので、満足のいく集客状況だったと思います。メインと考えていた質疑応答ではあまり多くの質問、意見が出ず、残念に思いましたが、質問しやすい環境、意見をいいやすい雰囲気づくりがこれからの課題です。

「市民公開講座」の企画実行を通して、たくさんの人との出会いがありました。企画班の面々、在広島平和団体、各地で平和への運動をしている方々、学生運動に興味を持っている方々。みな、形、考えは異なりますが、同じ目的を持った人々ばかりでした。互いに話し合い、協力しあうことが、行動していく上での励みになっていることがわかり、まだよく理解できていない「平和」というものをもう一度考えるきっかけになりました。ゼロから何かを創り出し、一つのことを多方面から見る必要性を学ぶことによって自分の狭い視野が幾らか広がったような気がします。

担当教員より

「本当の学び」とは、自己と社会の変革につながるような学びのことです。とくに平和学の分野では、教室のなかの座学だけでは限界があります。今年の国際交流セミナーのテーマは「被爆地で、世界の学生とともにニュー・ミレニアムの平和を考える」というものでした。先学（過年度参加者）の応援をえて、このテーマを具体化するような企画を立案してほしい、自らお客さんから主人公に変わってほしいと参加者に訴えました。その結果、広島で企画した市民講座には多数の被爆者が出席され、大成功でした。私たちの学んだ成果を社会に広げ、世の原爆観を変える力になったと思います。英語を使える学生が多かったこともあり、毎朝、英字新聞を発行できました。税金を徴収し旅行中の共通経費を賄う「財務省」も機能しました。長崎では、「私の平和宣言」を起草・発表する取り組みもしました。1週間の旅行のなかでセミナーがサークルのようなものに、私はコーチのような存在に変わっていったのです。今後もインターネットを介してアメリカ、マーシャル諸島の学生との交流を続け、友情を育んでいってほしい、報告集を日英両文でまとめ、来年度以降の参加者に今年の成果を伝承していってほしいと期待しています。

経済学部教授　藤岡　惇（ふじおか・あつし）

多くの人との出会いがあった

『立命館大学学園通信』122号，1999年11月，PP10～12.

12

巻末資料 5-3

オピニオン opinion

論壇

原爆投下から続く人類の悪夢

ピーター・カズニック　米国アメリカン大学教授（歴史学）

「眠れないことなど全くなかった」。米国のトルーマン元大統領は数十万の人を死に至らしめ、二つの街を瓦礫にし、未来の世界を核による全滅の危機に陥れることになった原爆投下の決定についてこう語った。しかし、米国の愛国者と、日本を含む資本主義世界の冷戦信奉者のおかげで、その責任を十分に負うことを免れてきた。

原爆投下から五十五周年を前にして、この問題についての意見は激しく二分されたままだ。擁護する者は、上陸戦で米国人の命を犠牲にせずに戦争を早期に終わらせたとして正当化する。批判者は、広島と長崎の悲惨な犠牲者に焦点を当て、日本は軍事的敗北を認識しており、ソ連の参戦が迫っていたことを考えれば、ほかの手段で降伏させられたはずだと主張する。

私は後者を支持するが、短期的には日本に対する軍事的優勢、長期的にはソ連への地政学的優位を得るために、トルーマンとその側近が、そうと知りながら全人類を危機にさらしたと厳しく弾劾する第三の見方を紹介したい。

政治家として凡庸な経歴だったトルーマンは、一九四四年、ルーズベルト大統領の副大統領で理想主義的で絶大な人気のあったヘンリー・ウォーレスと入れ替えるため、民主党幹部に選ばれた。ウォーレスの進歩的な考え方が党内保守派とぶつかったのだ。

ルーズベルトはトルーマンにほとんど注意を払わず、新しい副大統領だというのに米国が原爆を作製中であることすら知らせなかった。トルーマンが初めてその詳細を知るのは大統領に就任直後の四五年四月十三日である。主要な補佐官で後に国務長官になるジェームズ・バーンズが、米国は「世界を丸ごと破壊できるほどの」爆弾を作製中だと語った、とトルーマンは書き残している。

四月二十五日にヘンリー・スティムソン陸軍長官、レズリー・グローブス陸軍准将はトルーマンに、原爆によって「現代文明は完全に破壊される恐れがある」と警告し、人類の将来は原爆をいかに使用し、どう管理、共有するかにかかっていると強調した。

この身の毛のよだつ武器の使用の持つ黙示的な意味をトルーマンが理解していたことは明白だ。トリニティ実験の結果について説明を受けたあと、彼は七月二十五日の日記にこう記している。「ノアの箱船のあとに起きると予言された業火の破壊兵器なのかも知れない」

トルーマンは、日本が軍事的に敗北し戦争終結を望んでいると知りながら、広島、長崎に原爆投下を命じた。実は、軍上層部ではこのことは広く認識されており、アイゼンハワー将軍、マッカーサー将軍らを含む大勢が、道徳に反し軍事的に不要だったとして原爆の使用を嘆いた。

幕僚長でトルーマン側近のトップだったウィリアム・リーヒは後にこう書いている。「この野蛮な武器の使用は、対日戦争で何ら重要な支援ではなかった。日本はすでに敗北し、降伏の準備をしていたのだから。原爆を最初に使用したことで、暗黒時代の野蛮人の倫理基準を採用した、というのが私の気持ちだ」

トルーマンは、任期を終えたときには救いようのない低支持率だったが、今では偉大な大統領の一人と広く認められている。広島が地図から消えたと知らされたとき、トルーマンは「歴史における最も偉大な出来事だ」と叫んだ。この見解はいまだに公式に訂正されていない。五八年に後悔の念はないかと聞かれたときには「全くない。かけらほども」と答えている。

原爆で最も苦しんだのは広島と長崎の人々だが、我々もまた原爆投下の決断の結果とともに生きている。科学者が予測した核兵器競争はすぐさま現実となった。世界は少なくとも一度は核戦争の寸前までいき、政治の力ではなく幸運によって切り抜けた。

核廃絶への重要な一歩として、我々には歴史をありのままに記録する義務がある。

トルーマンは熟睡できたかも知れないが、人類は五十五年間もの間、悪夢を強いられてきたのである。

＝投稿、原文は英語

巻末資料６　（『朝日新聞』2000年８月５日）

NO MORE HIROSHIMA AND NAGASAKI

~The information of 2000 RITS-AU Peace Study Program~

— Aug. 9th —

Kevin Owen
I found Hiroshima to be a beautiful city, we need cities and people in the U.S. dedicated to Peace and Harmony. I'm struck with the forgiveness the Japanese have towards Americans

Aimee Picarel
This trip has been a huge cultural learnings experience.
I have enjoyed the interaction with the other students For future trips, I would like to see an additional aspect of how all of what we have learned has affected policy and the respective governments.

Nadia Barbarasa
Hiroshima opened my heart, Nagasaki sealed the memories.

James Bono
I want to pose hypothetical Solutions to end W.W.II with role playing and diplomacy.

Sonoko Oba
I learned how history is important — to deal with the fact.
Also, how individual interaction is important. We need to solve the past issues and to understand difference of others in order to have the world peace.

Yasir
Aug 6, Hiroshima musium was crowded, but Aug 9, the musiam was almost empty.
That made me think of the rest of the year. Do people for get about the atomic-bomb, and remember it only on Aug 6? I wish the media in Japan and the rest of the world keep reminding people about Hiroshima and Nagasaki. So we it never replay again

Gi-Yuk Lee
Thin line between life and death ...
One decision and effect ...
The thin line is the symbol of difference between the good result and bad effect. The decision to use or not is the last stage of fact.
This thin line is so fragile and vague to detirmine and conform. Our assignment is to maintain this fragile line to continue give a chance to flag to keep it in next genaration

Atsushi Fujioka
Reflection: It is much better them last year that all Students could participate more positively to organize their tripy

Hiroyuki Morino
I was really surprised that peace movements in Hiroshima was really strong and active I could find that people in Hiroshima have the duty of spreading peace movements as a city atomic bomb had dropped.
However, I felt that this city was isolated in other cities

Ayumi Ohashi
In Hiroshima, I was so moved and I cried many times, but I do not why I want to think about what made me so emotional.

What we think through the learning in Hiroshima and how in Nagasaki

Aya Murai
I felt Hiroshima's celemony different from Nagasaki's one. I awaring my ignorance. Today's work, I'm ashamed of Japanese behavior in past, I want to apologize to Asian Countries heartfuly.

Daiske Nishimura
I'm think that of Hiroshima. I think that the knowledge that comes in Hiroshima, and was obtained was precious. However I'm going through handships to take communication Turning it today long upon my ambition.
To touch the air of Nagasaki anyway I want to make an effort to that develops the thoghts

Motohiko Choji
This program let me know that we must change the actual system of society to realize our wish, "Peace".
And to change it, we must be more educated.
As a result, we can be more democratic.
This gives us a power to reform the actual.

Chinami Sugawara
It was last time for me to visit Hiroshima in my Rit's life.
I will be back someday with my children person I love.
And I will be teacher, I will tell my students what I learned, what I think, and what I was impressed.

Hitomi Wada
What the most important thing in peace studies I thought is to share what each one of us are thinking of.

Madoka Mitsuyoshi
I was surprised at atmosphere of Hiroshima. when we stay in other city, maybe we seldom think about atomic bomb except memorial day. But Hiroshima was different I felt something heavy.

Naoki Iida
To do field work is good experience for me We told a lot of thing with true mind So we can solve a lot of problem first I felt problem in my mind, but talking solving my problem in my mind I feel they are best friend.

Rayoi Tanigaki
I Knew a lot of things, through this travel However, I cant express all of them well. So I want to find the reason why I was so moved.

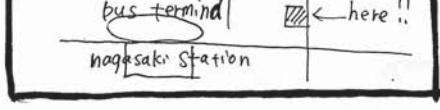
Seiichiro Ishizu
Through the seminer until now, I could know the fact of Hiroshima in detail. what I feel very important in the nuclear is the hanging down to people who are birth after the W.W.II. It is necessary for local media to tell many information to all over the world to successed the hanging down.

Miyuki Furuta
I had a very interesting experience that I couldn't have experienced when I just stayed in Hiroshima I also learned a lot as how to make an appointment. I'm very happy to meet all my members and that I was able to sher the thoghts with them.

Ayumi Sakai
It was the first time to go to Hiroshima So many thing shocked me and I was moved many times. Our group studied about NGO and went to Gensuikyo. I made me interest in NGO, but Our time was limited so though we could get some information I couldn't have time to think about it so much I would keep thinking about it here in Nagasaki.

On 9th Aug.

9:30	Meet at 1st floor Everyone must participate it We go to Yamazato school to participate the celemony.
11:15~ 12:30	Musium of atomic bombs
After 12:30	Free
5:00	Discussion called by Tamy someone who want to discuss more at the hotel
7:00	Meet at Nagasaki Station
7:30	"Fearewell Party" at Utami(魚民)



Attention !!

Keep the receipt if it is for the official programs. Taxi fee is just for official programs not for private purpose.
It is necessary to write down your name and where the taxi is coming from and going to, the back of the receipt
We don't return the money if you lost the receipt !!

US NEWS

Democratic Presidential candidate Al Gore has chosen senato Joseph Lieberman as his Vice Presidential Lurdidate.

Contract Information

The friendship you make now could last forever. Please private the information requested below so that we can keep in touch with eachother :
(Name) _____
(E-mail) _____
(Home Address) _____

巻末資料７　（『旅行団ニューズ』2000 年 8 月 9 日付）

朝日新聞　2003年(平成15年)8月15日　金曜日　13版△　京都

学生と戦争

京大綜合原爆展 ㊤

占領下、実態市民に

北区の立命館大国際平和ミュージアムで3日、立命館大の学生と提携校の米・アメリカン大の学生ら33人が、写真のパネルを手に取っていた。原爆の被害を伝えた1951年の「京大綜合原爆展」の様子が収められていた。

京大医学部生として原爆展にかかわった北区の川合一良さん(73)が、学生たちに切り出した。「信じられないことかもしれませんが、2度の原爆投下にもかかわらず、国民のほとんどは原爆の被害について知りませんでした」

日米二つの大学は95年から8月に広島と長崎を訪れる「国際平和交流セミナー」を続けている。この日、川合さんは当時理学部生だった妻の葉子さん(72)と講師に招かれ、原爆展について語った。

◇

占領軍は45年9月、プレスコードを発表し、原爆報道を厳しく禁じた。52年のサンフランシスコ講和条約発効まで国内の原爆報道や研究の公表は事実上、できなかった。その占領下、被爆の実態を世に明らかにしたのが、京大綜合原爆展だった。

朝鮮戦争が始まった50年、自衛隊の前身である警察予備隊ができた。米トルーマン大統領は「原爆使用も考慮中」と表明した。世界が緊張した。

京大綜合原爆展　1951年7月14日から、旨間、原爆の原理や被害を市民に知らせようと、京都大の全学学生自治会の「同学会」が、下京区に当時あった丸物百貨店で開いた。大学当局が途中で「大学は関知しない。実験器具、標本の持ち出しは禁止」と態度を変えたり、百貨店がいったんは会場使用を断ってきたりしたが、延べ3万人の[illegible]が訪れた。かかわった学生は京大、京都工芸繊維大、京都市立美術大（現市立芸大）などの約500人。学生が展示パネルを帰郷先に持ち帰って開くなどで、原爆展は各地へ広がった。

「戦争の犠牲になるのは被爆者のように一般市民だ」。学生たちは原爆展開催に自然発生的に動いた。タブーに挑戦しようという気負いはなかった。志願を強制されて陸軍学校に入ったり、勤労動員で海岸で塹壕を掘ったり、軍需工場で飛行機をつくったりするなど、戦争に協力した苦い記憶にも突き動かされた。

京大では原爆投下直後、医・理学部の調査班が現地入りし、被爆者の遺体から収集した標本を持ち帰っていた。血液学者天野重安助教授は50年に医学部で「原爆症」の特別講義をした。

川合さんは天野助教授の講義記録や被爆者の病理標本などをもとに、展示パネルのシナリオをつくった。

「講義は極めて学問的で、もっぱら標本の話だった。人体の機能が再生不能になる。その非人道性に反原爆の思いが募った」と振り返る。

こうして医学部はケロイドの写真や標本で人体への影響を解説することになった。科学雑誌で米国の原爆に関する翻訳論文を読んだ理学部生は、発行元の出版社を訪ね、未発表の論文や写真を見せてもらってその原理をパネルにした。文学部は原爆体験記を出版した。全学部が得意分野を生かし、約190枚のパネルが展示された。

工学部生だった岡田光正さん(74)＝大阪府吹田市＝は、パネルを製作し、会場風景などを写真に撮った。日米の学生が見た写真は岡田さんが撮ったものだ。「原爆投下の詳細は原爆展の準備中に知った。私の写真が今になって学生の目に触れるとは思ってもなかった」と言う。

川合夫妻らは岡田さんの写真の展示などで、原爆展の歴史的意味を掘り起こし、平和を訴える活動を続けている。

「まず事実を知って一人でも多くの人に伝えてほしい。そして原爆展当時に抱いた私たちの思いを、引き継いでほしい」。学生たちの前で夫妻はそう強調した。

◇

戦争が起き、北朝鮮の核開発が懸念され、国内では有事法制が成立した。イラク戦争前、京都の繁華街は反戦を訴えるピースウオークの学生であふれた。終戦から58年の夏、かつての、そしていまの若者たちの平和を探る試みを追った。

京大綜合原爆展の展示に見入る来場者ら＝51年7月、下京区の丸物百貨店で、岡田光正さん撮影

平和を願って

「つらい思いをするのはいつの時代も一番弱い立場の人たち。そろそろやめにして欲しい」　京都精華大4年小川剛さん(22)

「学生と戦争」のシリーズでは、左京区の京都精華大芸術学部マンガ学科カートゥーンマンガ・コースの学生や講師が描いた作品を掲載します。ヨシトミヤスオ教授の指導のもと、「戦争や平和」をテーマに自由な発想で風刺マンガを描いてもらいました。

巻末資料 8-1　（『朝日新聞』2003 年 8 月 15 ～ 17 日）

新聞　2003年(平成15年)8月16日　土曜日　13版△　京

学生と戦争

京大綜合原爆展について話した後、日米の学生からプレゼントをもらい握手する川合一良・葉子夫妻（左）＝北区の立命館大国際平和ミュージアムで

京大綜合原爆展 ㊥

語り継ぐ 思い強く

川合一良(73)、葉子(72)夫妻が立命館大と米・アメリカン大の学生たちに、1951年の京大綜合原爆展について話し終えた。次々質問が出た。

「占領下でどう資料を集めたのか」「検閲などはなかったか」。正直な感想もあった。「いろんな学部の学生が力を合わせている。すごい」「それに比べ、自分たちはどうなんだろう」

立命館大国際関係学部3年の小嶋萌さん(21)は、イラク戦争中に交わした会話を思い出した。

「9・11の時は多くの講義でテロが題材になった。またイラクのことがテーマになるやろう」。理工学部の友人は「こっちは世界で何が起きようと、覚えなあかん数式は同じや」とつぶやいた。

学部によってこんなにも関心が違うものか。それだけに全学部が協力した原爆展が新鮮だった。「学生の強みは社会の動きを学問としてとらえ、学んでいくところにもある。反核の原点のようなものを事実で示した綜合原爆展は大きな意味がある」と思った。

◇

京大文学部生だった宮川裕行さん(73)＝広島市＝は、原爆展で原爆体験記を編集・出版した。広島の爆心地から2・3キロで被爆している。

父が校長をしていた女学校の生徒533人が亡くなった。生徒の親に責められ、自身も負い目を感じた。大学では被爆者であることを積極的に明かさず、原爆展にも乗り気ではなかった。だが友人に「黙っていいのか」と言われた。京都だけでなく、広島にも被爆者を訪ねた。

「これからは劣化ウラン弾の問題も声を大きくすべきだ。ただ、被爆者は高齢化している。若い人おらんかなあ……」

◇

川合夫妻の話を聴いた翌日の4日、日米の学生たちは広島市を訪れた。初めて見る原爆ドーム、平和記念公園、仲間との記念撮影に、はしゃいだ気分でカメラのシャッターを押した。

しかし、広島平和記念資料館で雰囲気は一転した。数人の集団が一人ひとりになり、展示されている国別核実験年表や占領下の日本の言論統制などをノートに書き込んだ。原爆で黒こげた弁当箱や人影の石の周辺では、言葉がなかった。

被爆者からも話を聞いた。近藤紘子さん(58)はケロイドに悩む「原爆乙女」の治療に尽力した故・谷本清牧師の娘だ。生後8カ月で被爆した。

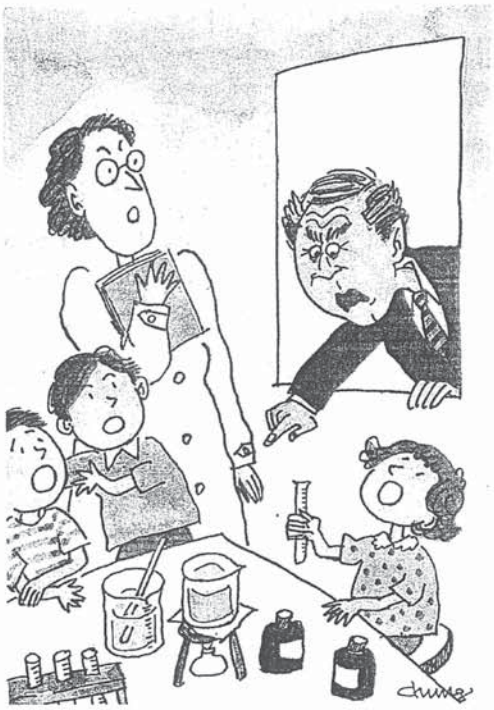
10歳の時、米テレビ番組で、広島に原爆を投下したエノラ・ゲイの副操縦士R・ルイス氏と父が対面した場に居合わせた。原爆投下後、どう思ったかを司会者に聞かれたルイス氏は「おお神よ。私は何ということをしたのか……」と嗚咽した。

その瞬間の気持ちを近藤さんは涙を流しながら語った。「戦争を起こす心を憎まないといけない。平和は自分の心の中から始まる」。全員の心に響いた。

◇

小嶋さんは高校生の時、阪神大震災の被災者の仮設住宅を訪ねるボランティアをした。震災の際はベルギーで暮らしていて日本にいなかった。「私だけ何も知らないのでは」とプレッシャーを感じた。

本当の痛みは体験者しか分からないだろう。「でも現地で体験者と向き合うことで、人々に客観的に真実を知らせることは出来る。戦争体験はないけど、語り継ぐ方法はあるはずだ」。その思いを広島で強くした。



「化学兵器製造実験だろう！」

「いつも何人かによって決められる戦争に正当性うんぬんはナンセンス」　京都精華大大学院博士課程（ポストインキョウ）鄭仁敬さん

新聞　2003年(平成15年)8月17日　日曜日　13版△　京

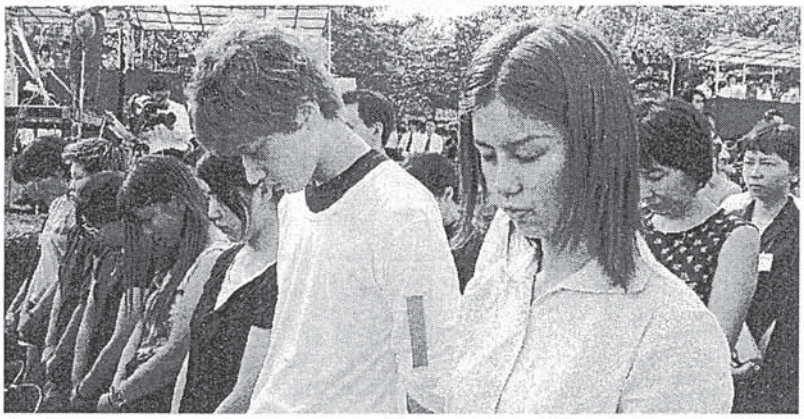
A M

学生と戦争

京大綜合原爆展 ㊦

「願いは共通」実感

平和記念式で原爆投下の時間に合わせ黙祷(もくとう)し、核廃絶と平和を願う立命館大の学生ら＝6日午前8時15分、広島市中区の平和記念公園で



立命館大と米・アメリカン大のセミナー参加者の1人、立命館大文学部2年の辻道子さん(21)は、昨夏味わった違和感を、何とかぬぐいたいと広島に来た。

ある自民党衆院議員の事務所で2カ月、インターンシップで働いた。日米安保や自衛隊のあり方について秘書や支援者と議論になった。「自衛隊は専守防衛にしては大きすぎる」「人を殺そうと生まれてくる人間はいない」と主張した。

秘書らは「ならば武器は発達していない。平和憲法があると言って、家族が殺されるのを見ているだけなのか」「米国が助けてくれなければ誰が日本を助ける」と言う。反論できなかった。

「外交を語るなら、現場を見てからにしろ」と言われ、秘書3人とインターン生5人で1泊2日、陸上自衛隊に体験入隊した。匍匐前進をしたり、東アジアの軍備状況などの講義を受けたりした。

セミナーでは生産的な議論をしたいと思った。アメリカ人が実際のところ、どう考えているのかも知りたかった。

◇

5日、日米の学生たちは秋葉忠利・広島市長を表敬訪問した。ア大4年生のエイプリル・ブラウンさん(37)は「広島に来れば平和とは何かを理解できる。中でも被爆者の語りは、大使の役割を果たせる。米国の指導者に対し、学生は何ができると考えるか」と市長に尋ねた。

ブラウンさんはアフリカ系米国人だ。米国の黒人の人権運動と、広島の核兵器廃絶運動が重なって見える。キング牧師が現れ、1人が動けば誰かが続き、黒人の歴史が変わった。

秋葉市長は「米国だけでなく(核をめぐっては)世界的に悪い状況にある。心配を声にすることが大事だ。持っている疑問を多くの人にぶつけてみるべきだ」と答えた。

夜、ア大生らは語り合った。「被爆者の話はまだ胸が痛い。米国では原爆を一般的出来事としてとらえている。話を聞けてうれしい」「米国の教科書は米国が常に正しいように書かれている」「核兵器使用は道徳的に間違ってると考えるようになった。10歳の弟に伝えたい」――。

◇

6日午前8時。平和記念式の席についた。ブラウンさんは「ここに集まった人たちみんなが、必ず平和が来ると信じている。感動した」と力を込めた。辻さんは「広島で米国人を説得するつもりでいたけど、人として感じることは一緒だった。うれしかった」と話した。

日米の視点を交換することで、学生たちは考える材料を得た。原爆の非人道性を訴える日本と、原爆投下の背景や正当性を強調する米国。でもきっと共通のゴールにたどり着ける。多くがそう確信した。

52年前、学生たちは綜合原爆展を開いた。辻さんはそのことを知り、広島を訪ね、当時の学生たちの願いは自分の願いでもあると実感した。一方で、半世紀を超えて同じ訴えを続けなければいけないことが残念でもある。「今度は私たちが動いて、何年か後には変化を形にしたい」。政治にかかわりたいと思い始めた。

(長谷川久美子が担当しました。企画「学生と戦争」は次シリーズを近く始めます)

さっ いらないものはすべて
捨ててきれいにしましょ

「戦争を知らない子どもたちに、戦争は恐ろしいというより、戦争はしてはいけないということを伝えたい」
京都精華大3年山崎智恵さん(22)

非核願い 被爆者自伝翻訳

原爆投下機搭乗米兵の孫

原爆投下機に2度搭乗した唯一の米兵を祖父に持つ大学生が、被爆者の自伝の翻訳を通じて、頭上から原爆の閃光（せんこう）を浴びた人々の苦しみを知ろうとしている。原爆を落とすことも、落とされることもない、核のない平和な世界を築きたいと強く願うからだ。

（ボルダー〈米コロラド州〉＝望月洋嗣）

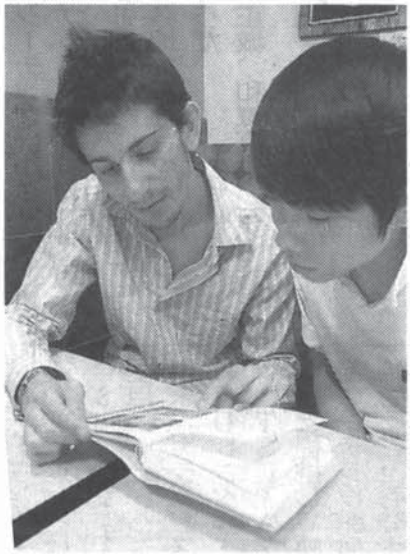
コロラド州立大学ボルダー校に通う、アリ・ビーザーさん(22)。祖父ジェイコブ・ビーザー氏（故人）は、広島と長崎への原爆投下機にレーダー技師として搭乗した。

「被爆者から見た原爆」に興味を持ったのは今年3月。広島への原爆投下に関する本の内容が不正確だとして、米国で発売停止になった騒ぎがきっかけだった。「歴史を正しく認識するには、より多面的に史実に迫る必要がある」。そう考え、広島で被爆した田坂博子さん（故人）に思い至った。

少なからぬ縁がある。

自伝「ヒロコ　生きて愛」（学研）によると、田坂さんは女学生だった14歳で被爆。1955年、米キリスト教団体などの支援で米国で治療を受ける「原爆乙女」の25人に選ばれ、ニューヨークに。その時に知り合った米国人男性と結婚するため、約10年後にメリーランド州ボルティモアに移り住んだ。そこで、田坂さんが勤めたデパートの上司の娘が、ジェイコブ氏の長男と結婚した。アリさんの両親だ。

アリさんは96年8月、知人宅でのパーティーで田坂さんに会っている。「愛情に満ちた瞳が印象的だった」という。翌年、田坂さんは亡くなった。



田坂さんの自伝について語り合うアリさん（左）と、友人の鈴木さん＝コロラド州ボルダー、望月写す

日本人留学生の鈴木勘九郎さん(26)の協力で5月に始めた田坂さんの自伝の翻訳作業で、被爆地が「この世の地獄」だったと知った。

原爆使用への考え方は、大きく揺さぶられた。それでも、日本を降伏させて、米兵や日本の民間人の被害を最小限にとどめるために、原爆投下が必要だったとする祖父の考えも正しいと思う。

一方で、祖父も田坂さんも、原爆を使うようなことが二度とあってはならないという考えでは、一致していると思える。祖父の著書と今回の翻訳をともに紹介し、対極にある二つの視点を広く知らせることが、次の目標だ。

巻末資料９　（『朝日新聞』2010年10月6日）

2003年

2003.8.13 京都-M

遠い夏から

58年目の戦後

③

国を超えて

非核の思い 津深く

被爆者の生の声に揺れる若者

立命館大四年生の紀古鮎美さん(二)=京都市北区=は、今年の八月六日を広島で迎えた。立命館大とアメリカン大が開いた国際平和交流セミナーの参加者とともに、原爆死没者慰霊式に出席した。初めて原爆資料館を見学し、被爆者を訪ねて話も聞いた。

小学六年生の時、修学旅行で長崎の原爆資料館を訪れ、ショックのあまり気分が悪くなった。「以来、ずっと心のどこかに原爆のことはひっかかっていた」という。

米国のアメリカン大に留学していた二年前の八月、米国を訪れた広島、長崎の被爆者に通訳ボランティアとして付き添った。進んでつらい体験を話そうとする姿を見て考え込んだ。「自分は日本人として何をすべきだろうか」。翌月、非核を訴える学内グループに加わった。

米国民の核兵器への関心は低かった。平和学や国際関係学の授業が充実し、リベラルな校風なのに、学生の反応は芳しくない。核兵器の恐さを写真やデータで訴えるパネル展を開いた時、通りがかった学生が口を開いた。「核兵器が戦争を防ぐんだ」。被爆少年を描いた映画「はだしのゲン」英語版の上映会にも参加者が集まらなかった。

「原爆が、戦争を終わらせた」。こう教えられてきた米国人学生に、どう非核を訴えればいいのだろう。同時中枢テロの発生後、街にあふれる星条旗に違和感を、報復攻撃やイラク戦争に向かう世論に恐さを感じた。

テロ直後、ある授業でテーマが急きょ「9・11に対する報復攻撃の是非」に切り替えられた。五人の発言者すべての答えが「NO」だった。「同年代の学生の良心を感じてうれしかったけど、あれは少数派だった」。米国への失望感が高まった。

今年二月の帰国後、非核を訴えた学内グループは活動をやめた、と伝え聞いた。

紀古さんは、核廃絶や平和についてもっと踏み込んだ討論をしたい、と日米の学生が広島や長崎を訪れる今回のセミナーに参加した。

八月五日夜に、広島で討論会があった。「これだけの経験をしているのに、なぜ日本は、劣化ウラン弾でイラクを攻撃する米国の側に立つのか」。日本人学生が自問した。

米国人学生も率直に考えを打ち明けた。「私は核兵器を使うことは道義的に間違っていると思うようになった」「米国はすべて正しいという教育を受けてきたことを今、考え直している」。被爆者の生の声を聞いて、学生たちの気持ちは揺れた。

討論会の翌日、広島で被爆した山岡ミチコさん(七三)は日米の学生に語り掛けた。「国の言うことをそのまま信じていた私は愚かだった。あなたたちに期待している。ぜひ自分で判断し、行動できる人間になってほしい。それが平和につながる」

90歳を超える被爆者(手前の白髪の人)の体験に聞き入る日米の学生たち
(8月5日、広島市・広島原爆養護ホーム倉掛のぞみ園)

巻末資料 10 (『京都新聞』2003年8月13日)

米国生まれの辻さん

国籍手放す前に、出生地まで2355キロ縦走

銃・戦争・ヒロシマ…

感じた「母国」ネットに

米国生まれで、日本と米国の国籍を持つ立命館大文学部2年辻道子さん(21)＝北区＝が、米国籍を手放すのを前に、自転車で米国縦断の旅をした。出生地を目指してペダルをこいだ辻さんは、現地での様子をつづった日記や偶然出会った米国人に米国観や戦争、広島・長崎への原爆投下などについて聞いたインタビューをインターネットのホームページ（http://www.ritsumei.ac.jp/~lt095026）で発信している。

朝日新聞 04.2.18 AM

辻さんは両親が仕事のために米国にいた際に生まれ、米国籍を得て1歳で帰国した。日本は二重国籍を認めないため、22歳までにどちらかを選ばなければならない。小さなころは米国を「自由で正義の味方」と信じていたが、銃社会や戦争の歴史などを知るうち「不信感」を持つようになったといい、国籍は日本を選ぶことに決めた。

期限まであと1年となった昨年7月の誕生日、「自分の一つのアイデンティティーだった米国を肌で感じたい」との思いが募り、8月29日から10月21日まで、南部のルイジアナ州ニューオーリンズから、辻さんの出生地オハイオ州クリーブランドまで、5州9都市を回り、2355キロを1人、自転車で走った。

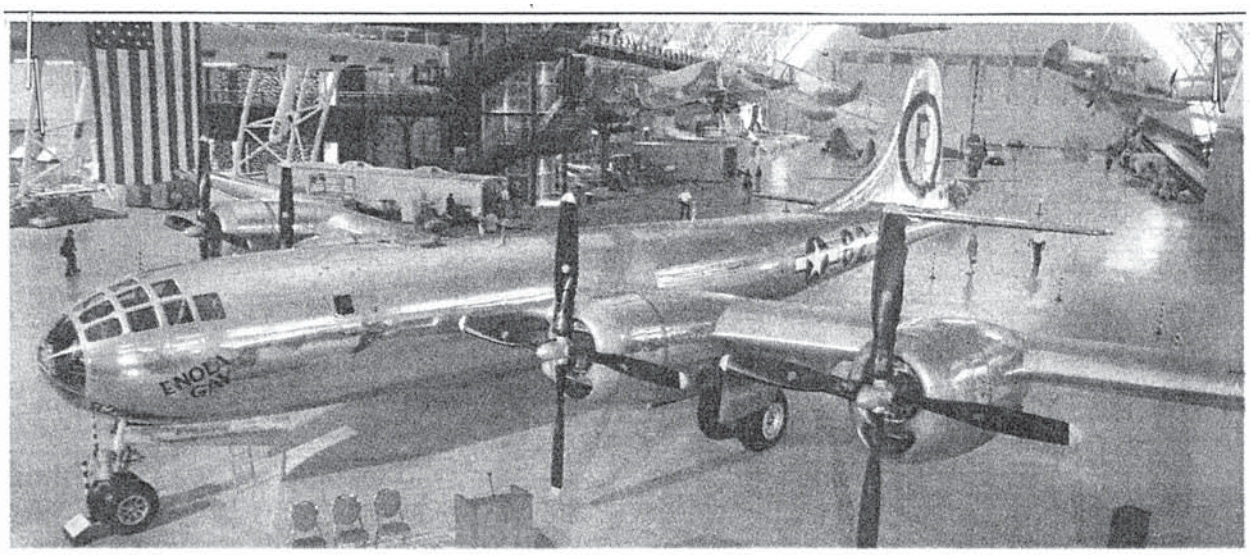
2355キロを自転車で走った辻道子さん＝米国・テネシー州で、辻さん提供

インタビューしたのは高校生や医師、レストラン経営者、主婦ら約30人。ミシシッピ州ジャクソン市で話を聞いた女性(51)は海軍経験もある。「ヒロシマ、ナガサキに行きたい。強烈なメッセージをもって我々に教訓を示している。世界中の子供たちは核兵器の恐ろしさを理解しなければならない」と話す一方、「原爆は戦争を止めた」と語った。辻さんは「彼女から『原爆の事実を絶対に忘れてはならない』と聞いたときはうれしかったが、強烈なメッセージとは、米国以外の国に発せられているものなのだろうか」とコメントを添えた。

夜中に泊まるところがなくて困っている時、年配の女性に助けてもらったり、パンクした時に通りすがりの人に励ましてもらったり、人との出会いが印象的で、何度も米国人のやさしさに救われた。一方で「米国には弱い国を助ける責任がある」「戦争は願っていない。しかし、やむを得ない時がある」などという感覚には違和感を抱いたという。

米国籍があることで日米関係に興味を持つようになった辻さんは「インタビューしなければ米国はいいところで終わっていたが、二面性を見た。なぜこの国にひかれていたのか分からなくなってしまったが、もっと米国について勉強しないといけないと思った」と話した。

巻末資料 11 （『朝日新聞』2004 年 2 月 18 日）



8月に復元され報道陣に公開されたエノラ・ゲイ（ロイター）

米国

「原爆被害の事実知らせて」

学者ら「エノラ・ゲイ」展示で署名

【ワシントン8日遠藤誠二】広島に原爆を投下した米軍B29爆撃機「エノラ・ゲイ」が十二月、ワシントン郊外にある米スミソニアン博物館で完全復元展示されますが、米国の学者・研究者、作家、平和活動家らが、「原爆被害の実態を知らせる」よう博物館側に要求、原爆投下機展示をめぐる論争が再び活発化しそうです。

四十三年ぶりに完全復元されるエノラ・ゲイは、来月中旬にバージニア州ダレス国際空港脇で開館するスミソニアン航空宇宙博物館別館に展示されます。博物館側は、原爆投下した爆撃機と説明するのみで、それによる犠牲者数など被害については言及しない方針です。米国内の文化人などでつくる「核の歴史と現政策を討議する全国委員会」は五日、原爆による被害を知らせるなどバランスのとれた展示を求める要請書を同博物館に送付しました。「討議する全国委員会」は、アメリカン大学のカズニック教授らが中心となり活動しています。

要請書に署名するなど同委員会に賛同したのは、作家のダニエル・エルズバーグ、歴史家のハワード・ジン、ジョン・ダワー、言語学者のノーム・チョムスキーの各氏ら。映画監督のオリバー・ストーン氏、秋葉忠利・広島市長も名を連ねています。

エノラ・ゲイは、一九九五年にワシントンのスミソニアン博物館で機体の一部が一般公開されました。この時は、原爆被害についても説明される予定でしたが、議会や退役軍人の圧力で取りやめになった経過があります。

今回の展示にあたり、「討議する全国委員会」などの組織は、十二月十二日から十五日まで、日本の被爆者らを招いた行事を催す計画です。

2003 11. 10
『赤旗』

巻末資料 12 （『赤旗』2003 年 11 月 10 日）

『朝日』夕刊

「原爆被害も展示を」

エノラ・ゲイ展示博物館　渡米の被爆者ら訴え

「キノコ雲の下にいた我々のことも考えて展示すべきだ」と訴える坪井直・広島県被団協事務局長＝12日、ワシントン市内で、石合写す

【ワシントン＝石合力】15日から一般公開される米国立スミソニアン航空宇宙博物館の新館（米バージニア州）に展示される原爆投下機エノラ・ゲイの展示方法をめぐり、広島、長崎の被爆者らが12日、ワシントン市内で記者会見し、被害の実態もあわせて展示すべきだと訴えた。会見後、同市内にある博物館本館を訪れ、広報責任者に1カ月半で集めた約2万5千人分の署名を手渡した。デイリー館長は、面会には応じなかった。

会見で、広島県被団協（藤川一人理事長）の事務局長、坪井直さん(78)は、「エノラ・ゲイを展示する場合には、その下で何が起こったかということ、原爆被害の実相を展示して初めて歴史の真実が発表されることになる」と述べ、B29の技術的側面の説明にとどめたいとする博物館側の展示姿勢を批判。長崎で被爆した日本被団協事務局長の田中熙巳さん(71)は「B29はたくさんある。なぜエノラ・ゲイでなければならないのか」と疑問を投げかけた。

米国内では、退役軍人を中心に「原爆投下が戦争終結を早め、日本での地上戦を食い止めた」とする投下正当化論が依然根強く、会見に出席したのは大半が日本のメディアだった。一行は、15日に新館を訪れ、エノラ・ゲイの前で被害の写真などを示して「静かな抗議行動」をすることを予定している。

エノラ・ゲイの展示方法をめぐっては、米国内の学者や歴史家らも被害面の展示を求める署名を提出したが、博物館側は11月、ホームページ上で、博物館の展示目的について「飛行の発達史や飛行を可能にした技術史の記録を示すことにある」と述べ、エノラ・ゲイがもたらした原爆の被害については特に展示しない方針を改めて示している。

巻末資料 13　（『朝日新聞』2003 年 12 月 13 日夕刊）

『人民の星』日本生活協同組合 2005 8.20

原爆投下終戦論の誤り指摘

8・9 長崎 日米歴史学者がシンポ

原爆投下六〇周年の八・九にあたって、「広島・長崎――原爆投下の意味を考える」と題した日米歴史学者のシンポジウムが九日午後二時から、長崎市の長崎原爆被災者協議会・地下講堂でおこなわれた。アメリカン大学・立命館大学国際平和セミナーおよび長崎平和研究所が主催したこのシンポジウムには、来日したアメリカン大学生や立教大学生、関係する大学教員・研究者、平和運動・原水禁運動にかかわってきた人人、長崎市民など一〇〇人あまりが参加した。

シンポジウムでは、藤岡惇・立命館大学教授をコーディネーターにして二つの報告がおこなわれ、報告者にたいする質疑が予定時間をこえておこなわれた。

一つ目の報告は、「原爆投下終戦論の誤り」と題して西嶋有厚・福岡大学名誉教授がおこない、二つめの報告は、「核兵器の犯罪性」と題して、ピーター・カズニック・アメリカン大学教授がおこなった。

西島氏は、「太平洋戦争は原爆投下でおわった」という論が流布されているがそれは誤りであり、「日本に降伏を余儀なくさせた直接の要因は、原爆ではなくソ連参戦であった」ことを、事実をあげてあきらかにした。

当時の支配階級のなかの「主戦派」と「和平派」の動きをとりあげ、ソ連の参戦によって「主戦派」がとなえていた本土決戦論がなりたたなくなったこと、「和平派」が対米和平交渉の仲介をソ連に期待する主観主義的願望もくずれさり、御前会議で天皇の「聖断」という非常手段をつかってポツダム宣言の受諾をきめるしか、「国体護持」（天皇制を軸とする支配階級の地位をまもる）道がなくなったこと、そしてその背景には「敗戦にともなっておこるかも知れない人民革命への恐怖」があったことを指摘した。

また、「なぜソ連参戦終戦論の真実が、…日本で今日まで事実上無視され」「戦後日本でも原爆投下終戦論があたかも当然のように繰り返し強調され」たのは、「戦後日本がソ連に批判的な米国に占領されたことも、それを助長した」と指摘した。

カズニック氏は、原爆投下は広島、長崎市民にとって犯罪であったこと、また全人類にとっての犯罪でもあることの二つの点を強調した。

そして、トルーマンは原爆がどれほどの被害をあたえるかを知っていたが、投下は正しかったとみなし、戦後も一貫して後悔していない、という態度をとってきたこと、トルーマン以後のアメリカ大統領は一人をのぞいて全員が原爆投下を賛美してきたことをあげ、かれらは核兵器を使用するために保有していると指摘し、核兵器を一日もはやくなくさないといけない、とよびかけた。

二つの報告は、アメリカは、広島、長崎市民にあのような苦痛と被害をあたえた原爆を、なんのために投下したのかという問題とかかわっており、それは戦後日本を占領支配する計画とむすびあっていたのではないか、ということを考えさせるものであった。

シンポジウムの報告者の西嶋有厚氏（右）、ピーター・カズニック氏（中）とコーディネーターの藤岡惇氏（左）

巻末資料 14 （『人民の星』2005 年 8 月 20 日）

墓碑銘

アメリカで治療を受けた広島の語り部 山岡ミチコさん、「命がけの使命感」

山岡ミチコさんは、広島での被爆体験の証言活動を続けてきたひとりである。反戦のイデオロギーや感情で語ることはなかった。

当時、山岡さんは15歳で、進徳高等女学校の3年生。動員学徒として電話局に向う途中、爆心地から800メートルで被爆。母親に助けられたが、大火傷で顔が風船のようにふくれあがり、ケロイドとなる。頭髪が抜け血便が出て、死を覚悟した。

広島平和記念資料館の前館長、畑口実さんは振り返る。

「山岡さんの言葉は恨みでも嘆きでもなかったのです。二度と私のような人を出してはいけないという一心で、説得力がありました。死ぬまで語り続けるという気迫をお持ちだった。資料館では1回に1時間ほど語りますが、話すたびにはっきり情景が浮かぶと言っていました」

同級生で同じく証言活動を続けてきた寺前妙子さんも述懐する。

「信念の強い人でした。思いがけないことになりましたが、生き残った者、体験した者には伝える使命や責任があると思っております」

スポーツが得意で快活だった山岡さんは家にこもるようになる。あまりの火傷に人目を避けて暮らす女性を救いたいと広島流川教会の牧師、谷本清さんは動き出す。作家の真杉静枝さんの支持を得て募金が始まり国内で治療が始まった。

原爆孤児をすでに支援していた作家のノーマン・カズンズさんは谷本さんに賛同し義援金を募る。昭和30年、山岡さんを含む25人がアメリカに渡った。谷本さんの長女、近藤紘子さんは言う。

「娘をこんな目にあわせた敵国で治療するとは何事か、と断る親御さんもいたそうです。親として当然の反応だったかもしれません」

まだ戦後10年の時期。アメリカに行けば殺されると山岡さんに忠告した人もいたが、原爆を落とした国が治すのが当然と思ったという。

「こんちくしょう、と思って行った。治療を受けて、人々に触れるうちに許す気持ちにだんだんと変わってきたと話してくれました」（NPO法人ワールド・フレンドシップ・センター理事長の山根美智子さん）

1年半に27回も手術を受けた。真珠湾攻撃を持ち出し原爆使用を肯定する意見もあったが、丁重に扱われた。

帰国後、洋裁を教えたりしながら、山岡さんが被爆の証言を始めたのは、母親が亡くなった54年からである。

「この子はひとりだから、ずっと友達でいてやって下さいというお母様の言葉を思い出します」（寺前さん）

戦争や原爆は怖い、かわいそうの印象で終わらせないのが山岡さんの語りだった。子供達に、しっかり自分で考えて、ものを言える人になって下さいと必ず伝えた。

「戦争は憎んでも人を憎みません。若い世代に語り継ぎ、根づくことに心を砕いていました」（ワールド・フレンドシップ・センター前理事長の森下弘さん）

治療から40年の平成7年には、アメリカで執刀医と再会したり、学校で語った。

「前向きでアメリカ人にも遠慮せずに語ります。逆境から立ち上がった山岡さんの生き方への尊敬と共感がある一方で、彼らが被爆体験と核兵器問題を結びつけて考えているかは疑問でした。山岡さんは変わらないアメリカという国と優しさのあるアメリカ人の両方を感じていたのではないでしょうか」（国際ボランティア連絡会議代表幹事の須田浩之さん）

17年にはドキュメンタリー映画『マッシュルーム・クラブ』に出演。製作に尽力した、広島で平和運動を続けるNPO法人ANT代表の渡部朋子さんは言う。

「自分の外見よりも、一緒にいたのに生き別れてしまった友達を思うとつらいとお話しでした。執念を持って語る姿は一貫していました」

2月2日、肺炎のため82歳で逝去。18年、原爆の日に語った後、脳梗塞に倒れた。命が危険な状態だったがリハビリを続ける。頬がこけ、車椅子姿でも翌年には小学校で語りかけていた。

巻末資料 15 （『週刊新潮』2013 年 2 月 21 日）

核廃棄 まず英国で実現を

CND執行委員・デービッド・ウェブ氏に聞く

英国政府は、戦略核システム「トライデント」を更新しての後継システム導入を打ち出し、英国下院が今年三月、政府方針を賛成多数で承認した。原水協などの原水爆禁止世界大会に参加している「核軍縮キャンペーン」（CND）執行委員デービッド・ウェブ氏（58）＝リーズ市大教授＝に、後継システムを不要とする理由などを聞いた。

（金崎由美）

英国の戦略核の廃棄は可能と主張するウェブ氏

―英国の戦略核システムを解説してください。

特徴は、潜水艦発射弾道ミサイルだけということ。昨年発表された核戦略白書は、この潜水艦の退役時期を二〇二五年までとし、それまでに次世代型を用意するため、今年中に開発を決めなければならない、としている。しかし、本当にその日程が正しいのか、疑問が出ている。下院の投票でも、与党の労働党から異例の大量造反が出た。

―核の廃棄が可能ですか。

核兵器を保有する米国やロシア、中国、フランスと比べ、英国は最も核兵器の廃棄を実現しやすい環境にある。近隣に敵対国がない。潜水艦搭載型しか持っておらず、保有核弾頭も二百と比較的少ないからだ。

―「テロ対策上も、最小限の核抑止力は必要」とする英国政府の見解にどう反論しますか。

国内に潜伏するテロリストに核を使うのか。ばかげている。ある新聞社の調査では、回答した国民の65％がトライデント更新に反対している。世論はテロ対策と核を直結させて考えてはいない。

将来も核抑止力を保つことは、核拡散防止条約（NPT）が定める締約国の核軍縮義務に違反する。政府は「潜水艦を四隻から三隻体制に減らし、核弾頭も二百から百六十に減らす」と主張するが、それで義務を果たしたとは言えない。

―トライデントが配備されているスコットランドのファスレーン海軍基地で反対運動が続いていますね。

七月に日本人も逮捕されるなど日常的に逮捕者が出ているが、ほとんどは翌朝釈放され、起訴されない。非常に形式的だ。スコットランドでは大多数がトライデントに反対していることが背景にある。

英国を、核保有五大国で初めて核廃棄を実現する国にしたい。そうすれば、続く国が出る。政府に方針転換させるタイミングは、まだ何度もある。

クリック

核軍縮キャンペーン（CND） ロンドンに本部を置く欧州で最大級規模の反核運動団体。58年に設立し、会員は4万5000人。労働党の英下院議員が副議長を務めるなど、市民と政治の双方に影響力を持っている。

巻末資料 16

小田まゆみ作

第3種郵便物認可　1998 7 25　朝日新聞（夕刊）

米兵捕虜も同じ被爆者

憲兵隊司令部収容中に被爆死

広島の森さん　跡地に慰霊銘板

第二次大戦末期、広島市中区の旧中国憲兵隊司令部に収容されていて被爆死した元米兵捕虜を慰霊する銘板が完成し、二十九日、同司令部跡地に建てられたビル前で除幕式がある。広島で被爆死した米兵捕虜は少なくとも十人はいたといわれているが、これまで慰霊する銘板や碑などはなかった。同市西区の地方史研究家で被爆者の森重昭さん(六二)が、米兵の遺族や元捕虜との交流を進める中で、慰霊碑の建立を思い立った。あの日から五十三年。「米兵も同じ被爆者と思えるようになった」と、森さんは話している。

Site of Former Chugoku Military Police Headquarters.

Photographed by Toshio Kawamoto

The atomic bomb dropped on Hiroshima August 6,1945 devastated the city and its people with a force beyond any known before. U.S.Air Force and U.S.Navy airmen interned as POWs at the Chugoku Military Police Headquarters which was located at this site,near the epicenter,were among the victims of this holocaust. This plaque is placed in the memory of these brave and honorable men.May this humble memorial be a perpetual reminder of the savagery of war. 1998.7.29

英文で「戦争の悲劇、心に刻む」

森さんが調べた連合国軍総司令部（GHQ）などの資料によると、米軍は一九四五年七月二十八日、広島県呉市沖に停泊していた戦艦などを攻撃した。しかし、爆撃機二機は山口県柳井市と広島市佐伯区に相次いで墜落した。

その乗組員らを中心に、旧中国憲兵隊司令部には計十三人の米兵捕虜がいた。爆心地から約五百㍍の場所で、原爆投下で少なくとも十人が被爆死したとされる。

銘板は縦五十㌢、横六十㌢の銅板。森さんが警備のアルバイトをしてためた数十万円で作った。銘文は原爆投下直前に、同司令部から東京に移送されていた、元爆撃機機長のトーマス・カートライトさん(七三)＝テキサス州在住＝が、森さんの求めに応じて寄せた。

「このささやかな記念碑をもって、戦争のもたらす悲劇を絶えずわれわれの心に刻む」などと英文で記されている。

森さんは、司令部近くの国民学校（小学校）三年生だったが、被爆当時は同市中心部からやや離れた学校に転校していたため、被爆はしたものの、致命傷は免れた。

被爆死した元米兵の遺族が九〇年に来日し、住所を公表して元米兵の手がかりを求めた。これに対し、森さんがそれまでに調べたことを記した手紙を送ったのがきっかけで遺族や生存する元米兵との交流が始まった。

森さんは「原爆投下後、広島市民の多くは『かたきを取ってやる』といっていた。だが、それから五十三年がたった。慰霊することで戦争の愚かさと平和のありがたさを記憶に残したい」と話している。

「米兵の慰霊銘板」が置かれる場所

被爆死した元米兵を慰霊する銘板。中央は、元米兵がいた中国憲兵隊司令部の被爆後の写真

巻末資料 17　（『朝日新聞』1998 年 7 月 25 日夕刊）

叡智 見つめて

12 9 11 京都新聞

第4部 ⑤ 平和へ

広島の惨禍 未来への学び

世界遺産40周年

世界遺産・原爆ドームが川面に揺れる。広島市中区の元安川。色とりどりの灯籠に、人々が手を合わせる。

原爆投下から67年目の8月6日夜、日本、韓国、中国、米国などの学生約40人が、鎮魂や平和への願いを母国語で記した灯籠を川に流した。米国ワシントン大のジャシャンタ・サラ・ヒースさん(22)は「米国の学生が自分のように被爆地に足を運び、原爆のむごさを学んでほしい」と灯籠に祈りを込めた。

米国アメリカン大と立命館大が毎年共催する「国際平和交流セミナー」。今年も8月に京都から広島、長崎を巡った。学生の視点が「キノコ雲の下へ」向かうことを期待している。米国では、原爆投下が終戦を早め戦争犠牲者を減らしたとする「原爆正当論」が根強い。セミナーが始まった1995年にはスミソニアン航空宇宙博物館の原爆展が退役軍人会などの反対で中止に追い込まれた。「被爆の惨禍を直視しよう」と、宙に浮いた原爆展を開いたのがアメリカン大だった。

学生たちは被爆者の証言を聴き、講義で正当論に論拠があるのか歴史学研究から問い直した。広島では原爆ドームや平和記念資料館を見学、6日の平和記念式典に参列した。「怒りや悲しみを乗り越えた被爆者の声が力強く印象的だった」。ヒースさんは一人でも多くの人に聴いてほしいと、撮影した証言をネットで紹介するつもりだ。

鎮魂や平和への願いを記した灯籠を手にする日米とアジアの学生たち。原爆ドームと灯籠の明かりが川を彩る(8月6日、広島市・平和記念公園)＝撮影・山本陽平

広島市出身の立命大1年有廣悠乃さん(20)もセミナーに参加した。大学に入学して「8・6」に対して関心も思い入れも弱い他府県出身の学生に驚いた。セミナーでも「来日しなければ米国が正義だと思い続けていた」と米国人学生から聞き、被爆地で学ぶ大切さを実感した。

修学旅行で平和学習に取り組む学校が減っている。昨年度に平和記念資料館を訪れた児童生徒は約32万人で、ピーク時の85年度より4割も少なかった。

「最新鋭の核兵器が万一使われたら、ドームのような建物も生存者も残らない。核戦争が今までなかったのは幸運だっただけ」。アメリカン大のピーター・カズニック教授(64)は学生たちに訴える。核の脅威の時代は広島と長崎で幕を開け原爆ドームはその舞台から降りることができない。原爆の惨状を学ぶ平和学「広島・長崎講座」は秋葉忠利前広島市長の提唱から10年たったが、米国での開講はアメリカン大など14大学にとどまる。

「核保有国は互いにけん制し、核兵器をなくすのは難しい」「日本は米国の核の傘から抜け出せるのか」。平和記念公園で学生たちは難問に突き当たっていた。セミナーはリポート提出で終わりではない。立命大の藤岡惇教授(65)は「人生をかけて答えを出して」と呼び掛けた。

(松浦吉剛)

＝3面に続く

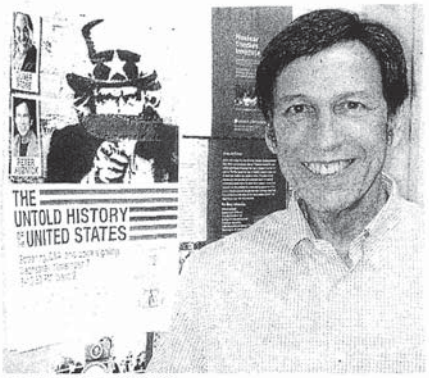
巻末資料 18 （『京都新聞』2012 年 9 月 11 日）

原爆の投下は阻止できた

ウォレス元米副大統領 果たせなかった役割（上）

ルーズベルト米政権（1933～45年）で副大統領などを務め、トルーマン政権（45～53年）の「冷戦」政策に反対したヘンリー・ウォレス。アメリカン大学のピーター・カズニック教授と映画監督のオリバー・ストーン氏は昨年制作したドキュメンタリー映画「語られない米国史」と同名の著作で、米国による広島・長崎への原爆投下は不必要だったことを歴史的事実で裏付け、その中でウォレスの〝果たせなかった役割〟を明らかにしました。ウォレスとはどういう人物だったのか、カズニック氏に話を聞きました。

（ワシントン＝山崎伸治）



アメリカン大学のピーター・カズニック教授（山崎伸治撮影）

アメリカン大学教授 ピーター・カズニック氏に聞く

ヘンリー・ウォレス（1888～1965年）（米議会図書館ホームページから）

―映画と著作でヘンリー・ウォレスに光を当てたのはなぜでしょうか。

カズニック氏　私は1987年に、30年代の米国の科学者がなぜ進歩的になったかを論じた本を書きました。その時にウォレスのことを知りました。

ウォレスは科学者の最もよき理解者でした。さらにルーズベルト政権で最も強力にファシズムに反対していました。そのことがウォレスと科学者との結び付きを強めたのです。

そうした背景を知り、研究を重ねました。96年にオリバー（ストーン監督）が私の（大学の）クラスに来て話をする機会があり、「映画にすべき題材があるよ」と持ちかけたのがドキュメンタリー制作のきっかけでした。

農務長官に就任

ヘンリー・ウォレスは、トウモロコシの品種改良事業で成功。33年に成立したルーズベルト政権で農務長官に就任し、農業における「ニューディール政策」を実行しました。

カズニック氏　ルーズベルトは40年の大統領選で副大統領候補に、国民の真の守り手でファシズムに反対する人物が必要だとして、民主党指導部の反対を押し切ってウォレスを指名しました。

一般市民の世紀

副大統領となったウォレスは42年5月、「20世紀は一般市民の世紀だ」という演説を行います。植民地主義・帝国主義を終わらせ、世界中で人民の革命を起こすべきだという考えを示しました。

カズニック氏　ところが、こうした進歩的な政策提言や米国内のファシストを非難するウォレスの立場が敵をつくることになります。

ウォール街の意向を受けた党指導部は、44年の大統領選挙でもウォレスを副大統領候補から排除しようとしました。ルーズベルトは病に侵されており、副大統領に指名される人物が次の大統領になるのは明らかでした。

7月の党大会直前の調査で党内のウォレス支持率は65％。一方、上院議員だったトルーマンの支持率は2％にすぎませんでした。

歴史の変わり目

党大会2日目の7月20日夜、ウォレスが演壇に立つと、会場内で自然発生的なウォレス支持のデモが起こりました。進歩派のクロード・ペパー上院議員は、この瞬間に動議を提出すれば、ウォレスを副大統領候補に指名できると考え、マイクを握ろうと群衆をかき分けて演壇に向かいます。

カズニック氏　党指導部はあわてて休会動議を提案し、混乱の中で休会になりました。ペパーはマイクの1メートル半手前まで来ていました。オリバーと私は、彼がここでマイクを握っていれば、その後の歴史は大きく変わったと考えます。

45年に原爆が投下されなかったことは間違いないでしょうし、その後の米ソ冷戦も起こらなかったかもしれません。（つづく）

巻末資料 19　（『赤旗』2013 年 7 月 11 日）

広島から全て始まった

爆心地訪問 オリバー・ストーン監督

2013.8.8 京都

来日中の米映画監督オリバー・ストーン氏(66)は7日までに、原爆の日に合わせて初めて訪れた広島市で共同通信のインタビューに応じた。「あらゆる国への核兵器使用の検討をためらわない米国の姿勢は、広島から全て始まった」と述べ、68年前の最初の原爆投下が米国の核戦略を決定づけたとの認識を示した。

インタビューに答える米映画監督のオリバー・ストーン氏(左)と歴史学者のピーター・カズニック氏

核使用検討辞さぬ米批判

「犠牲者に思いやりを」

爆心地付近を歩いた印象について「私たちは皆、あの朝ここにいて犠牲になった可能性がある。人間の手による最悪の事態だが、実際に被爆した人のほとんどは何が起きたか分からなかっただろう」と語り、「記憶しようと努めることが（犠牲者への）思いやりを保つ第一歩になる」とした。

原爆投下の理由が「第2次大戦を早期に終わらせ、米兵の命を犠牲にしないため」と米国で説明されていることは「とんでもないうそ」で、旧ソ連の日本侵攻を食い止めるのが真の目的だったとあらためて指摘した。

戦勝国となった米国は「道徳的指針をなくし、どの国に対しても核の脅威を見せつけるようになった」と語った。

歴代の米政権は「ベトナムとイラクを混乱させ、アフガニスタンを腐敗させた。自分たちのしたことの意味を決して考えようとしていない」と批判。ベトナム戦争に従軍した自身の経験を「若い米国人として、共産主義者と戦っていると信じた」と振り返った。

米国の現代史の内実に迫る著書やドキュメンタリーに取り組んだ経緯について「ブッシュ政権時代に米国の帝国主義の原点に戻って考えることが重要と感じた。原点は原爆にあった」と説明した。

共著者でインタビューに同席した歴史学者ピーター・カズニック氏(65)は、日本が核兵器廃絶を訴えながら米国の「核の傘」に依存するのは矛盾であり「終わらせるべきだ」と話した。

ストーン氏は4日に広島入りし、7日からカズニック氏と長崎市も訪問。2人はその後、東京と沖縄を訪れる予定だ。

オリバー・ストーン氏　46年生まれ。ベトナム戦争から帰還後、ニューヨーク大で映画制作を学ぶ。プラトーン（86年）、7月4日に生まれて（89年）でアカデミー監督賞。

ピーター・カズニック氏　48年生まれ。アメリカン大准教授。95年、スミソニアン航空宇宙博物館で中止になった原爆展を大学で開く。毎年夏、学生と広島、長崎を訪問。

巻末資料 20　（『京都新聞』2013 年 8 月 8 日）

2014年(平成26年)8月3日　日曜日

原爆の残虐性「ショック」

被爆者の苦悩に触れ

留学生や海外の学生が広島や長崎を訪ね、戦争と平和を考える「国際平和交流セミナー」が2日、京都市北区の立命館大で始まった。学生たちはまず、広島出身の被爆者の体験談を聞き、原爆の残虐性や戦後の暮らしの苦悩に触れた。

留学生や海外の学生 立命大でセミナー開始

真剣な表情で被爆者の体験談を聞く学生たち（京都市北区・立命館大）

国籍を超えて原爆投下の事実を学ぼうと、立命大が毎年開いている。今年は20回目で、北米やアジアなど7カ国の44人が参加した。

被爆者を招いたセミナーでは、生後8カ月の時に広島の爆心地から1・1キロで被爆した近藤紘子さんが「大人になったら敵討ちをしようと思っていた」と幼少時の思いを打ち明けた。訳も分からず原爆傷害調査委員会（ABCC）の被爆者調査を受けたことを「とても屈辱的な経験だった」と振り返った。

また、京都在住の米澤鉄志さんと花垣ルミさんも自らの被爆体験について、原爆が落ちた瞬間の記憶や、多数の遺体が燃やされた様子を生々しく語った。

学生たちからは「戦争を放棄した日本と、その後も戦争を繰り返している米国との違いは何だろう」「広島と長崎の被害を知ってショックだった」などの感想が聞かれた。（後藤創平）

巻末資料21　（『京都新聞』2014年8月3日）

被爆70年　核廃絶への一歩を踏み出す年に

市民の力で「原爆の図」をアメリカへ

公益財団法人原爆の図丸木美術館・アメリカン大学ピーター・カズニック

原爆の図　第１部「幽霊」180×720ｃｍ　部分

被爆 70 年の今年、核兵器禁止に向けた大きな動きが始まります。2014 年 12 月にウイーンで開かれた「第３回核兵器の人道的影響に関する国際会議」で、オーストリアなど 29 カ国と国際赤十字が核兵器を法的に禁止する取り組みを呼びかけました。この５月に行われる核拡散防止条約（NPT）再検討会議は核保有国とのせめぎ合いになります。ご高齢の被爆者の方々も多数国連に行き核廃絶の思いを訴えます。その後、秋の国連総会にむけて核不使用条約制定の動きが加速するでしょう。地雷に関しては米・露・中が禁止条約に不参加ですが、実質的に使えない状況が生まれています。核についてはより困難ですが、圧倒的な国際世論で核保有国を包囲し、核兵器を使わせない世界を創り出さねばなりません。

この歴史的な動きを支えるために、丸木美術館は「原爆の図」６作品を、2015 年６月～８月にワシントンのアメリカン大学美術館で展示します。核兵器が非人道的であることは日本では当然ですが、世界ではまだ十分認識されていません。被爆直後に広島に行き、人々の惨状を目の当たりにした丸木夫妻によって描かれた「原爆の図」は、見るもの心に深く訴えます。核超大国アメリカの市民がこの絵に向きあうことが、やがて核を使わない意思に結実していくことを願っています。

本展覧会は、歴史学者として「原爆投下は誤りだった」と実証し、オリバー・ストーン監督と共勇気ある訴えをしているカズニック教授との協同企画です。これを多くの市民の力で実現したいと思います。皆様のご協力をお願いします。

私たちも賛同します

（2014 年 12 月現在　賛同団体 57 賛同 1180 名（賛同者全員は美術館 HP で紹介しています）

田中熙巳（日本原水爆被害者団体協議会事務局長）　原水爆禁止日本国民会議　沢田昭二（原水爆禁止日本協議会代表理事）　日本 YWCA　杉並ユネスコ協会　日本カトリック正義と平和協議会　平和を実現するキリスト者ネット　ワールド・フレンドシップ・センター　伴英幸（原子力資料情報室共同代表）　森瀧春子（核兵器廃絶を目指す広島の会共同代表）　横原由紀夫（第九条の会ヒロシマ世話人）　川崎哲（ピースボート共同代表）　川崎昭一郎（第五福竜丸平和協会代表理事）　大石又七（元第五福竜丸乗組員）　近藤紘子　秋葉忠利　スティーブン・リーパー　梅原猛　瀬戸内寂聴　森重一成　浅妻南海江　高橋卓志　加藤登紀子　鎌田慧　落合恵子　井上鑑　池田龍雄　黒田征太郎　アーサー・ビナード　小沼通二　池内了　武者小路公秀　安斎育郎　今中哲二　石川文洋　広河隆一　ジャン・ユンカーマン　中村梧郎　大石芳野　豊田直巳　本橋成一　鎌仲ひとみ　三上智恵　アイリーン・美緒子・スミス　高橋哲哉　藤岡惇　比屋根照夫　岡真理　島薗進　鎌田東二　梅原利夫　佐藤学　関千枝子　外岡秀俊　村田光平　天木直人　崎山比早子　石川逸子　小沢節子　広瀬恒子　降矢奈々　西澤清　上野健爾　高實康稔　芹沢昇雄　池田恵里子　高原孝生　山田真　山根和代　奈良本英佑　自治労埼玉県職員組合　JR 総連　他多数

巻末資料 22

2011 年度の先輩リーダー（SC）

2014 年度の先輩リーダー（SC）

編集後記

「平和と民主主義」を教学理念に掲げている本学にとって、「国際平和交流セミナー」はまさに本学を代表する科目の一つであります。その一部をなす「広島長崎プログラム」は、今年度で記念すべき 20 年を迎えました。ここまで長くこのプログラムが継続されたのは、多くの関係者の皆様のご支援と学生の平和への熱意、加えて藤岡惇先生のご尽力の賜物であります。残念ながら、藤岡先生はここを一旦の区切りとし、後任者へとバトンを渡されることとなりました。これまでの功績・貢献に感謝申し上げます。

この報告書の作成にあたっては、「広島長崎プログラム」の 20 年の歩みや、参加者の思い、今後どのような活動を目指すべきなのか、藤岡先生からのバトンを次に受け取ってもらえることを願いながら作成を致しました。また、この報告書がすべてのみなさまにとって、「平和」について考えていく一翼を担えることを願っております。

最後になりましたが、本報告書の編集にあたりご協力いただきましたすべての方に感謝申し上げます。

（立命館大学教学部共通教育課事務局一同）

日米交流で原爆を探究する旅　20 年の歩み
――真実の共有と和解をめざして――

2015 年 3 月　発行

編集・発行：「20 年の歩み」編集委員会
（立命館大学教学部共通教育課気付）
ご照会は lac@st.ritsumei.ac.jp
印刷：株式会社 田中プリント